岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第509集

坂下（さかした）遺跡第10次発掘調査報告書

一関遊水地事業国道4号衣川橋橋梁改築工事関連遺跡発掘調査

2008

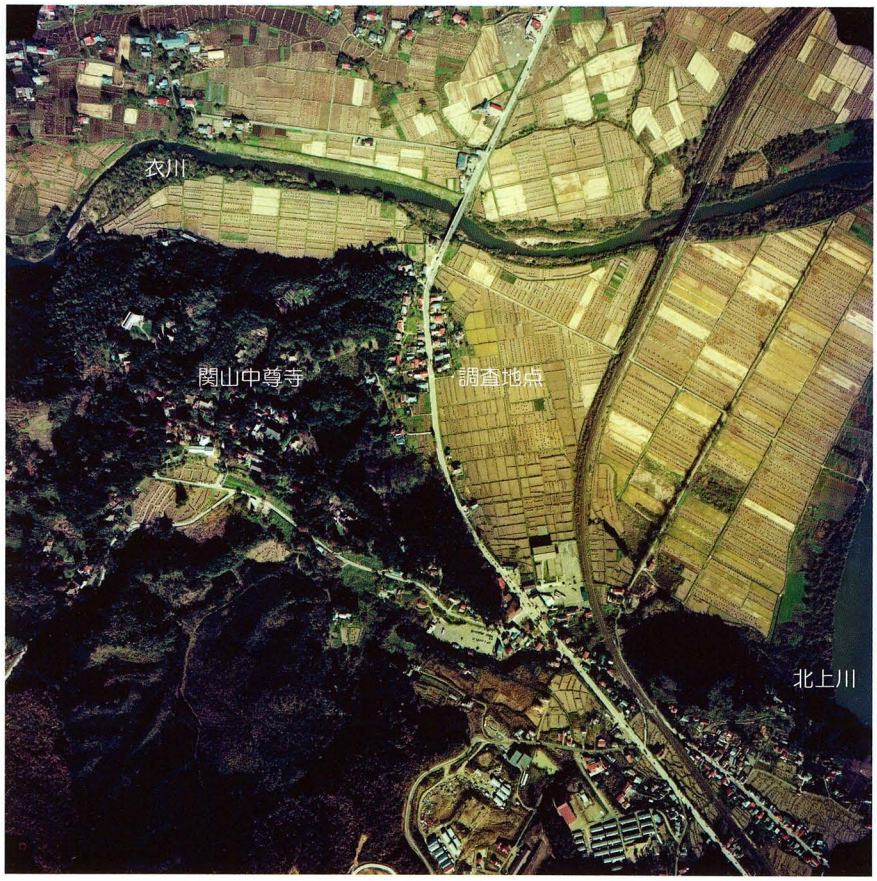
国土交通省東北地方整備局
岩手河川国道事務所

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

坂下遺跡第10次発掘調査報告書

一関遊水地事業国道４号衣川橋橋梁改築工事関連遺跡発掘調査

関山中尊寺と調査区（東方上空から）

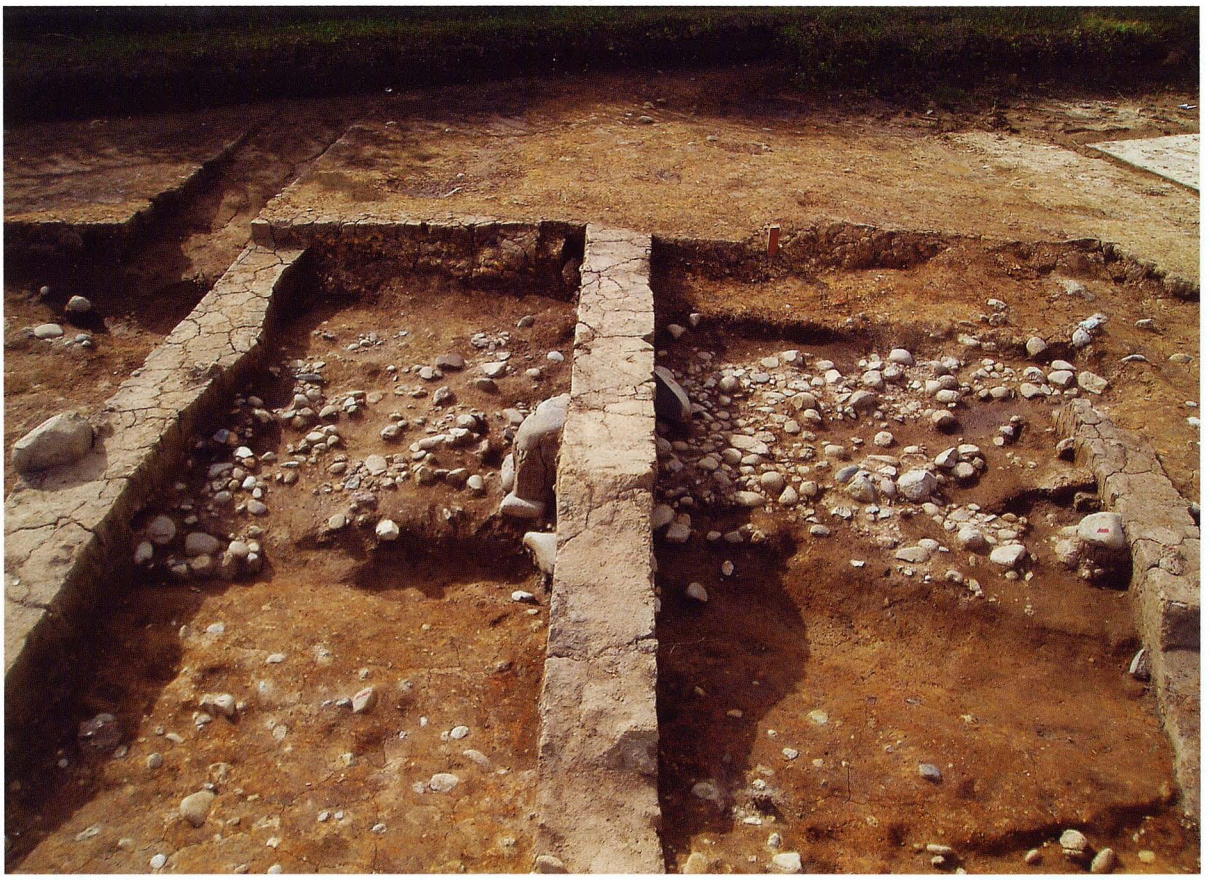


遺跡周辺の航空写真（国土地理院撮影　昭和 51 年）

調査区より束稲山を望む

敷石遺構と池状遺構

敷石遺構の帯状敷石面（南から）



敷石遺構　敷石面の状況

出土遺物の一部

序

岩手県では旧石器時代をはじめとする一万箇所以上の遺跡の所在が知られており、地中には貴重な埋蔵文化財が豊富にのこされています。地域の風土が生み出したこれらの遺産は、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料であるとともに、岩手県民のみならず国民的な財産といえます。現代に生きる私たちが、これらの埋蔵文化財を将来にわたって大切に保存し、その活用に力を注ぐべきであることは言うまでもありません。

一方、豊かな地域づくりのためには社会資本の整備・充実が必要不可欠であることもまた事実です。故郷の大地と共にある埋蔵文化財の保護と開発行為との調和は、現代社会に暮らしを営む私たちに与えられた大きな課題といえましょう。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を実施し、調査成果を記録化し保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、一関遊水地事業国道4号衣川橋橋梁改築工事に伴い発掘調査を実施した、平泉町坂下遺跡第10次調査の成果をまとめたものです。今回の調査では、国指定特別史跡中尊寺の東縁に隣接する調査区内において、12世紀の建物跡とともに敷石遺構や池状遺構など当時の景観の一端を垣間見せる種々の遺構が発見され、奥州藤原氏の時代の平泉の姿をまた一つ明らかにすることができました。

本書が学術研究や教育活動などに広く活用されることにより、埋蔵文化財への理解と関心が一層深められ、ひいては埋蔵文化財保護思想の涵養に資するものとなれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所、平泉町教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成20年3月

財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　　武　田　牧　雄

例　　言

1　本書は岩手県西磐井郡平泉町平泉字坂下43－5ほかに所在する坂下遺跡第10次調査の成果を収録したものである。

2　岩手県遺跡台帳における本遺跡の登録番号はＮＥ76-0000、調査略号はＳＳ－06－10である。

3　本遺跡の発掘調査は、一関遊水地事業国道４号衣川橋橋梁改築工事に伴い、岩手県教育委員会の調整を経て、国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所の委託を受けた財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが、記録保存を目的として実施したものである。

4　野外調査を実施した期間／調査面積／調査担当者は下記の通りである。

平成18年4月11日～平成18年10月18日／8,420㎡／村上　拓・菅野　梢

5　室内整理の期間／担当者は下記の通りである。

平成18年11月1日～平成19年3月30日／村上　拓・菅野　梢

6　本文の執筆は、Ⅰを国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所、Ⅱの１・２・４を菅野、そのほかを村上が行った。

7　本書中に示した平面座標値は平面直角座標第Ｘ系（世界測地系）を用いたものである。

8　各種の分析・鑑定・保存処理は下記の機関に委託した。

石質鑑定　花崗岩研究会

放射性炭素年代測定　（株）加速器分析研究所

火山灰同定・微化石分析　パリノ・サーヴェイ（株）

鉄製品保存処理　ＪＦＥテクノリサーチ（株）

木製品保存処理・樹種同定　（株）古環境研究所

9　基準点測量業務は（株）総合土木コンサルタンツに委託した。

10　写真測量および空中写真撮影は（株）シン技術コンサルに委託した。

11　野外調査では下記の機関・個人の協力を得た。（敬称略・順不同．所属は平成18年度.）

国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所、岩手県教育委員会生涯学習文化課、平泉町教育委員会・平泉町商工観光課、一関市教育委員会、奥州市教育委員会、一関警察署交通課。

斎藤邦雄・及川　司・八重樫忠郎・島原弘征・菅原計二（平泉町教育委員会）、工藤　武（一関市教育委員会）、石崎高臣・鹿野里絵（奥州市教育委員会）、酒井宗孝（花巻市博物館）、菅　常久・櫻井友梓（岩手県教育委員会生涯学習文化課）、網　伸也（財団法人京都市埋蔵文化財研究所）、井上雅孝（滝沢村教育委員会）。

12　今次調査で得られた出土遺物および諸記録類の一切は、岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

目　次

Ⅰ　調査に至る経過……1

Ⅱ　立地と環境……1
1　遺跡の位置……1
2　周辺の地形……2
3　基本層序……2
4　周辺の遺跡……3
5　調査履歴……6

Ⅲ　野外調査と室内整理……7
1　野外調査……7
2　室内整理……10

Ⅳ　検出遺構と出土遺物……11
1　概要……11
2　遺構……14
(1) 掘立柱建物跡……14
(2) 敷石遺構……21
(3) 池状遺構……29
(4) 取水口状遺構……36
(5) 土坑……39
(6) 溝跡……47
(7) 竪穴住居跡……55
(8) 陥し穴状遺構……58
(9) 沢跡……61
3　遺物……64
(1) かわらけ……64
(2) 国産陶器……64
(3) 中国産磁器……64
(4) 鉄製品……64
(5) 木製品……65
(6) 土師器・須恵器……65
(7) 縄文時代の石器……65

Ⅴ　まとめ……89

附編……93
1　放射性炭素年代測定……93
2　火山灰同定・微化石分析……99
3　出土木椀の樹種同定……115
報告書抄録……153

表目次

表1　周辺の遺跡……5
表2　調査履歴一覧……6
表3　基準点一覧……7
表4　柱穴一覧……19
表5　陥し穴状遺構一覧……61
表6　土器・陶磁器類……78
表7　金属製品……88
表8　木製品……88
表9　石器……88

図版目次

第1図　遺跡の位置……1
第2図　基本層序模式図……2
第3図　周辺の遺跡……3
第4図　過去の調査地点……6
第5図　調査区とグリッド配置……8
第6図　遺構配置図(1)－④⑤・⑦・⑧区－……12
第7図　遺構配置図(2)－⑥区－……13
第8図　建物跡1……15
第9図　建物跡2……16
第10図　建物跡3……17
第11図　建物跡4……18
第12図　敷石遺構（北半）周辺……23
第13図　敷石遺構（南半）周辺……24
第14図　敷石遺構・溝跡2・3断面(1)……25
第15図　敷石遺構・溝跡2・3断面(2)……26
第16図　敷石遺構・溝跡2・3断面(3)……27

第17図　敷石遺構周辺の遺物出土状況…… 28
第18図　池状遺構…… 32
第19図　池状遺構断面(1) …… 33
第20図　池状遺構断面(2)・取水口状遺構断面 … 34
第21図　池状遺構周辺の遺物出土状況…… 35
第22図　土坑(1) …… 44
第23図　土坑(2) …… 45
第24図　土坑(3) …… 46
第25図　溝跡１・２－ｅ・２－ｆ…… 51
第26図　溝跡２－ａ・２－ｂ…… 52
第27図　溝跡２－ｃ・２－ｄ…… 53
第28図　溝跡３…… 54
第29図　住居跡１(1) …… 56
第30図　住居跡１(2) …… 57
第31図　陥し穴状遺構(1) …… 59
第32図　陥し穴状遺構(2) …… 60
第33図　沢跡トレンチ…… 62
第34図　土器・陶磁器(1)－建物跡１～3とその周辺.
敷石遺構・池状遺構周辺(1)－ …… 66
第35図　土器・陶磁器(2)
－敷石遺構・池状遺構周辺(2)－ …… 67
第36図　土器・陶磁器(3)
－敷石遺構・池状遺構周辺(3)－ …… 68
第37図　土器・陶磁器(4)
－敷石遺構・池状遺構周辺(4)－ …… 69
第38図　土器・陶磁器(5)
－敷石遺構・池状遺構周辺(5)－ …… 70
第39図　土器・陶磁器(6)－敷石遺構・
池状遺構周辺(6)．土坑(1)－…… 71
第40図　土器・陶磁器(7)
－土坑(2)．溝跡(1)－…… 72
第41図　土器・陶磁器(8)－溝跡(2)．
⑥区南縁周辺(1)－ …… 73
第42図　土器・陶磁器(9)
－⑥区南縁周辺(2)－ …… 74
第43図　土器・陶磁器(10)
－⑥区南縁周辺(3)－ …… 75
第44図　土器・陶磁器(11)－⑥区南縁周辺(4)．
竪穴住居跡１．②・③区－…… 76
第45図　金属製品・木製品・石器…… 77

写真図版目次

写真図版１　調査開始時の状況…… 119
写真図版２　掘立柱建物跡（１）…… 120
写真図版３　掘立柱建物跡（２）…… 121
写真図版４　敷石遺構・池状遺構（１）…… 122
写真図版５　敷石遺構・池状遺構（２）…… 123
写真図版６　敷石遺構・池状遺構（３）…… 124
写真図版７　敷石遺構・池状遺構（４）…… 125
写真図版８　敷石遺構・池状遺構（５）…… 126
写真図版９　敷石遺構・池状遺構（６）…… 127
写真図版10　敷石遺構・池状遺構（７）…… 128
写真図版11　敷石遺構・池状遺構（８）…… 129
写真図版12　敷石遺構・池状遺構（９）…… 130
写真図版13　敷石遺構・池状遺構（10）…… 131
写真図版14　敷石遺構・池状遺構（11）…… 132
写真図版15　敷石遺構・池状遺構（12）…… 133
写真図版16　⑦区の調査…… 134
写真図版17　土坑（１）…… 135
写真図版18　土坑（２）…… 136
写真図版19　土坑（３）…… 137
写真図版20　土坑（４）…… 138
写真図版21　溝跡（１）…… 139
写真図版22　溝跡（２）…… 140
写真図版23　竪穴住居跡（１）…… 141
写真図版24　竪穴住居跡（２）…… 142
写真図版25　陥し穴状遺構（１）…… 143
写真図版26　陥し穴状遺構（２）…… 144
写真図版27　基本土層・沢跡…… 145
写真図版28　出土遺物（１）
－土器・陶磁器類－…… 146
写真図版29　出土遺物（２）
－土器・陶磁器類－…… 147
写真図版30　出土遺物（３）
－土器・陶磁器類－…… 148
写真図版31　出土遺物（４）
－土器・陶磁器類－…… 149
写真図版32　出土遺物（５）
－土器・陶磁器類－…… 150
写真図版33　出土遺物（６）
－土器・陶磁器類－…… 151
写真図版34　出土遺物（７）
－金属製品・木製品・石器類－… 152

Ⅰ　調査に至る経過

坂下遺跡第10次調査は、北上川上流改修一関遊水地事業衣川地内の事業区域内に所在する「坂下遺跡」の記録保存を目的とし、当該事業の施工に先立ち実施したものである。

当該地区における事業内容は、一般国道4号の延長約1.1㎞の付け替え工事等を行うもので、平成17年度に用地取得から事業着手し、一般国道4号衣川橋の桁下高不足の解消を図り支川衣川の周辺地域を洪水から守るため、堤防整備をすすめている。

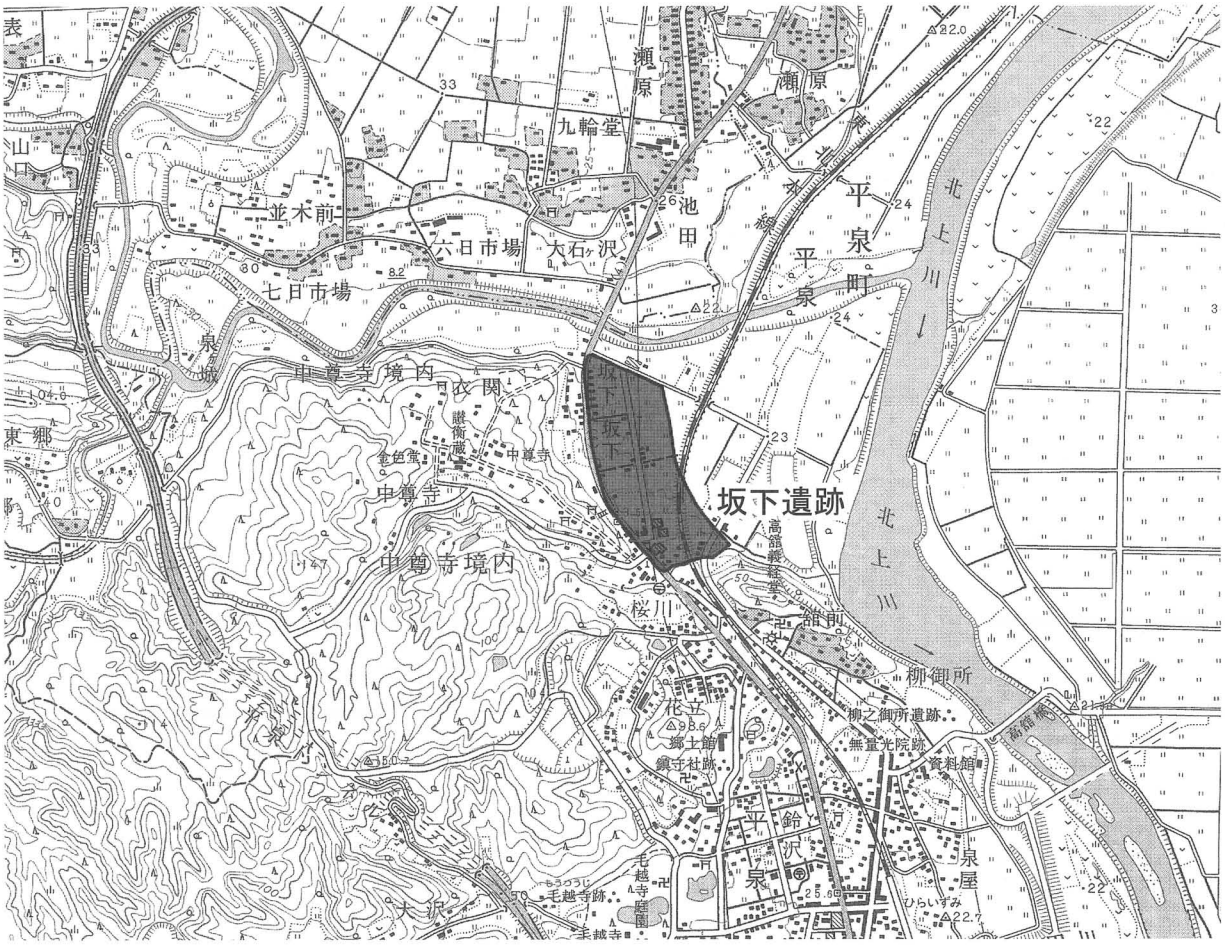
当該事業区域の埋蔵文化財包蔵地については、平成17年度、施工主体である国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所と岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課が協議し、平成18年度、財団法人岩手県文化振興事業団に調査を委託することとした。

（国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所）

Ⅱ　立地と環境

1　遺跡の位置（第1図）

坂下遺跡は、岩手県西磐井郡平泉町字坂下に所在する。ＪＲ東北本線平泉駅の北約2.0㎞、北緯38度59分54秒～北緯39度16分9秒、東経141度6分21～40秒付近に位置する。



第1図　遺跡の位置

本遺跡の所在する西磐井郡平泉町は、岩手県の南部に位置する。北は奥州市、西・南は一関市と接している。面積は63.39㎢、人口は8707人である（平成19年1月現在）。町域のおよそ半分は山林・原野が占め、水田・畑地の割合は3割弱である。

遺跡が所在する坂下地区は町の北側に位置しており、本遺跡の北端は衣川と北上川の合流点一帯に形成された氾濫原、それより南は関山丘陵の北東側縁辺に当たる緩斜面地となっている。標高は23～25ｍ前後を測る。調査開始以前は水田・畑地であった。

（菅野）

2　周辺の地形と地質

平泉町周辺は、東は北上山地、西は奥羽山脈に囲まれ、その中央部を一級河川北上川が南流している。平泉町は北上川の中流域にあたり、この川によって形成された氾濫平野や谷底平野、後背湿地などの低地と河岸段丘上にのる。町は北上川を境として、西側の平泉地区と東側の長島地区に大きく二分されるが、北上川西岸の平泉地区はそのほとんどが衣川丘陵からなり、開析が及んでいない丘陵西部の緩斜面では、牧場などに利用されている。

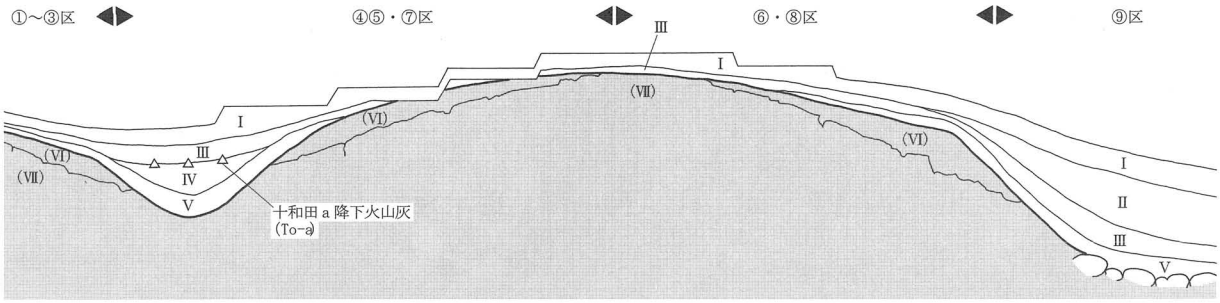
平泉町周辺の地質は、北上川の左岸、束稲山地は古生代の石灰岩・礫岩・泥岩、中生代の花崗岩により構成される。北上川右岸では新生代第三紀の安山岩・砂岩・泥岩が主体である。当地においては金沢層、油島層を基盤とし、表土から浅い深度にかけては河川浸食により形成された第四紀以降の比較的新しい粘土、微砂、シルトといった沖積土に被われている。土壌は丘陵部で黒ボク土壌、低地では灰色低地土壌が主体である。

（菅野）

3　基　本　層　序（第2図、写真図版27）

野外調査では、遺跡内に堆積する土層の新旧関係や各層の時期を把握するよう努めた。

第2図は調査区内における層序の模式図である。大きくⅠ～Ⅶ層に分けることができる。



第2図　基本層序模式図

Ⅰ層　褐灰色土。現表土（現耕作土）。現代の盛土等、攪乱層含む。

Ⅱ層　黄褐色土。洪水堆積層。本層下部はやや暗く、12世紀遺構の埋土上部にみられる褐色土に類似する。数時期あると思われるが層界不明瞭で細分困難。

Ⅲ層　暗褐色土。炭片目立つ。12世紀遺物を包含。遺構埋土の主体土。

Ⅳ層　褐色砂～砂礫。沢跡等にのみ堆積。グライ化すると青灰～緑灰色。

Ⅴ層　黒褐色土。縄文時代遺物わずかに含む。上面が古代以降（主に12世紀）の遺構検出面。

Ⅵ層　黄褐色土。高位面に近いほど層厚薄く砂質を帯び、低位面に向かっては層厚を増し粘土質を帯びる。これ以下、地山構成層。

Ⅶ層　淡黄色風化礫層または暗褐色砂。主に高位面にみられる。風化した基盤岩盤及びその崩落層と思われる。

（村上）

4　周 辺 の 遺 跡（表１、第３図）

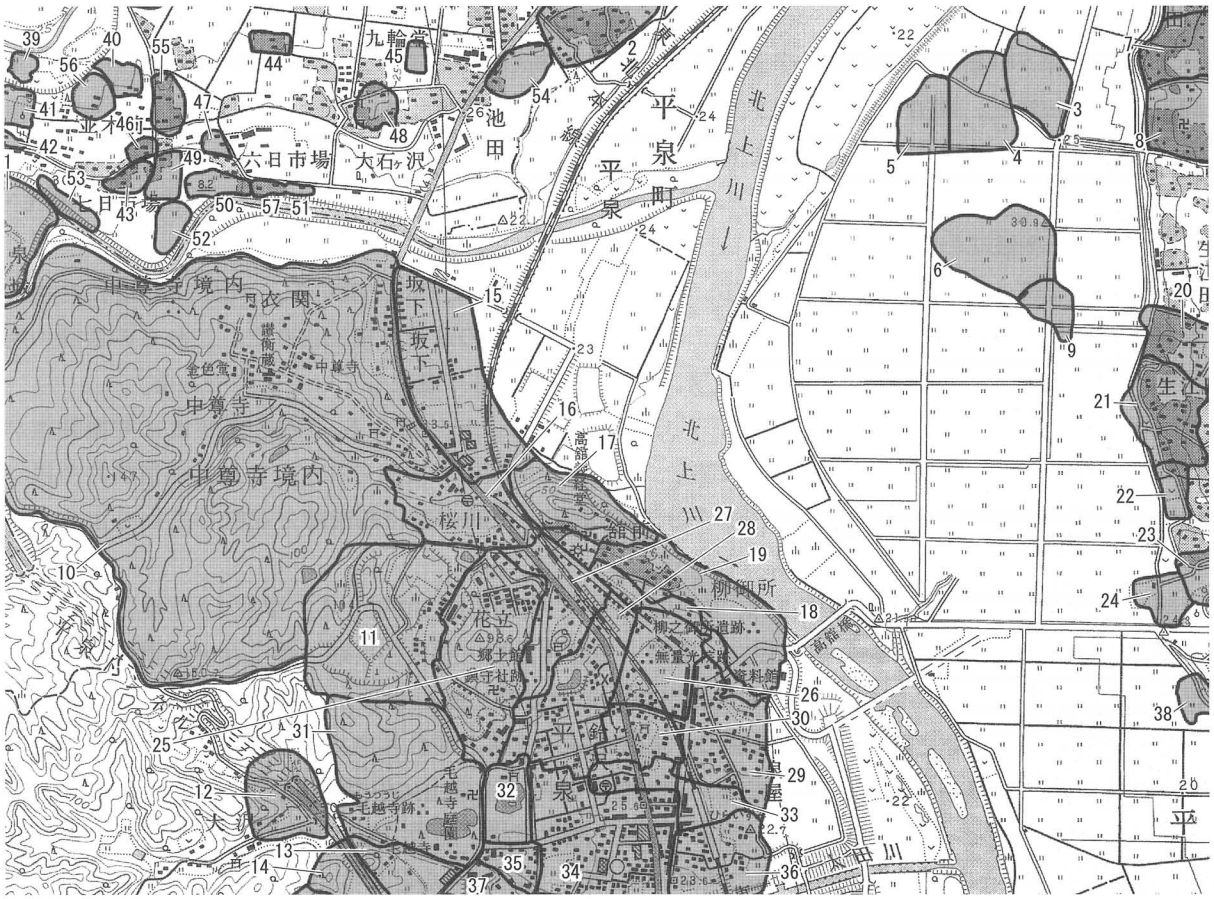
平成18年度末の岩手県教育委員会のまとめでは、平泉町内には102ヵ所、奥州市衣川区には117ヵ所の遺跡が確認されている。このうち第３図には、本遺跡を中心とした平泉町38ヵ所、隣接する奥州市衣川区19ヵ所の遺跡を図示した。

平泉町内で登録されている遺跡の主体となるのは、平安末期に平泉を拠点とした奥州藤原氏関連遺跡である。これを狭義の「平泉遺跡群」と呼び、特に濃密な分布を示す範囲を「拠点地区」と呼ぶ。

拠点地区は、北は衣川、南は太田川、東は北上川氾濫原との段丘境界、西は奥羽山脈東端の小起伏山地の縁辺を境とする範囲で、東西、南北共に約２km四方の広がりをもつ。藤原氏関連遺跡は、北上川周辺や支流の河川、小起伏丘陵をこえて衛星状の広がりを持つことが知られており、これを「周辺地区」と呼ぶ。北は奥州市衣川区に隣接する瀬原地区、東は北上川左岸の氾濫原微高地である里・本町地区、南は祇園・宿・大佐地区と北上川の氾濫原微高地である高玉地区、西は小金沢・達谷地区などである。

拠点地区には現在、中尊寺境内、毛越寺跡附鎮守社跡、無量光院の３ヵ所が特別史跡に、柳之御所遺跡１ヵ所が国の史跡に指定されており、平成15年度には金鶏山遺跡が史跡指定の答申を受けている。本遺跡は、この拠点地区の北東部の一角を占めており、国指定特別史跡中尊寺とは国道４号線を境に西側で接し、同様に南東側で高舘遺跡と接している。

次に、図幅中に示している遺跡の中で、過去に当埋蔵文化財センターによって調査された遺跡について述べることにする。



第３図　周辺の遺跡

＜志羅山遺跡＞平泉町の中心部、北上川の西の平泉段丘の北半に位置する。平成４・５・７・９・10年度に発掘調査が行われた。調査の結果、道路状遺構・池・建物跡・柱列・井戸・溝跡・土坑などの遺構が検出された。これらの遺構の所属年代は12世紀が中心となっている。

＜泉屋遺跡＞平泉町の中心部、北上川の西の平泉段丘の北半に位置する。平成５・６・７・８・11・12年度に発掘調査が行われた。調査の結果、竪穴住居跡・竪穴建物・建物跡・井戸・土坑・溝跡・柱列・焼土・カマド状遺構・土器埋設遺構などの遺構が検出された。これらの遺構の所属年代は、縄文時代・古代・12世紀・13世紀後半～14世紀前半・近世・近代と多岐にわたっている。

＜花立Ⅰ遺跡＞平泉町の中心部、北上川の西の平泉段丘の北側に位置する。平成６・７・８年度に発掘調査が行われた。調査の結果、竪穴住居跡・建物跡・土坑・柱穴列・溝跡・便所遺構などの遺構が検出された。これらの遺構の所属年代は平安時代が中心となっている。

＜衣関遺跡＞平泉町の中心部、北上川の西の平泉段丘の北側に位置する。平成９年度に発掘調査が行われた。調査の結果、土坑・溝跡・塀跡・石敷遺構などの遺構が検出された。これらの遺構の所属年代は12世紀が中心となっている。

＜矢崎Ⅰ遺跡＞平泉町の中央部を南流する北上川の東側の氾濫平野と丘陵地の境界付近に位置する。平成12年度に発掘調査が行われた。調査の結果、竪穴住居跡・竪穴状遺構・溝跡・土坑などが検出された。竪穴住居跡は平安時代、竪穴状遺構は縄文時代に属するようである。

＜里遺跡＞平泉町の中央部を南流する北上川の東側の氾濫平野と丘陵地の境界付近に位置する。平成12年度に発掘調査が行われた。調査の結果、竪穴住居跡・井戸・土坑・溝跡・カマド状遺構・建物跡・陥し穴・柱穴などの遺構が検出された。これらの遺構の所属年代は、弥生時代・平安時代・12世紀と多岐にわたっている。

＜本町Ⅱ遺跡＞平泉町の中央部を南流する北上川の東側の自然堤防上に位置する。平成13年度に発掘調査が行われた。調査の結果、竪穴住居跡・工房跡・住居状遺構・畠跡・土器埋設遺構・焼土遺構・堀跡・溝跡・周溝・墓壙・道路状遺構・建物跡・柱穴列・配石・井戸跡・カマド状遺構・炭窯・土坑・柱穴などの遺構が検出された。これらの遺構の所属年代は、縄文時代・弥生時代・平安時代・中世・近世と多岐にわたっている。

＜六日市場遺跡＞奥州市衣川区の南東部、衣川北岸の河岸段丘上に位置する。平成17年度に発掘調査が行われた。調査の結果、建物跡・柱穴・溝跡・土坑などの遺構が検出された。これらの遺構の所属年代は12世紀が中心となっている。遺構は西隣の細田遺跡に連続していくようである。

＜細田遺跡＞奥州市衣川区の南東部、衣川北岸の河岸段丘上に位置する。平成17年度に発掘調査が行われた。調査の結果、建物跡・柱穴・溝跡・土坑などの遺構が検出された。これらの遺構の所属年代は12世紀と近世である。遺構は東隣の六日市場遺跡、西隣の接待館遺跡と連続していくようである。

＜接待館遺跡＞奥州市衣川区の南東部、衣川北岸の河岸段丘上に位置する。平成17年度に発掘調査が行われた。調査の結果、建物跡・柱穴・溝跡・堀跡・土坑・竪穴住居跡・焼土などの遺構が検出された。これらの遺構の所属年代は、12世紀が中心となるが、出土遺物から建物跡の中には中世に属するものもあると推測されている。遺構は、東隣の細田遺跡と切れ目無く連続していくようである。

＜衣の関道遺跡＞奥州市衣川区の南東部、衣川北岸の河岸段丘上に位置する。平成17年度に発掘調査が行われた。調査の結果、建物跡・土坑・溝跡・池状遺構・テラス状遺構・墓壙・カマド状遺構などの遺構が検出された。これらの遺構の所属年代は12世紀が中心となっている。

（菅野）

表１　周辺の遺跡

No.	市町村名	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物
1	平泉町	泉ケ城（和泉ケ城）	散布地・城館跡	縄文・平安	縄文土器、石器、土師器
2	平泉町	瀬原Ⅱ	散布地	（奈良）・平安	土師器
3	平泉町	里	散布地	平安	土師器
4	平泉町	里前Ⅱ	散布地	平安	土師器
5	平泉町	里前Ⅰ	散布地	平安	羽口
6	平泉町	本町	散布地	平安	土師器、墓域
7	平泉町	二反田Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器
8	平泉町	滝の沢	散布地	縄文	土器
9	平泉町	畑中	散布地	平安	土師器
10	平泉町	中尊寺	散布地、社寺跡、経塚	縄文・平安	伽藍遺構、かわらけ、陶磁器、池跡、木製品、堀跡、石器
11	平泉町	鈴懸の森	経塚	平安	陶器片
12	平泉町	大沢	散布地	縄文	縄文土器、石器
13	平泉町	毛越Ⅱ	社寺跡	平安	
14	平泉町	毛越Ⅲ	社寺跡	平安	
15	**平泉町**	**坂下**	**散布地・社寺跡**	**平安**	**伽藍遺構、かわらけ、陶磁器片**
16	平泉町	衣関	社寺跡、屋敷地	平安	かわらけ、陶器片、建物跡
17	平泉町	高館（衣河館）	城館跡	縄文・平安	土塁、堀、かわらけ
18	平泉町	猫間ケ淵	池跡	平安	池跡、かわらけ、陶磁器
19	平泉町	柳之御所	城館跡	平安	かわらけ、陶磁器、堀、溝
20	平泉町	竜ケ坂	散布地	縄文	縄文土器
21	平泉町	佐藤屋敷	城館跡	平安	
22	平泉町	新田	散布地	縄文	縄文土器
23	平泉町	矢崎Ⅱ	散布地		土器
24	平泉町	矢崎Ⅰ	散布地	平安	土師器
25	平泉町	金鶏山	経塚	平安	甕、壺、鉢
26	平泉町	無量光院	社寺跡	平安・近世	伽藍遺構、かわらけ、陶磁器
27	平泉町	花立Ⅰ	社寺跡・城館跡		礎石、瓦、かわらけ、陶磁器
28	平泉町	花立Ⅱ	社寺跡	平安	瓦、かわらけ、陶磁器
29	平泉町	伽羅之御所	城館跡	平安	土塁、かわらけ、陶磁器
30	平泉町	白山社	社寺跡	平安	かわらけ、木製品、土塁、堀、池跡、橋脚
31	平泉町	毛越寺	社寺跡	縄文・平安・近世	伽藍遺構、かわらけ、陶磁器
32	平泉町	観自在王院	社寺跡	平安	伽藍遺構、かわらけ、陶磁器
33	平泉町	鈴沢の池	池跡		
34	平泉町	志羅山	屋敷地・瓦窯跡	平安・中近世	かわらけ、陶磁器
35	平泉町	倉町	屋敷地	平安	かわらけ、陶磁器
36	平泉町	泉屋	散布地	縄文・平安・中近世	かわらけ、陶磁器
37	平泉町	国衡館	城館跡	平安・中世	かわらけ、陶磁器
38	平泉町	下構	散布地	近世	墓
39	奥州市	桜瀬	墳墓	近世	塚
40	奥州市	御蔵場	屋敷跡	近世？	
41	奥州市	衣川柵（並木屋敷）	城館跡	中世？	平場
42	奥州市	大手	城館跡		
43	奥州市	巒森			
44	奥州市	室の樹			
45	奥州市	九輪塔	墳墓		墓石
46	奥州市	宿（上宿）	宿場跡		
47	奥州市	下宿	散布地	縄文	縄文土器
48	奥州市	池の辺坊屋敷	屋敷跡		墓碑
49	奥州市	七日市場	市場跡		須恵器
50	奥州市	接待館	城館跡	中世	土塁、土師器、郭
51	奥州市	六日市場	市場跡		
52	奥州市	衣の関道	関道跡・散布地	古代	土師器、須恵器
53	奥州市	淵畑	散布地	縄文・古代	縄文土器、土師器
54	奥州市	池田	散布地	縄文・古代・近世	石器（縄文）
55	奥州市	上野	散布地	近世？	陶磁器片
56	奥州市	清水の上	散布地		
57	奥州市	細田	散布地	縄文・近世	石器（縄文）

Ⅱ章１・２・４　参考文献

岩手県農政部北上山系開発室　1978『北上山系開発地域　土地分類基本調査　一関』

岩埋文　1995『志羅山遺跡 14・25 次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 216 集

岩埋文　1997『泉屋遺跡第 10・11・13・15 次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 247 集

岩埋文　1999『花立Ⅰ遺跡（第９次・第 12 次・第 13 次）・衣関遺跡（第５次）発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 285 集

岩埋文　2000『志羅山遺跡第 46・66・74 次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 312 集

岩埋文　2001『矢崎Ⅰ遺跡第１次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 372 集

岩埋文　2002『里遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 383 集

岩埋文　2003『泉屋遺跡第 16・19・21 次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 399 集

岩埋文　2003『本町Ⅱ遺跡第２次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 410 集

平泉町教育委員会　2004『中尊寺跡第 65 次発掘調査報告書』岩手県平泉町文化財調査報告書第 84 集

※岩埋文＝岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

5　調　査　履　歴

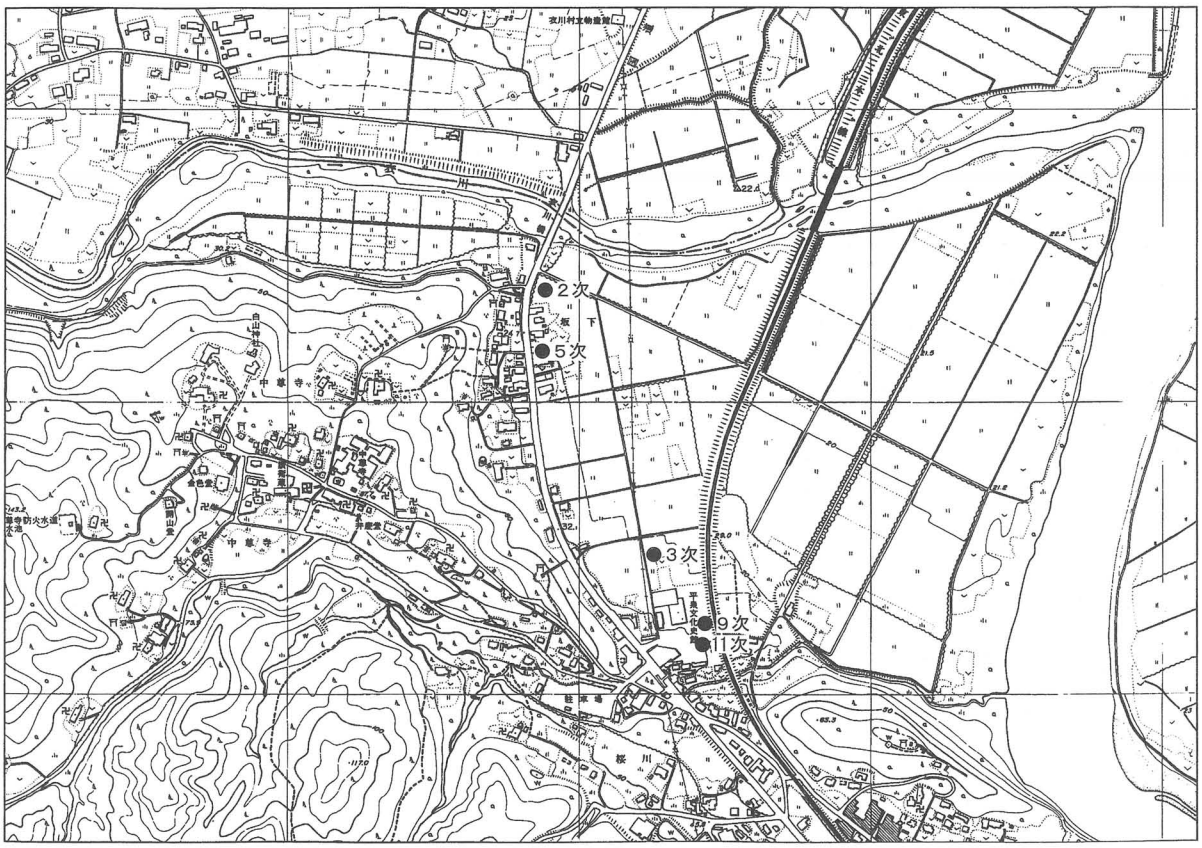
これまでに実施された坂下遺跡の調査は下表の通りである。

表２　調査履歴一覧

	年	調査機関	調査の種類	事業者	原因	遺構	遺物
1次	昭和56	平泉町教育委員会	(調整のみ)		駐車場建設		
2次	平成7	平泉町教育委員会	試掘	平泉町	駐車場建設	近世末～近代礎石建物1棟、土坑1基、石敷遺構	近世末～近代遺物が主体。12世紀陶磁器片少量。
3次	平成10	平泉町教育委員会	試掘	民間	店舗建設	なし	かわらけ片(攪乱層から)
4次	平成15	岩手県教育委員会	試掘	岩手県	道路		
5次	平成17	平泉町教育委員会	試掘	個人	住宅建設	なし	近現代陶磁器
6次	平成17	岩手県教育委員会	試掘	国交省	鉄道	柱穴	
7次	平成17	岩手県教育委員会	試掘	国交省	道路	土坑、溝	かわらけ
8次	平成17	岩手県教育委員会	試掘	国交省	鉄道	柱穴	
9次	平成18	岩手県埋文センター	本発掘	国交省	鉄道	柱穴	かわらけ
10次	平成18	岩手県埋文センター	本発掘	国交省	道路		
11次	平成18	平泉町教育委員会	本発掘	民間	施設棟建設		

平泉町教委による坂下遺跡第1次調査は、隣接する中尊寺の第26次調査と重複してカウントされたものであるが、調整の結果、掘削を伴う調査は発生していない。第6～8次は第9次・第10次（今次調査）に先立って岩手県教育委員会が実施した一関遊水地事業関連の試掘調査である。

（村上）



第4図　過去の調査地点

Ⅲ　野外調査と室内整理

1　野　外　調　査

(1) 調　査　区（第５図）

登録されている坂下遺跡の範囲は、南北約 700 m・東西約 250 m、面積にして約 17 万５千㎡に及ぶ。今回の調査区は、遺跡範囲の北西部に位置し、岩手県教育委員会が実施した試掘調査の結果本発掘調査を要すると判断された、幅約 30 ～ 60 m・全長約 300 mの範囲である。調査区は南西部で現国道４号と接し、これと分岐するように北東方向へと延びている。

周辺はほぼ東西・南北に軸の揃った畦畔が連なる水田地帯で、調査区はこの中を縦断している。今次調査では、この水田区画を利用し、便宜的に調査区を①～⑨区に区分した。

(2) グリッド設定と基準点（第５図、表３）

検出される各種遺構・遺物の詳細な座標値を記録するため、調査区を覆う碁盤目状のグリッドを設定した。まず、調査対象区域の北西側に原点（世界測地系，平面直角座標第Ｘ系，X=-110,500・Y=23,600）を設け、ここから南及び東にのびる軸線を等分して 100×100 mの大グリッドを設定した。さらに大グリッドの一辺を 25 等分して小グリッド（４× ４m）とした。

大グリッドは北から南に向かってローマ数字Ⅰ～Ⅴ、西から東に向かって英大文字Ａ～Ｂとして「ⅠＡ」または「ⅡＢ」のように表し、さらに小グリッドも同様に北側から順に算用数字１～ 25、西側から順に英小文字ａ～ｙとして「１ａ」または「２ｂ」のように表した。特定の小グリッドを指し示すのには、これらを組み合わせて「ⅠＡ１ａ」のように表記した。現地では各小グリッドの北西隅に位置する杭にその名称を表記して用いた。本書中の平面図でも同様に小グリッドの北西隅に位置する杭点にグリッド名を併記している。

表３　基準点一覧

点名	対応するグリッド杭名	Ｘ座標	Ｙ座標	標高
A-4	ⅢＡ 16 k	-110760	23640	25.713
A-5	ⅢＡ 11 k	-110740	23640	25.558
A-7	ⅢＡ１ k	-110700	23640	25.382
B-5	ⅢＡ 11 p	-110740	23660	24.711
B-7	ⅢＡ１ p	-110700	23660	24.497
C-9	ⅡＡ 16 u	-110660	23680	23.475
D-9	ⅡＢ 16 a	-110660	23700	23.036
D-10	ⅡＢ 11 a	-110640	23700	23.030

（世界測地系）

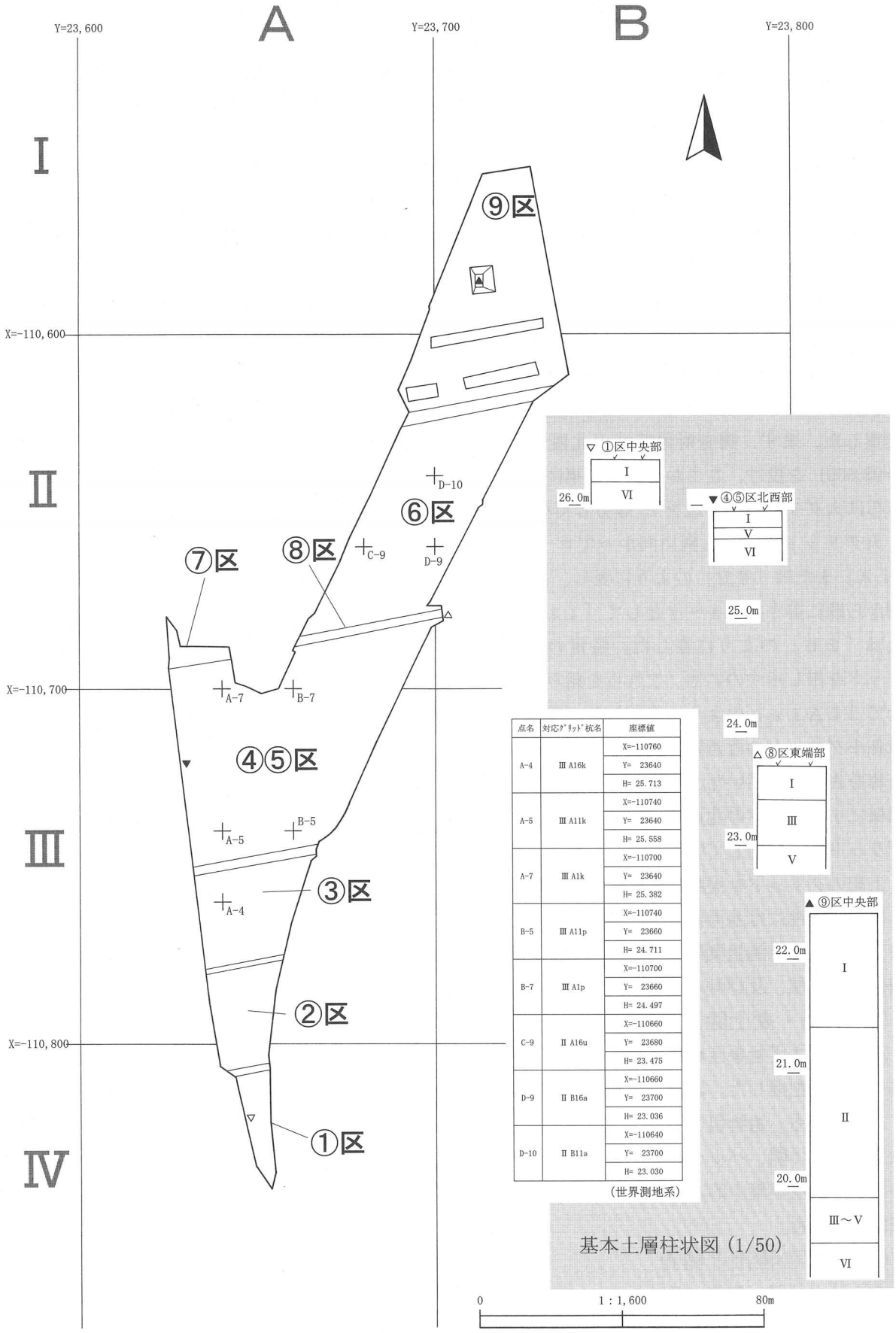
上記のグリッドを実際に調査区に割り付けるため、現地には基準杭及び区画割付杭を打設した。基準点測量業務は㈱総合土木コンサルタンツに委託した。基準杭及び区画割付杭の第Ｘ系座標値・標高値、及び対応するグリッド杭名は右表の通りである。

(3) 試掘・表土除去

調査ではまず対象区域に任意に試掘トレンチを設定し、重機・人力を併用して土層の堆積状況と遺構の存否を把握した。試掘により遺構・遺物が存在しないことを確認した範囲はこれをもって調査終了とし、一方、遺物包含層および遺構が確認された場合は、その上面を面的に広げるように土層を除去した。この際、バックホー・キャリアダンプ等の重機を積極的に用いたが、検出面までの土層が薄い場合や遺物が集中的に出土する場合など、重機の使用が適当でないと判断した区域では人力による掘削を行った。

(4) 遺構の検出と精査

表土除去の後、鋤簾（じょれん）・両刃草削り・移植ベラを用いて遺構検出を行い、必要に応じてスプレー塗料による白線で遺構プランにマーキングを施した。



点名	対応ｸﾞﾘｯﾄﾞ杭名	座標値
A-4	Ⅲ A16k	X=-110760
		Y= 23640
		H= 25.713
A-5	Ⅲ A11k	X=-110740
		Y= 23640
		H= 25.558
A-7	Ⅲ A1k	X=-110700
		Y= 23640
		H= 25.382
B-5	Ⅲ A11p	X=-110740
		Y= 23660
		H= 24.711
B-7	Ⅲ A1p	X=-110700
		Y= 23660
		H= 24.497
C-9	Ⅱ A16u	X=-110660
		Y= 23680
		H= 23.475
D-9	Ⅱ B16a	X=-110660
		Y= 23700
		H= 23.036
D-10	Ⅱ B11a	X=-110640
		Y= 23700
		H= 23.030

（世界測地系）

第５図　調査区とグリッド配置

精査では遺構の規模や性質に応じて２分法・４分法を使い分け、土層断面を観察しながら埋土を除去した。検出時に遺構の重複が認められた場合、なるべく平面観察で新旧関係を把握するように努め、原則として新期のものから順に埋土の掘削を行った。この場合、両者を縦断する断面を設定し土層の堆積状況からも併せて新旧関係を検討した。また、平面プランの確定や埋土の解釈が困難な場合には、積極的にサブトレンチを活用してこれらの確認に努めた。これにより完掘段階には平面プランの一部がサブトレンチで壊された状態になったものも含まれる。遺物は、遺構名やグリッド名および出土層位を記録して取上げ、必要に応じて出土状況図の作成・写真撮影を行った。

(5) 遺　構　名

①野外調査での仮名称

遺構には検出時点に随時固有の仮名称を与えた。仮名称には区名を示す丸数字を冠し、その後ろに遺構略号と数字を組み合わせ、「⑥ＳＫ０１」のように表記した。遺構略号としては、ＳＢ＝建物跡、ＳＤ＝溝跡、ＳＩ＝住居跡、ＳＫ＝土坑、pp ＝柱穴状土坑などを用いている。ただし、精査の初段階で遺構種別が判然としない場合などは、「○○グリッド付近暗褐色土落ち込み」のように特徴を端的に示す語を付し、遺物の取り上げや諸記録に用いた。

以上の仮名称は、室内整理段階でも作業用遺構名としてそのまま用いた。

②本書中の掲載名称

遺構名は、掲載にあたって仮名称を変更し、遺構種名を冠した１からの連番とした（「土坑１」・「陥し穴２」など）。一方、柱穴状ピットは改名せず「pp ○」として調査時の名称をそのまま用いた。ただし、調査の過程で名称が不明となったものや未命名のままだったものには、pp101 で始まる連番名を新たに与えた。本書ではこれらの柱穴群から建物跡を構成すると思われる柱穴を抽出し、建物跡復元案として「建物跡１」のように示した。また、溝跡についても室内整理によって得られた検討結果を反映させた新たな名称を与えている。

(6) 実　　測

遺構や出土状況などの平面実測は、小グリッドを再細分した１m方眼を基準に実測・作図する「簡易遣り方測量」で行った。縮尺は１/20 を基本とし、必要に応じて 1/10 図を作成した。このほか平板・光波トランシットを用いて、トレンチ位置図・遺構配置図・現況地形図等の作成を行い、調査区主要部については、（株）シン技術コンサルに委託し、ラジコンヘリによる写真測量を行った。

断面図は水平に設定した水糸を基準にして実測・作図した。縮尺は 1/20 を基本とし、細部表現を要する場合には 1/10 図も作成した。

(7) 土層断面の分層と注記

遺構やトレンチなどの土層断面は慎重に観察し堆積状況を把握するよう努めた。分層は堆積過程を表現するのに必要と思われた場合は細部にも配慮したが、薄層が連続的に互層をなす部分や、偶然の結果と思われる混入物の偏りなどは徒らに細分せず、有意と思われるまとまりの境界を表現した。

この分層の根拠を示すため、各層の性状を記録した。土層は主体土と混入土（物）によって構成されるものと考え、色調・土性・混入物・粘性・締まりの程度等を記載した。また、解釈可能な場合は、その層の持つ性格を想定し付記した。

遺構埋土等の堆積層の「主体土」には、認識可能な場合、その層が堆積した時点で周辺の表土を形成していたと思われる土（埋没開始時点における最新期の土）をあてた。例えば地山土のブロックが大半を占める遺構の壁の崩落層であっても、当時の表土と思われる黒色土が僅かに含まれている場合は、後者を主体土とし、「地山土が大量に混入している状態」と解釈している。主体土と基本土層の

対比から、その層の堆積時期を推定することが可能だと考えたからである。

土色の表記は新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議事務局）に準じたが、調査員が受ける層間の印象の差が土色名の違いとして反映されない場合も多くあった。このため、各層の記録には調査員個人の主観による相対的な層全体の印象（明暗や色味の差）も併記した。例えば、「○層よりも明るい」・「焼土含み全体に赤味」・「炭化物多く黒味強」・「地山土含み黄味がかる」などの表現がこれにあたる。また混入物の量について「極微」・「やや多」等の表記を行っているが、調査員の主観的基準を土色帖に示されているパーセント表記に置き換えれば、概ね、極微（１～２％）・微（３～５％）・少（５～10％）・やや多（15～20％）・多（30～50％）・大量（50％以上）となろうか。

(8) 写　真　撮　影

野外調査では６×７㎝判カメラ（モノクロ）、35㎜判カメラ（カラーリバーサル）、デジタルカメラを用い、各種遺構の全景・土層断面・遺物出土状況等を撮影した。撮影に際しては、撮影状況を記したカードをその都度写し込み、現像後これを元に整理した。なお、一部の遺構ではいずれかのカットを省略した場合がある。また、カメラの故障などで必要なカットを撮影できなかったものも含まれる。またこれらとは別に、ラジコンヘリによる空中写真の撮影を行った。

(9) 遺構の保全・埋め戻し

今次調査では、岩手県教育委員会の指導により、12世紀の遺構面までを記録対象とすることとなった。12世紀の遺構については報告書作成に必要なデータを確保しつつ、必要以上の破壊を行わないよう留意した。「池状遺構」や土坑・溝の一部では、埋土の掘り上げを一部に限定し、断面の観察・記録にはサブトレンチを活用した。「敷石遺構」でも、礫面の除去は行わず、礫面以下の観察にはサブトレンチを利用し断面の観察・記録を行った。「池状遺構」・「敷石遺構」ともに、断面観察に用いたベルトは除去せずそのまま埋め戻すこととしたため、調査終了時の図・写真等にはこれらが残った状態で記録されている。しかしながら、度重なる降雨・冠水によりベルトの崩壊が進み、結果的には良好な状態で保存できたとは言い難い。調査終了後は、国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所の了解のもと、遺構が集中する調査区中央部（④～⑧区）については埋め戻しの材として山砂を用い、遺構面の上を50㎝の厚さで覆うように敷きならして遺構面の保全を図った。

2　室　内　整　理

(1) 作　業　手　順

出土遺物の洗浄と地点別の仕分け作業、土器を除く各遺物の分類は、野外調査と並行して現地で行った。野外調査終了の後、室内において土器の接合・復元作業を開始し、随時掲載資料の選別・登録を行った。その後、実測図作成・拓影作成・トレースの順に作業を進めた。調査員はこれらの作業の統括と並行して図面合成・遺物観察表作成・原稿執筆を行った。

(2) 遺　　構

各遺構は必要に応じて第２原図を作成し、これをもとにトレースののち図版を作成した。図中には縮尺を示すスケールを付し、方位マークで座標北を示した。

(3) 遺　　物

土器は出土地点・遺構別に分けた後、掲載に適した資料を選抜し、実測等の作業対象資料とした。全ての遺物についての掲載番号・出土地点・層位・計測値・その他観察事項等を記載した一覧表を作成した。なお、実測図から読みとれる属性については、記載を省略したものもある。各図版には掲載縮尺を示すスケールを付している。

Ⅳ　検出遺構と出土遺物

1　概　　要

(1) 検出遺構と出土遺物

①12世紀

＜遺構＞　掘立柱建物跡４棟、敷石遺構１箇所、池状遺構１箇所、取水口状遺構３箇所、土坑12基、溝跡13条。

＜遺物＞　かわらけ（ロクロ・てづくね）、国産陶器（渥美・常滑・須恵器系ほか／甕・鉢）、中国産白磁（碗・壺・皿）［以上、大コンテナ５箱］、刀子・鉄釘［各数点］・木椀［１点］。

②古代（平安時代前期）

＜遺構＞　竪穴住居跡１棟、陥し穴状遺構６基、沢跡２条。

＜遺物＞　土師器（坏・甕）・須恵器（坏・甕）［以上、小コンテナ１箱］・刀子

③縄文時代

＜遺構＞　なし

＜遺物＞　土器細片（時期不明、後晩期か）［小袋１］・石器（石鏃・石錐・石匙・剥片）［各数点］

④その他

＜遺構＞　なし。上記の一部（柱穴等）に含まれている可能性あり。

＜遺物＞　近世以降の陶磁器［中コンテナ１箱］・鉄釘・煙管雁首・煙管吸口・銭貨（寛永通宝）

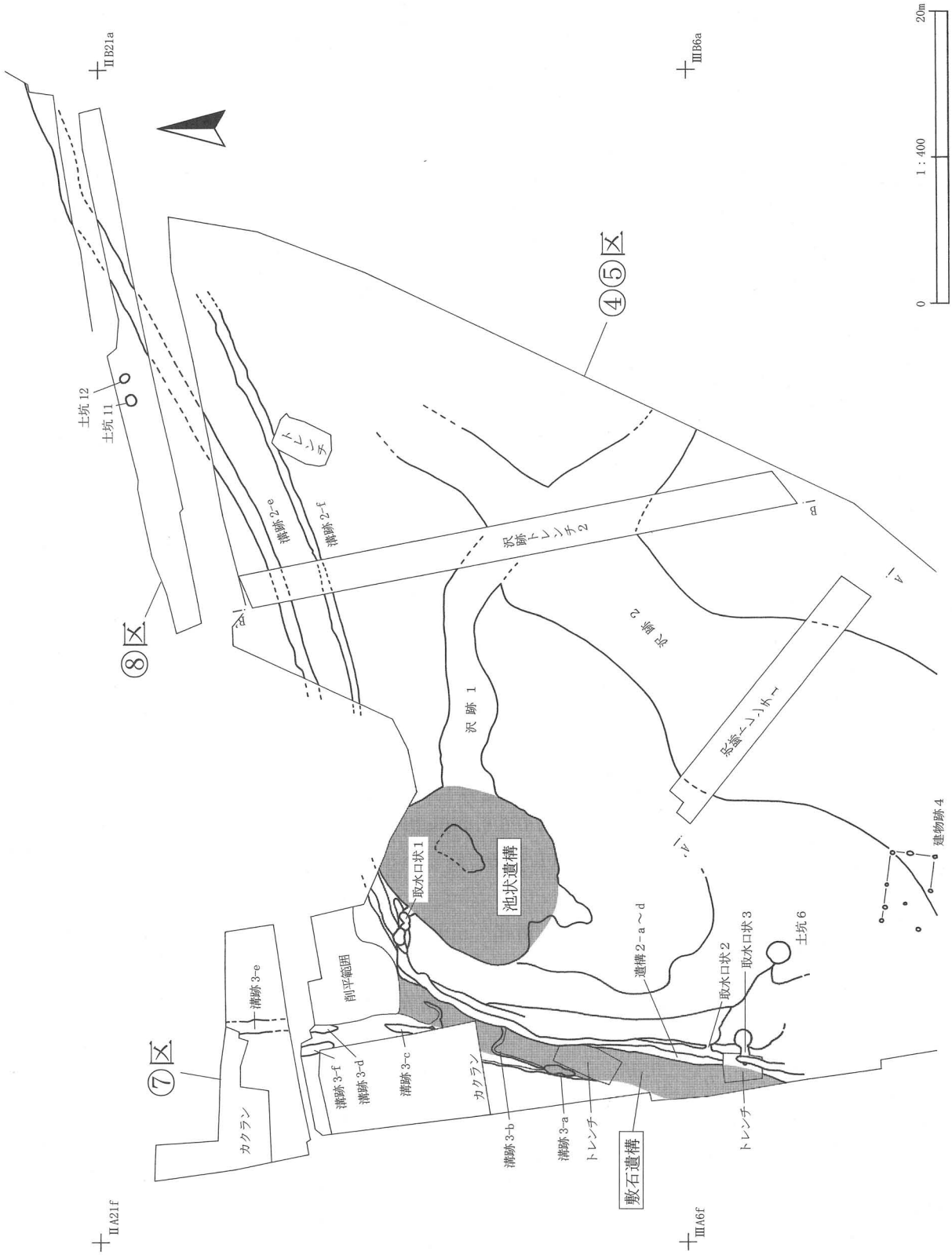
(2) 成 果 の 概 要（第６・７図）

今次調査区は関山丘陵の東側縁辺に接する緩斜面地に立地し、その中央部は関山側からのびる沢跡に挟まれた舌状の微高地となっている。上記の遺構・遺物は、主にこの微高地周辺（⑥・⑦・⑧区）から検出されたものであり、12世紀に帰属するものが主体となっている。一方、微高地の周縁（④⑤区南東部及び⑨区）は、洪水土砂に幾度も被覆されている低位面へと連続しており、遺構・遺物ともに著しく希薄であった。

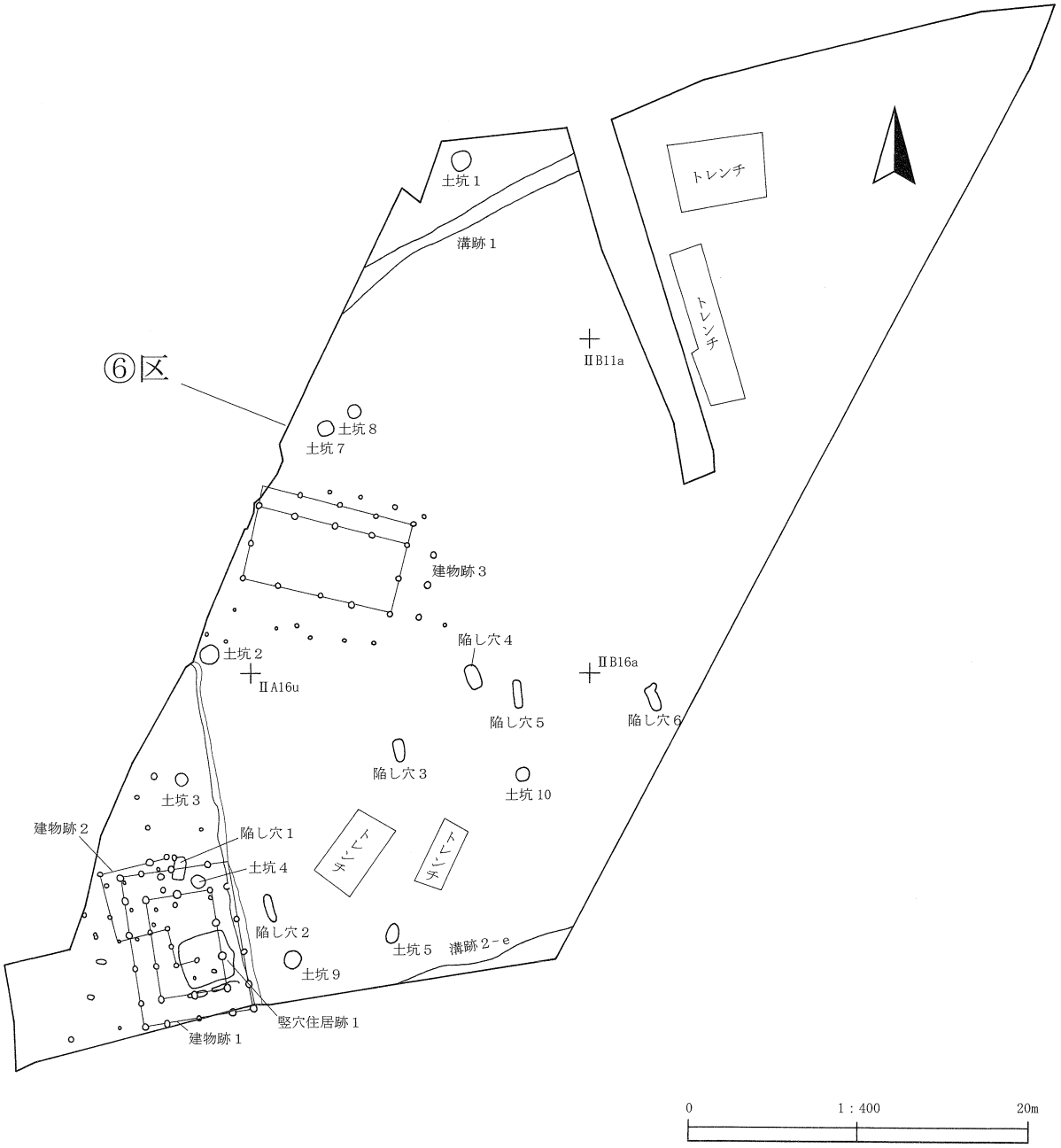
掘立柱建物跡を構成する12世紀の柱穴と直径１m前後の円形土坑は、北辺と南辺を溝で区画された微高地頂部（⑥区）に集中して分布していた。四面に廂を持つ建物跡（建物跡１）は微高地南縁の区画溝（溝跡２-e）に面しており、本建物跡の前面（南東面）付近からは概ね12世紀第３四半期に帰属するかわらけ等の遺物がまとまって出土した。今次調査区において遺物の集中が最も顕著なのがこの地点であった。

一方、調査区西側の関山（中尊寺）に接する地点（④⑤区西縁部）からは、ほぼ南北方向に走行する帯状の敷石面が検出された。側溝状の溝を両脇に伴っており道路跡と推定される。東縁の側溝は途中で東向きに屈曲し微高地南辺の区画溝へと連続している。屈曲部付近では敷石面の幅が広くなりテラス状の高まりが生じていることから、この箇所が南北走行の道路と東側から上ってくる別の道路との合流点であった可能性もある。さらに、屈曲部の下方には池状の落ち込みが検出された（「池状遺構」）。遺物の集中廃棄などはみられないが、出土遺物は12世紀代のものに限定される。

以上の遺構群は、一時期、中尊寺の寺域の一部を構成していた可能性が高いものと思われる。



第６図　遺構配置図 (1) －④⑤・⑦・⑧区－



第７図　遺構配置図（2）－⑥区－

2　遺　　構

(1) 掘立柱建物跡

建物跡１(第８図、写真図版２)

〔位置〕⑥区南西部、ⅡＡ 20 ｔグリッド杭付近に位置する。

〔重複〕建物跡２のプランと重複する。

〔平面形式〕３×２間の身舎の四面に廂を伴う掘立柱建物である。桁行き 900 ㎝、梁間 650 ㎝である。

〔建物方位〕Ｎ -81°　－Ｅ（梁)、Ｎ－９°　－Ｗ(桁)。

〔柱間寸法〕身舎の柱間は 200 ㎝、廂は桁方向で 150 ㎝、梁方向で 120 ㎝である。

〔付属施設？〕南面廂 pp84・86 の南側に、梁行方向と平行して並ぶ２基の土坑が検出された（土坑 11・12)。自然の流入土によって埋没した浅い落ちこみであり柱穴ではない。本建物に伴う何らかの施設か、雨垂れ等の痕跡の可能性があろう。

〔出土遺物〕(第 34・45 図、写真図版 28・34)

建物構成柱穴の多くは埋土に土師質の土器細片を含んでいた。このうち pp84 から出土したてづくねかわらけの破片（６）１点を掲載した。柱穴からはこのほか鉄釘（303・306）が出土している。須恵器坏（４)、土師器甕（５）の口縁部破片は近接する平安時代住居跡からの混入であろう。本建物跡の付近の検出面からは常滑産陶器片（７・８）の出土もみられた。本遺構付近では多くの 12 世紀遺物が出土しており、特に建物跡の南東側に近接した溝跡２-e の検出面（⑧区周辺）には、かわらけや陶器類が集中的に分布している。第 41 ～ 44 図に示した「⑥区南縁周辺」の出土遺物（178 ～ 240）がこれにあたる。12 世紀第３四半期を中心とするかわらけ・陶磁器類である。

〔帰属年代〕平面形態や柱穴埋土の主体土及び出土遺物から 12 世紀代に帰属すると思われる。

建物跡２(第９図、写真図版２)

〔位置〕⑥区南西部、ⅡＡ 19 ｓ付近に位置する。

〔重複〕建物跡１のプランと重複する。

〔平面形式〕柱配置の復元が不完全であるが、東西方向に主軸を持ち南面に張り出しを持つ形態と考えられる。

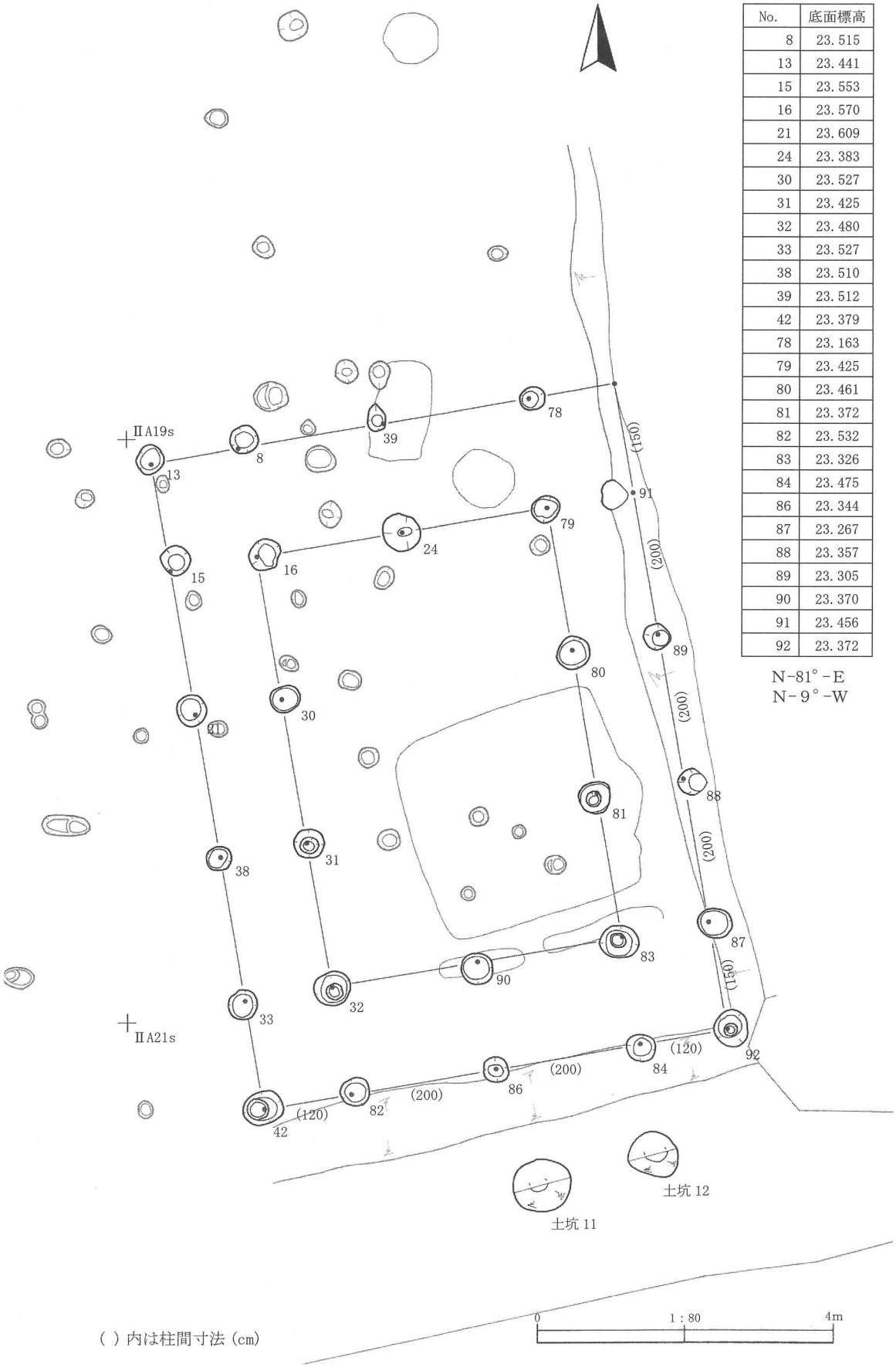
〔建物方位〕Ｎ -14°　－Ｅ（梁)、Ｎ -76°　－Ｗ（桁)。建物跡３と軸方位を同じくする。

〔柱間寸法〕桁方向で 120 ㎝・300 ㎝、梁方向で 150 ㎝・270 ㎝、張り出し部では 120 ㎝となっている。

〔出土遺物〕(第 34 図、写真図版 28)

建物構成柱穴から掲載可能な遺物の出土はなかった。常滑産甕破片（７・８)、近世軒平瓦片（11・12）はいずれも本建物跡及び建物跡１が位置する⑥区南西部の検出面から出土したものであり、本遺構との関連をもつ可能性がある遺物である。須恵器坏破片（10）は付近の平安時代住居跡からの混入と見られる。

〔帰属年代〕出土遺物から 12 世紀代後半を上限とする。埋土主体土は他の 12 世紀遺構に似るが下限年代確定の根拠を欠く。

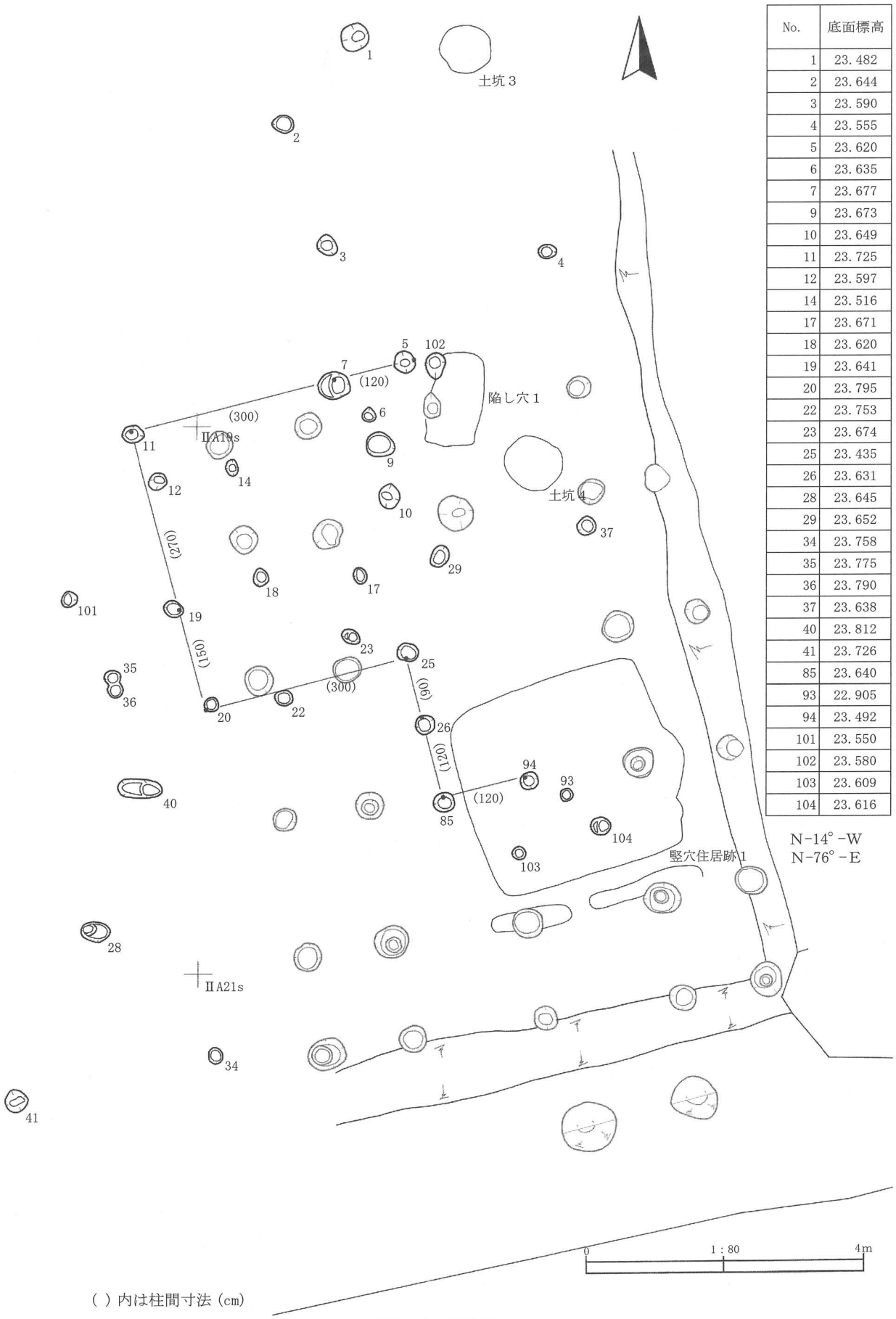


No.	底面標高
8	23.515
13	23.441
15	23.553
16	23.570
21	23.609
24	23.383
30	23.527
31	23.425
32	23.480
33	23.527
38	23.510
39	23.512
42	23.379
78	23.163
79	23.425
80	23.461
81	23.372
82	23.532
83	23.326
84	23.475
86	23.344
87	23.267
88	23.357
89	23.305
90	23.370
91	23.456
92	23.372

N-81°-E
N-9°-W

( ) 内は柱間寸法 (cm)

第８図　建物跡１



No.	底面標高
1	23.482
2	23.644
3	23.590
4	23.555
5	23.620
6	23.635
7	23.677
9	23.673
10	23.649
11	23.725
12	23.597
14	23.516
17	23.671
18	23.620
19	23.641
20	23.795
22	23.753
23	23.674
25	23.435
26	23.631
28	23.645
29	23.652
34	23.758
35	23.775
36	23.790
37	23.638
40	23.812
41	23.726
85	23.640
93	22.905
94	23.492
101	23.550
102	23.580
103	23.609
104	23.616

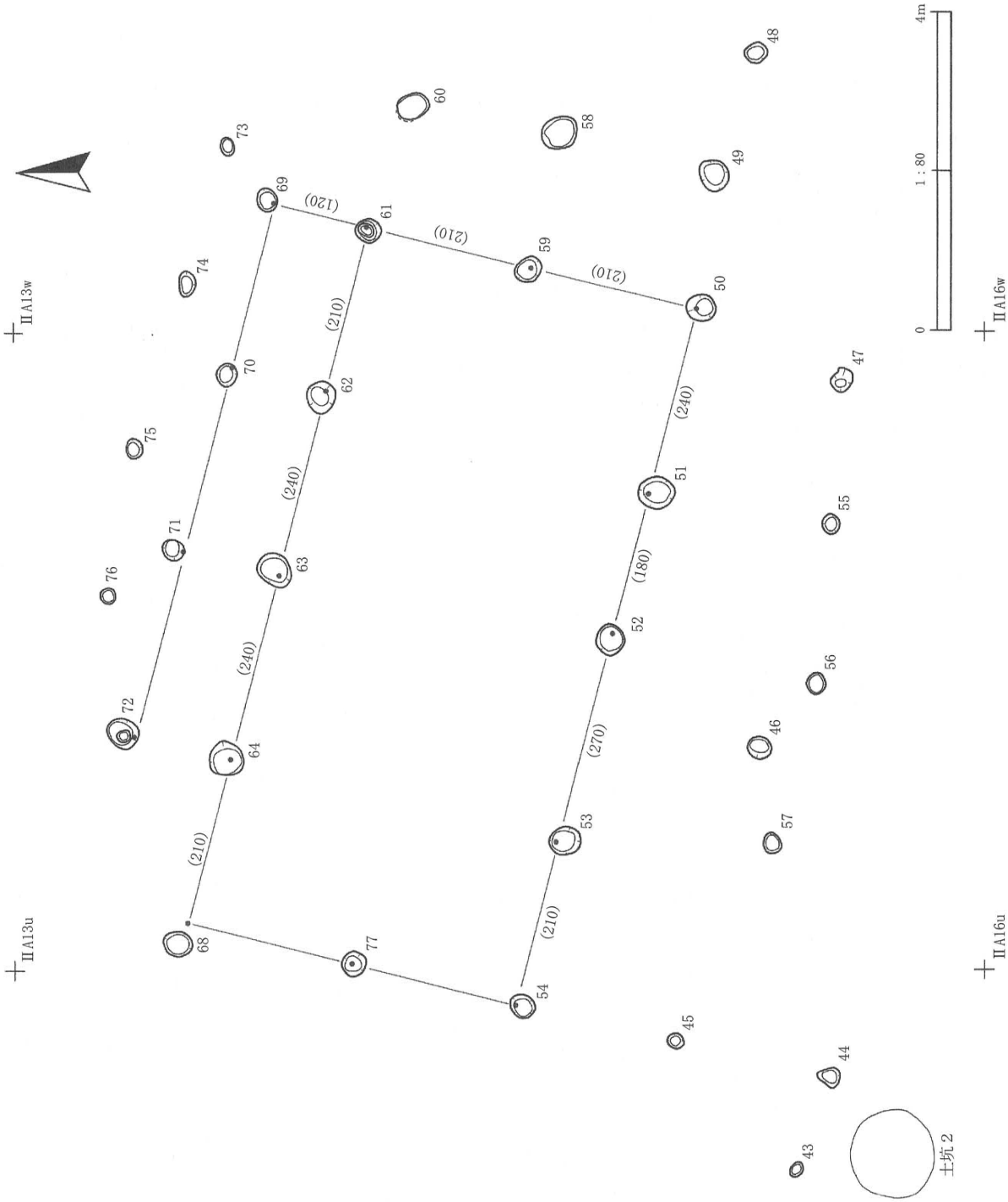
( ) 内は柱間寸法 (cm)

第９図　建物跡２

No.	底面標高
43	23.230
44	23.166
45	23.324
46	23.216
47	23.172
48	23.252
49	22.949
50	22.945
51	22.882
52	23.100
53	23.056
54	23.000
55	23.262
56	23.268
57	23.229
58	23.164
59	23.100
60	23.120
61	22.927
62	23.005
63	23.088
64	23.113
68	23.012
69	23.184
70	23.064
71	23.048
72	23.100
73	23.118
74	23.190
75	23.142
76	23.056
77	22.907

N−14°−E
N−76°−W

( ) 内は柱間寸法 (cm)



第10図　建物跡3

建物跡３（第 10 図、写真図版３）

〔位置〕⑥区中央西部、ⅡＡ 14 ｖグリッド杭付近に位置する。

〔重複〕本建物跡は柱穴群から抽出したものであり、周囲の他の柱穴が構成する建物跡等とプランの重複がある可能性がある。

〔平面形式〕４間×２間の身舎の北側に廂を伴う掘立柱建物であると思われる。桁行き 900 ㎝、梁間 540 ㎝。周囲には軸方向を同じくする柱穴列が認められ、これらが本建物に伴う可能性がある。

〔建物方位〕Ｎ -14°　－Ｅ（梁）、Ｎ -76°　－Ｗ（桁）。建物跡２と軸方位を同じくする。

〔柱間寸法〕身舎は桁方向で 180 ～ 270 ㎝、梁方向は 210 ㎝、廂は 120 ㎝である。

〔出土遺物〕（第 34・45 図、写真図版 28・34）

建物構成柱穴の一つ、pp70 からは常滑産鉢の破片が出土した。また pp53・pp63 からは鉄釘（307・308）も出土している。本建物跡の東辺に平行する柱穴 pp49 からは渥美産（２）及び常滑産（３）の甕破片が出土している。

〔帰属年代〕出土遺物から 12 世紀代後半を上限とする。埋土主体土は他の 12 世紀遺構に似るが下限年代確定の根拠を欠く。

建物跡４（第 11 図、写真図版３）

〔位置〕④⑤区南西部、ⅢＡ 10 １グリッド杭付近に位置する。

〔重複〕十和田ａ降下火山灰層を切る。重複する遺構はない。

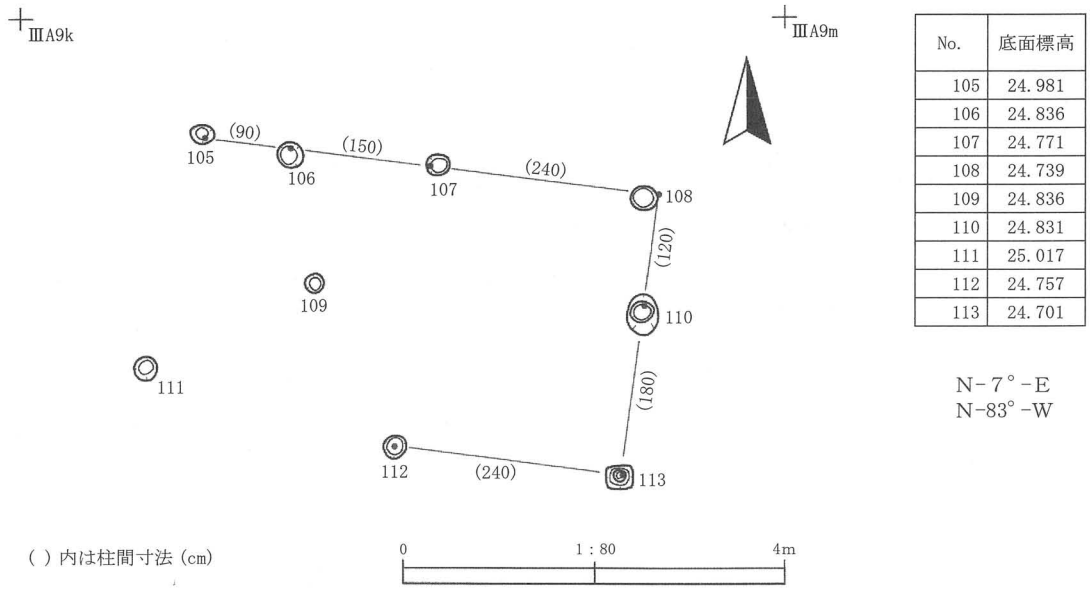
〔平面形式〕柱配置の復元が不完全であるが、東西方向に主軸を持つ形態と考えられる。

〔建物方位〕Ｎ－７°　－Ｅ（梁）、Ｎ -83°　－Ｗ（桁）。

〔柱間寸法〕桁方向では 90 ㎝・150 ㎝・240 ㎝、梁方向では 120 ㎝・180 ㎝である。

〔出土遺物〕なし。

〔帰属年代〕十和田ａ降下火山灰層を切るため 10 世紀代を上限とする。下限年代は不明である。



No.	底面標高
105	24.981
106	24.836
107	24.771
108	24.739
109	24.836
110	24.831
111	25.017
112	24.757
113	24.701

第 11 図　建物跡４

表４　柱穴一覧

No.	区	グリッド	掘り方埋土主体土		混入物	柱痕径（cm）	底面標高	帰属遺構	重複（新＞旧）	出土遺物（掲載番号）※番号無しは不掲載
			色調	土質						
1	⑥	ⅡＡ17s	10YR3/3 ～ 4/3	粘シ	地山礫微	20	23.482			
2	⑥	ⅡＡ17s	10YR3/4	シ	地山礫微・炭粒極微	－	23.644			土師質土器片
3	⑥	ⅡＡ18s	10YR3/4	シ	地山礫少	16	23.590			
4	⑥	ⅡＡ18t	10YR3/4 ～ 4/4	砂シ	炭粒極微	－	23.555			
5	⑥	ⅡＡ18s	10YR3/4 ～ 4/4	砂シ	炭粒極微	－	23.620	建物跡２		
6	⑥	ⅡＡ18s	10YR2/3 ～ 3/3	シ	炭粒極微	－	23.635			
7	⑥	ⅡＡ18s	10YR3/3	粘シ	地山礫少	－	23.677	建物跡２		
8	⑥	ⅡＡ18s ～ 19s	10YR3/3	粘シ	地山礫少	16	23.515	建物跡１		
9	⑥	ⅡＡ19s	10YR3/3	粘シ	地山土ブロック微	－	23.673			
10	⑥	ⅡＡ19s	10YR3/3	粘シ	地山土ブロック微	－	23.649			
11	⑥	ⅡＡ19r	10YR3/3 ～ 4/3	粘シ	地山礫やや多	－	23.725	建物跡２		
12	⑥	ⅡＡ19r	10YR3/3 ～ 4/3	粘シ	地山礫微	－	23.597			
13	⑥	ⅡＡ19s	10YR3/3 ～ 4/3	粘シ	地山礫多	17	23.441	建物跡１		
14	⑥	ⅡＡ19s	10YR3/3 ～ 4/3	粘シ	地山礫多	12	23.516			
15	⑥	ⅡＡ19s	10YR3/3 ～ 4/3	粘シ	地山礫多	12	23.553	建物跡１		
16	⑥	ⅡＡ19s	10YR3/3	シ	地山土ブロック少・炭片微	－	23.570	建物跡１		
17	⑥	ⅡＡ19s	10YR3/3	シ	地山土ブロック極微	－	23.671			
18	⑥	ⅡＡ19s	10YR3/3	シ	地山土ブロック極微	－	23.620			
19	⑥	ⅡＡ19r	10YR3/3	シ	地山土ブロック極微	－	23.641	建物跡２		
20	⑥	ⅡＡ19s ～ 20s	10YR3/3	シ	地山土ブロック極微	－	23.795	建物跡２		
21	⑥	ⅡＡ19s	10YR3/3	シ	地山礫やや多	16	23.609	建物跡１		
22	⑥	ⅡＡ19s ～ 20s	10YR3/3	シ	地山土ブロック極微	－	23.753	建物跡２		
23	⑥	ⅡＡ19s	10YR3/4	シ	地山礫やや多	－	23.674			
24	⑥	ⅡＡ19s	10YR3/3	シ	地山礫多	16	23.383	建物跡１		須恵器坏口縁部片 (4)
25	⑥	ⅡＡ19s	10YR3/4	シ	地山礫少	－	23.435	建物跡２		
26	⑥	ⅡＡ20s	10YR3/3 ～ 4/3	粘シ	地山礫少	－	23.631	建物跡２		
27	⑥		10YR3/3	シ	地山礫少	－	0.000			
28	⑥	ⅡＡ20r	10YR2/3	シ	地山土ブロック少	－	23.645			
29	⑥	ⅡＡ19s	10YR2/3	シ	地山土ブロック極微	－	23.652			
30	⑥	ⅡＡ19s	10YR3/4	シ	地山礫多	12	23.527	建物跡１		土師質土器片．鉄釘 (303)
31	⑥	ⅡＡ20s	10YR3/3	シ	炭粒極微	－	23.425	建物跡１		土師質土器片
32	⑥	ⅡＡ20s	10YR3/3	シ	地山土ブロック少	－	23.480	建物跡１		土師質土器片
33	⑥	ⅡＡ20s	10YR3/3	シ	地山土ブロックやや多	14	23.527	建物跡１		
34	⑥	ⅡＡ21s	10YR3/3	シ	―	－	23.758			
35	⑥	ⅡＡ19r	10YR3/3	シ	―	－	23.775		＜ 36	
36	⑥	ⅡＡ19r	10YR3/4	シ	地山礫多	－	23.790		＞ 35	
37	⑥	ⅡＡ19t	10YR3/4	シ	地山礫少	－	23.638			
38	⑥	ⅡＡ20s	10YR3/3	シ	地山礫多	14	23.510	建物跡１		土師質土器片
39	⑥	ⅡＡ18s	10YR3/4	シ	地山土ブロック少	－	23.512	建物跡１	＞陥し穴１	
40	⑥	ⅡＡ20r	10YR3/3	シ	―	－	23.812			
41	⑥	ⅡＡ21r	10YR3/3	シ	地山土ブロックやや多	－	23.726			
42	⑥	ⅡＡ21s	10YR3/3 ～ 4/3	シ	地山礫多	16	23.379	建物跡１		土師質土器片
43	⑥	ⅡＡ15t	10YR3/3	シ	地山土ブロック少	－	23.230			
44	⑥	ⅡＡ15t	10YR3/3	シ	地山土ブロック少	－	23.166			
45	⑥	ⅡＡ15t	10YR3/3	シ	―	－	23.324			
46	⑥	ⅡＡ15u	10YR3/3 ～ 3/4	シ	炭片微・焼土粒極微	－	23.216			
47	⑥	ⅡＡ15v	10YR3/3	シ	地山礫極微	－	23.172			
48	⑥	ⅡＡ15w	10YR3/4	シ	炭粒極微	－	23.252			
49	⑥	ⅡＡ15w	10YR3/4	シ	炭粒極微	－	22.949			渥美甕 (2)・常滑甕 (3)・土師質土器片
50	⑥	ⅡＡ15w	10YR3/4	シ	炭粒極微	－	22.945	建物跡３		
51	⑥	ⅡＡ14v ～ 15v	10YR3/4	シ	炭粒極微	－	22.882	建物跡３		
52	⑥	ⅡＡ14u ～ 14v	10YR3/4	シ	炭粒極微	－	23.100	建物跡３		
53	⑥	ⅡＡ14u	10YR3/4	シ	地山土ブロック多	15	23.056	建物跡３		鉄釘 (307)

No.	区	グリッド	掘り方埋土主体土		混入物	柱痕径（cm）	底面標高	帰属遺構	重複（新＞旧）	出土遺物（掲載番号）※番号無しは不掲載
			色調	土質						
54	⑥	ⅡＡ14t	10YR3/3	シ	地山土ブロック少	－	23.000	建物跡３		
55	⑥	ⅡＡ15v	10YR3/3	シ	地山礫微	－	23.262			
56	⑥	ⅡＡ15u	10YR3/3	シ	地山礫微	－	23.268			
57	⑥	ⅡＡ15u	10YR3/3	シ	地山礫微	－	23.229			
58	⑥	ⅡＡ14w	10YR3/4	シ	地山土ブロック微	－	23.146			
59	⑥	ⅡＡ14w	10YR3/4	シ	地山土ブロック多	－	23.100	建物跡３		
60	⑥	ⅡＡ14w	10YR3/4	シ	地山土ブロック多	－	23.120			
61	⑥	ⅡＡ14w	10YR3/4	シ	地山土ブロック微	－	22.927	建物跡３		かわらけ口縁部片
62	⑥	ⅡＡ13v	10YR3/4	シ	地山土ブロック微	－	23.005	建物跡３		
63	⑥	ⅡＡ13v	10YR3/4	シ	地山土ブロック微	－	23.088	建物跡３		土師質土器片・鉄釘(308)
64	⑥	ⅡＡ13u	10YR3/4	シ	地山土ブロック極微	－	23.113	建物跡３		
65	⑥		10YR4/2	粘シ	地山土ブロック大	16	0.000			
66	⑥		10YR4/2	粘シ	地山土ブロック大	20	0.000			
67	⑥		10YR4/2	粘シ	地山土ブロック大	20	0.000			
68	⑥	ⅡＡ13u	10YR3/3	シ	地山土ブロック少	－	23.012	建物跡３		
69	⑥	ⅡＡ13w	10YR3/3	シ	地山土ブロック微	－	23.184	建物跡３		
70	⑥	ⅡＡ13v	10YR3/3	シ	地山土ブロック微	－	23.064	建物跡３		常滑鉢(1)・土師質土器片
71	⑥	ⅡＡ13v	10YR4/4～4/6	シ	地山土ブロック微	－	23.048	建物跡３		土師質土器片
72	⑥	ⅡＡ13u	10YR3/3	シ	地山土ブロック微	－	23.100	建物跡３		
73	⑥	ⅡＡ13w	10YR4/4	シ	地山土ブロック微	－	23.118			
74	⑥	ⅡＡ13w	10YR4/4	シ	地山土ブロック微	－	23.190			
75	⑥	ⅡＡ13v	10YR4/4	シ	地山土ブロック微	－	23.142			
76	⑥	ⅡＡ13v	10YR4/4	シ	地山土ブロック微	－	23.056			
77	⑥	ⅡＡ14t～14u	10YR3/3	シ	―	－	22.907	建物跡３		根固石（径約10cm）
78	⑥	ⅡＡ18t	10YR3/3	シ	―	－	23.163	建物跡１		
79	⑥	ⅡＡ19t	10YR3/3	シ	地山土ブロック少	－	23.425	建物跡１		
80	⑥	ⅡＡ19t	10YR3/3	シ	地山土ブロック少	－	23.461	建物跡１		土師質土器片・鉄釘(306)
81	⑥	ⅡＡ20t	10YR3/3	シ	―	－	23.372	建物跡１		土師器甕口縁部片(5)・かわらけ片
82	⑥	ⅡＡ21s	10YR3/3	シ	地山土ブロック多	－	23.532	建物跡１		土師質土器片
83	⑥	ⅡＡ20t	10YR3/3	シ	地山土ブロック多	－	23.326	建物跡１		土師質土器片
84	⑥	ⅡＡ21t	10YR3/3	シ	地山土ブロック多	－	23.475	建物跡１		かわらけ片(6)・土師質土器片
85	⑥	ⅡＡ20s	10YR3/3	シ	地山礫微	－	23.640	建物跡２		剥片［縄文］
86	⑥	ⅡＡ21t	10YR3/4	シ	地山土ブロック大	15	23.344	建物跡１		
87	⑥	ⅡＡ20t	10YR3/3	シ	地山土ブロック少	－	23.267	建物跡１		土師質土器片
88	⑥	ⅡＡ20t	10YR3/3	シ	10YR3/2 シルトブロック少	－	23.357	建物跡１		
89	⑥	ⅡＡ19t	10YR4/4	砂	地山礫極微	－	23.305	建物跡１		
90	⑥	ⅡＡ20t	10YR3/3	シ	地山土ブロック微	－	23.370	建物跡１		
91	⑥	ⅡＡ19t					23.456	建物跡１		
92	⑥	ⅡＡ20u～21u	10YR3/3	シ	地山土ブロック微	－	23.372	建物跡１		
93	⑥	ⅡＡ20t	10YR3/3	シ	地山土ブロック極微	－	22.905			
94	⑥	ⅡＡ20t	10YR3/3	シ	地山土ブロック極微	－	23.492	建物跡２		
101	⑥	ⅡＡ19r					23.550			
102	⑥	ⅡＡ18s					23.580			
103	⑥	ⅡＡ20t					23.609			
104	⑥	ⅡＡ20t					23.616			
105	④	ⅢＡ９k					24.981	建物跡４		
106	④	ⅢＡ９k					24.836	建物跡４		
107	④	ⅢＡ９l					24.771	建物跡４		
108	④	ⅢＡ９l					24.739	建物跡４		
109	④	ⅢＡ９k					24.836			
110	④	ⅢＡ９l					24.831	建物跡４		
111	④	ⅢＡ９k					25.017			
112	④	ⅢＡ10 k～10 l					24.757	建物跡４		
113	④	ⅢＡ10 l					24.701	建物跡４		

(2) 敷　石　遺　構（第12～17図、写真図版4～10・16）

〔位置・検出状況〕

⑦区西半部及び④⑤区北西部～西部中央、ⅡＡ23ｉ～ⅢＡ７ｈグリッド付近に位置する。調査開始当初に④⑤区北西部に設定したトレンチの断面（B-B'）において、整地層の上面に集中する礫群が検出された。現水田耕作土の下面に接して見つかったことや、県教育委員会の試掘成果で同地点付近に自然礫層の分布することが報告されていたことから、当初この礫群を記録対象とすべきか否かについては判然としなかった。その後、④⑤区西部の表土除去を進めたところ、帯状の礫群が面的に展開することが確認されたため、人為的な構築物と認定し本格的な精査に着手した。

〔規模・形状〕

礫面の分布範囲は南北方向に最大約38ｍ、幅は概ね1.5ｍから最大3.0ｍ程である（以下、礫面の分布範囲全体を「敷石遺構」と称する）。このうち特に整った敷石面が認められるのは、北端がⅢＡ１ｉグリッド東部、南端がⅢＡ７ｈグリッド東部の範囲である。幅1.5ｍ前後の平坦な敷石面が概ね南北方向に帯状に伸展し、北部でやや東に傾いて全体的には緩い弧状を呈している（「敷石遺構」全体のうち当該部分を限定して「帯状敷石面」と称する）。この区間の全長は約26ｍである。礫の分布は帯状敷石面のさらに北側にも広がりを見せるが、礫の密度は疎らとなり面が傾斜や凹凸を持つなど、帯状敷石面とは様相を異にしている。

敷石遺構に伴う礫は後世の削平等によって失われた部分も多いと思われ、残存部のみで遺構の全体像を理解することは難しい。帯状敷石面の側縁に並走する溝跡（溝跡２･溝跡３）が本遺構に伴う「側溝」であるとすれば、これらが帯状敷石面の範囲を越えそれぞれ北側・東側へと展開することは、同様の敷石面がさらに広がりを持っていた可能性を示している。特に帯状敷石面の東縁北端から東側に屈曲して⑥区南縁部に沿ってのびる溝跡２－ｅの埋土上半には、周囲から流入したとみられる多量の礫が含まれており、敷石面残存範囲のさらに東方にも礫を用いた構築物が展開していた可能性を強く示唆している。

また、帯状敷石面北部のⅢＡ２ｉグリッド付近では低位面側（「池状遺構」側）に張り出すテラス状の高まりが認められる。この高まりの上面に敷石面は残存しないが、標高からみて削平を受けた可能性が高く、本来的な敷石面の有無は不明である。この高まりがⅢＡ３ｉグリッド付近の敷石面とⅢＡ１ｉ東部の敷石面を分断していることから、帯状敷石面を覆って新期に構築されたものである可能性が疑われたが、断面を確認したところ、この高まりは地山の削り出しによって設けられたものであり、下部に古期の敷石面が潜っていないことが確認された。よって、帯状敷石面は元々この地点に明瞭な段差を有していたということが明らかとなった。

以上のことから、敷石遺構の全体像は、ひな壇状の平坦面と自然傾斜をのこした斜面部が複合して構成された空間であったと考えられる。

〔敷石面及び周辺の礫の状況〕

帯状敷石面が良好に残存するのは、北から順に、ⅢＡ１ｉグリッド東部～同１ｊグリッド西部、ⅢＡ３ｉグリッド西部、ⅢＡ５ｉグリッド杭付近、ⅢＡ６ｈグリッド東部～同７ｈグリッド東部の４地点である。本来は各地点間にも敷石面が連続していた可能性が高いが、後世の攪乱等により多くが失われている。

敷石は直径10㎝未満の円礫を主体とし、切り土・盛り土によって平坦に整地された地面に直に敷き詰められている。これらの礫の間隙にはさらに径の小さい礫が充填され、密で締まった敷石面が形

成されている。

敷石面の上には、直径20㎝程度の中型の礫が点在する状況が認められ、また、特にⅢＡ２ｉ・同３ｉグリッド付近では直径30㎝を超える大型の礫が集中的に積み重なって出土した。これらの中型～大型礫群は上部が安定した面を形成せず配置に規則性もみられない。また、敷石面の上位に堆積した土層中に混在して出土するものも多く含まれる。よって、これらの礫は現位置を保った本遺構の構築部材ではなく、廃絶後に敷石面上に遺棄・転落したものと判断される。

次に帯状敷石面以外の礫分布状況について。礫の分布範囲の北部にあたるⅡＡ24ｉグリッド杭付近（⑦区）及びⅡＡ25ｉ中央付近では、礫の分布面が東に下る緩斜面となっており、礫の密度も疎らで緻密さを欠いている。図上で礫の空白域となっている⑦区西端部、⑦区東半部、ⅡＡ24ｈグリッド南半部、ⅡＡ25ｊグリッド周辺は明らかに後世の攪乱を受けており、本来の礫面の有無については不明である。ⅡＡ25ｊグリッド杭及びⅢＡ１ｊグリッド杭付近に点在する礫群は、近世以降の水田耕作土の下面に二次的に集積したものであり本来の位置を保っていない。

〔周辺遺構との関係〕

帯状敷石面の西縁には断続的に連なる溝跡３（ａ～ｃ）、東縁側には溝跡２（ａ～ｄ）が並走している。溝跡３は帯状敷石面の延長上さらに北側にむかってほぼ南北方向に真っ直ぐ抜けていく（ｄ～ｆ）のに対し、溝跡２は平坦な敷石面が残存する範囲の北端にあたるⅢＡ１ｊグリッド付近で急激に向きを東側へ転じ、溝跡２－ｅへと連続している。また、帯状敷石面の東側には溝跡２を間に挟んで池状遺構がある。溝跡２・３及び池状遺構の底面からは敷石遺構側から転落・流入したと思われる拳大の礫が多く出土しており、埋土も類似していることなどから、敷石遺構とこれらの遺構は同時的に構築され機能したものと考えられる。

〔層位的所見〕

本遺構を横断する土層断面の観察から、構築～廃絶～埋没過程が部分的に復元できる。

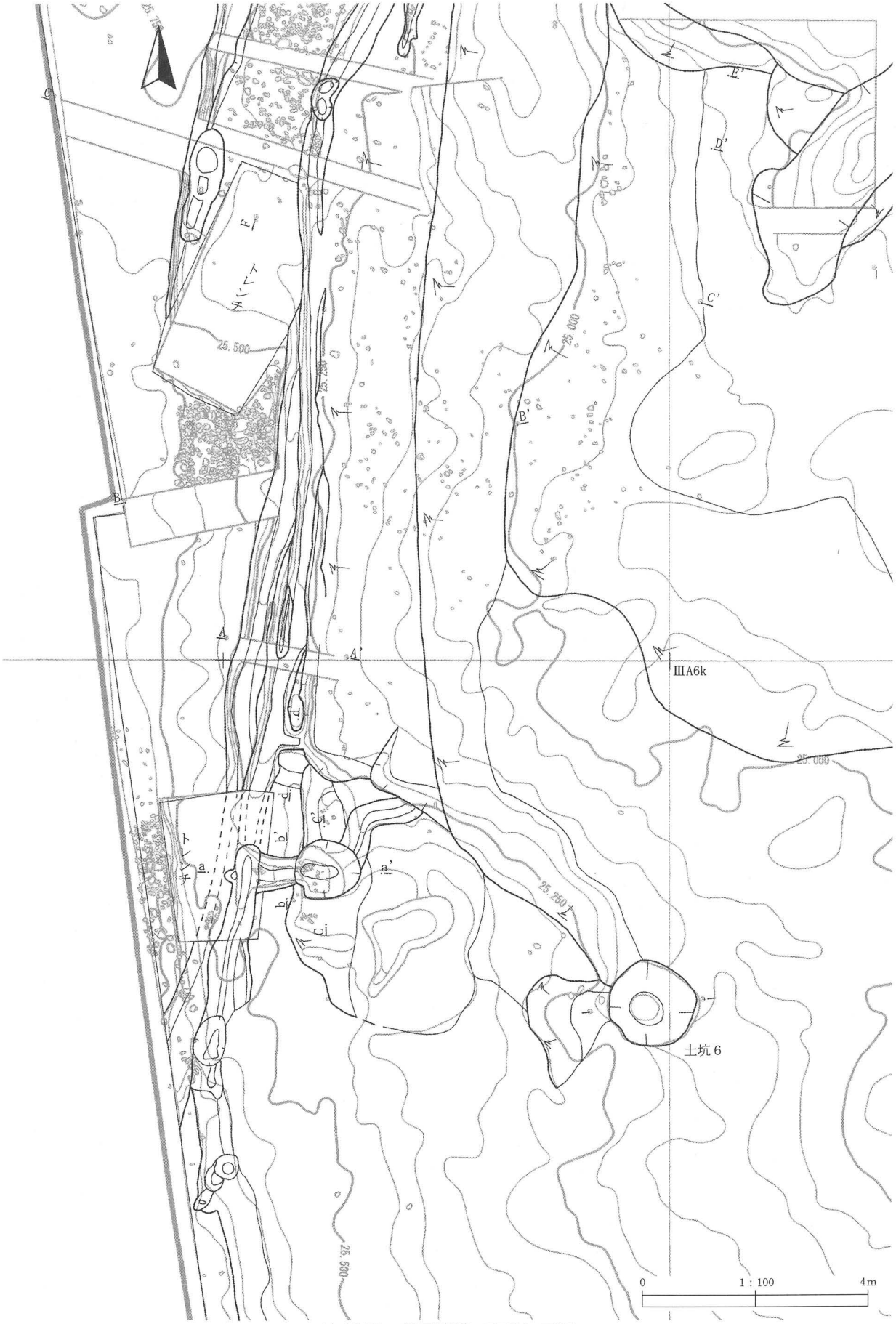
B-B’４層やE-E’６層は敷石を施す面を造成するための盛土層で、一方C-C’11層やD-D’10層は、地山を切って平らにした敷石面の西側（山側）に土を盛り上げ、高位の段を形成した盛土層と見られる。このことから礫敷設の前段階に、切土・盛土により敷石を施す面の造成が行われたこと、敷石面の山側に明瞭な段差を持った高位面の形成が意図されたこと、が読み取れる。この空間全体の造成を終えた後、帯状の平坦面とその周囲には密に礫が敷き詰められたと考えられる。

次に本遺構が機能していた間の状況についてである。土層断面では帯状敷石面東縁の溝（溝跡２）が幾度かの造り替えを経ている状況が確認できる。これらの溝が敷石面にともなう「側溝」であるとするならば、敷石面も同様に更新された可能性が高いと思われる。しかし土層断面等にその痕跡を見出すことはできなかった。敷石面は廃絶後、漸次、Ⅲ層相当の暗褐色シルトによって覆われ埋没していった様子が観察される。上述の中～大型礫や各種遺物片は、この土層の堆積の過程で敷石面上に遺棄・転落したものと思われる。敷石面を被覆する土層には径５㎜程度のやや大きめの木炭粒の混入が顕著で、この特徴は池状遺構の埋土（２ａ層）やその他の12世紀遺構（土坑等）の埋土主体土も共通している。この付近一帯の12世紀構造物が廃絶を迎えた時点の環境と、本層に含まれる木炭粒の生成要因との間に何らかの因果関係が存在するか興味深いところである。

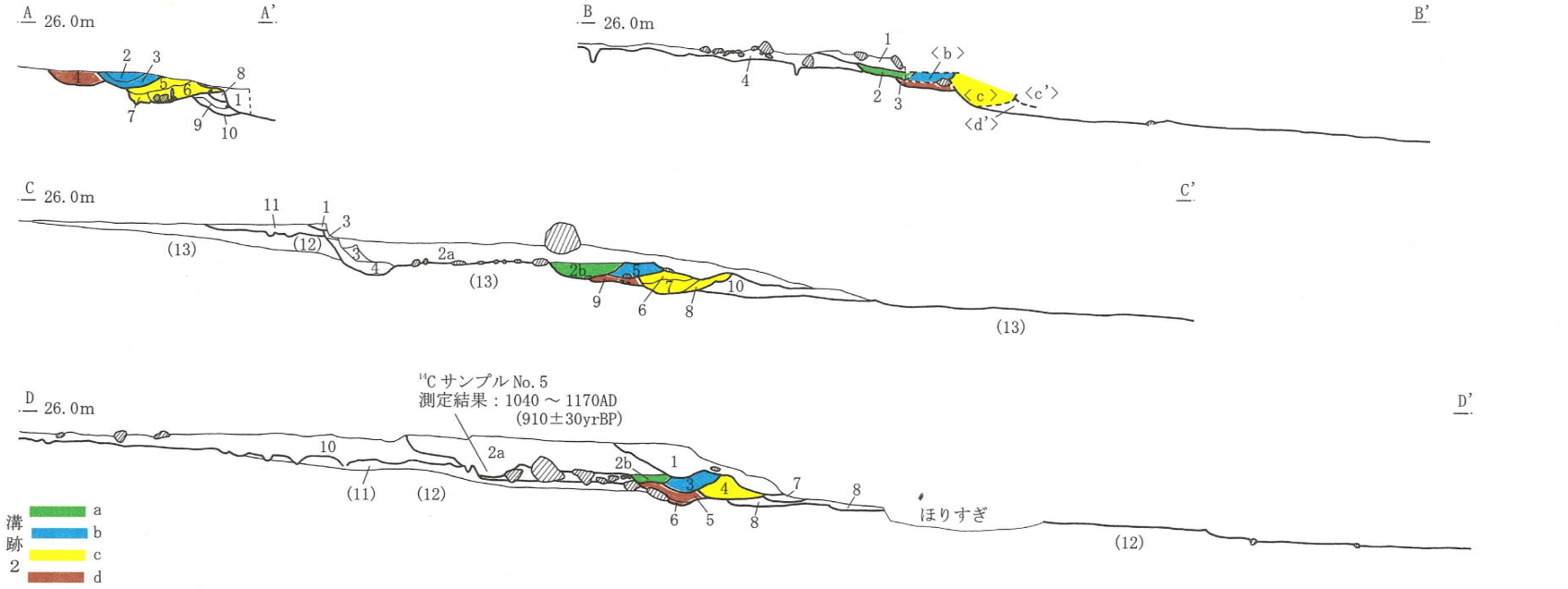
〔放射性炭素年代測定〕（→附編１）

帯状敷石面の断面D-D’の２ａ層下面付近から採取した炭化物粒（^{14}ＣサンプルNO．５）の年代測定（ＡＭＳ測定）を委託実施した。測定結果は、1040～1170AD（910±30yrBP）である。この値は池状遺構底面直上から採取した^{14}ＣサンプルNO．１と一致しており、両者は「共に平安時代後期後

第12図　敷石遺構（北半）周辺



第13図　敷石遺構（南半）周辺



0　1：60　2m

※破線は推定

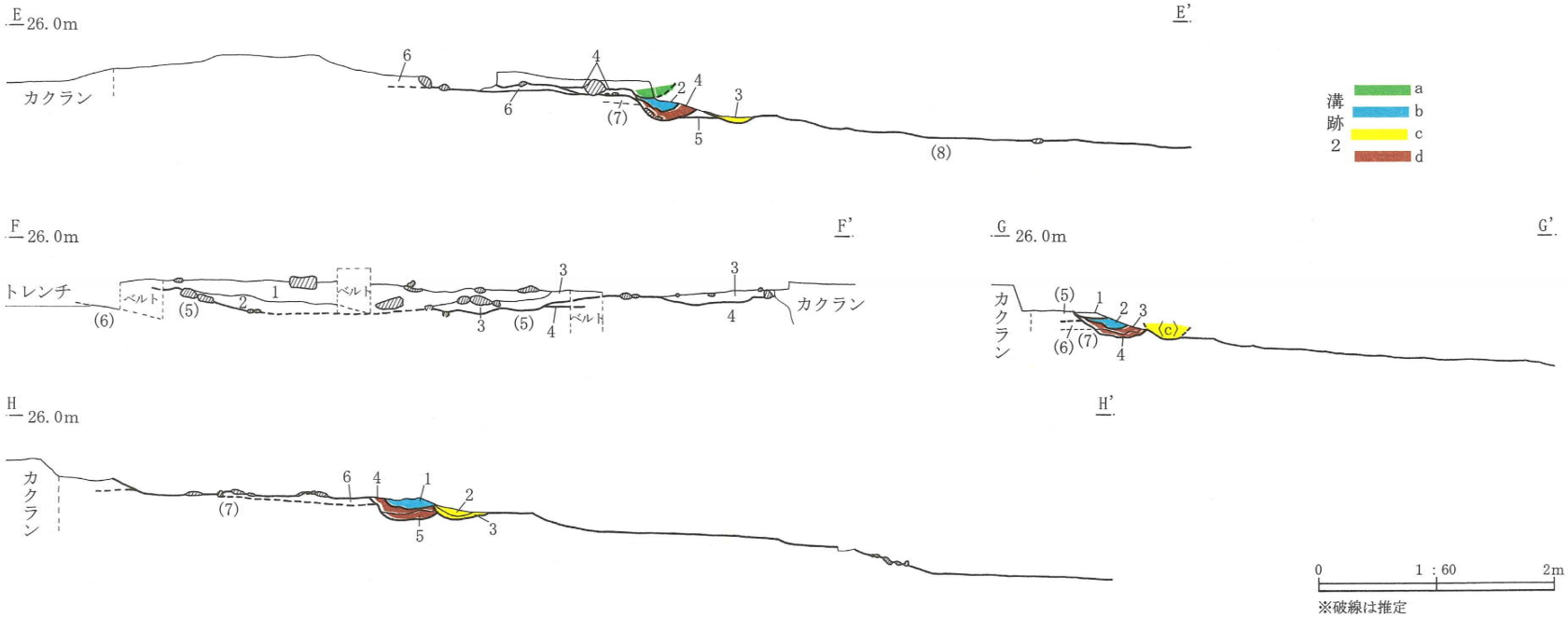
敷石遺構 A－A'
1．10YR3/2 黒褐色．シルト．全体に微量の砂粒含む．
2．10YR3/3 暗褐色－3/4 暗褐色．砂、礫（φ5～10mm）多量含む．
3．10YR5/2 灰黄褐色－4/2 灰黄褐色．粘土質シルト．
4．10YR2/2 黒褐色－2/3 黒褐色．シルト．砂の薄層．少ブロックを全体に含む．礫（φ5～25cm）やや多量含む．
5．10YR3/3 暗褐色－3/4 暗褐色．砂、粗・細のラミナ状．
6．10YR3/3 暗褐色－3/4 暗褐色．砂．底面にφ10cm 前後の礫入る．
7．10YR5/2 灰黄褐色－4/2 灰黄褐色．粘土．立ち上がりの下端に断続的につづく細い溝状痕跡．土留め板などの痕跡か？
8．10YR3/4 暗褐色．砂．礫（φ5～10mm）多量含む．
9．10YR4/3 にぶい黄褐色－3/3暗褐色．粘土質シルト．
10．10YR4/3 にぶい黄褐色－3/3暗褐色．粘土質シルト．砂やや多量含む．底面直上．

敷石遺構 B－B'
1．10YR3/3 暗褐色－2/3 黒褐色．シルト．
2．10YR3/2 黒褐色．シルト．Ⅶ層礫片微量含む（4 層からの流入か？）．
3．10YR3/3 暗褐色．砂質シルト．
4．10YR4/3 にぶい黄褐色．シルト．10YR7/8 黄橙色凝灰？礫片、Ⅶ層ブロック大量に含む．整地層．上面に敷石．

敷石遺構 C－C'
1．10YR3/3 暗褐色．シルト．表土？　新しい層．
2a．10YR3/2 黒褐色．シルト．締まり密．φ5～10mm 炭粒微量含む（目立つ）．乾くと白い．礫面の直上層．
2b．2a 層に砂を多量に含む．溝埋土．底面に小礫も．
3．11 層の崩落土．
4．10YR3/2 黒褐色．粘土質シルト．Ⅶ層礫片少量含む．石敷西側の不整な側溝の埋土．
5．10YR3/2 黒褐色．シルト．砂含む．
6．10YR3/2 黒褐色．粘土質シルト．下面に砂含む．
7．10YR3/3 暗褐色．砂．下面にビッシリ礫入る．
8．5 層に酷似（砂含むシルト）．
9．10YR3/2 黒褐色．シルト．
10．10YR4/2 灰黄褐色－3/2 黒褐色．シルト．φ5～10mm 炭粒微量含む．下面に礫・12 世紀の遺物点在．
11．10YR4/3 にぶい黄褐色．シルト．10YR7/8 黄橙色凝灰？礫片、Ⅶ層ブロック大量に含む．礫ごく微量含む．整地層．
(12)．Ⅴ層相当．
(13)．Ⅵ層相当（山側砂含む．低位部粘土質）．

敷石遺構 D－D'
1．10YR4/2 灰黄褐色－3/2 黒褐色．シルト．締まり密（新しい層？）．
2a．10YR3/2 黒褐色．シルト．締まり密．φ5～10mm 炭粒微量含む（目立つ）．乾くと白い．
2b．2a 層に砂を多量に含む．溝埋土．底面に小礫も．
3．10YR4/3 にぶい黄褐色－3/2黒褐色．シルト．砂多量含む．
4．10YR2/2 黒褐色．粘土質シルト．砂薄層挟む．
5．10YR3/2 黒褐色．シルト．
6．10YR3/2 黒褐色．シルト．下面に砂．水含みややグライ化．
7．10YR3/3 暗褐色．砂質シルト．
8．10YR3/2 黒褐色－3/3 暗褐色．シルト．炭粒ごく微量含む．
9．10YR3/2 黒褐色－3/3 暗褐色．砂質シルト．締まっている．石敷直上層．
10．10YR4/3 にぶい黄褐色．シルト．10YR7/8 黄橙色凝灰？礫片、Ⅶ層ブロック大量に含む．拳大礫わずかに含む（上・下面ではなく、客土中に混在）．整地層．
(11)．Ⅴ層に対比．
(12)．Ⅵ層に対比．

第14図　敷石遺構・遺跡2・3断面（1）



敷石遺構 E－E'
1．10YR3/2 黒褐色．シルト．
2．10YR4/3 にぶい黄褐色～3/2 黒褐色．シルト．砂多量含む．
4．10YR2/2 黒褐色．粘土質シルト．砂の薄層入る．
3．10YR3/3 暗褐色．砂．下面に小礫密．
5．10YR4/2 灰黄褐色～3/2 黒褐色．シルト．
6．10YR4/3 にぶい黄褐色．シルト．10YR7/8 黄橙色凝灰？礫片、Ⅶ層ブロック大量に含む．整地層．
(7)．Ⅴ層相当．
(8)．Ⅵ層相当．

敷石遺構 F－F'
1．10YR3/2 黒褐色．シルト．粘性あり．締まり密．炭粒ごく微量含む．凝灰礫粒（φ2～10mm）微量含む．
2．10YR4/2 灰黄褐色－4/3 にぶい黄褐色．粘土質シルト．砂多く含む．下面が敷石面．敷石の礫は拳大以下のもの多いが、本層および1層に含まれる（つまり敷石面を覆う土に含まれる）石はφ20～50cm のものがほとんどである．
3．1層と同じ．
4．7.5YR4/3 褐色．シルト．（酸化による赤み→）7.5YR7/8 黄橙色凝灰礫（?）片（Ⅶ層のブロック）多量含む．整地層．敷石は本層の上面．
(5)．10YR3/3 暗褐色．シルト．砂多量に含み全体砂質．地山が砂質なため本層も砂多い．本層はⅤ層相当．6層（Ⅵ～Ⅶ層）との層界は漸移的．
(6)．10YR5/6 黄褐色．砂質シルト．地山Ⅵ～Ⅶ層相当．酸化鉄の集積により全体に赤味強い．

敷石遺構 G－G'
1．10YR3/2 黒褐色．シルト．締まっている．
2．10YR3/2 黒褐色．シルト．砂大量．礫（φ5mm 程度）下面に集中．A－A'の3，7，8層に似る．酸化して赤味強い．
3．10YR3/2 黒褐色．粘土質シルト．1層より暗く．粘性あり．
4．10YR3/2 黒褐色．シルト．砂大量に含む．底面に拳大礫が点在．敷石からの転落か？
(5)．7.5YR4/3 褐色．シルト．7.5YR7/8 黄橙色礫片（Ⅶ層ブロック）含む．整地層．
(6)．Ⅴ層
(7)．Ⅵ～Ⅶ層

敷石遺構 H－H'
1．10YR4/3 にぶい黄褐色－4/4 褐色．砂．
2．10YR3/3 暗褐色．シルト．
3．E－E'の4層に対比．
4．10YR3/2 黒褐色．シルト．砂やや多量含む．
5．10YR3/2 黒褐色．砂質シルト．砂やや多量含む．
6．7.5YR4/3 褐色．シルト．7.5YR7/8 黄橙色礫片（Ⅶ層ブロック）含む．整地層
(7)．Ⅵ層相当．

第15図　敷石遺構・遺跡2・3断面(2)

敷石遺構 I－I'
1．10YR3/2 黒褐色．シルト．
2．10YR3/3 暗褐色．砂．
3．10YR2/3 黒褐色－3/2黒褐色．シルト．砂の薄層入る．
4．10YR4/2 灰黄褐色－3/2 黒褐色．シルト．
5．7.5YR4/3 褐色．シルト．7.5YR7/8 黄橙色礫片（Ⅶ層ブロック）含む．整地層．
(6)．Ⅵ層相当．

敷石遺構 J－J'
1．10YR3/2 黒褐色－4/2 灰黄褐色．シルト．全体に砂やや多量含む．
2．10YR3/2 黒褐色．シルト．締まり密．Ⅶ層礫粒微量含む．炭粒（φ5～15mm：目立つ）少量含む．拳大前後の礫、土器片など多く含む層．並走する溝に切られている（1層）．
3．10YR3/2 黒褐色．シルト．締まり密．2層よりⅦ層礫粒多い（少量）．炭粒入らない．
4．10YR5/4 にぶい黄褐色－4/4褐色．砂．壁から流入の砂層．
5．10YR3/2 黒褐色－4/2 灰黄褐色．粘土質シルト．2,3層より締まりない．粘性あり．ややグライ化して灰色気味．
6．4層に同じ．
7．10YR3/2 黒褐色－4/2 灰黄褐色．粘土質シルト．締まりやや疎．地山砂微量含む．
8．10YR5/4 にぶい黄褐色－4/4褐色．砂．締まり密．
9．10YR3/2 黒褐色－4/2 灰黄褐色．シルト．全体に地山砂やや多量含む（シルトと砂の薄い互層）．
10．10YR3/2 黒褐色－4/2 灰黄褐色．シルト．
11．10YR3/2 黒褐色－4/2 灰黄褐色．シルト．地山砂少量含む．
12．10YR5/4 にぶい黄褐色－4/4褐色．砂．再堆積層．
13．10YR3/2 黒褐色．シルト．2層によく似る．
※2層には炭が目立ち、礫、遺物も多い．溝の廃絶と周辺の構造物の焼失や、礫による構造物の廃絶が連動している可能性．本遺跡の遺構や包含層にはほぼ必ず炭化物が多く含まれている．

敷石遺構 K-K'
0．現表土（現水田畦畔）．
1a．10YR4/2 灰黄褐色．シルト．現水田耕作土．下面に酸化帯．
1b．10YR4/3 にぶい黄褐色－3/3暗褐色．シルトと 10YR4/2 灰黄褐色．シルトの混土．現代畦畔．
2．10YR4/2 灰黄褐色－3/2 黒褐色．シルト．締まり密．白色粒子を少量含む（大分目立つ）．炭粒微量含む．池状の1層（最上層）及び敷石遺構 D－D' の2a層（敷石面被覆層）などに良く似る．
3．10YR4/2 灰黄褐色－3/2 黒褐色．シルト．黒味持ち、白色粒子をほとんど含まない．全体に酸化による赤み．2層より粘性あり．
4．10YR3/2 黒褐色－3/3 暗褐色．シルト．性状は3層に良く似るが、より黒み強く、炭化物（φ5－10mm）が目立つ．下面に砂のラミナ．石敷東縁の溝埋土に良く似る．
5．4層に良く似るが砂の混入やや多い．下面には砂層形成．
6．10YR3/3 暗褐色．砂・小礫層．石敷東縁新期溝の埋土下部に良く似る．
7．10YR4/2 灰黄褐色－4/3 にぶい黄褐色．シルト．
8．10YR4/2 灰黄褐色－4/3 にぶい黄褐色．砂質シルト．
(9)．Ⅵ層対比
※7.8層：池状遺構の埋土下部に連続するか？池状北東部で底面礫を被覆する層と思われる．

敷石遺構 L-L'
1．10YR4/3 にぶい黄褐色．シルト．地山粘土ブロック微量含む．撹乱層．
2．10YR5/3 にぶい黄褐色－5/4 にぶい黄褐色．粘土質シルト．10YR7/6 明黄褐色腐り礫片（Ⅶ層に対比？）を含む．混入量は地点により多寡あり．固くしまっている．中央付近では下面または層中に河原石多く含む．④・⑤区の敷石遺構の礫面に連続するか？整地層の可能性あるが時期不明（遺物なし）．
3．7.5YR3/4 暗褐色．粘土質シルト．2層に被覆される．部分的に残存していることから上部を削平されていることが分かる．4層（溝埋土）との連続性は不明．
4．10YR3/2 黒褐色．シルト．埋土中位に拳大礫点在．炭片（φ10mm 前後）極微量含む．④・⑤区溝跡3と同種のものか？
(5)．10YR6/3 にぶい黄橙色－5/3 にぶい黄褐色．粘土．10YR7/6 明黄褐色腐り礫片部分的に含む．地山Ⅵ層下部に対比？

第16図　敷石遺構・遺跡2・3断面 (3)

第 17 図　敷石遺構周辺の遺物出土状況

半に相当する暦年較正年代であり、同一時期の堆積物と考えられる」との見解を得ている。

〔出土遺物〕（第 34 ～ 39 図、写真図版 28 ～ 30）

本遺構及び池状遺構周辺では、遺構の形状や堆積状況の詳細がまだ不明だった調査の初段階から多くの遺物が出土した。これらの多くは主にグリッド単位で取り上げを行ったが、特徴的なものについては個別番号を付して出土地点を記録した。第 17 図には本遺構周辺の遺物出土状況を示している。

掲載遺物に見られるように、12 世紀後半、特に第 3 四半期を中心とした時期に帰属する遺物が大半を占めている。かわらけにはてづくねに加えロクロ整形のものが一定量含まれる。国産陶器としては常滑産・渥美産・須恵器系陶器があり、このほか中国産白磁の破片も比較的多く出土している。

〔遺構の時期〕

放射性炭素年代測定結果、出土遺物の年代観、堆積状況等から 12 世紀に帰属すると考えられる。

〔遺構の保存〕

調査の進捗に伴い 12 世紀主体の遺跡であることが明らかになった段階で、報告に必要な最低限の記録を得た後は 12 世紀の遺構面を極力保存し、調査後は山砂で埋め戻すよう県教育委員会から指導を受けた。本遺構については、敷石面以下が保存対象となったことから、礫面や整地層を除去して下部を面的に調査することはしなかった。また、土層断面の観察に用いたベルトは全てそのまま埋め戻した。

(3) 池　状　遺　構（第 18 ～ 21 図、写真図版 10 ～ 12）

〔位置・検出状況〕

④⑤区北西部、ⅢＡ２１グリッド付近に位置する。敷石遺構及び溝跡２の東部に隣接する不整形な暗褐色土の広がりとして検出された。土器・陶磁器片等の遺物と礫が混在する土層がプランの不明瞭な状態でやや広い範囲に広がっていたことから、土層断面観察のベルトを格子状にのこし、４× ４ｍの小グリッド単位で土層の掘り下げに着手した。

〔規模・形状〕

埋土となる暗褐色土層は長径 13 ｍ・短径 10 ｍ程の概ね楕円形の範囲に広がっている。セクションポイント「On'」付近をコーナーとして、溝跡２と平行して直線的にのびる等高線（ⅢＡ２ｋ杭と同１１杭を結ぶライン）と、ⅢＡ３ｋ杭付近から南東方向に延びる直線的な等高線が認められることから、本来的にはⅢＡ３ｋ杭・同４１杭・同２ｎ杭等の付近に頂点を持つ隅丸長方形あるいは扇面形のような形状であった可能性がある。底面（埋土２ａ層下面）はほぼ平坦で、最も残存状況が良いⅢＡ２ｋグリッド付近では、上端から底面までの深さが 20 ㎝強となっている。斜面下方の南東部へ向かって埋土は次第に薄くなっておりプランも不明瞭となっている。

〔周辺遺構との関係〕

上記のとおり、敷石遺構の東側に近接し溝跡２の屈曲点付近に位置している。断面 H-H' にみる敷石遺構の帯状敷石面（ⅢＡ１ｉグリッド東部）と池状遺構底面（ⅢＡ２ｋグリッド）との比高は約 70 ㎝である。ⅢＡ１ｋ北部の取水口状遺構１は、溝跡２から本遺構への導水施設と思われる。敷石遺構及び溝跡２・３と本遺構の覆土は極めて類似し、また、放射性炭素年代測定結果（→附編 1）や出土遺物の年代観等からも密接な関係性（同時性）が認められる。

〔層位的所見〕

はじめにセクションポイントの表記法について説明しておきたい。本遺構の精査では、小グリッド（４×４ｍ）の境界に幅 50 ㎝のベルトを格子状にのこして掘り下げを行い、観察に有効な６本のベ

ルト（Mベルト～Rベルト）を選択して断面の記録を行った。この際、土層観察に適した断面の向きがベルトによって異なり、どちら側の面を記録したのかを明示する必要が生じた。そこで、ベルト名（英大文字）に記録面側の方位を表した英小文字を付し、Mベルトの西面はMw-Mw'、Oベルトの北面はOn-On'のように表記することとした。

以下、土層断面Mw-Mw'～Rw-Rw'をもとに本遺構付近の土層堆積過程の復元を試みることとする。

池状遺構の南東部は、ⅢＡ４ｋグリッド付近から④⑤区北半部を通って東側の調査区外に抜ける沢跡１と重複している。断面に見られる土層のうち最も古いのは、沢跡１の下半部に堆積する砂層の４ｂ層である。ⅢＡ２１グリッド北半部を中心としてＣ字状に巡っている落ち込みの内部には、４ｂ層に酷似した砂層（４ａ層）の堆積も認められる。このＣ字状の落ち込みは池状遺構の中央部に位置し、その内部に擬似的な中島状の高まりが生じている。そこでこの高まりが池状遺構本体の形成時に併せて設けられたものである可能性を考慮にいれ、池状遺構に切られる沢跡の堆積層の４ｂ層と、池状遺構形成期まで下る可能性を持つ４ａ層を区別して扱い検討を進めた。結果的には両者は給源が同じでほぼ同時期に堆積した砂層であるとの解釈に達し（沢跡上流側より一気に流入したものと考えられる）、この中島状の地山の高まりは自然による擬似的なものであるとの認識に至っている。

沢跡１の流路内では、砂層の上位に黒褐色粘土質シルト層（３ａ～３ｃ層）が堆積している。このうち３ａ層の上面～上部には層状～ブロック状の十和田ａ降下火山灰の堆積が顕著にみられる。十和田ａ降下火山灰は④⑤区南部から北東部にかけて流れる沢跡２の流路上でも、層状に多量に堆積しており、本遺跡付近に当該火山灰のまとまった降下があったことを示している。３ａ層の堆積範囲はⅢＡ２ｍグリッド以東の沢跡１内部に限られ、特にⅢＡ２ｍグリッド付近においては、層中から９世紀後半～10世紀初頭に位置づけられる須恵器・土師器のまとまった出土があった。池状遺構の北側には平安時代の竪穴住居跡（住居跡１）が検出された⑥区に連続する微高地頂部が広がっており、この付近における該期の人間活動に伴う遺物と考えられる。

さて、池状遺構本体の主たる埋土は、３層の上位に、あるいは３層以下を切って堆積している２ａ層である。本層は池状遺構が埋没を開始した時点から、周辺の表土が礫や各種の遺物と共に流入したものと思われる。敷石遺構の敷石面を被覆する炭化物混入の顕著な暗褐色土層と同一の可能性が高いことから、敷石遺構と池状遺構は極めて近い時期に廃絶をむかえ、埋没を始めたものと推測される。断面Mw-Mw'・Ps-Ps'に見られるように、本遺構の底面である２ａ層下面には敷石遺構側から転落したと思われる小礫群が広がり陶磁器片等の遺物の出土がみられた。本層は斜面上方側にあたる池状遺構西部で良好に残存しており、東側に向かって次第に層厚を減じて東端部では沢跡１の埋土最上部に残存するのみとなっている。池状遺構の水平な底面の直上に堆積した本層が、斜面下方側の東部では後世の流失・削平を受けた結果であろう。

ここで注意すべきなのは、池状遺構本体の主たる埋土である２ａ層が、池状遺構本体のプランを越え、沢跡１の流路上に連続して堆積している点である。このことは池状遺構の廃絶直前まで沢跡１と同じ経路を水流が通っていたことを意味し、この自然流路が池状遺構への導排水路の役を担っていた可能性を示唆している。言い換えれば、池状遺構は古くからの沢筋上でなお流水のある地点を選択して設けられた施設であると理解できるのである。

最上位の１層は、後に２ａ層上部が攪拌されることによって生成したものと思われ、池状遺構の範囲を超えて溝跡２以東の広い範囲に分布する。１層下面による攪乱は随所に及んでおり、本遺構の主たる堆積層２ａ層の本来的な広がりを知ることを困難にしている。しかしながら、池状遺構の範囲外において１層の下位に２ａ層類似土が残存する地点が存在する。沢跡１上流側のⅢＡ４ｊ～同６ｊグ

リッド付近および取水口２・同３の周辺では、２ａ層類似度の広がりと共に、池状遺構西部底面付近と良く似た遺物・礫の出土状況が観察された。特に、第13図の等高線からも読み取れるように、ⅢＡ５ｊグリッド付近や同６ｉグリッド北東部は方形プランのコーナー部のような状況を呈しており、わずかに残存する平坦な底面上からは２ａ層類似土層に被覆された遺物や礫の出土が見られた。このことから、現状では削平によって多くが失われているが、本来は溝跡２の東側に同様の複数の池状遺構が「棚田」のように連なっていた状況が想像されることを付け加えておきたい。

〔土壌サンプルの分析〕

本遺構の性格や周辺環境・埋積過程の復元を目的とし、遺構内堆積土を試料とした微化石分析の委託を行った（→附編２．Ⅱ）。採取地点は堆積状況が最も良好な遺構西部で、Ｐベルト西部の一部を柱状に切りとり試料とした。以下に分析結果の概要を記す。

珪藻化石の分析では、本遺構は当初「水深の浅い池沼あるいは沼沢地のような水域」であり、その後、上部まで埋積が進んだ頃にも「遺構内に流水の流れ込み」があり「周囲の乾いた場所から陸生珪藻を含む土壌が流水と共に流れ込んだと考えられる」との見解が示された。植生については、木本類の花粉化石の産状から「堆積当時の本遺跡周辺では、後背の丘陵・山地部にはブナ属を主体とする落葉広葉樹林が成立」し、「丘陵縁辺部や低地部などには部分的にスギ属などの林分も認められ」、「河畔や低湿地には、ハンノキ属を主体とした湿地林が分布していた」とみられ、花粉草本類の花粉化石としてはイネ科・ヨモギ属等を主体としたいわゆる「人里植物」を多く含む分類群が検出されたことから、「本遺構周辺の開けた草地にこれらの草本類が生育」する環境であったことが推測されている。このほか栽培種であるソバ属・イネ属も各層位から検出され、これらの栽培が行われた可能性についても指摘されているが、特にイネ属については「池状遺構に水域があった当時の本遺跡周辺における稲作については」、「イネ属の層位的な消長や分布域を確認した上で検討すること」が望ましいとの見解が示された。

〔放射性炭素年代測定〕（→附編１）

本遺構内から採取した炭化物粒を試料とし、放射性炭素年代測定（ＡＭＳ測定）を委託実施した。

断面 Ps-Ps’ の２ａ層下面（池状遺構底面直上）から採取した ^{14}Ｃサンプル NO. １については、1040 ～ 1170AD（910 ± 30yrBP）との測定結果が出された。この値は敷石遺構の敷石面直上層から採取した 14 Ｃサンプル NO. ５と一致しており、両者は「共に平安時代後期後半に相当する暦年較正年代であり、同一時期の堆積物と考えられる」との見解を得た。

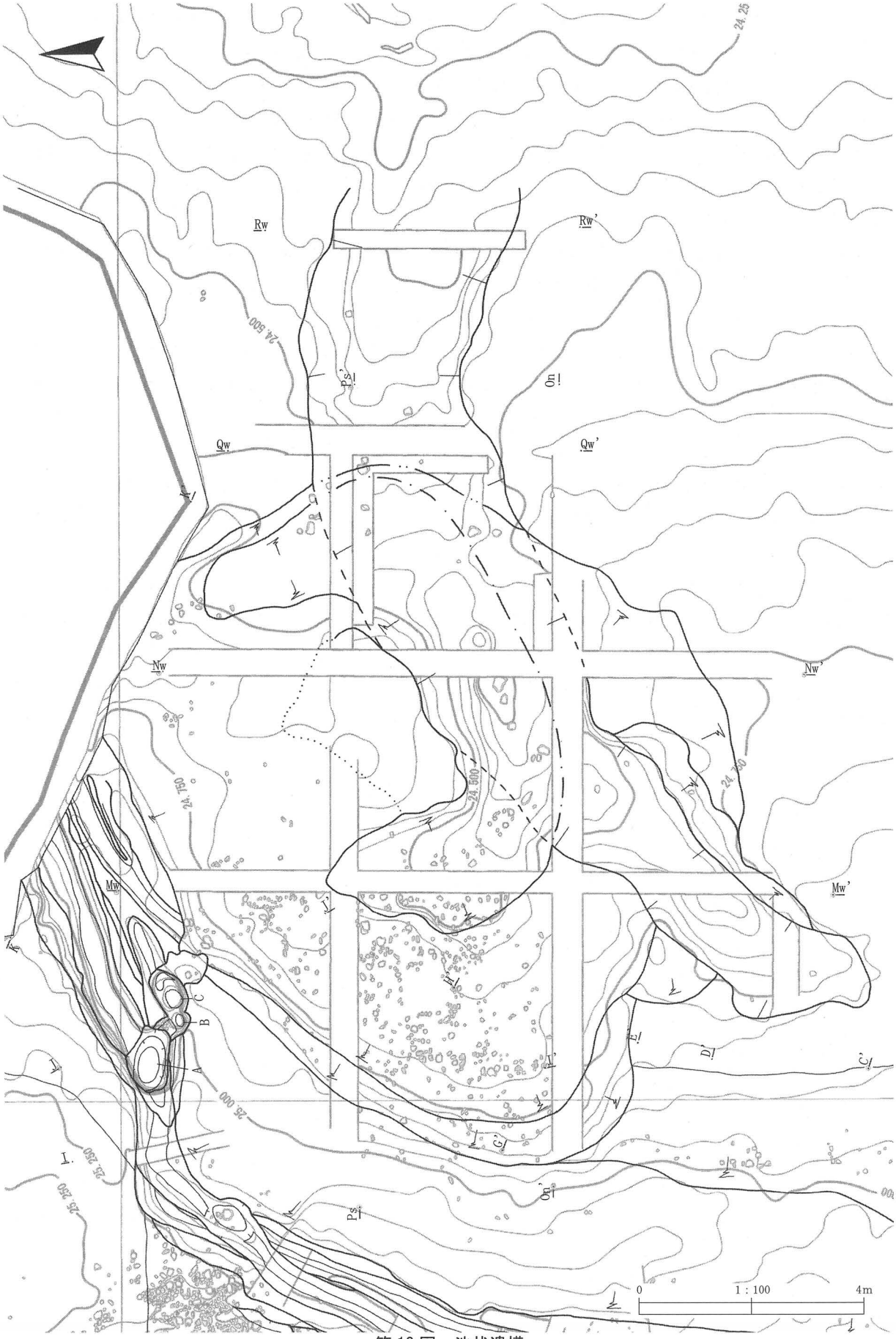
このほか、断面 Ps’-Ps’’ において２ｂ層と４ｂ層の層界から採取した No. ２は 700 ～ 870AD（1220 ± 30yrBP）、断面 Qw-Qw’ の４ｂ層下面（沢跡１底面直上）の No. ３は 430 ～ 540AD（1950± 30yrBP）と測定された。なお断面 Mw-Mw’ の４ａ層下面から採取した No. ４は測定不能試料（非炭化物）であり年代値は算出されなかった。

〔出土遺物〕（第 34 ～ 39 図、写真図版 28 ～ 30）

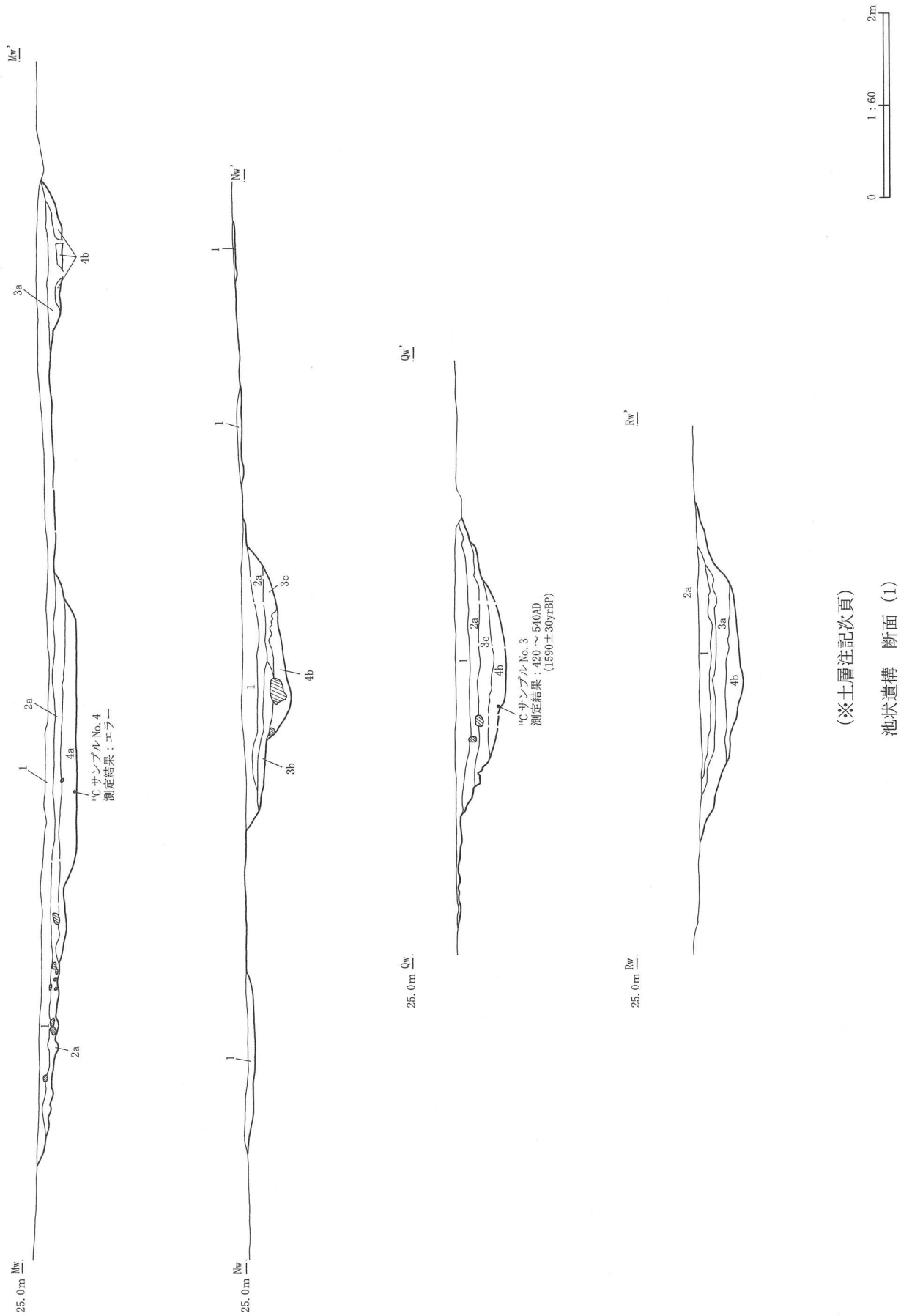
本遺構及び敷石遺構周辺では、遺構の形状や堆積状況の詳細がまだ不明だった調査の初段階から多くの遺物が出土した。これらの多くは主にグリッド単位で取り上げを行ったが、特徴的なものについては個別番号を付して出土地点を記録した。第 21 図には本遺構周辺の遺物出土状況を示している。

掲載遺物に見られるように、12 世紀後半、特に第３四半期を中心とした時期に帰属する遺物が大半を占めている。かわらけにはてづくねに加えロクロ整形のものが一定量含まれる。国産陶器としては常滑産・渥美産・須恵器系陶器があり、このほか中国産白磁の破片も比較的多く出土している。

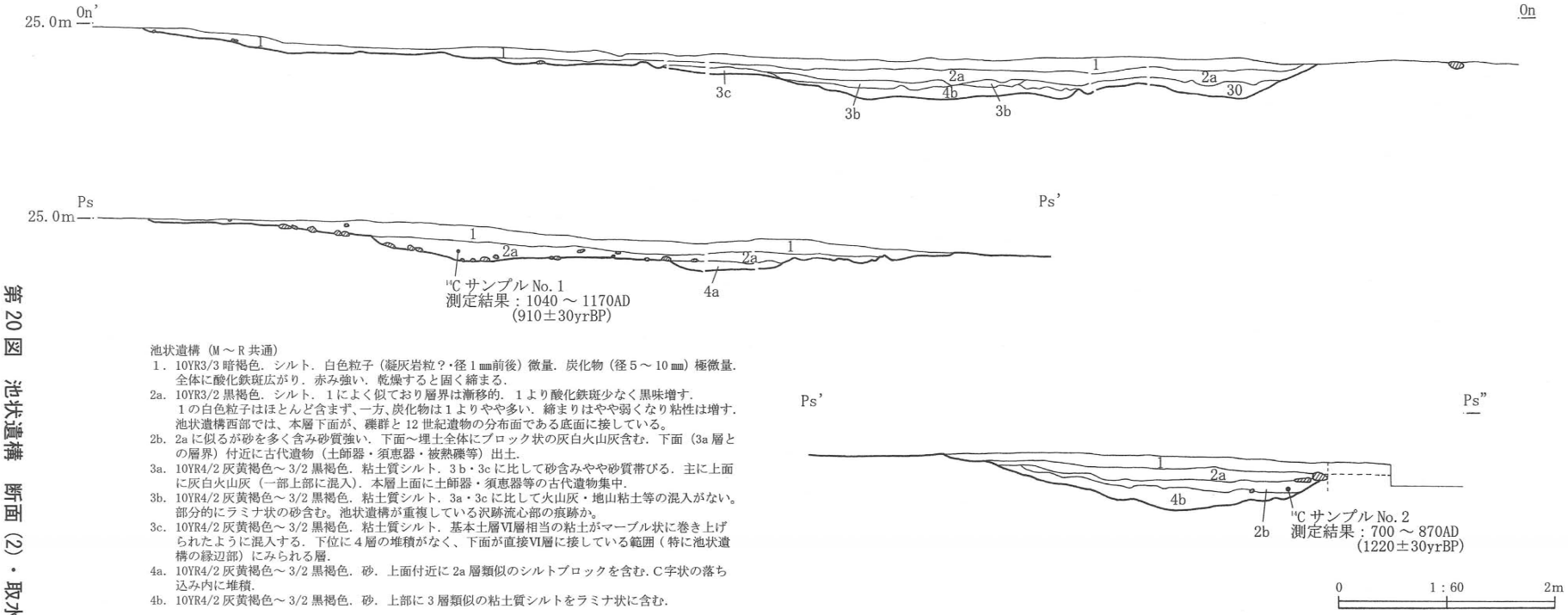
ⅢＡ２ｍグリッド付近で出土した土師器・須恵器は、土層確認のサブトレンチ内において、本遺構


24.25
Rw
Rw'
24.500
Ps'
On'
Qw
Qw'
Nw
Nw'
24.750
24.500
24.750
Mw
Mw'
B
C
25.000
25.250
25.250
Ps
On
0
1 : 100
4m

第 18 図　池状遺構



第19図　池状遺構　断面 (1)



池状遺構（M ～ R 共通）

1．10YR3/3 暗褐色．シルト．白色粒子（凝灰岩粒？・径 1 ㎜前後）微量．炭化物（径 5 ～ 10 ㎜）極微量．全体に酸化鉄斑広がり．赤み強い．乾燥すると固く締まる．

2a．10YR3/2 黒褐色．シルト．1によく似ており層界は漸移的．1より酸化鉄斑少なく黒味増す．1の白色粒子はほとんど含まず、一方、炭化物は1よりやや多い．締まりはやや弱くなり粘性は増す．池状遺構西部では、本層下面が、礫群と 12 世紀遺物の分布面である底面に接している。

2b．2a に似るが砂を多く含み砂質強い．下面～埋土全体にブロック状の灰白火山灰含む．下面（3a 層との層界）付近に古代遺物（土師器・須恵器・被熱礫等）出土．

3a．10YR4/2 灰黄褐色～ 3/2 黒褐色．粘土質シルト．3 b・3c に比して砂含みやや砂質帯びる．主に上面に灰白火山灰（一部上部に混入）．本層上面に土師器・須恵器等の古代遺物集中．

3b．10YR4/2 灰黄褐色～ 3/2 黒褐色．粘土質シルト．3a・3c に比して火山灰・地山粘土等の混入がない。部分的にラミナ状の砂含む。池状遺構が重複している沢跡流心部の痕跡か。

3c．10YR4/2 灰黄褐色～ 3/2 黒褐色．粘土質シルト．基本土層Ⅵ層相当の粘土がマーブル状に巻き上げられたように混入する．下位に 4 層の堆積がなく、下面が直接Ⅵ層に接している範囲（特に池状遺構の縁辺部）にみられる層．

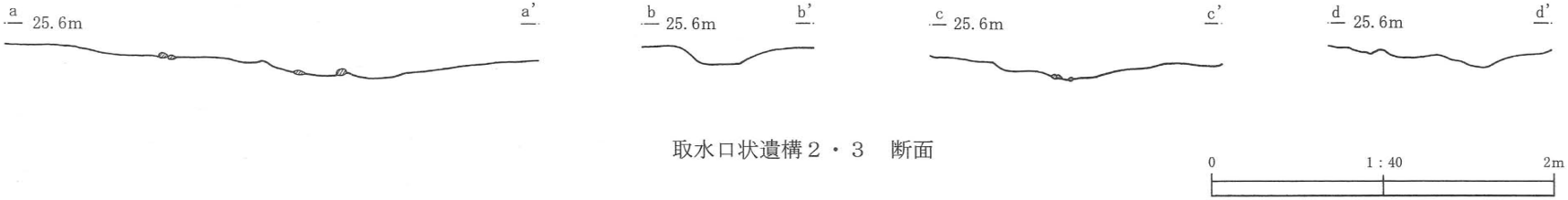
4a．10YR4/2 灰黄褐色～ 3/2 黒褐色．砂．上面付近に 2a 層類似のシルトブロックを含む．C 字状の落ち込み内に堆積．

4b．10YR4/2 灰黄褐色～ 3/2 黒褐色．砂．上部に 3 層類似の粘土質シルトをラミナ状に含む．

※ 2a および 3a 層は、池状遺構の東端部（断面 Qw-Qw'・Rw-Rw' 付近）にのみ分布．古代遺物の集中分布範囲も同じ．

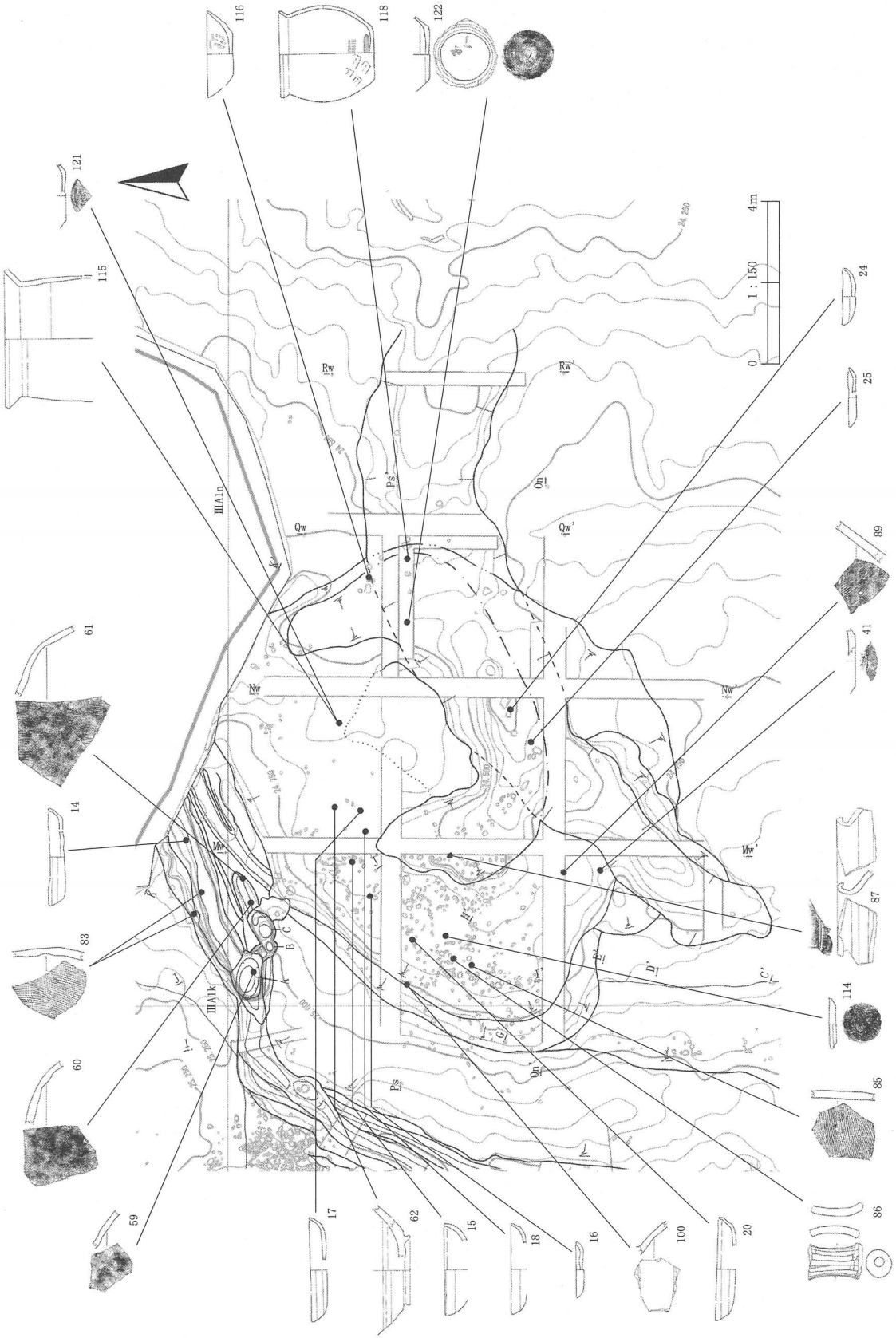
※ 分層に際しては、主体土の性状を軸に 1 ～ 4 層に大別し、さらに混入物等のあり方から細分（英小文字）した。
堆積過程を検討の結果、古い順に 4a 及び 4b→3c→3b→3a→（十和田 a 火山灰降下？）→2b（10 世紀遺物包含）→4a→2a→ 1 と解釈した。

池状遺構　断面（2）



取水口状遺構２・３　断面

第 20 図　池状遺構　断面（2）・取水口状遺構断面



第 21 図　池状遺構周辺の遺物出土状況

埋土の下位に堆積した沢跡の埋土から出土したものである。

〔遺構の時期〕

放射性炭素年代測定結果、出土遺物の年代観、堆積状況等から12世紀に帰属すると考えられる。

〔遺構の保存〕

調査の進捗に伴い12世紀主体の遺跡であることが明らかになってくると、報告に必要な最低限の記録を得た後は、12世紀の遺構面を極力保存し、調査後は山砂で埋め戻すよう県教育委員会から指導を受けた。よって本遺構については池状遺構本体の堆積層のみを掘り上げ、土層の観察に用いたM～Rベルトは除去せずにそのまま残して埋め戻す方針をとった。しかし、事実確認や断面記録を進める必要から、下位に重複する沢跡1等の堆積層も掘り上げた箇所があり、調査最終段階に作製した測量図にそのまま図化されている。ⅢＡ２ｋ・２ｌ・１ｍグリッド内のＣ字状落ち込み部埋土（４ａ層）、ⅢＡ３ｋ・２ｌ・グリッド同２１グリッドの沢跡1埋土（４ｂ層ほか）がそれにあたり、図上では本来の遺構の様相とは異なり余計に掘り下げられた状態が示されていることに注意されたい。同様に、断面記録のため設定したⅢＡ２ｍグリッド北辺及び東辺のサブトレンチ、ⅢＡ２ｏグリッド西辺サブトレンチが白抜きで示されている。

(4) 取水口状遺構

取水口状遺構1（第12・18・20・21図、写真図版13・14）

〔位置・検出状況〕

④⑤区北西部、ⅢＡ１ｋグリッドに位置する。溝跡２の精査の過程で、溝跡底面より一段深い土坑状の落ち込みとして検出された。内部の埋土が池状遺構側に向かって連続していたことから、池状遺構に伴う何らかの施設である可能性を念頭に精査に着手した。

〔規模・形状〕　溝跡２の内部から池状遺構へ向かって３基の土坑状の掘り込みが連結した構造となっている。記載にあたり溝跡２内部にある西端の掘り込みをＡ、中央のものをＢ、池状遺構に接する東端のものをＣとする。Ａは開口部が115×80㎝の楕円形で、壁の下半部がえぐれて袋状の断面形を呈する。Ｂは直径30㎝、Ｃは直径60㎝のほぼ円筒形の掘り込みである。溝跡２はＡを境に東側の底面が急激に低くなっている。

〔層位的所見〕

本遺構は当該地点における溝跡２の掘り下げが進んだ時点で存在が確認されたものである。そのため精査当初に適所に土層断面を設定することができなかった。第16図の断面J-J'には本遺構付近の堆積状況を見ることができるので、以下、これを元に説明したい。断面J-J'の２層は溝跡２の埋土上部にあたり、池状遺構埋土２ａ層や敷石遺構の敷石面を被覆するⅢ層相当層に対比される。本遺構の掘り込みＡは上半部にJ-J'２層から連続するシルト層が堆積し、その下位にJ-J'４～８層に類似する壁から流入した砂層が堆積していた。Ａの壁面下半部には地山構成砂層Ⅶ層が露出しており、これが水流にえぐられてオーバーハングしている。掘り込みＢの埋土及びＣの埋土にはＡの埋土下部に似て地山砂層の流入が顕著であるが、いずれの掘り込みにおいても埋土の主体土はⅢ層類似土であり、最終的にJ-J'２層から連続するシルト層によって覆われていることから、構築・廃絶ともに池状遺構に連動しているものと考えられる。

〔周辺遺構との関係〕

ⅢＡ１ｋグリッド杭付近において、溝跡２と池状遺構の間に位置し、両者と埋土が連続している。

〔出土遺物〕

第21図に出土地点を示した59・60（第36図、写真図版29）は、本遺構の内部から出土した常滑産の甕破片である。また、157のてづくねかわらけ・159の常滑産甕破片は本遺構と埋土の連続する溝跡２内部から出土したものである（第40図、写真図版31）。いずれも12世紀第３四半期に帰属させ得る資料である。

〔遺構の時期〕

埋土の様相と出土遺物から12世紀代に帰属するものと思われる。

取水口状遺構２（第13・17・20図、写真図版15）

〔位置・検出状況〕

④⑤区西部中央、ⅢＡ６ｉグリッドに位置する。敷石遺構東縁の溝跡２の精査段階に、東側（斜面下方側）の壁面に生じた開口部として検出された。周囲の遺構との関係性から特定機能が想定される箇所と判断した。

〔規模・形状〕

溝跡２の東壁の切れ目から長さ・幅ともに約30㎝の溝状の掘り込みが東側に延び、斜面下方側に構築された方形プランを持つと思われる掘り込みの南西コーナー部に接続している。溝跡２と溝状掘り込みの底面は連続しており高低差はない。一方、方形状掘り込みの底面は一段低くなっており、溝跡２から分岐した水流は一段低い方形状掘り込みに注ぎ込む構造となっている。

〔層位的所見〕

本遺構は当該地点における溝跡２の掘り下げが進んだ時点で確認されたものであり、初段階に適所に土層断面を設定することができなかった。第20図d-d’には完掘後に記録した溝状掘り込み部の横断図を示した。溝跡２から方形状掘り込みへ連続して堆積していたのは池状遺構埋土２ａ層や敷石遺構の敷石面を被覆土層に類似するⅢ層相当層である。溝状掘り込みが接している方形状掘り込みのコーナー付近の底面には、小礫に加え陶磁器等の遺物小片が比較的まとまっており、池状遺構西部の底面に類似した状況を呈する。「池状遺構」の項でも述べたが（→(3)池状遺構〔層位的所見〕）、本来は本遺構及び取水口状遺構３付近にも池状遺構と同種の施設が存在した可能性があり、後世の削平によって上部が大きく失われた結果、現在のような残存状況を呈するに至ったと解釈できる。

〔周辺遺構との関係〕

敷石遺構南部東縁の溝跡２の一部に位置しており、下段の方形状掘り込み側へ導水するために設けられた施設と思われる。敷石遺構～溝跡２の一部～方形状掘り込みは、同一の連続したⅢ層相当層に被覆されており、これらが同時的に存在・機能したものと推測される。なお、当該地点の完掘状況を見ると溝跡２の掘り形は２条が並行しており（溝跡２の同位置造替えによる）、本遺構がこのうち東側の溝（溝跡２-ｃか）に付属すると見られるのに対し、取水口状遺構３は西側の溝（溝跡２-ｄか）に付属すると思われ、両者に時間差が想定される。

〔出土遺物〕

第17図に出土地点を示した遺物のうち、95・96（第38図、写真図版30）が本遺構に帰属させうるものと思われる。いずれも須恵器系陶器の破片であり、12世紀中葉～後半の所産とみられる資料である。

〔遺構の時期〕

埋土の様相と出土遺物から12世紀代に帰属するものと思われる。

取水口状遺構３(第13・17・20図、写真図版15)

〔位置・検出状況〕

④⑤区西部中央、ⅢＡ６ｉ～７ｉグリッドに位置する。敷石遺構東縁の溝跡２の精査段階に、これと直交して東側（斜面下方側）にのびる溝条の掘り込みが検出され、さらに下段の落ち込みへ埋土が連続する状況が確認された。よって周囲の遺構との関係性から特定機能が想定される箇所と判断し精査着手した。

〔規模・形状〕

溝跡２と直交方向に延びる溝状の掘り込みは長さ130㎝・幅50㎝強で、東端部が一段低い面との境界に接している。残存深は最大でも４㎝程度とごく極浅い。溝状掘り込みと接する付近の下段面には、直径約110㎝の略円形で深さ５㎝程の浅い落ち込みが生じている。この落ち込みの端部からは北東側に溝状の痕跡がのび、さらに下段にある方形状掘り込みの南西コーナー部へと連続している。

〔層位的所見〕

本遺構は取水口状遺構２と同様、当該地点における溝跡２の掘り下げが進んだ時点で確認されたものであり、初段階に適所に土層断面を設定することができなかった。第20図a-a'～c-c'には完掘後に記録した溝状掘り込み部の横断図を示した。溝跡２から方形状掘り込みへ連続して堆積していたのは池状遺構埋土２ａ層や敷石遺構の敷石面を被覆土層に類似するⅢ層相当層である。溝状掘り込みの東端部に生じた略円形の落ち込みの底面には小礫と遺物小片の比較的まとまった分布が認められ、池状遺構西部の底面に類似した状況を呈する。

〔周辺遺構との関係〕

敷石遺構南部東縁の溝跡２の一部に位置しており、下段側へ導水するために設けられた施設と思われる。敷石遺構～溝跡２の一部～円形状落ち込み付近の下段平坦面は、同一の連続したⅢ層相当層に被覆されており、これらが同時的に存在・機能したものと推測される。なお、当該地点の完掘状況を見ると溝跡２の掘り形は２条が並行しており（溝跡２の同位置造替えによる)、本遺構がこのうち西側の溝（溝跡２-dか）に付属すると見られるのに対し、取水口状遺構２は東側の溝（溝跡２－ｃか）に付属すると思われ、両者に時間差が想定される。

〔出土遺物〕

本遺構に伴うことが明確な遺物は確認できなかった。周辺のⅢ層相当土からは12世紀後半の所産とみられるかわらけ片や常滑産等の国産陶器片が出土している。

〔遺構の時期〕

埋土の様相と周辺の出土遺物から12世紀代に帰属するものと思われる。

(5) 土　　坑

土坑１（第22図、写真図版17）

〔位置・検出状況〕⑥区北西部、ⅡＡ８ｘグリッドに位置する。Ⅴ層上面において明瞭な円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕開口部は128×116㎝の略円形で、底面までの残存深度は20㎝である。

〔埋土と堆積状況〕Ⅲ層類似の暗褐色シルトを主体とし、自然堆積によって埋没したものと思われる。埋土下部には壁崩落によるⅤ層土ブロックを含む。1層下面に遺物が集中する。

〔重複遺構〕なし。

〔出土遺物〕（第39・45図、写真図版31・34）

127～131のかわらけが出土している。ロクロ成形によるものが目立つ。いずれも12世紀第３四半期の中心とした時期に帰属するものである。このほか、鉄釘が２点（304・305）出土した。

〔遺構の時期〕埋土の様相と出土遺物から12世紀に帰属するものと考えられる。

土坑２（第22図、写真図版17）

〔位置・検出状況〕⑥区中央西部、ⅡＡ15ｔグリッドに位置する。水田造成による削平で露出したⅦ層面で、明瞭な円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕開口部は110×104㎝の円形で、底面までの残存深度は24㎝である。上部を大きく削平されている可能性が高い。

〔埋土と堆積状況〕Ⅲ層相当の暗褐色シルトを主体とする。開口部からの流入土と壁面からの崩落土により漸次埋没したものと推測される。

〔重複遺構〕なし。

〔出土遺物〕かわらけ片が出土している。細片につき不掲載とした。

〔遺構の時期〕埋土の様相と出土遺物から12世紀代に帰属するものと思われる。

土坑３（第22図、写真図版17）

〔位置・検出状況〕⑥区南西部、ⅡＡ17ｓグリッドに位置する。Ⅴ層上面においてⅢ層類似暗褐色土の円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕開口部は74×68㎝の円形で、底面までの残存深度は18㎝である。

〔埋土と堆積状況〕Ⅲ層相当の暗褐色土を主体とする単層である。掘り込みはⅥ層（地山）に到達せずⅤ層が壁面となっている。埋土は上部から下部まで一様で変化に乏しく、開口部からの流入土により短時間に埋没したと考えられる。

〔重複遺構〕なし。

〔出土遺物〕（第39図、写真図版31）

底面～壁面に貼り付くようにかわらけの大形破片が出土している。132はロクロかわらけ、133はてづくねかわらけである。いずれも12世紀第３四半期の所産とみられる。

〔遺構の時期〕埋土の様相と出土遺物から12世紀代に帰属するものと思われる。

土坑４（第22図、写真図版18）

〔位置・検出状況〕⑥区南西部、ⅡＡ19ｔグリッドに位置する。水田造成による削平で露出したⅦ

層面で、明瞭な円形範囲として検出された。
〔規模・形状〕開口部は 82 × 78 ㎝の円形で、底面までの残存深度は 12 ㎝である。
〔埋土と堆積状況〕壁際底面に崩落土が堆積し、その上を開口部から流入したⅢ層類似暗褐色土が覆っている。
〔重複遺構〕なし。
〔出土遺物〕かわらけ片が出土している。細片につき不掲載とした。
〔遺構の時期〕埋土の様相と出土遺物から 12 世紀代に帰属するものと思われる。

土坑５（第 23 図、写真図版 18）
〔位置・検出状況〕⑥区北部、ⅡＡ 19 ｗグリッドに位置する。当地点に設定した試掘トレンチ内において遺物を含むⅢ層類似土の不整形な広がりとしてⅤ層上面で検出された。
〔規模・形状〕開口部は 115 × 75 ㎝の不整楕円形で、底面までの残存深度は 24 ㎝である。西側開口部が一部張り出している。
〔埋土と堆積状況〕Ⅲ層類似の暗褐色土を主体とする。掘り込みはⅥ層（地山）に到達せずⅤ層が壁～底面となる。埋土下部には壁崩落土と思われるⅤ層土ブロックを多く含み、その上を遺物を多く含むⅢ層相当土が覆っている。
〔重複遺構〕なし。
〔出土遺物〕（第 39 図、写真図版 31）
134 ～ 137 はてづくねかわらけ、138 はロクロかわらけで、いずれも 12 世紀第３四半期の所産とみられる。134・135 の２点は、伏せて重ねられた状態で埋土最上部から出土したものである。このほか渥美産甕小片（139）、フイゴ羽口様の焼粘土小塊（140）が出土した。
〔遺構の時期〕埋土の様相と出土遺物から 12 世紀代に帰属するものと思われる。

土坑６（第 23 図、写真図版 18）
〔位置・検出状況〕④⑤区中央西部、ⅢＡ７ｊ～７ｋグリッドに位置する。Ⅵ層上面において不整形な黒褐色土の広がりとして検出された。
〔規模・形状〕最上部では開口部は不整形を呈するが、やや内側に径 130 ㎝ほどの整った円形の上端を持つ。底面までの残存深度は 36 ㎝で、底面から壁にかけては緩やかに内弯して立ち上がり、全体に丸底状の形態を呈する。
〔埋土と堆積状況〕水を含み粘性に富む黒褐色土が主体である。Ⅲ層土が水により流入したものと思われる。底面直上では砂を多く含み、底面はグライして青灰色を呈する。開口部周縁の壁面上端では拳大の礫が内部に落ち込んだような状態で出土している。
〔重複遺構〕水田造成による削平を受け周辺の状況が明らかではないが、池状遺構に類似する大形遺構に付属する可能性（取水部の施設等の機能）が考えられる。
〔出土遺物〕（第 40 図、写真図版 31）
141 ～ 144 はいずれもてづくねかわらけで 12 世紀第３四半期の所産とみられる。また、漆器椀（401）が出土している。
〔遺構の時期〕埋土の様相と出土遺物から 12 世紀代に帰属するものと思われる。

土坑７（第23図、写真図版19）
〔位置・検出状況〕⑥区中央西部、ⅡＡ12ｖグリッドに位置する。Ⅴ層上面で比較的明瞭な暗褐色土の円形範囲として検出された。
〔規模・形状〕開口部は98×90㎝の略円形で、底面までの残存深度は72㎝である。開口部でやや広がるが下半部はほぼ円筒形を呈し平坦な底面を有する。
〔埋土と堆積状況〕Ⅲ層類似の暗褐色土が主体。埋土最下層の６層はやや黄味を帯びるほかはⅢ層土によく似ており、底面から開口部まで連続して堆積している。この６層を遺構中央で抉り込むように５層以上の堆積層が切っている。この堆積状況からは柱材の抜き取りなどの行為が想起されるが、地山であるⅥ・Ⅶ層を大きく掘り込んだ遺構であるにも拘わらず、埋め戻し土であるはずの６層に地山土が含まれないのは不自然であり解釈を困難にしている。
〔重複遺構〕直接重複する遺構はない。形態と堆積状況が酷似する土坑８と近接して位置する。本土坑と土坑８との中心を結ぶ軸方向はＮ-59°－Ｅ（直交方向Ｎ-31°－Ｗ）である。
〔出土遺物〕（第40図、写真図版31）
てづくねかわらけ口縁部片（146）、ロクロかわらけ底部片（147）、常滑産甕破片（148～150）などが出土している。いずれも12世紀後半期の所産とみられる。
〔遺構の時期〕埋土主体土と出土遺物から12世紀代に帰属するものと思われる。

土坑８（第23図、写真図版19）
〔位置・検出状況〕⑥区中央西部、ⅡＡ12ｖグリッドに位置する。Ⅴ層上面で比較的明瞭な暗褐色土の円形範囲として検出された。
〔規模・形状〕開口部は86×80㎝の形で、底面までの残存深度は96㎝である。開口部でやや広がるが下半部はほぼ円筒形を呈し平坦な底面を有する。
〔埋土と堆積状況〕Ⅲ層類似の暗褐色土が主体。土坑７によく似た堆積状況を示している。２層はやや黄味を帯びたⅢ層類似土で底面から開口部まで連続して堆積している。この２層を遺構中央で深く抉り込むように１層が切っている。埋土中部の壁際からは径20㎝強のやや大形の礫が数点出土しており、上記の堆積状況からも材の抜き取られた大形の柱穴ではないかと思われた。しかし、地山であるⅥ・Ⅶ層を大きく掘り込んだ遺構であるにも拘わらず埋め戻し土であるはずの２層に地山土が含まれないのは不自然であり解釈が困難となっている。
〔重複遺構〕直接重複する遺構はない。形態と堆積状況が酷似する土坑７と近接して位置している。本土坑と土坑８との中心を結ぶ軸方向はＮ-59°－Ｅ（直交方向Ｎ-31°－Ｗ）である。
〔出土遺物〕かわらけ片が出土している。細片につき不掲載とした。
〔遺構の時期〕埋土主体土と出土遺物から12世紀代に帰属するものと思われる。

土坑９（第24図、写真図版20）
〔位置・検出状況〕⑥区南部、ⅡＡ20ｕグリッドに位置する。水田造成による削平で露出したⅥ～Ⅶ層面で、明瞭な不整円形の範囲として検出された。
〔規模・形状〕開口部は102×100㎝の不整円形で、底面までの残存深度は80㎝である。開口部下の25㎝ほどのところでやや窄まり、以下の壁面はほぼ直立する八つの平面からなり、上面観はやや崩れた八角形を呈する。
〔埋土と堆積状況〕全体的に黒褐色土を主体土とする。３～５層は地山Ⅵ・Ⅶ層土のブロックを含む

土層で堅く締まっている。これらは堆積状況から人為的な埋め戻し土とみられる。２層はこれらの層を上部から深く抉り込むように切っており、一度埋没した後に掘り返された可能性がある。柱材の抜き取りなどが想定されようか。
〔重複遺構〕なし。
〔出土遺物〕なし。
〔遺構の時期〕埋土主体土はⅤまたはⅢ層に類似することから 12 世紀を下限に考えたい。ただし出土遺物はなく詳細は不明といわざるを得ない。

土坑 10（第 24 図、写真図版 20）
〔位置・検出状況〕⑥区南東部、ⅡＡ 17 ｘ～ 17 ｙグリッドに位置する。Ⅴ層上面において明瞭な暗褐色土の円形範囲として検出された。
〔規模・形状〕開口部は 92 × 85 ㎝の円形で、底面までの残存深度は 76 ㎝である。下部は径 40 ㎝程の円筒形を呈しており、開口部から上半部は埋積過程の崩落により大きく広がったものと思われる。
〔埋土と堆積状況〕Ⅲ層相当の暗褐色土を主体とし、全体に自然堆積の様相を呈する。この地点ではⅤ～Ⅵ層が砂質を帯びており、埋土内にも壁から流入した砂の混入が見られる。壁の下半部からは湧水が顕著である。壁の崩落を伴いながら、開口部からの流入土により漸次埋没したものと考えられる。
〔重複遺構〕なし。
〔出土遺物〕（第 40 図、写真図版 31）
てづくねかわらけ片（151）が出土している。
〔遺構の時期〕埋土主体土と出土遺物から 12 世紀代に帰属するものと思われる。

土坑 11（第 24 図、写真図版 20）
〔位置・検出状況〕⑧区中央部、ⅡＡ 21 ｔグリッドに位置する。付近に面的に堆積していたⅢ層を除去したところ、Ⅴ層上面において暗褐色土の明瞭な不整円形範囲として検出された。
〔規模・形状〕開口部は 80 × 74 ㎝の略円形で、底面までの深度は 12 ㎝である。浅い丸底状を呈し壁面は内部に向かって緩やかに傾斜する。
〔埋土と堆積状況〕上位に面的に堆積していたⅢ層から連続して流入した黒褐色土の単層である。このことから開口部は削平を受けていないと考えられる。
〔重複遺構〕直接重複する遺構はないが、同じ形態・堆積状況を示す土坑 12 とは 80 ㎝の間隔をおいて並列する関係にある。また、2 基を結ぶ軸線は建物跡 1 の梁行軸と平行することから、建物跡 1 との関連性が強いものと推測される。
〔出土遺物〕（第 40 図、写真図版 31）
　常滑産甕破片（152）が出土している。
〔遺構の時期〕埋土状況や出土遺物などから 12 世紀代に帰属すると思われる。

土坑 12（第 24 図、写真図版 20）
〔位置・検出状況〕⑧区中央部、ⅡＡ 21 ｔグリッドに位置する。付近に面的に堆積していたⅢ層を除去したところ、Ⅴ層上面において暗褐色土の明瞭な不整円形範囲として検出された。
〔規模・形状〕開口部は 68 × 65 ㎝の不整円形で、底面までの深度は 12 ㎝である。
〔埋土と堆積状況〕〕上位に面的に堆積していたⅢ層から連続して流入した黒褐色土の単層である。

このことから開口部は削平を受けていないと考えられる。

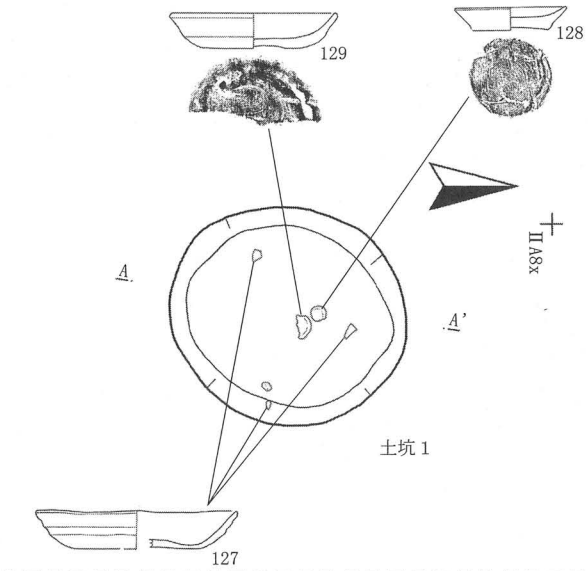
〔重複遺構〕直接重複する遺構はないが、同じ形態・堆積状況を示す土坑 11 とは 80 cmの間隔をおいて並列する関係にある。また、2 基を結ぶ軸線は建物跡 1 の梁行軸と平行することから、建物跡 1 との関連性が強いものと推測される。

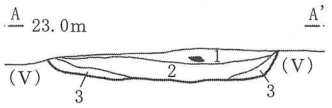
〔出土遺物〕（第 40 図、写真図版 31）

かわらけ片が出土しているが細片につき不掲載とした。153 は近接する平安時代住居跡付近から流入したとみられる須恵器坏小片である。

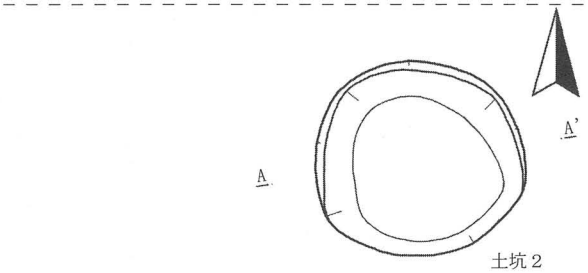
〔遺構の時期〕埋土状況や出土遺物などから 12 世紀代に帰属すると思われる。

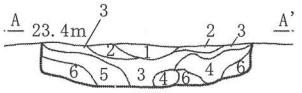
雨の現地説明会（平成 18 年 7 月 22 日）





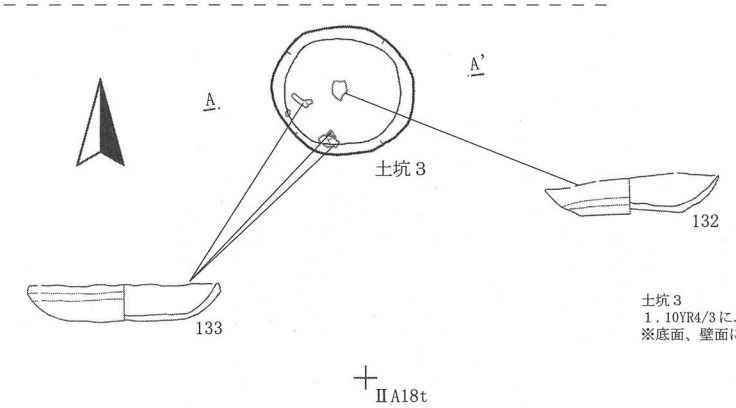
土坑１
１．10YR3/3 暗褐色－4/3 にぶい黄褐色．シルト．炭片やや多量に含む．本層下面にかわらけ片集中．
２．10YR3/3 暗褐色．シルト．締まり密．10YR4/2 灰黄褐色－4/3 にぶい黄褐色の粘土質シルトブロック少量含む．
３．10YR3/3 暗褐色．シルト．10YR4/2 灰黄褐色－4/3 にぶい黄褐色の粘土質シルトブロック多量含む．



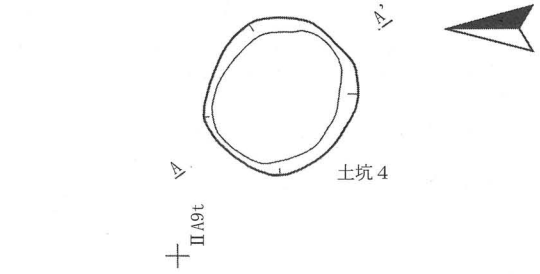


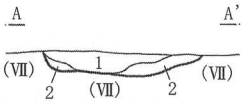
土坑２
１．10YR3/2 黒褐色．砂質シルト．炭粒（φ5mm）微量含む．
２．10YR3/3 暗褐色．粘土質シルト．Ⅶ層ブロック少量含む．全体やや黄味．
３．10YR3/3 暗褐色．粘土質シルト．粘性やや強．
４．10YR4/2 灰黄褐色．粘土質シルト．Ⅵ層ブロック層？
５．10YR3/3 暗褐色．粘土質シルト．Ⅵ層、Ⅶ層ブロック多量含む．
６．10YR3/3 暗褐色．粘土質シルト．
※検出時は埋土グライ化．

ⅡA10t

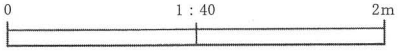


土坑３
１．10YR4/3 にぶい黄褐色．粘土質シルト．粘性あり．締まりやや密．炭粒極微量含む．
※底面、壁面に張り付くように土器（かわらけ）片出土．埋土は一様、一度に埋没か．

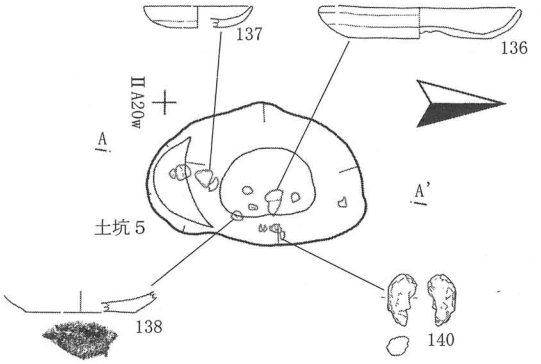


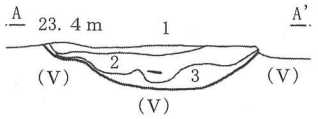


土坑４
１．10YR3/3 暗褐色．シルト．締まり密．炭片微量含む．
２．10YR3/3 暗褐色．シルト．締まり密．地山礫多量含む．
※PP39 埋土によく似ている．

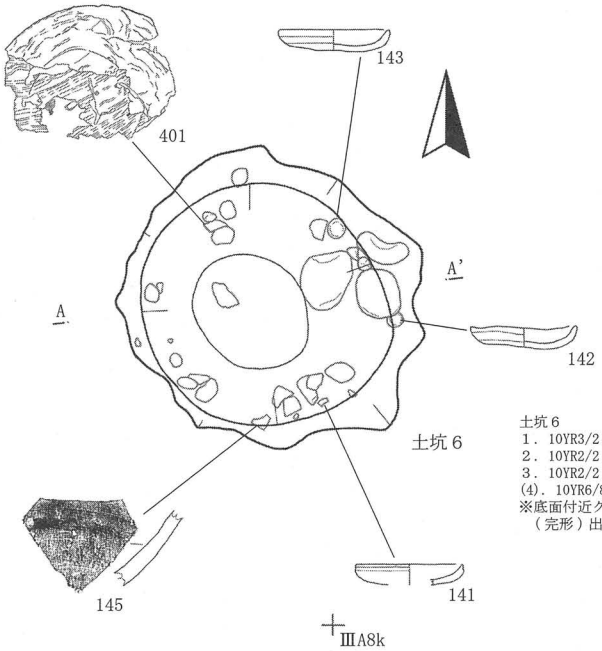


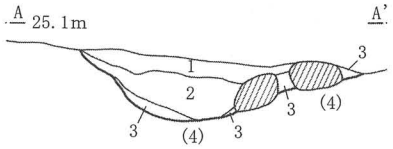
第 22 図　土坑 (1)



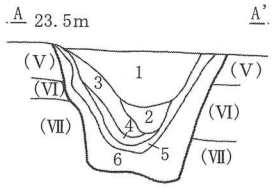


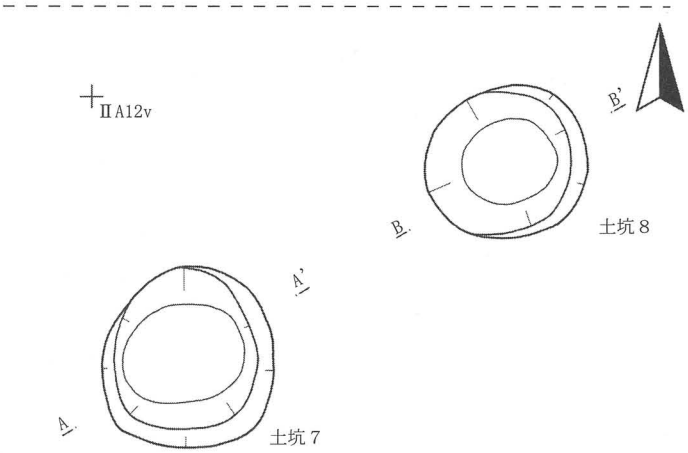
土坑５
1．10YR3/3 暗褐色．シルト．白色の軟礫片（凝灰岩？）含み、φ10～20mm の炭片含む（この層だけ乾きやすい）．
2．10YR3/3 暗褐色－2/3 黒褐色．シルト．
3．10YR2/2 黒褐色シルト（Ⅴ層土）と２層の混ブロック層．
※底面に５～15cm の礫が点在．遺物は１～２層に含まれる．かわらけ２枚重ねで伏せた状態で出土．

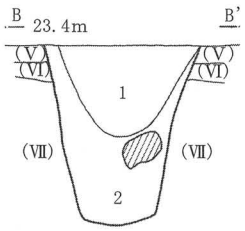




土坑６
1．10YR3/2 黒褐色．シルト．締まり密．炭粒ごく微量含む．
2．10YR2/2 黒褐色．粘土質シルト．炭ごく微量含む．１より黒味強く、水含んで粘性に富む．
3．10YR2/2 黒褐色．粘土質シルト．砂やや多量含む．
(4)．10YR6/8 明黄褐色．シルト．地山Ⅵ層相当（？）
※底面付近グライ化．開口部周縁に拳大～人頭大の礫入る．東側の底面直上に小型のかわらけ（完形）出土．





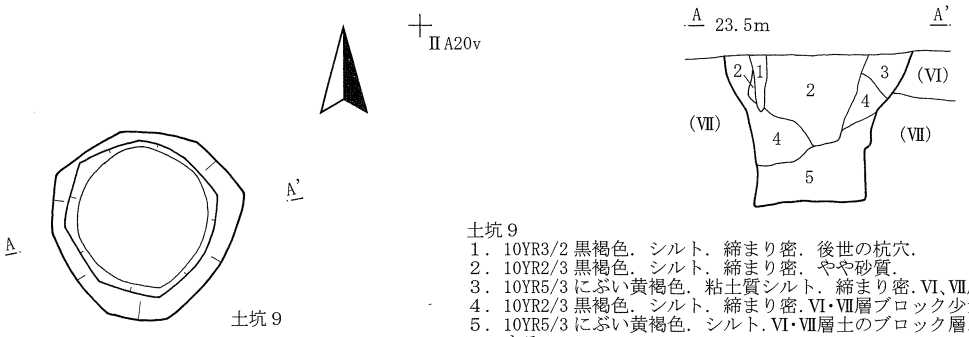


土坑７
1．10YR3/3 暗褐色－4/3 にぶい黄褐色．シルト．締まり密．炭片（φ5～10mm）極微量含む．Ⅲ層類似土．
2．10YR3/3 暗褐色－4/3 にぶい黄褐色．シルト．Ⅴ層土（黒色土）ブロック、Ⅵ, Ⅶ層ブロック微量含む．
3．10YR3/3 暗褐色－4/3 にぶい黄褐色．シルト．Ⅴ層ブロック微量．Ⅵ, Ⅶ層ブロック多量含む．
4．2 層に類似．
5．3 層に類似．
6．10YR4/2 灰黄褐色－4/3 にぶい黄褐色．粘土質シルト．１層より黄味あり．酸化鉄斑発達．
※柱材を抜き取られた大形柱穴？

土坑８
1．10YR3/3 暗褐色－4/3 にぶい黄褐色．シルト．締まり密．炭片（φ5～10mm）極微量．Ⅲ層類似土．
2．10YR4/2 灰黄褐色－4/3 にぶい黄褐色．粘土質シルト．１層より黄味あり．酸化鉄斑発達．
※柱材を抜き取られた大型柱穴？礫は根固めか．

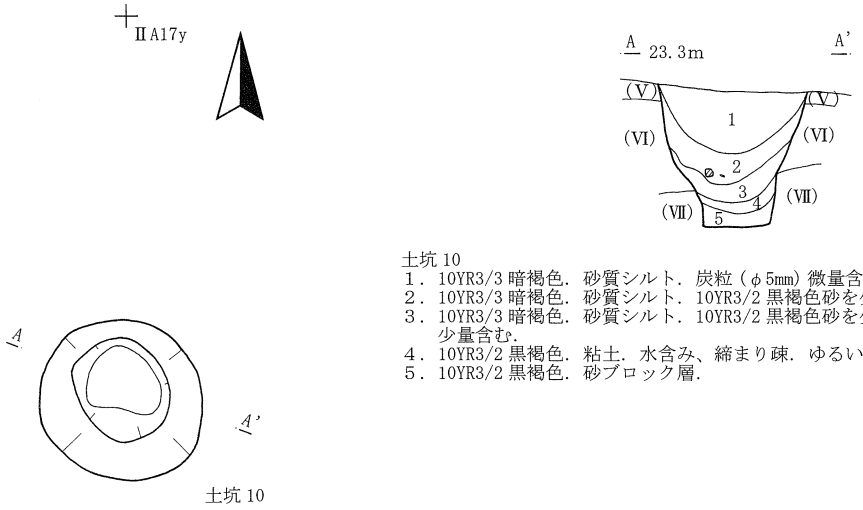
0　1：40　2m

第 23 図　土坑 (2)

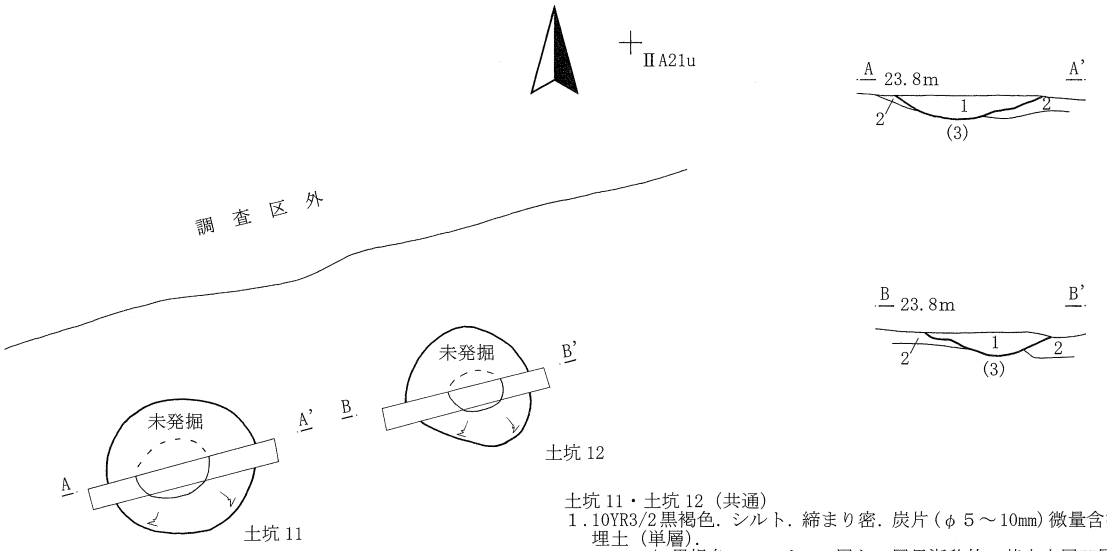


土坑 9
1．10YR3/2 黒褐色．シルト．締まり密．後世の杭穴．
2．10YR2/3 黒褐色．シルト．締まり密．やや砂質．
3．10YR5/3 にぶい黄褐色．粘土質シルト．締まり密．Ⅵ、Ⅶ層ブロック層．
4．10YR2/3 黒褐色．シルト．締まり密．Ⅵ・Ⅶ層ブロック少量含む．
5．10YR5/3 にぶい黄褐色．シルト．Ⅵ・Ⅶ層土のブロック層．非常に固く締まる．

※3.4.5 層：人為堆積？大形柱穴？



土坑 10
1．10YR3/3 暗褐色．砂質シルト．炭粒（φ5mm）微量含む．締まっている．
2．10YR3/3 暗褐色．砂質シルト．10YR3/2 黒褐色砂を少量含む．
3．10YR3/3 暗褐色．砂質シルト．10YR3/2 黒褐色砂を少量、Ⅶ層小ブロック少量含む．
4．10YR3/2 黒褐色．粘土．水含み、締まり疎．ゆるい．
5．10YR3/2 黒褐色．砂ブロック層．



土坑 11・土坑 12（共通）
1．10YR3/2 黒褐色．シルト．締まり密．炭片（φ５～10mm）微量含む（目立つ）．埋土（単層）．
2．10YR2/2 黒褐色．シルト．３層との層界漸移的．基本土層Ⅴ層相当。
（3）．10YR5/4 にぶい黄褐色．砂．Ⅶ層礫小片微量含む．Ⅵ、Ⅶ相当．地山．
※掘立柱建物跡１の柱穴配置に並ぶ不整形な落ち込み．付属施設または雨落溝状の痕跡か？

0　1：40　2m

第 24 図　土坑 (3)

(6) 溝　　跡

溝跡１　（第 25 図、写真図版 21）

〔位置・検出状況〕⑥区北西部、ⅡＡ８ｙ～ 10 ｖグリッドに位置する。Ｖ層上面において明瞭な帯状の範囲として検出された。

〔規模・形状〕検出した全長は 16.3 ｍ、幅は 45 ～ 70 ㎝、深さは 20 ㎝である。走行方向はＮ -58°～ 61°　－Ｅである。

〔埋土と堆積状況〕Ⅱ層下部に類似する粘土質土を主体とする。埋土の最上部には拳大の礫が点々と入る。付近の他の遺構でも埋土上部にⅡ層下部類似土の堆積が認められ、本遺構付近に洪水堆積土が及んだことを示唆している。

〔重複遺構〕なし。

〔出土遺物〕（第 40 図、写真図版 31）

てづくねかわらけ破片（154）、常滑産鉢破片（155）などが出土している。

〔遺構の時期〕出土遺物と埋土から 12 世紀と考えられる。

溝跡２　（第 12 ～ 17・25 ～ 27 図、写真図版 21・22）

〔位置・検出状況〕

敷石遺構の東縁に沿い、池状遺構の北西部付近で東に屈曲するものである。主に④⑤区中央西部～北縁部を走行し、⑧区を経由して⑥区南東隅部に延びている。同様の軌跡を通る溝が複数重複・平行しており、これらを一括して「溝跡２」と呼称している。

〔細分〕

上記のとおり、本遺構は同一箇所に繰り返し設けられた溝跡が重複した状態で検出されたものである。精査着手に際し、これらを峻別し個別に精査を進めることは、埋土の類似性等から極めて困難であると思われた。そこで埋土の掘り上げは一括して行い、その後、敷石遺構の精査で設定したベルトを本遺構にも兼用して堆積状況を確認し、最終的に全体の整合性をもった解釈が得られるよう検討することとした。その結果、敷石遺構東縁を走行する溝跡はａ～ｄに細分され、これに④⑤区北縁東部に延びる２条を加えｅ・ｆとした。以下、個別に記載する。

・溝跡２-a　（第 26 図）

〈細分根拠〉　敷石遺構断面Ｂ～Ｅ・Ｉから性状の共通する土層を抽出した。

〈埋土と堆積状況〉　黒褐色シルトを主体とし全体に砂の混入が顕著である。地点により底面に豆粒大の小礫の集中が見られる。

〈周辺遺構との関係〉　敷石遺構の東縁に付属しており、帯状敷石面の南部から北端部付近を経由し、溝跡２の屈曲部を越えて東側にも埋土が認められる。溝跡２－ａ～ｄのうち最も新しい。

・溝跡２-b　（第 26 図）

〈細分根拠〉　敷石遺構断面Ａ～Ｅ・Ｇ・Ｈから性状の共通する土層を抽出した。

〈埋土と堆積状況〉　にぶい黄褐色～黒褐色のシルトが主体である。砂を大量に含み、粘土質土の薄層を挟む地点もある。

〈周辺遺構との関係〉　敷石遺構の東縁に付属し、帯状敷石面の南部部から北部付近にかけて埋土が認められる。溝跡２－ａより古く、ｃ・ｄより新しい。

・溝跡２-c　（第 27 図）

〈細分根拠〉　敷石遺構断面Ａ～Ｅ・Ｇ～Ｊから性状の共通する土層を抽出した。

〈埋土と堆積状況〉　埋土の大半が暗褐色の砂で、一部に黒褐色シルト･粘土質シルトが介在する。底面に粗砂・小礫の集中が見られる地点がある。敷石遺構断面 B-B' の中央部に波線で示した〈ｃ〉はこの地点における掘り形から溝跡２-c の位置を推定したものである。また〈c'〉は溝跡２-c の東側に埋土の連続する掘り込み（池状遺構に類似）が想定されたためそれの堆積層を模式的に図示したものである。

〈周辺遺構との関係〉　敷石遺構の東縁に付属しており、帯状敷石面の南端部から北端部付近を経由し、溝跡２の屈曲部を越えて東側にも埋土が認められる。溝跡２－ａ・ｂより古く、ｄより新しい。取水口状遺構１よりは新しく、取水口状遺構２の取水源である可能性がある。

・溝跡２-d　（第 27 図）

〈細分根拠〉　敷石遺構断面Ａ～Ｅ・Ｇ～Ｊから性状の共通する土層を抽出した。

〈埋土と堆積状況〉　黒褐色～暗褐色シルトを主体とし砂の薄層が挟在する。地点によって砂質が強い。敷石遺構断面 B-B' の中央部に示した〈d'〉は、溝跡２－ｄの東側に埋土の連続する掘り込み（池状遺構に類似）が想定されたためそれの堆積層を模式的に図示したものである。取水口状遺構３の下段にある掘り込みと対比される。

〈周辺遺構との関係〉　敷石遺構の東縁に付属しており、帯状敷石面の南端部から北端部付近を経由し、溝跡２の屈曲部を越えて東側にも埋土が認められる。溝跡２－ａ～ｄのうち最も古い。取水口状遺構１および取水口状遺構３の取水源である可能性がある。

・溝跡２-e　（第 25 図、写真図版 21・22）

〈細分根拠〉　④⑤区北縁東部から⑧区を経由して⑥区南東隅に抜けている。溝跡２-a ～ｄの延長上に位置し、埋土も類似することから溝跡２の一部と判断した。

〈埋土と堆積状況〉　黒褐色シルトを主体とする。地山Ⅶ層の礫の混入が比較的顕著である。

「溝跡２-e」は④⑤区北縁に張り出している調査区外に隠れた部分より東側のみを指しているが埋土や掘り形をみれば、取水口状遺構１から東側の一段深い部分（敷石遺構断面 J-J' ２・４～８層）に連続することは間違いないと思われる。地山のブロックや礫を含む埋土下半部は構築段階～機能段階、拳大礫と遺物片を多く含み炭化物粒の混入が顕著な埋土上半部は廃絶段階以降の堆積層と推測される。また、溝跡２-e 末端部の⑥区南東隅部では埋土の上部に洪水堆積層であるⅡ層下部類似土の堆積が認められる。他の 12 世紀帰属遺構でも埋土上部に当該堆積層が観察されており、⑥区の一部が増水時の浸水区域であったことを示唆している。

〈周辺遺構との関係〉　溝跡２-f の北側に並走するが、埋土は異なり底面標高の差も大きいことからｆとは時間差がある（ｆより古い）と考えられる。一方、⑥区北縁の溝跡１とは埋土も類似し、走行方向が同じであることから同時存在の可能性が考えられる。

〈遺構埋土の保存〉　⑧区及び⑥区南東隅部にかけては、検出面以下の精査は行わず埋土を温存したまま埋め戻すこととなった。遺物の集中が顕著な地点であり、埋土には一定量の遺物が保存されているものと思われる。

・溝跡２－ｆ　（第 25 図、写真図版 21）

〈細分根拠〉　④⑤区北縁東部に位置し溝跡２-a ～ｄの延長上にあることから、溝跡２の一部の可能性があると判断した。

〈埋土と堆積状況〉　黒褐色シルト主体の単層である。溝跡２-e の埋土最上部にやや似るが、砂

の混入量が異なる。

〈周辺遺構との関係〉　溝跡２-e の南側に並走するが、埋土は異なり底面標高の差も大きいことからｅとは時間差がある（ｅより新しい）可能性が高いと考えられる。走行方向を見ると、調査区外に隠れている西端部は取水口状遺構１付近に向かって延びており、西側に向かうほど溝跡２-e との間隔は狭まっているものと推測される。ａ～ｄのうちの新期のもの、あるいはこれらより新しくすでに痕跡が消失した別の溝跡に連続していた可能性がある。

〔出土遺物〕（第 40・41 図、写真図版 31）

156 ～ 173 は「敷石遺構東縁の溝跡」から出土したものをまとめて取り上げた資料である。すなわち溝跡２埋土として一括して取り上げた資料となるのだが、細分したいずれの溝に帰属するかは不明である。てづくねかわらけ、ロクロかわらけ、国産陶器（常滑産・渥美産）、中国産磁器などがある。

溝跡２は敷石遺構・池状遺構および取水口状遺構等、近接する各遺構との関連が強いものと思われ、周辺の遺物出土状況（第 17・21 図）と出土遺物（第 34 ～ 39 図）もあわせて参照されたい。

また、⑥区南縁周辺の出土資料（第 41 ～ 44 図）として掲載したもののうち、特に表６で「⑥区南縁周辺（⑧区）」が出土地点になっているものは、ほぼ全て溝跡２-e の埋土最上部に帰属させることができる。

〔遺構の時期〕

溝跡２-a ～ f の帰属時期は、出土遺物と埋土から 12 世紀及びそれ以降と考えられる。

溝跡３　（第 28 図）

〔位置・検出状況〕

敷石遺構帯状敷石面の西縁及びその延長上に断続的に検出されたものである。④⑤区中央西部から⑦区中央部に位置する。溝状の掘り込みとして認識できる６箇所にａ～ｆの細分名を付した。

〔細分〕

・溝跡３-a

〈地点〉　敷石遺構帯状敷石面中央部西縁、ⅢＡ３ｈグリッド南東隅部に位置する。

〈規模・形状〉　長さ 210 ㎝、幅 50 ～ 60 ㎝。底面に凹凸があり、北側に向かって段階的に深くなっている。

〈埋土と堆積状況〉　敷石遺構断面 C-C’の４層が埋土に相当し、敷石面を被覆する２ａ層の下位に堆積している。Ⅲ層相当の黒褐色シルト主体。溝跡２と対になるものと思われるが、溝跡２-a ～ｄのいずれと対応するかは不明である。

・溝跡３-b

〈地点〉　敷石遺構帯状敷石面中央部西縁、ⅢＡ２ｉグリッド南西部に位置する。

〈規模・形状〉　敷石遺構帯状敷石面北部にある「テラス状の高まり」の南辺西端部に、南側から抉りこんだような幅 60 ㎝程度の不明瞭な痕跡として残存している。敷石面上においてはほとんど認識できない程度の深さである。

〈埋土と堆積状況〉　敷石遺構断面 E-E’において、敷石面を構成する整地層の６層が西端で切れている箇所が該当する。敷石面を被覆するⅢ層相当土が連続して堆積しており、溝跡２と対になるものと思われるが、溝跡２-a ～ｄのいずれと対応するかは不明である。

・溝跡３-c

〈地点〉　敷石遺構帯状敷石面北部西縁、ⅢＡ１ｉグリッドに位置する。

〈規模・形状〉　長さ 340 cm以上、幅 60 cm。非常に浅いシミ状の痕跡で、南端部が攪乱（防火水槽）に切られている。

〈埋土と堆積状況〉　Ⅲ層相当層が帯状に痕跡的に残存したものであり掘り形は極めて不明瞭である。

・溝跡３-d

〈地点〉　④⑤区北西部、ⅡＡ 24 ｉグリッド南部に位置する。

〈規模・形状〉　長さ 200 cm、幅 50 cm。底面に凹凸を持つ。北端部が調査不能区域に延びる。

〈埋土と堆積状況〉　Ⅲ層相当の黒褐色シルト主体の単層。

・溝跡３-e　（写真図版 16）

〈地点〉　⑦区中央部、ⅡＡ 23 ｉグリッドに位置する。

〈規模・形状〉　長さ 280 cm、幅 70 cm。整った底面と内弯して緩やかに立ち上がる壁面を持つ。南北両端が調査区外へと延び、全体形状は不明である。

〈埋土と堆積状況〉　⑦区を東西方向に縦断する敷石遺構断面 L-L’の４層が本遺構の埋土に相当する。埋土中部に拳大の礫が入り、また、層中に炭化物の混入が顕著であるなど、溝跡２-e や池状遺構の埋土に良く似る。

・溝跡３- f

〈地点〉　④⑤区北西部、ⅡＡ 24 ｉグリッド南部に位置する。

〈規模・形状〉　長さ 220 cm、幅 70 cm。南端部底面に凹部を持つ。掘り形は不明瞭で北端は調査区外に延びており、全体形状は不明である。

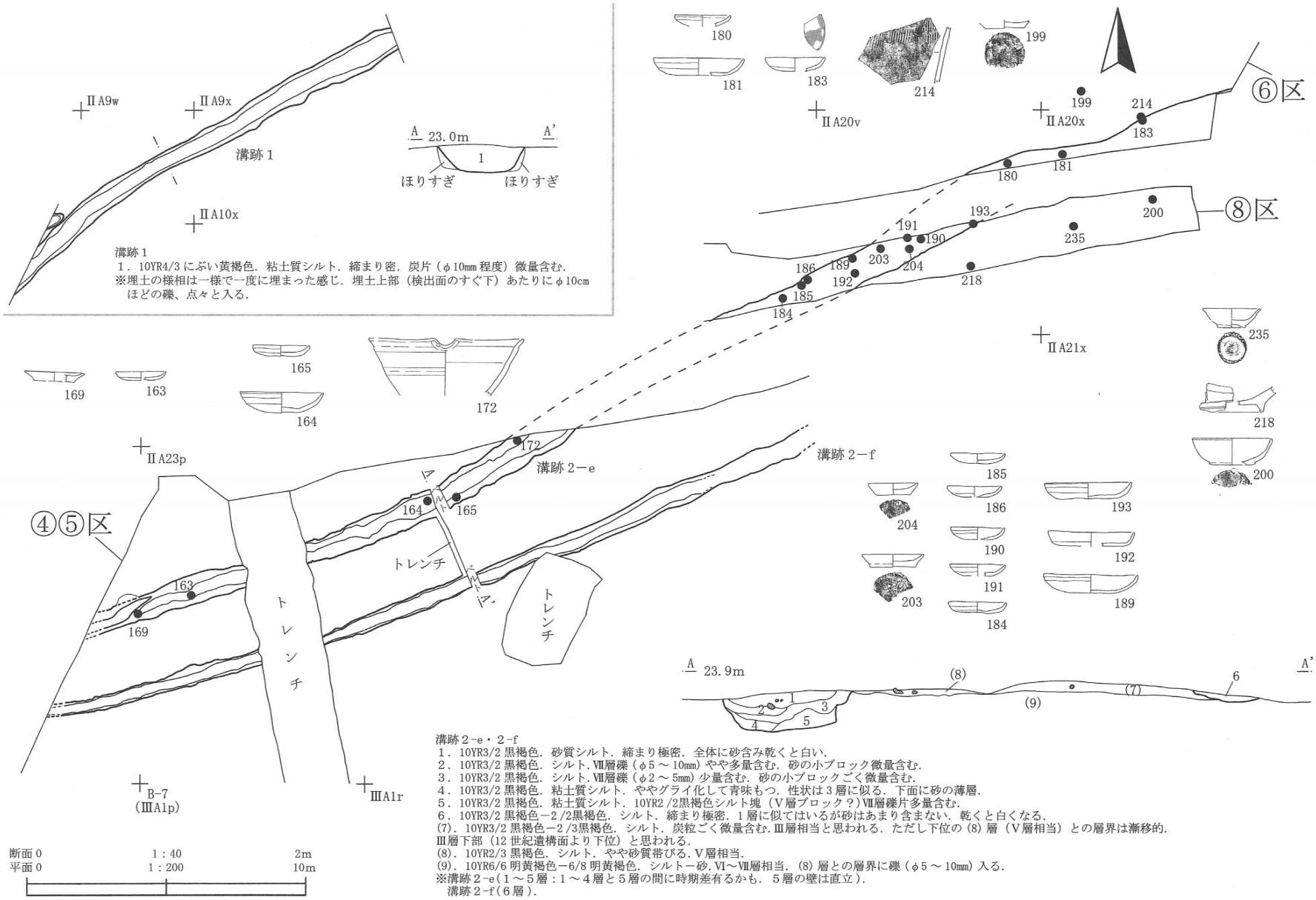
〈埋土と堆積状況〉　Ⅲ層相当の黒褐色シルトを主体とする。

〔出土遺物〕（第 40・41 図、写真図版 31）

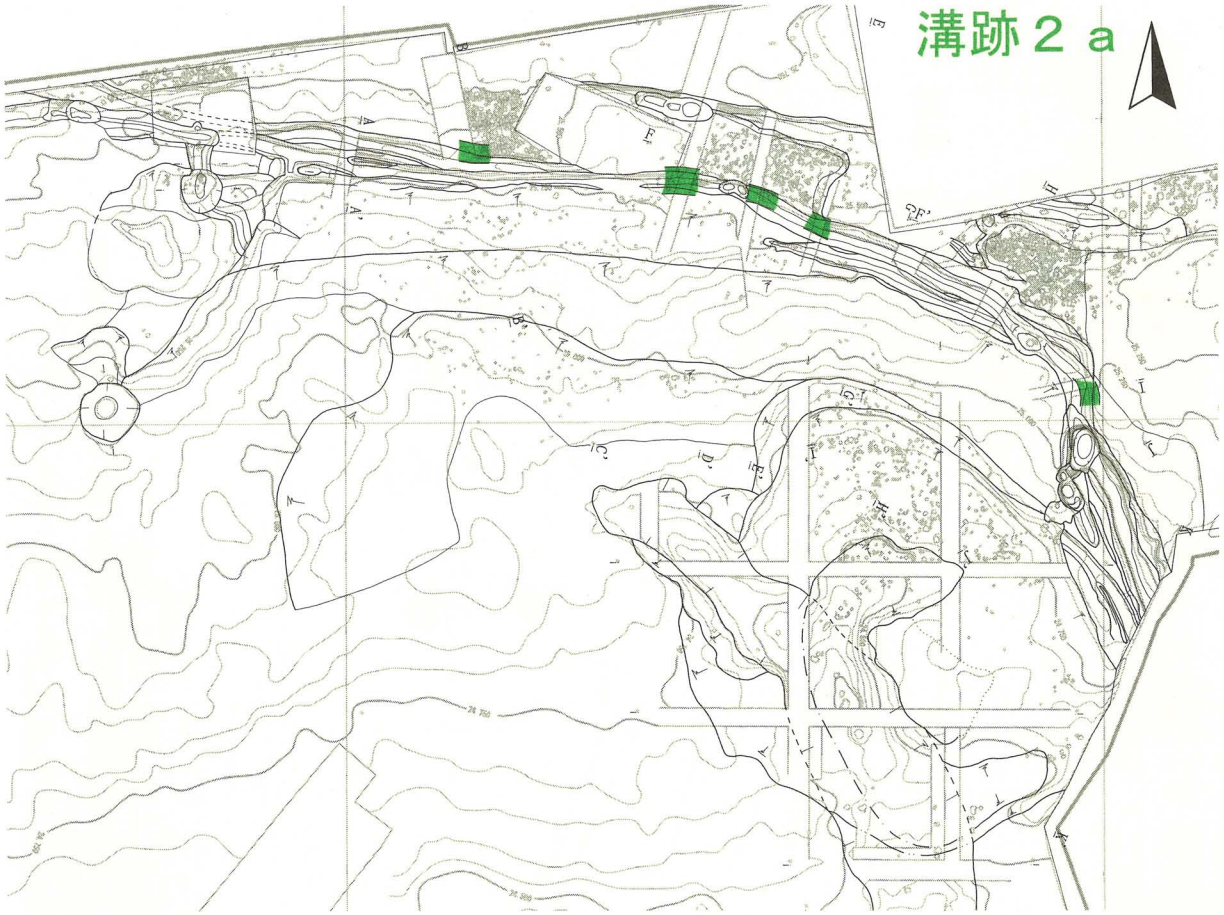
⑦区に位置する溝跡３-e の埋土から、てづくねかわらけ片（174）・常滑産甕片（176）・須恵器系陶器片（177）が出土している。

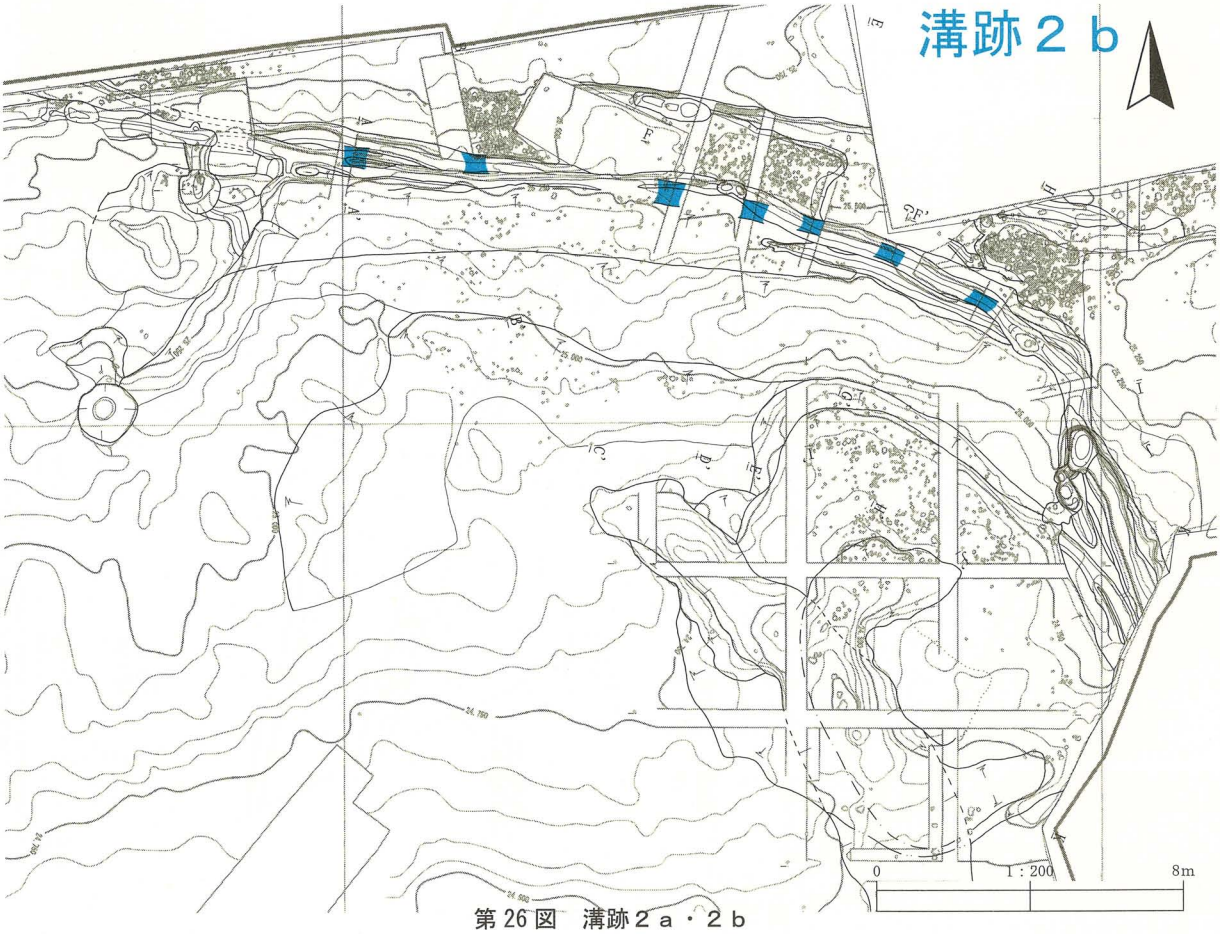
〔遺構の時期〕

溝跡３-a ～ f の帰属時期は、堆積状況や周囲との関係性から 12 世紀及びそれ以降と推定される。

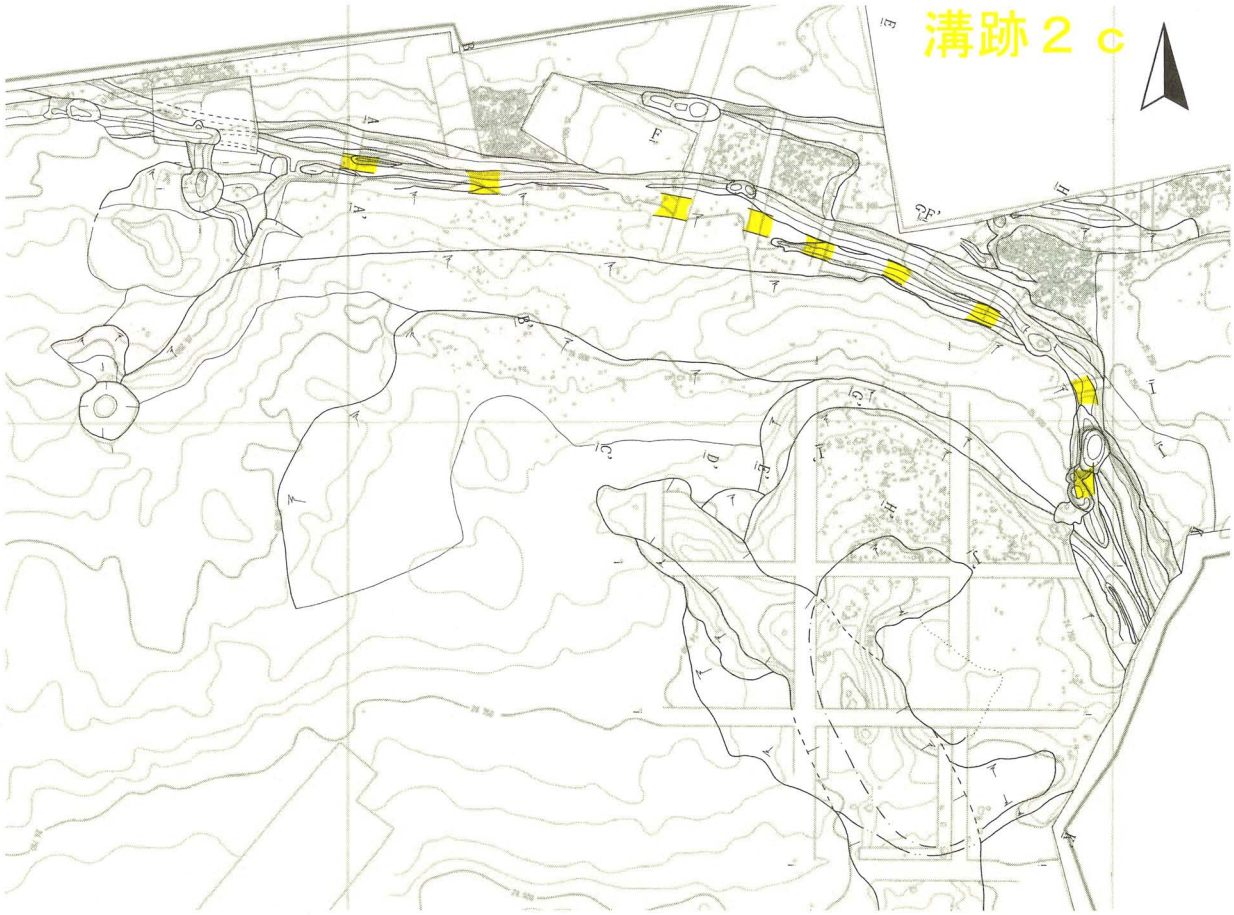


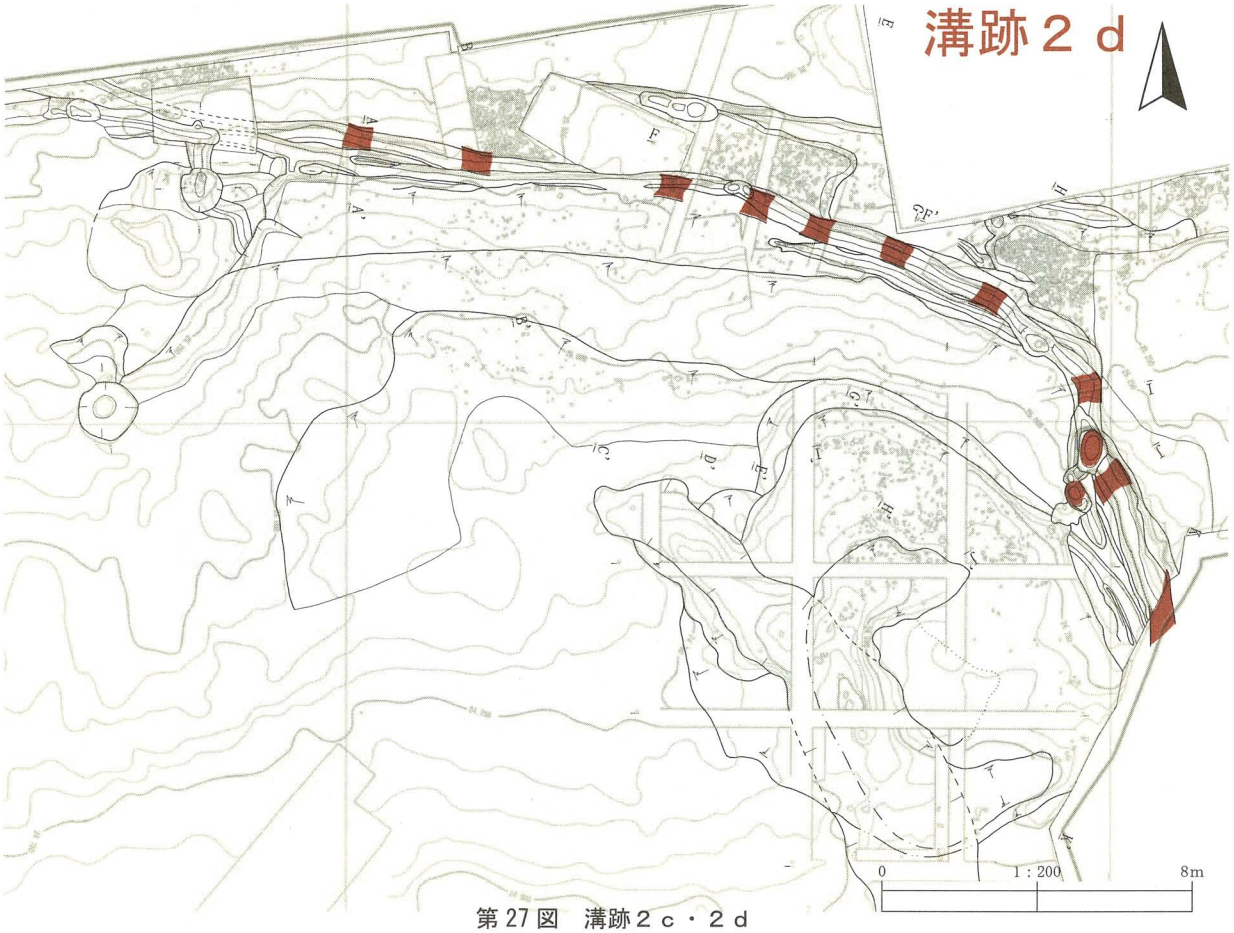
第25図　溝跡１・２－ｅ・２－ｆ



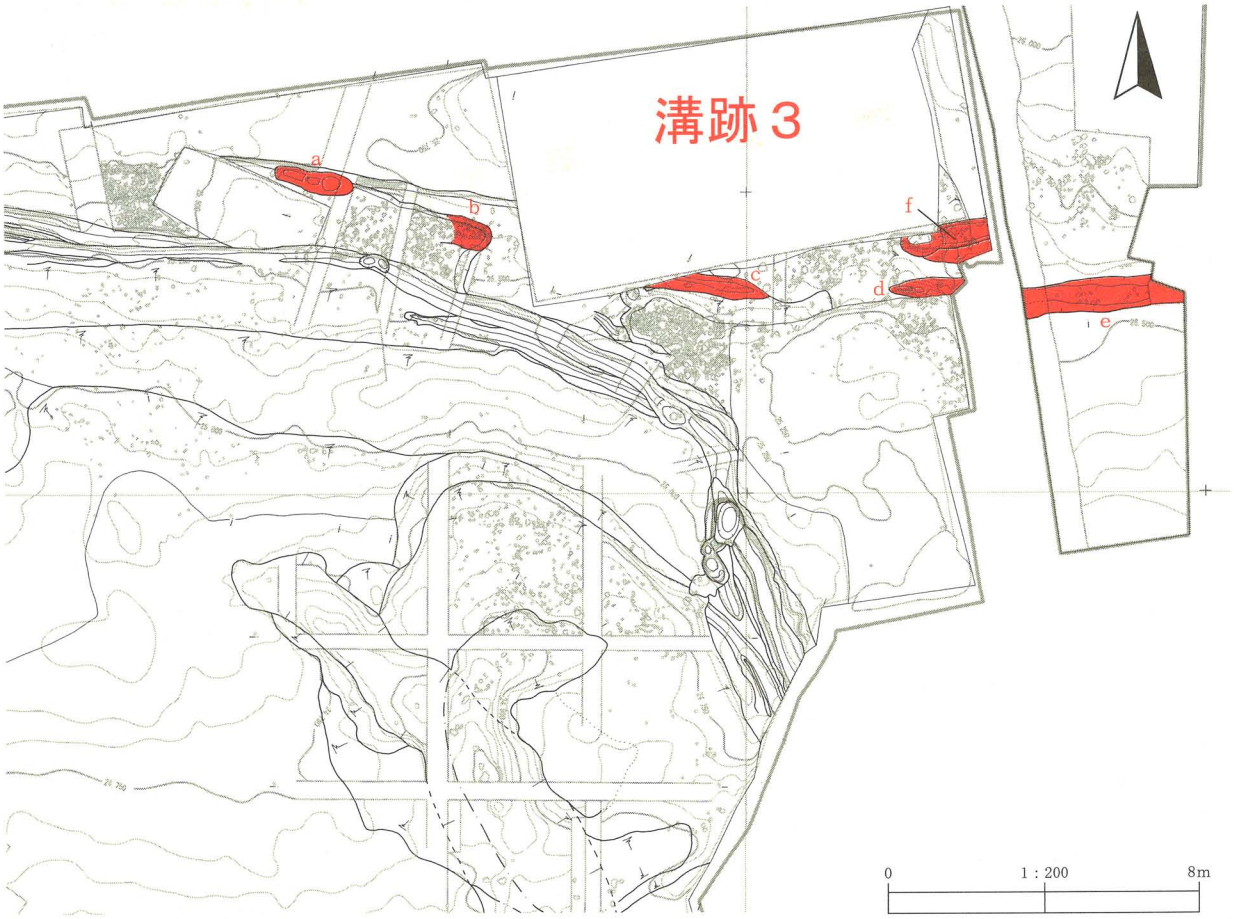


第26図　溝跡２ａ・２ｂ





第27図　溝跡２ｃ・２ｄ



第 28 図　溝跡３

調査の様子

(7) 竪 穴 住 居 跡

竪穴住居跡１　（第 29・30 図、写真図版 23・24）

〔位置・検出状況〕

⑥区南西部、ⅡＡ 20 ｔグリッドに位置する。Ⅴ層上面で不明瞭な隅丸長方形の範囲として検出された。

〔規模・形状〕

平面形は 300 × 290 ㎝の方形を呈する。床面までの残存深度は最大 10 ㎝である。

〔埋土と堆積状況〕

埋土の主体は炭化物を含む黒褐色土（２層）である。床面には少量だが繊維方向を残す炭化材が点在し廃絶時の焼失を示唆している。２層を被覆するのは 12 世紀遺構の埋土主体土となるⅢ層に相当するもの（１層）で、南東側に傾斜し床面の一部を切っている。

〔壁・壁溝・床面・柱穴など〕

壁の立ち上がりは北壁及び西壁側でわずかに認められるが全体に削平を受けており残存状況は痕跡的である。特に南壁側の立ち上がりは不自然に緩やかで、さらに外側に平行する溝状の掘り込みを伴うなど、本来の南壁位置は判然としない。床面は壁際まで平坦で、南壁外の溝を除けば、壁溝に相当する可能性をもつものは確認できない。住居内には図示した数個の柱穴が確認されているが、12 世紀以降の柱穴群と重複し、配置も整わないことから、本住居跡に伴う柱穴を特定することはできなかった。

〔カマド〕

東壁のほぼ中央に設置されている。12 世紀の柱穴（pp81：建物跡１）によって燃焼部中央が破壊され焼土はごくわずかに残るのみである。燃焼部の最奥部に倒立して設置された土師器小形甕は支脚であろう。カマド手前の床面に焼土塊とともに点在する拳大の角礫は、カマドの芯材に用いられたものと思われる。外にのびる煙道は認められず、両袖部の間の壁画がやや張り出すような状態となっている。床面付近まで削平を受けたものであることから煙道部の形態は不明とすべきであろう。

〔重複〕

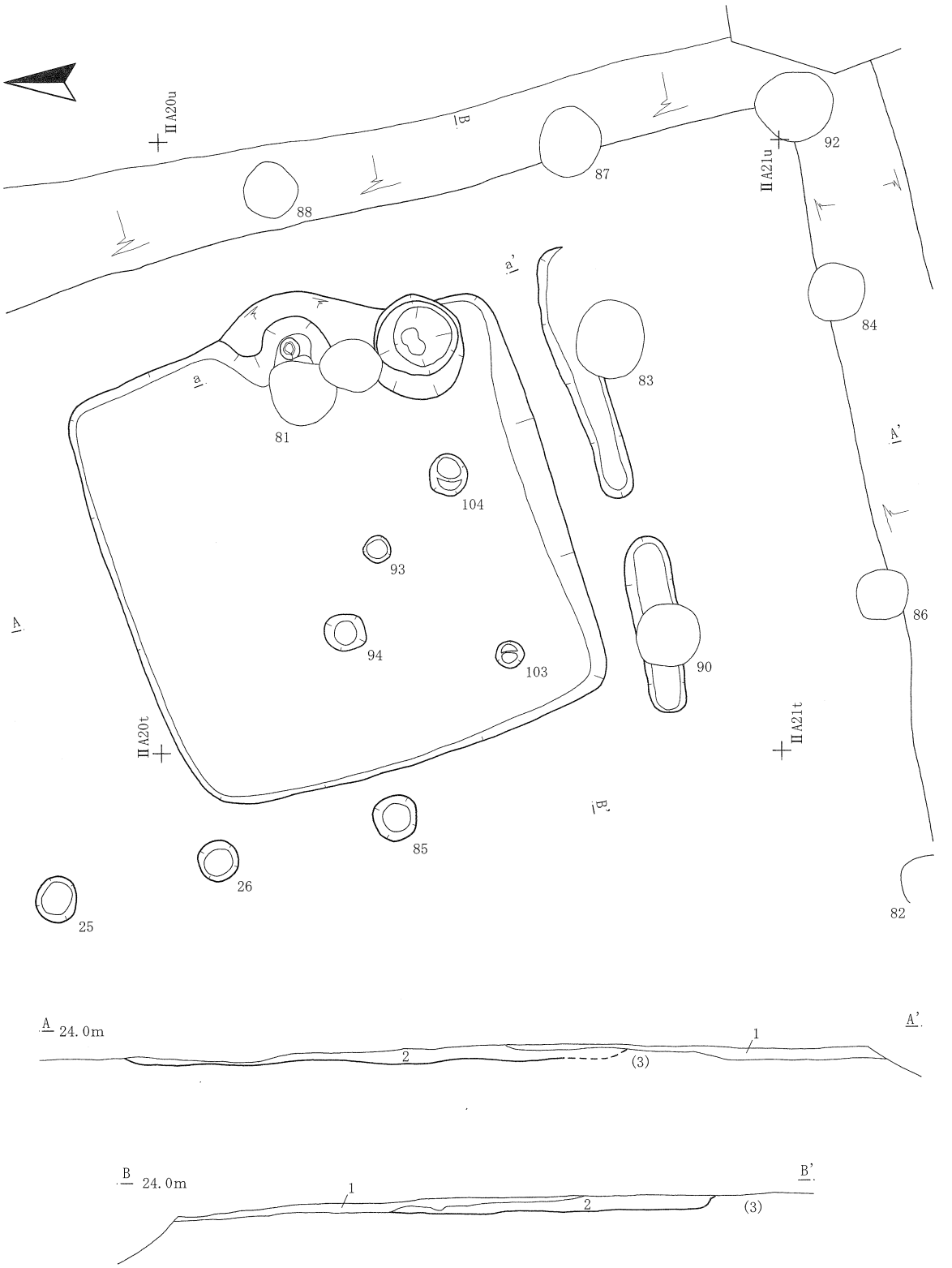
建物跡１及び建物跡３のプランに重複し、これらを構成する柱穴に切られている。

〔出土遺物〕（第 44・45 図、写真図版 33・34）

内面黒色処理の施された土師器坏（241）、ロクロ整形による土師器甕（242・243）、須恵器甕（248 ほか）、木質の付着した刀子様の鉄製品（301）などが出土している。カマド燃焼部からは非ロクロ整形の小形甕（244）が倒立した状態で出土した。支脚として設置されたものと思われる。

〔遺構の時期〕

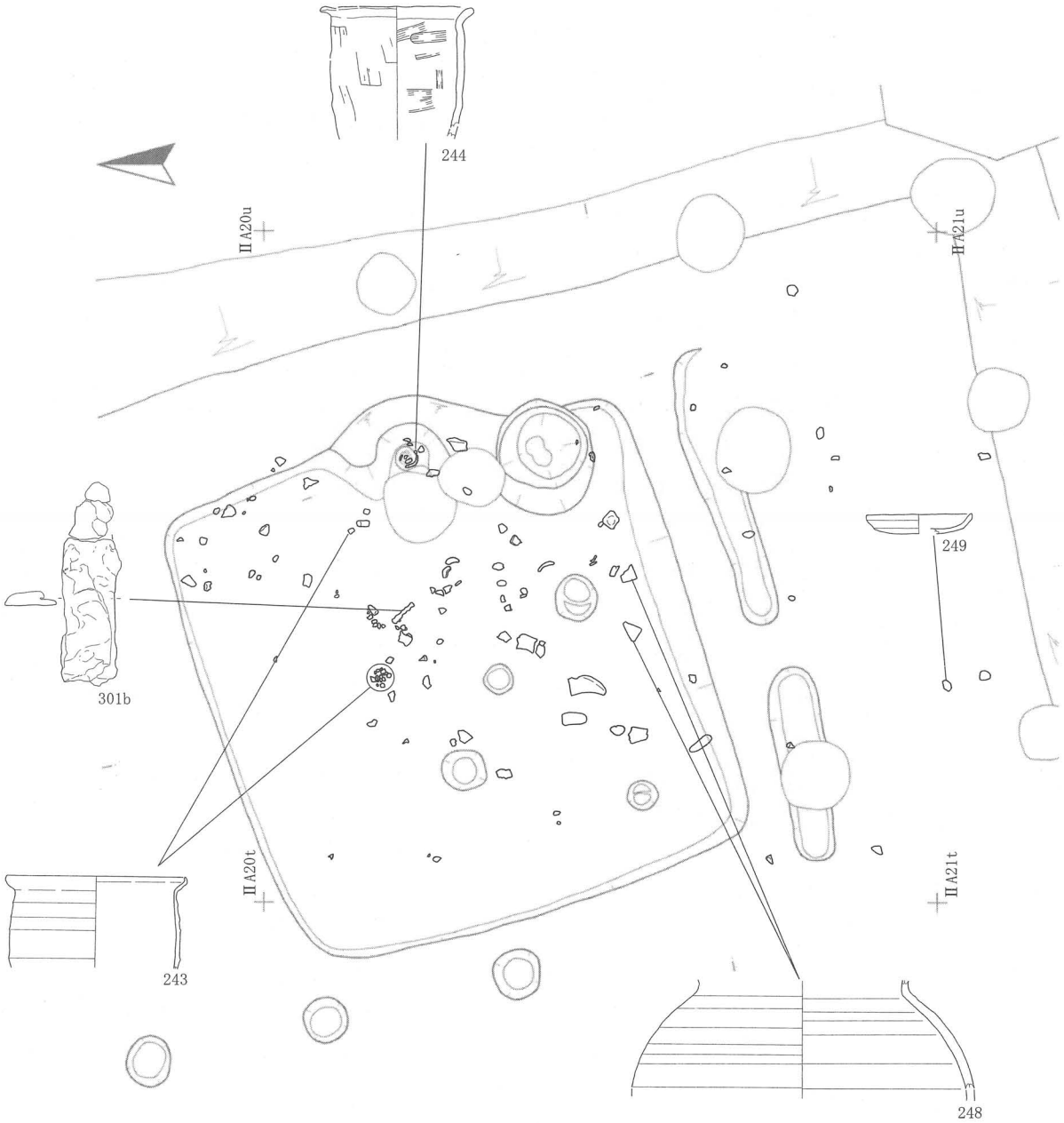
出土遺物から 9 世紀後半から 10 世紀初頭に帰属すると思われる。

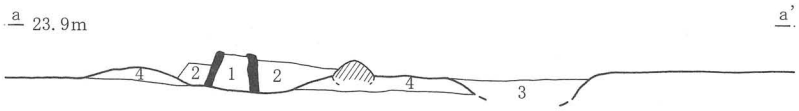


竪穴住居跡１
１．10YR4/3 にぶい黄褐色－3 /3　暗褐色．シルト．乾くと真っ白．斜面下方でかわらけ等を含む 12 世紀の土層と同じ．
２．10YR3/2 黒褐色－3/3 黒褐色．シルト．本遺構の埋土．炭片少量含む．Ⅲ層相当？
３．10YR3/2 黒褐色．シルト．粘性あり．締まり極密．Ⅶ層礫粒ごく微量含む．２層より黒味．Ⅴ層相当．
※北壁、西壁側ではわずかに立ち上がり見られるが、南東側に下る地形の為、東・南壁は失われている（１層に切られてしまっている）．東壁北部に支脚状の甕が倒立．この付近に遺物、礫が集中する．埋土には比較的炭化材が多い．焼失か？

0　1：40　2m

第 29 図　住居跡１（1）





竪穴住居跡１カマド
１．５YR5/8 明赤褐色．シルト．焼土．カマド内の倒立甕の内部…支脚？
２．10YR3/2 黒褐色．シルト．粘性やや有り．炭粒（φ５～１０mm）微量含む．４層土ブロックやや多量含む．
３．２層と酷似．カマド脇土坑（不整形）の埋土．
４．10YR3/3 暗褐色－4/3 にぶい黄褐色．シルト．２層より明るく締まっている．袖構築土．
※⑥区 SI01 のカマドはほぼ中心部に重複した 12 世紀の柱穴（PP81）によって大きく破壊されている．断面を取った位置は燃焼部よりも壁際で、支脚と思しき倒立した甕が据えられた地点である．袖は地山土をほとんど含まない暗褐色シルトで構築されている．芯材には角礫が用いられていたと思われ、断面にかかっているもののほか、カマド周辺には被熱した礫が点在していた．

カマド断面 0　1：20　1m
平　面　図 0　1：40　2m

第 30 図　住居跡１（2）

(8) 陥し穴状遺構　（第31・32図、写真図版25・26）

〔検出数〕

計６基である。このうち１基（陥し穴６）は検出面以下の精査を行わず埋め戻した。

〔位置・検出状況〕

⑥区南半部に集中し、南西から北東にかけて列状に分布する。

〔規模・形状〕

精査した５基はいずれも隅丸長方形の底面を有する。開口部は崩落等により元の形状を留めていない可能性が高く、本来は底面と同じく長方形を基調とした形状であったと推測される。変形の可能性が小さいと思われる底面の長軸長・短軸長に着目すると、長さ110㎝・幅50㎝前後の「幅広」のものと、長さ150㎝・幅30前後の「細長い」ものに大別できる。前者には陥し穴１・３・４、後者には陥し穴２・５が当てはまる。１～５はいずれも底面に複数の小ピットをもち、中央に１個、その両側に２個ずつを配した、賽の目の「５」のようなＸ字状の配置を基本としている。

〔層位的所見〕

陥し穴状遺構が位置する⑥区は北東部及び南東部に向かって傾斜しており、中央部のやや広い範囲が削平を受けているが、主に東半部では基本土層Ⅲ層以下の層序が比較的良好に残存していた（Ⅳ層は④⑤区沢跡内にのみ存在するものであり、これを除く）。

６基のうちの３基、陥し穴４～６は、⑥区の東半部に位置しいずれも縄文時代遺物（後～晩期か）を包含するⅤ層の上面で検出された。第32図に示した陥し穴４・５の断面では、Ⅴ層を切り込んで構築されている様子が確認できる。埋土の主体は基本層序Ⅲ層に相当する黒褐色～暗褐色シルトである。本遺跡においてⅢ層は、主に平安時代前期～12世紀の遺構埋土の主体土であり、遺跡内に観察される層序関係からも十和田ａ降下火山灰の降下以降に形成されたと考えられるものである。Ⅴ層上面を検出面としⅢ層相当土を埋土の主体土とすることからみれば、本遺跡の陥し穴状遺構の帰属年代の上限は10世紀初頭より新しいといえる。

また、陥し穴３・４・６の断面には、埋没の最終段階に上方から流入したやや明るい「暗褐色～鈍い黄褐色」土が観察される。これは12世紀遺構埋土に共通するⅢ層土、および洪水堆積層であるⅡ層土下部に相当するものと思われる。陥し穴１が12世紀の四面庇建物の柱穴（建物跡１のｐ39）に切られていることも勘案すれば、当該遺構の帰属年代の下限は12世紀となる。

〔周辺遺構との関係〕

陥し穴１がpp39（建物跡１）・pp102に切られている。

〔出土遺物〕

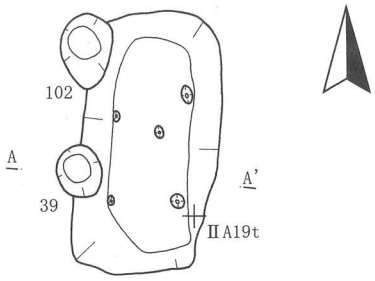
なし。

〔遺構の時期〕

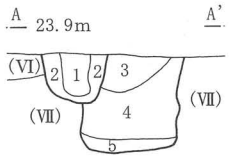
形態的には縄文時代に帰属させるのが自然であるが、それ以外に積極的な根拠を欠いている。層位的観点からは平安時代前期（10世紀？）以降、12世紀以前と考えることができる。

〔特記〕

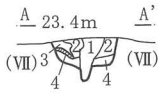
平成17年度に当センターが調査した奥州市胆沢区の宮沢原下遺跡では、埋土に十和田ａ下降火山灰を含む陥し穴状遺構が多数確認されている（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第495集）。平安時代前期（10世紀）の当地域において、長方形～楕円形の平面形を持ち底面に小ピットを持つ陥し穴が利用されていたことが明らかとなっており、本遺跡例はこれに類する可能性がある。

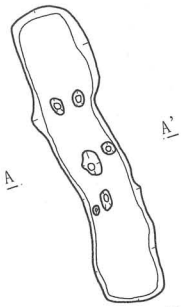


陥し穴状遺構１



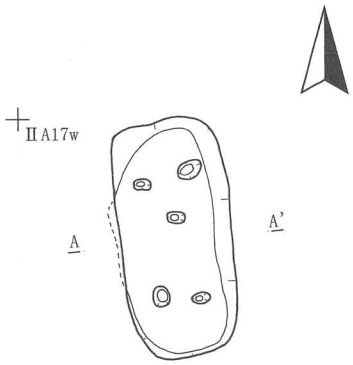
陥し穴状遺構１・PP39
１．10YR3/3 暗褐色．シルト．粘性あり．炭片（φ５～10mm）微量含む．
２．10YR3/3 暗褐色．シルト．地山ブロック（φ5mm）少量含む．
３．10YR3/3 暗褐色．シルト．
４．10YR3/3 暗褐色．シルト．10YR3/2 黒褐色のシルトブロック含む．
５．10YR4/2 灰黄褐色－3/2 黒褐色．粘土．10YR3/3 暗褐色のシルトブロック極微量含む．
※1.2 層：pp39 埋土．3.4.5 層：陥し穴状遺構１埋土．



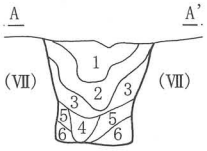


陥し穴状遺構２

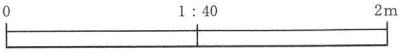
陥し穴状遺構２
１．10YR3/2 黒褐色．粘土質シルト．杭（逆茂木）跡？
２．10YR3/2 黒褐色．粘土質シルト．地山ブロック（φ10mm）微量含む．
３．10YR3/2 黒褐色．シルト．地山ブロック（φ10mm）やや多量含む．
４．地山ブロック層．
※下部のみ残存の陥し穴．１層は底面小穴から連続する杭状痕跡．



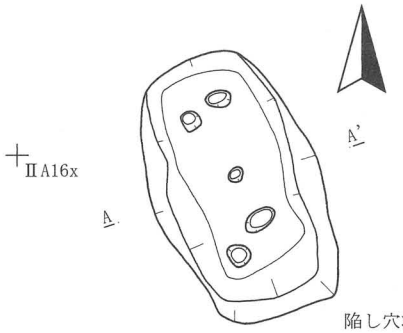
陥し穴状遺構３



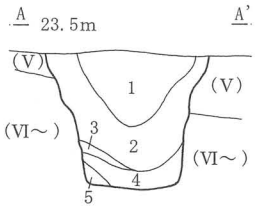
陥し穴状遺構３
１．10YR3/3 暗褐色－4/3 にぶい黄褐色．シルト．炭片（φ５～10mm）微量含む．Ⅲ層またはⅡ層下部相当．
２．10YR3/3 暗褐色－4/3 にぶい黄褐色．シルト．10YR2/3 黒褐色のシルトブロック（Ⅴ層土）やや多量含む．
３．10YR3/3 暗褐色－4/3 にぶい黄褐色．シルト．10YR2/3 黒褐色のシルトブロック（Ⅴ層土）、Ⅶ層ブロックやや多量含む．
４．10YR2/3 黒褐色．シルト．Ⅶ層礫少量含む．
５．10YR3/3 暗褐色．シルト．
６．Ⅵ、Ⅶ層ブロック層．



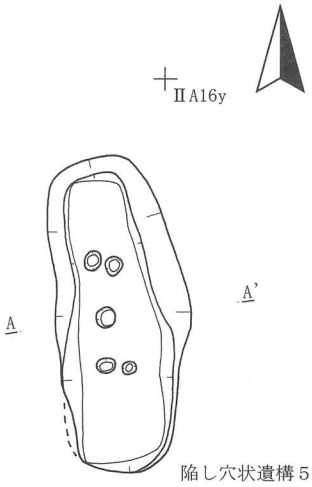
第 31 図　陥し穴状遺構（1）



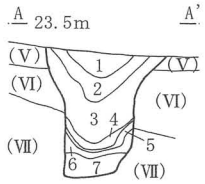
陷し穴状遺構４



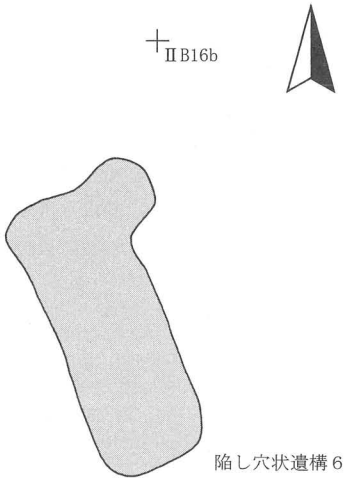
陷し穴状遺構４
１．10YR4/3 にぶい黄褐色－3/3 暗褐色．シルト．炭粒（φ5 ～ 10mm）極微量含む（Ⅲ層またはⅡ層下部相当？）．
２．10YR2/2 黒褐色－2/3 黒褐色．シルト．Ⅵ層ブロックを全体に少量含む．
３．10YR5/6 黄褐色．砂質シルト．Ⅵ層ブロック層．
４．10YR2/2 黒褐色－2/3 黒褐色．粘土質シルト．
５．10YR5/6 黄褐色．砂質シルト．Ⅵ層ブロック層．



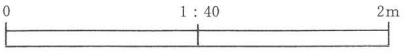
陷し穴状遺構５



陷し穴状遺構５
１．10YR2/2 黒褐色－2/3 黒褐色．シルト．10YR5/6 黄褐色のシルトブロック（Ⅵ層相当）やや多量含む．
２．10YR2/2 黒褐色－2/3 黒褐色．シルト．10YR5/6 黄褐色のシルトブロック（Ⅵ層相当）大量含む．
３．10YR2/2 黒褐色－2/3 黒褐色．シルト．10YR5/6 黄褐色のシルトブロック（Ⅵ層相当）少量含む．
４．10YR2/2 黒褐色－2/3 黒褐色．シルト．10YR5/6 黄褐色のシルトブロック（Ⅵ層相当）大量含む．
５．10YR2/2 黒褐色－2/3 黒褐色．シルト．
６．10YR2/2 黒褐色－2/3 黒褐色．シルト．10YR5/6 黄褐色のシルトブロック（Ⅵ層相当）大量含む．
７．10YR2/3 黒褐色．粘土質シルト．Ⅵ層ブロックやや多量含む．グライ化してやや青味あり．



陷し穴状遺構６



第 32 図　陷し穴状遺構（2）

表５　陥し穴状遺構一覧

	位置（グリッド）	開口部形態 規模（cm）	底面規模（cm）	残存深度（cm）	副穴数 配置	備　考
陥し穴１	ⅡＡ 18 s～19 s	不整隅丸長方形 142 × 52	115 × 40	52	5 個 X 字状	
陥し穴２	ⅡＡ 19 u	不整隅丸長方形 165 × 36	158 × 28	15	6 個 X字状＋１？	底部付近のみの残存
陥し穴３	ⅡＡ 17 w	隅丸長方形 125 × 60	115 × 50	56	5 個 X 字状	
陥し穴４	ⅡＡ 15 x～16 x	隅丸長方形 145 × 90	108 × 52	74	5 個 X 字状	
陥し穴５	ⅡＡ 16 x	不整隅丸長方形 168 × 72	148 × 35	70	5 個 X 字状	
陥し穴６	ⅡＢ 16 a～16 b	隅丸長方形 155 × 60	不明	不明	不明	検出のみ、未精査

(9) 沢　　跡

沢跡１　（第６・19・20・33 図、写真図版 27）

〔位置・検出状況〕

④⑤区の北半部に位置する。Ⅴ～Ⅵ層上面及び池状遺構底面で検出された。

〔規模・形状〕

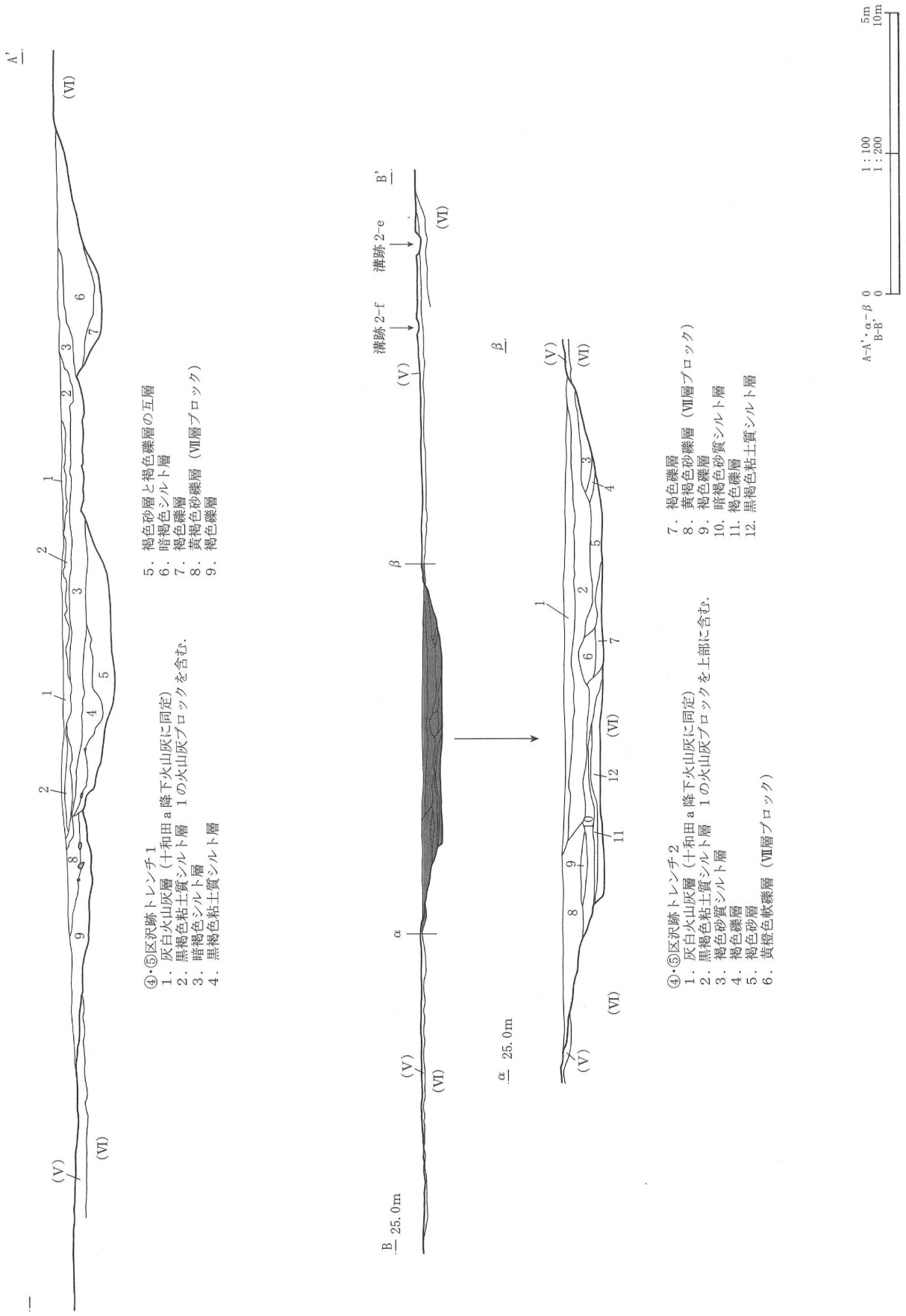
全長は約 45 m以上、幅は３m前後、検出面からの深さは 50 ～ 60 cmである。ⅢＡ４ｋグリッド付近が上流側の端で、ⅢＡ２ｏグリッド付近を頂点とした弧を描き、ⅢＡ５ｓ付近で調査区外東側へと抜けている。

〔埋土と堆積状況〕

第 33 図下段の B-B' は、沢跡１と沢跡２の重複地点を南北に断ち割った「沢跡トレンチ２」の断面図である。１～７層までが沢跡１の堆積層に相当する。１層は厚さ 20 cmを越える十和田ａ降下火山灰層、その下位の黒褐色粘土質シルト層（２層）は池状遺構埋土の３ａ～ｃ層に連続するものである。この地点の十和田ａ降下火山灰層は沢跡１に加え沢跡２の堆積土最上部にも広く堆積が認められる。なお、沢跡１の底面直上から採取した炭化物粒（第 19 図池状遺構断面 Qw-Qw'. ^{14}Ｃサンプル NO. ３）の年代測定（ＡＭＳ測定）を実施し、430 ～ 540AD（910±30yrBP）との測定結果を得た。

〔重複遺構〕

ⅢＡ３ｒグリッドで沢跡２と交差している。下部の堆積層は沢跡２の下部堆積層を切っているが、最上部の堆積層は連続している。また、ⅢＡ３ｌ・同２ｍグリッド付近で池状遺構の南部と重複し、切られている。


A
A'
(VI)
(V)
(VI)
④・⑤区沢跡トレンチ1
1．灰白火山灰層（十和田 a 降下火山灰に同定）
2．黒褐色粘土質シルト層　1の火山灰ブロックを含む.
3．暗褐色シルト層
4．黒褐色粘土質シルト層
5．褐色砂層と褐色礫層の互層
6．暗褐色シルト層
7．褐色礫層
8．黄褐色砂礫層（Ⅶ層ブロック）
9．褐色礫層
B 25.0m
α
β
溝跡 2-f
溝跡 2-e
B'
α 25.0m
β
(V)
(VI)
④・⑤区沢跡トレンチ2
1．灰白火山灰層（十和田 a 降下火山灰に同定）
2．黒褐色粘土質シルト層　1の火山灰ブロックを上部に含む.
3．褐色砂質シルト層
4．褐色礫層
5．褐色砂層
6．黄橙色軟礫層（Ⅶ層ブロック）
7．褐色礫層
8．黄褐色砂礫層（Ⅶ層ブロック）
9．褐色礫層
10．暗褐色砂質シルト層
11．褐色礫層
12．黒褐色粘土質シルト層
A-A'・α-β 0 1:100 5m
B-B' 0 1:200 10m

第 33 図　沢跡トレンチ

〔出土遺物〕
池状遺構の記載でふれたとおり、沢跡１流路内の黒褐色粘土質シルトから平安時代前期の遺物が出土している。池状遺構３ａ層がこれに当たり、特にⅢＡ２ｍグリッド付近から９世紀後半～10世紀初頭に位置づけられる須恵器・土師器のまとまった出土がみられた。池状遺構の北側には平安時代の竪穴住居跡（住居跡１）が検出された⑥区に連続する微高地頂部が広がっており、この付近における該期の人間活動に伴う遺物と考えられる。
〔帰属時期〕
放射性炭素年代測定結果から５～６世紀までさかのぼる可能性がある。十和田ａ降下火山灰の堆積時（10世紀初頭）にはすでに大半が埋没していたが、その後の12世紀に至っても池状遺構からの排水経路となるなど、継続して自然の流水があったものと思われる。

沢跡２　（第６・33図、写真図版27）
〔位置・検出状況〕
③区北端部～④⑤区南部～東縁部に位置する。Ⅴ～Ⅵ層上面で検出された。
〔規模・形状〕
全長は約80ｍ以上、幅は最大15ｍ、検出面からの深さは90㎝（断面A-A’付近）である。③区と④⑤区の境界を西から東側へと下り、④⑤区東縁部に沿って北東方向へ向い、調査区外へと延びている
〔埋土と堆積状況〕
第33図上段のA-A’は、沢跡２の調査区内における中央部を横断するように設定した「沢跡トレンチ１」の断面である。５・７・９層はいずれも礫層であるが、それぞれ異なる時期の流路の最下部に堆積したものと思われ、ほぼ同様のコースで開析・埋没を繰り返した様子が観察できる。最上層の１層は沢跡１と同様、十和田ａ降下火山灰層、２層は池状遺構の３ａ～３ｃ層に対比される粘土質シルト層である。
〔重複遺構〕
ⅢＡ３ｒグリッドで沢跡１と交差している。下部の堆積層は沢跡１の下部堆積層に切られているが、最上部の堆積層は連続しているまた、建物跡４を構成する柱穴群は沢跡２最上層の十和田ａ降下火山灰層を切っている。
〔出土遺物〕
なし。
〔帰属時期〕
沢跡１に切られていることから、沢跡１における放射性炭素年代測定結果から５～６世紀以前までさかのぼる可能性がある。十和田ａ降下火山灰の堆積時（10世紀初頭）にはすでに大半が埋没していたが、その後も継続して自然の流水があったものと思われる。

3　遺　　物（表6～9、第34～45図、写真図版28～34）

(1) か　わ　ら　け

出土したかわらけの総量は大コンテナ（40㍑）4箱である。手づくねかわらけとロクロかわらけがある。

手づくねかわらけは70点を図示した。口径の分布には「14～16㎝」及び「8～10㎝」に顕著な集中がみられ、両者の間には明瞭な断絶が認められる。計測可能な個体48点のうち、前者は15点(31.3%)、後者は25点(52.0%)で、口径から大・小の二群に大別することができる。底径は「4～6㎝」がやや多いが、その他が6㎝から12㎝の間に切れ目なく散布する状況である。器高は大半が1～3㎝におさまる。整形・調整は概して丁寧で、ほとんどがいわゆる「2段ナデ」とされるものに該当する。また、底面に「すのこ痕」が観察される個体が複数認められた。使用段階の痕跡としては、内外面に漆状の黒色塗膜が残るもの(32)、口縁から内面にかけて帯状のスス付着のあるもの(183)、などがある。

ロクロかわらけは29点を図示した。計測可能な個体13点は、口径「13.0～15.0㎝」・器高「3.0～3.5㎝」の群（3点）と、口径「8.0～10.0㎝」・器高「1.6～2.1㎝」の群（9点）の二群に大別できる。前者は緩く内弯して立ち上がる器壁をもった浅い椀形のもので、上述の手づくねかわらけの大口径の群に類似する。一方、後者はわずかに外傾・外反して短く立ち上がる器壁をもった小皿状のもので、あつい底部の外面に明瞭な回転糸切痕を残すものが多い。

(2) 国　産　陶　器

国産陶器の出土総量は中コンテナ（28㍑）1箱である。常滑産、渥美産、須恵器系がある。

常滑産陶器は52点を掲載した。器種には甕・鉢・片口鉢がある。いずれも12世紀後半期の所産とみられ、これらの過半（33点）は赤羽・中野生産地編年の2型式（12世紀第三四半）に相当するものである。

渥美産陶器は21点を掲載した。器種は甕・壺・鉢・片口鉢・山茶碗がある。226の鉢、235の山茶碗は12世紀中葉、その他は12世紀後半の所産とみられる。80は器面に枝を表現したと思われる刻画文をもち、破断面に漆継ぎの痕跡が認められる資料である。

須恵器系陶器は22点を掲載した。甕・壺・片口鉢がある。いずれも12世紀後半の所産とみられる。82は器外面の敲目に磨滅が認められ「おろし」に転用された可能性がある。85は内面に硯への転用の痕跡がみられる。

山茶碗を除き、これらの陶器類はすべて破片で出土したもので、全体形状を復元できたものはない。破損後に二次的に投棄・流入したものとおもわれる。

(3) 中 国 産 磁 器

出土資料は全て白磁で、総量は小コンテナ（20㍑）0.5箱である。このうち25点を図示した。

器種には壺、椀、皿がある。太宰府分類によれば、壺はⅡ系（9点）・Ⅲ系（2点）、碗はⅡ類（1点）、Ⅳ類（3点）、Ⅴ類（8点）、皿はⅢ類（1点）に相当する。

(4) 金　属　製　品（第45図、写真図版34）

301（a・b）は住居跡1の床面から出土した刀子様の鉄製品である。一部に木質の残存が認められる。

鉄釘（303～308）は、⑥区の土坑1及び柱穴から出土したもので12世紀の遺物とみられる。

このほか、寛永通宝（309）や煙管（310・311）など、近世以降のものが出土している。

(5) 木　製　品（表８・第45図、写真図版34）

土坑６から木椀（401）が出土している。材質はケヤキで、表面に漆に似た黒色塗膜が残存する。出土時点から極めて脆弱であったため内部に土を残したまま取り上げ保存処理を行った。保存処理工程においても本体と土壌の分離が不可能だったため、内面観察や立体的な実測はできなかった。

(6) 土師器・須恵器

平安時代前期の土師器・須恵器は、主に住居跡１内部及びその周辺と、沢跡１内部に堆積した十和田ａ降下火山灰層の上下から出土した。

土師器は13点を掲載した。甕・坏があり、甕はロクロ整形とそうでないものがそれぞれ見られる。坏は内面に黒色処理が施され、119は底部下端及び底外面にケズリ調整が認められる。

須恵器は16点を掲載した。甕・壺・坏がある。122は壺と思われる胴下部で、底面に墨書を持つ。173は小形の壺の胴部であろうか。

(7) 縄文時代の石器（第45図、写真図版34）

定形石器10点を掲載した。このほかに少量の剥片が出土している。Ⅴ層には磨滅した時期不明の縄文土器細片が含まれており、これらの石器類も付近の縄文時代遺跡から流れ込んだものと推測される。

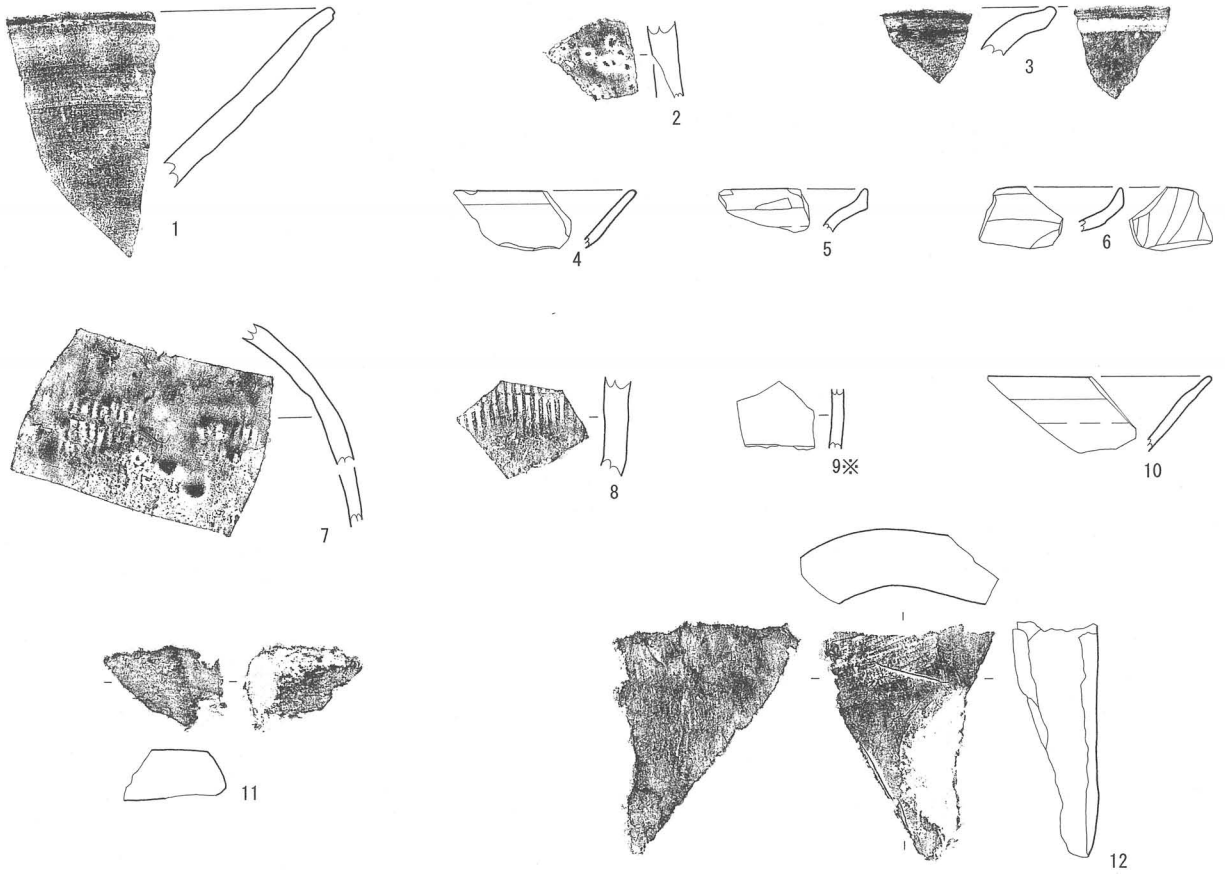
501は柳葉形の尖頭器、502～507は石鏃である。507のみ有茎で他は無茎鏃である。508は石錐の刃部であろう。509は素材剥片の打点側に抉りがみられることから、つまみ部作出の意図あるものと解釈し「石匙」とした。しかし刃部加工の剥離が不十分であり未成品あるいは粗製品の可能性が高い。

(8) その他の遺物

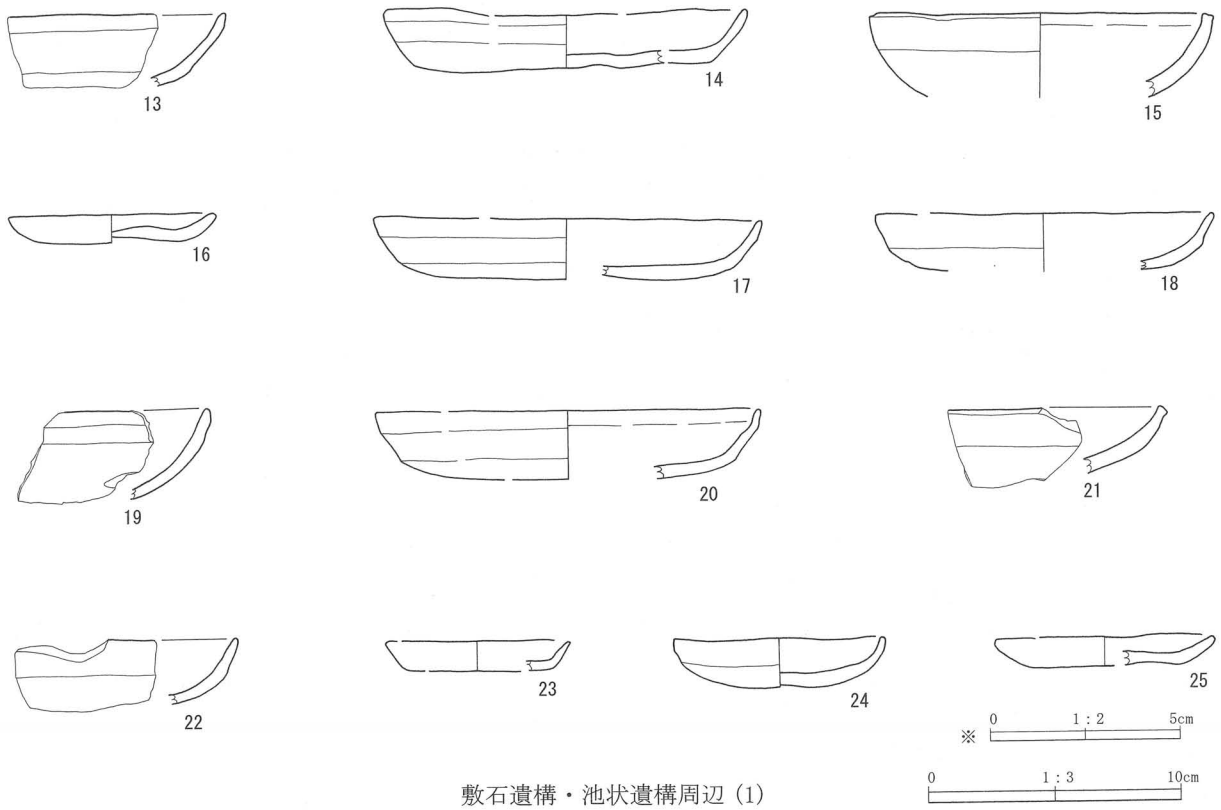
⑥区の南西部からは17世紀初頭の軒平瓦（11・12）が出土している。微高地頂部である⑥区が、当該期においても建物を配置する空間として利用された可能性を示す遺物である。

また④・⑤区の敷石遺構や池状遺構のさらに上位に堆積した土層（一部耕作土）からは近世の磁器が出土している（105・125・126）。

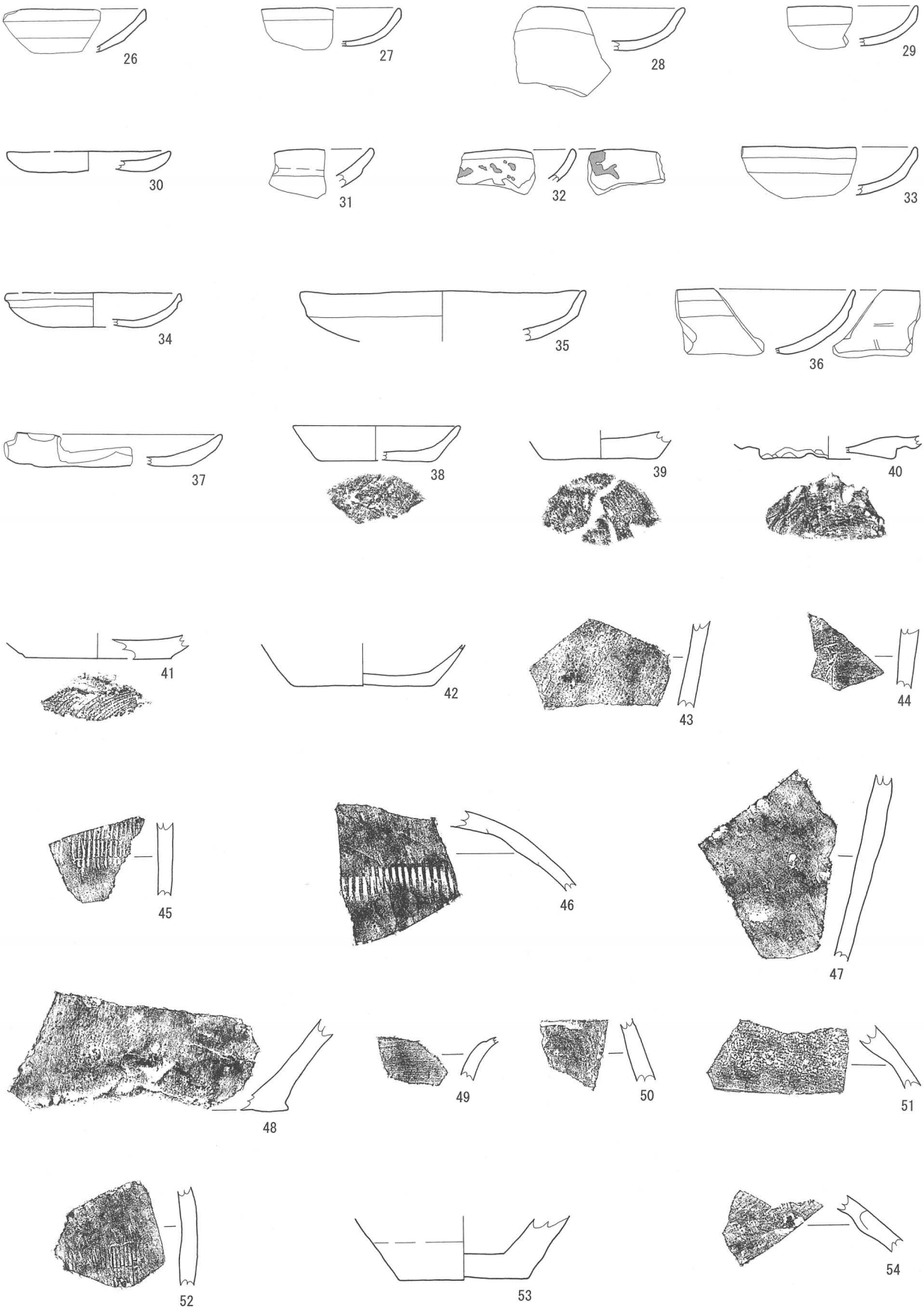
140の焼粘土塊は土坑５の埋土に含まれていたものである。焼成良好で橙色を呈する部分と、焼成の不十分な灰白色の部分がみられる。何らかの土製品あるいはフイゴ羽口などの一部の可能性がある。



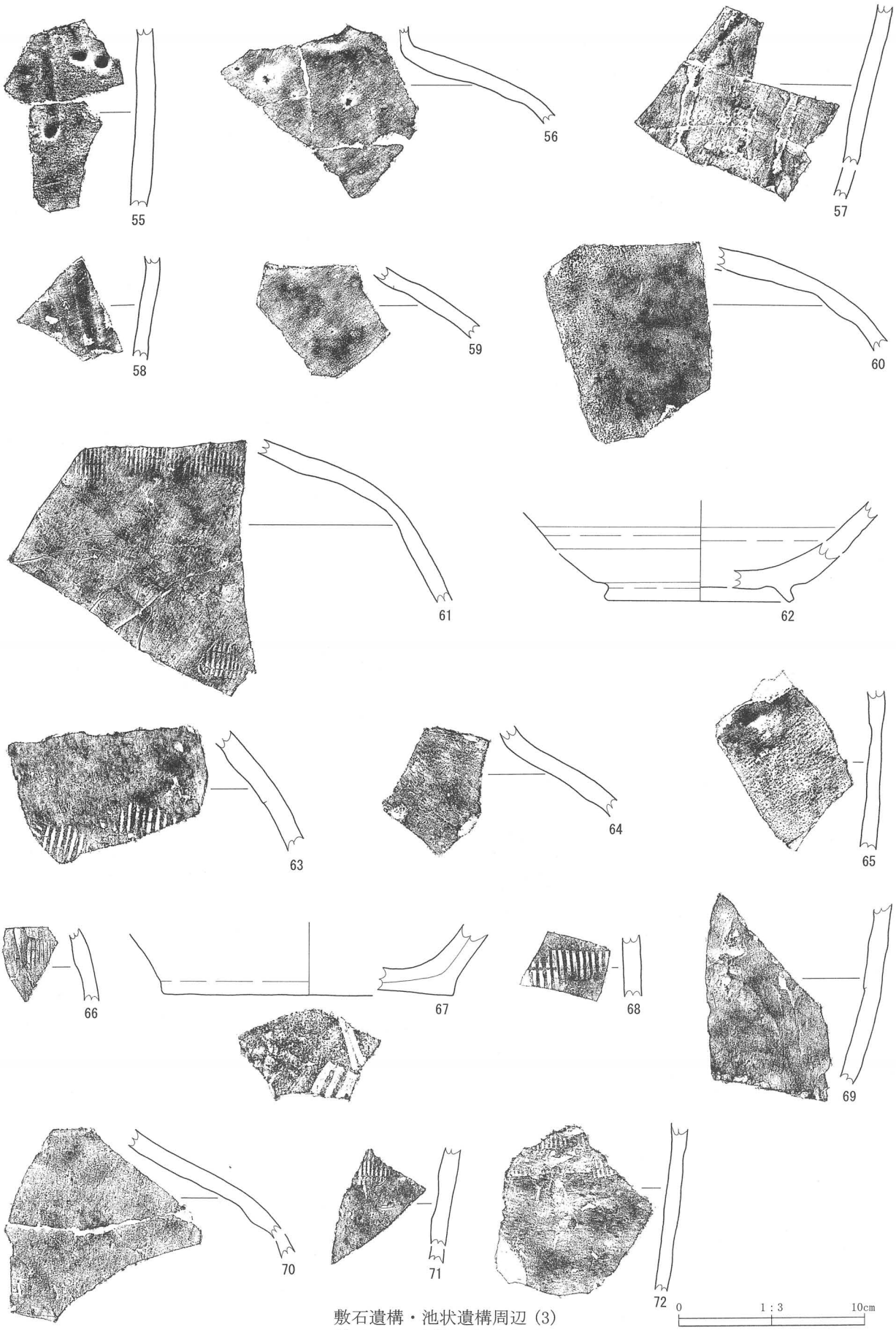
建物跡１～３とその周辺



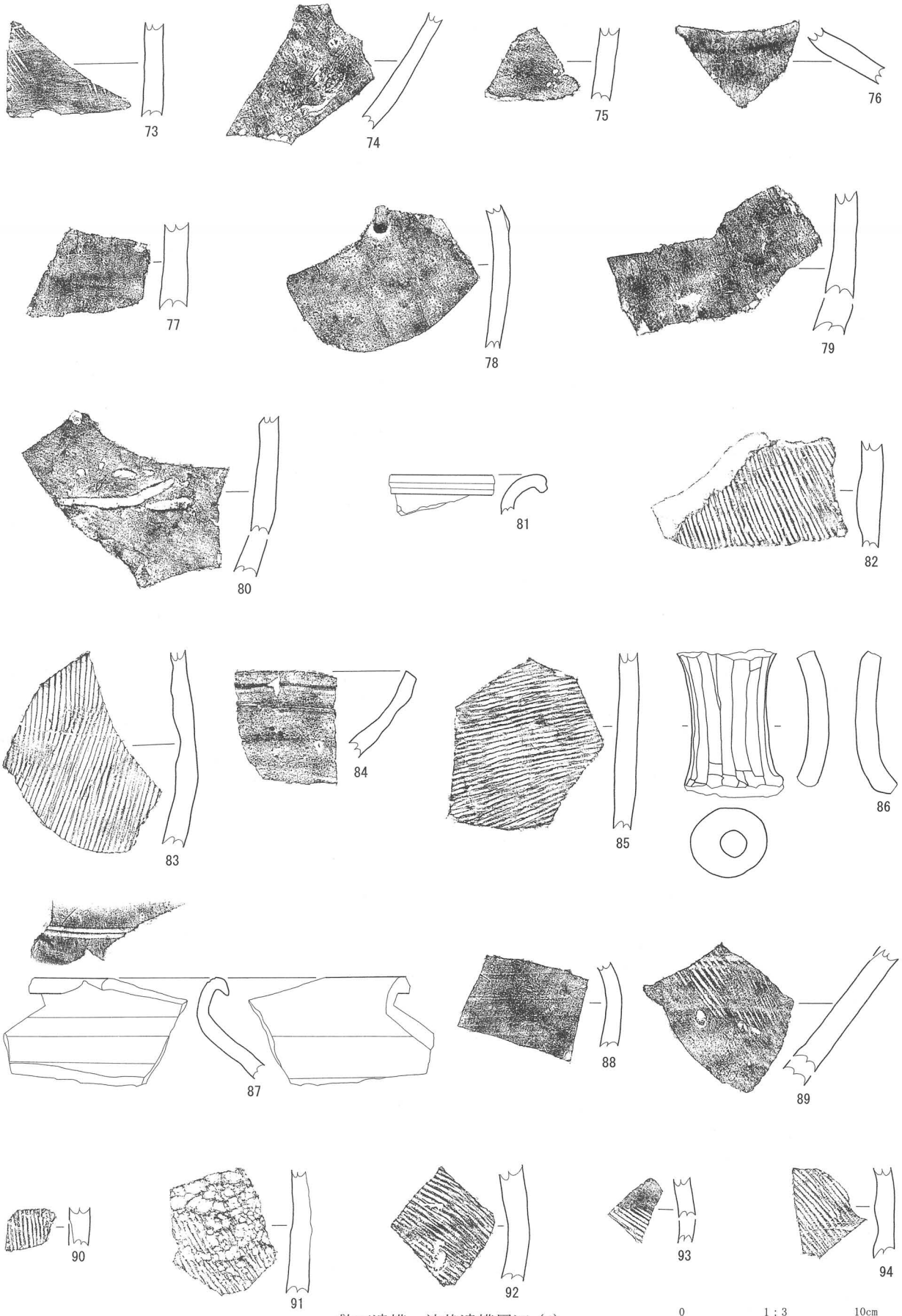
敷石遺構・池状遺構周辺（1）
第34図　土器・陶磁器（1）



敷石遺構・池状遺構周辺（2）
第35図　土器・陶磁器（2）

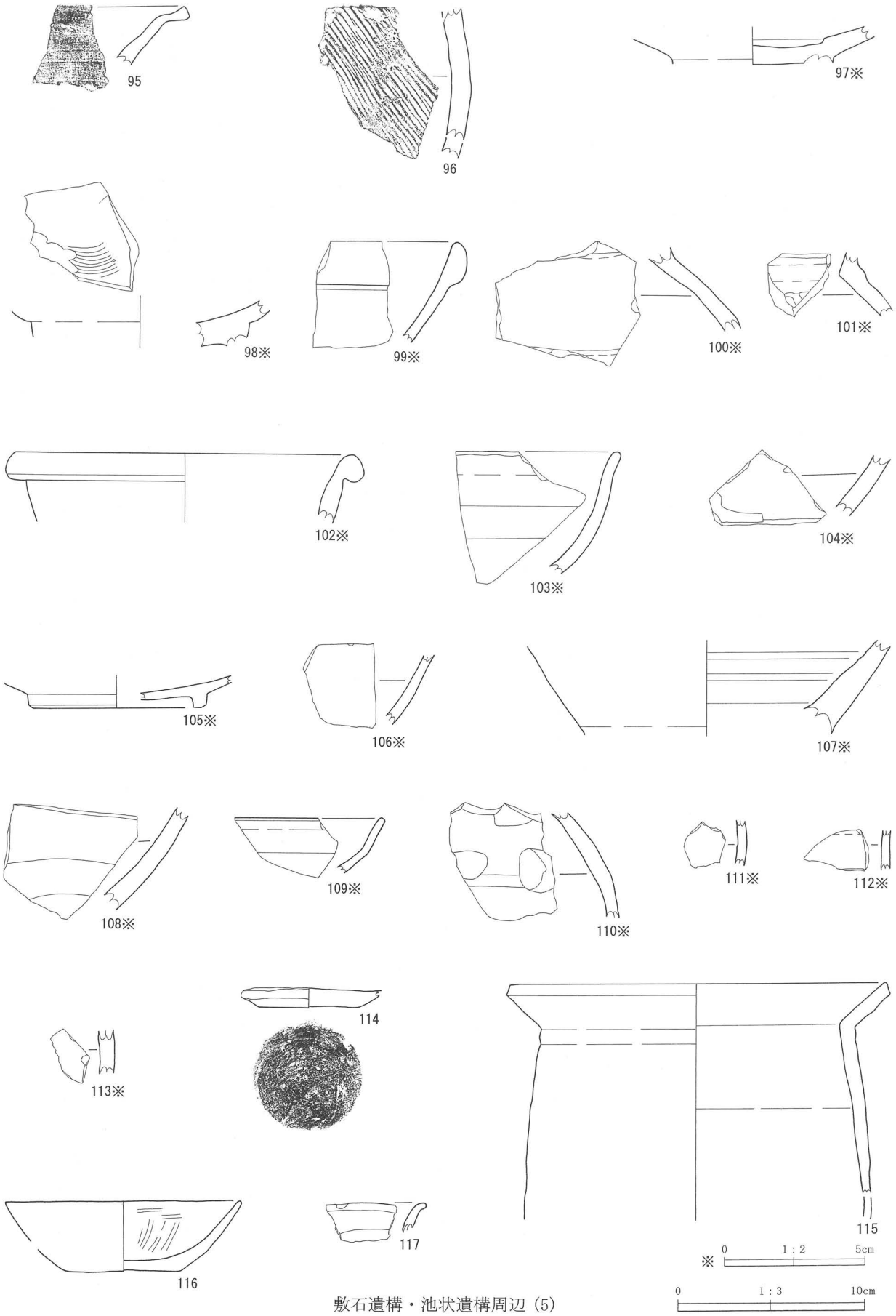


敷石遺構・池状遺構周辺（3）
第36図　土器・陶磁器（3）

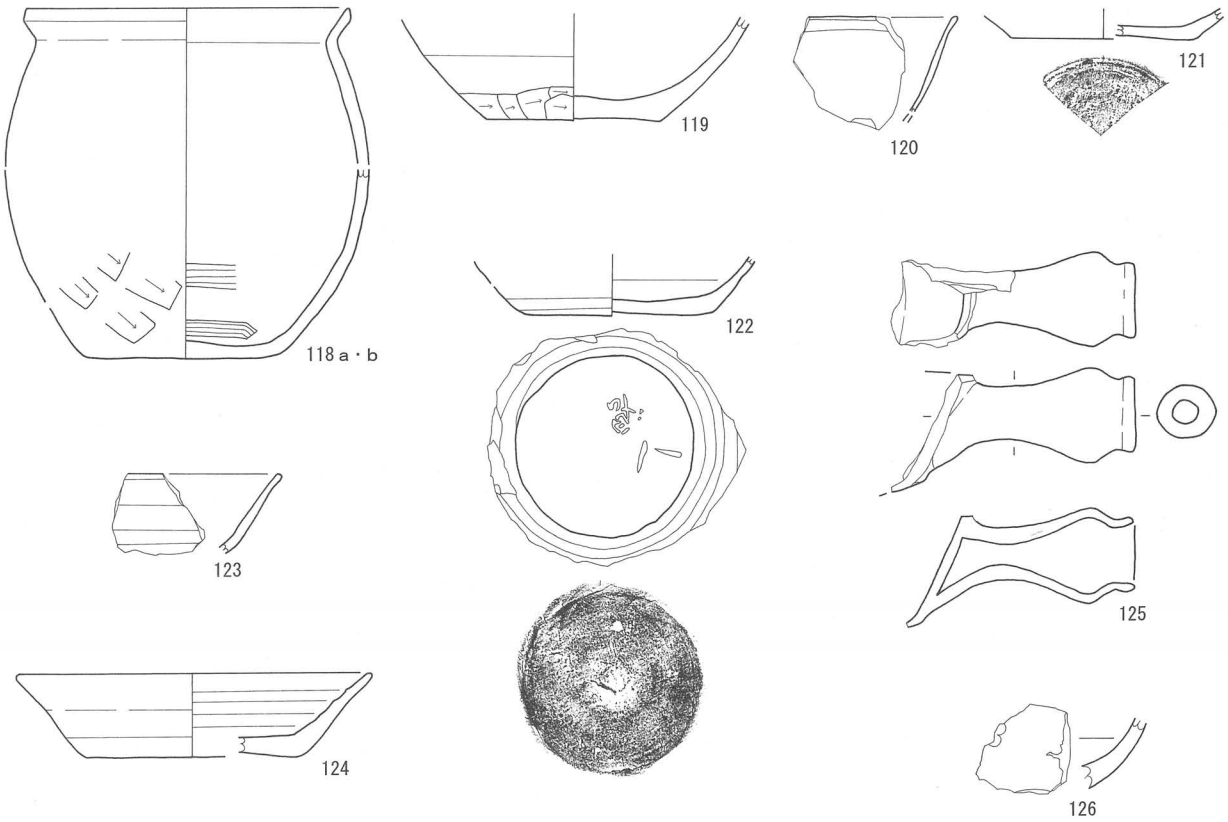


敷石遺構・池状遺構周辺（4）

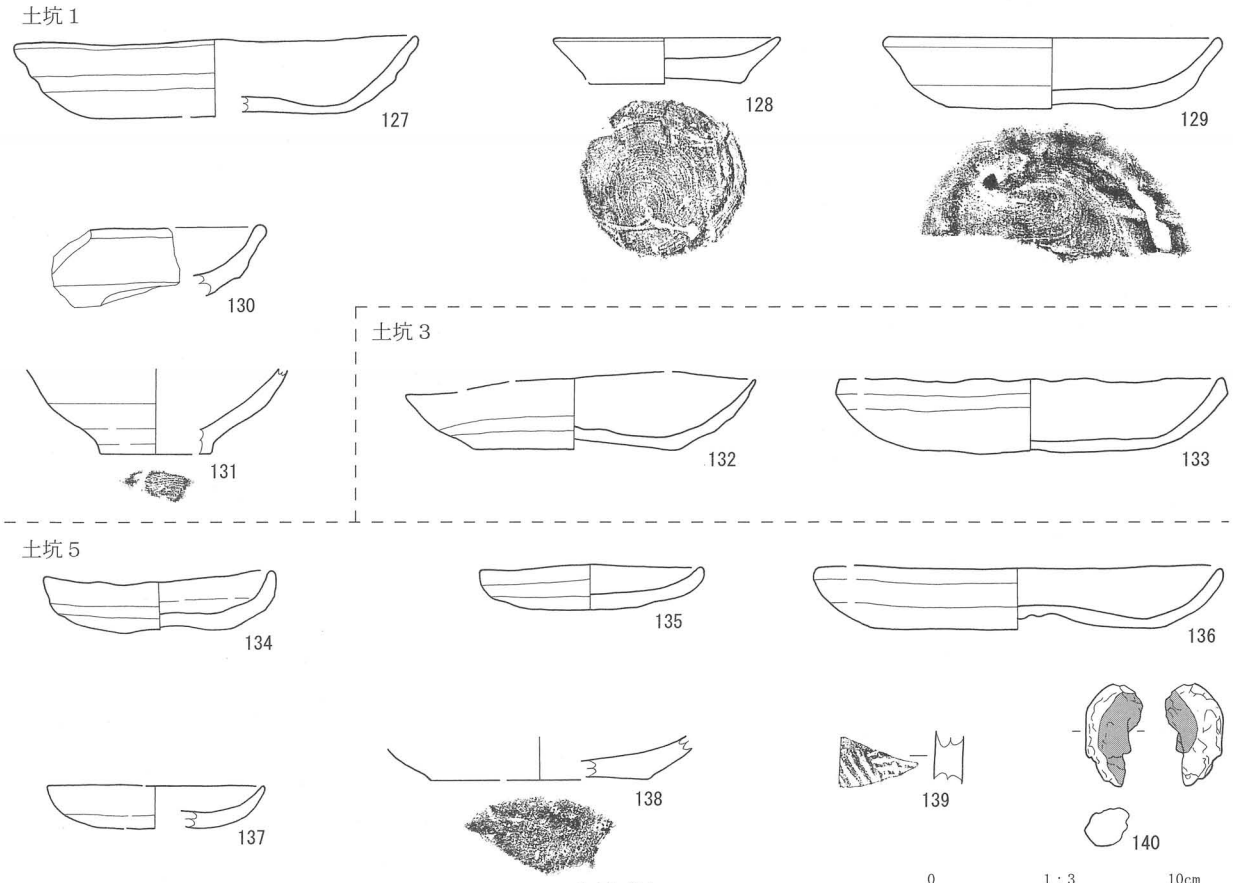
第37図　土器・陶磁器（4）



敷石遺構・池状遺構周辺（5）
第38図　土器・陶磁器（5）

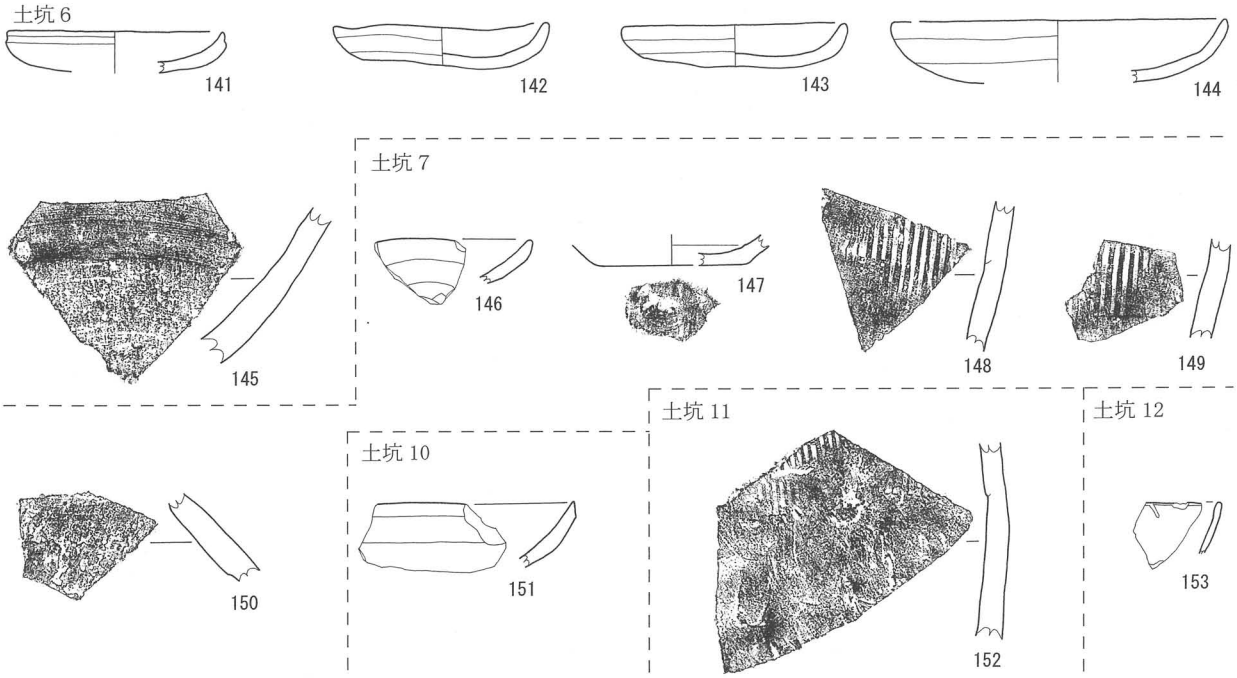


敷石遺構・池状遺構周辺（6）

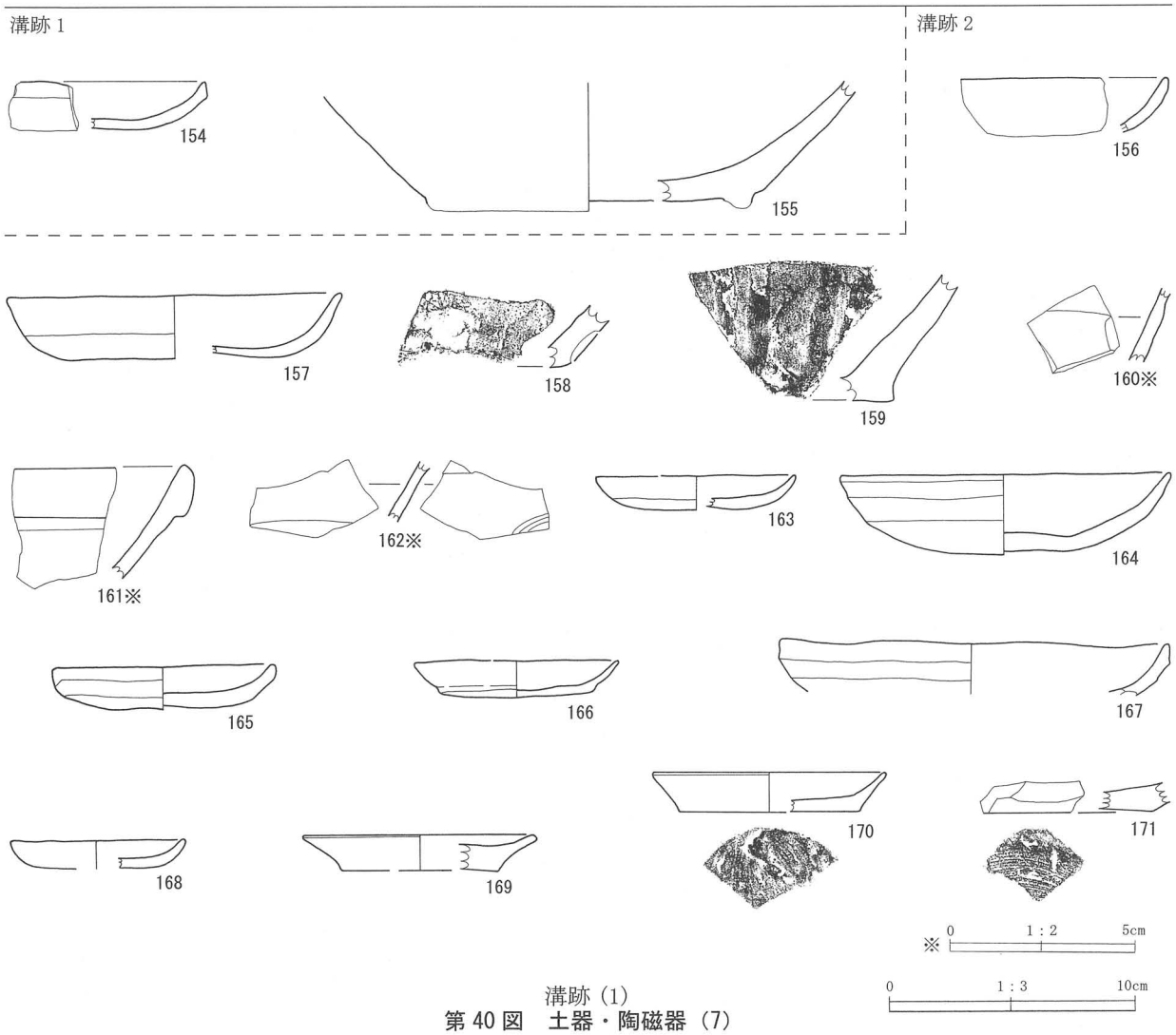


土坑（1）

第 39 図　土器・陶磁器（6）



土坑 (2)



溝跡 (1)

第 40 図　土器・陶磁器 (7)

溝跡２（つづき）

溝跡３

172　173　174

175　176　177

溝跡（2）

178　179　180

181　182　183　184

185　186　187　188

189　190　191

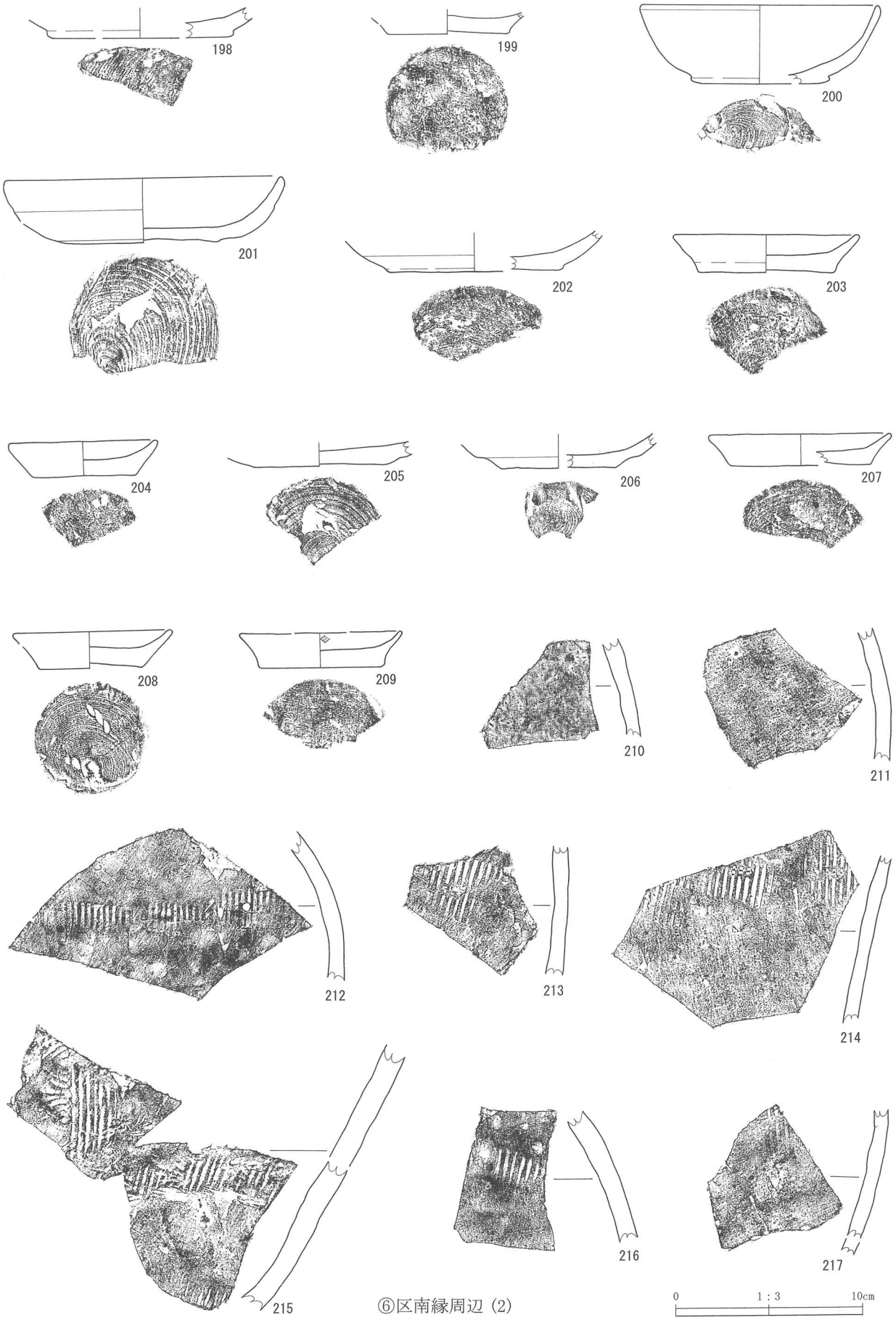
192　193　194

195　196　197

⑥区南縁周辺（1）

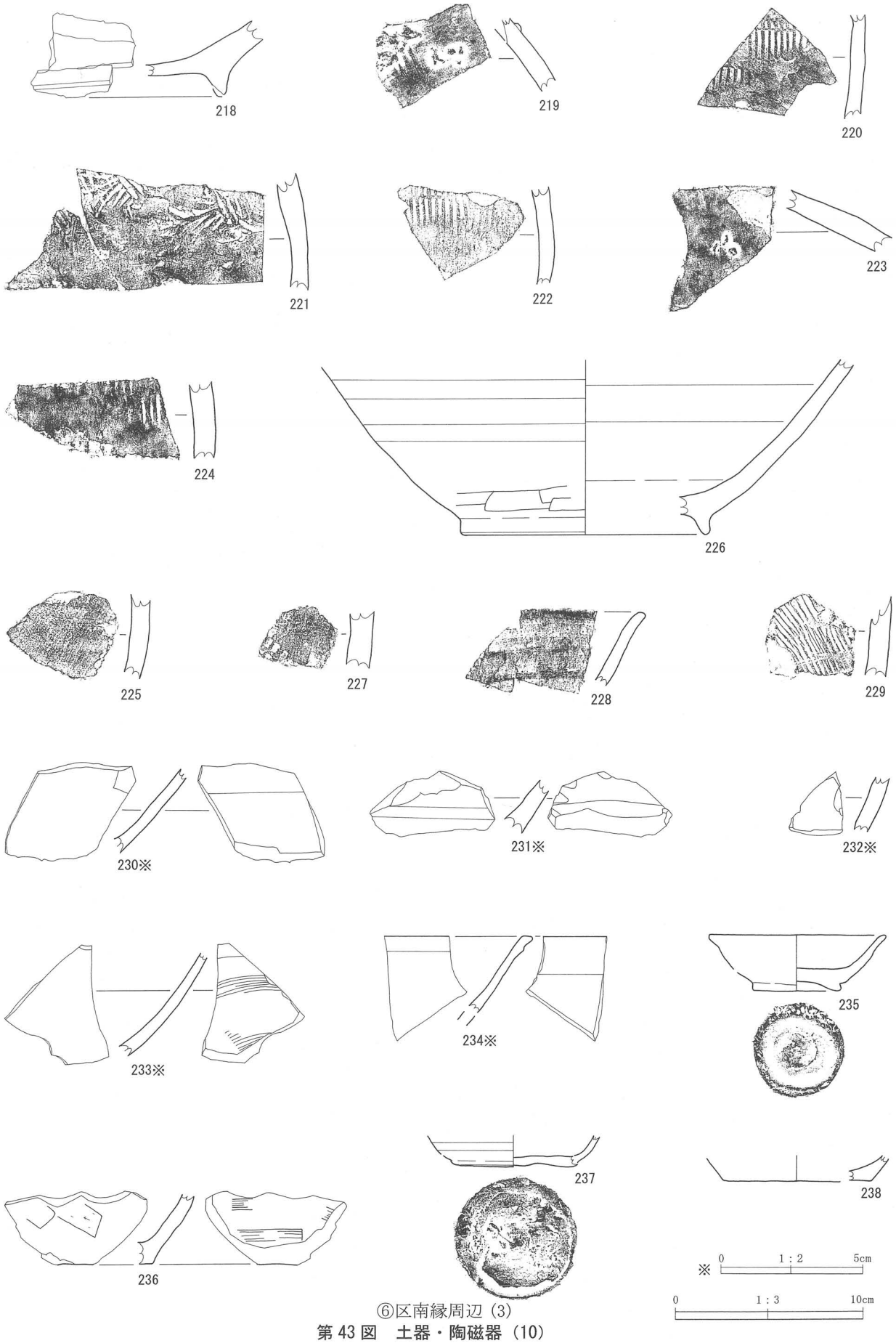
0　1：3　10cm

第41図　土器・陶磁器（8）



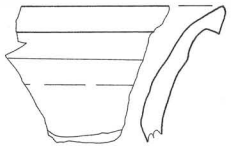
⑥区南縁周辺（2）

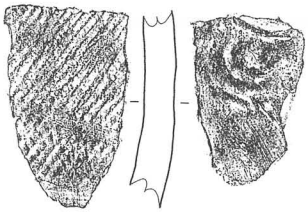
第 42 図　土器・陶磁器（9）



⑥区南縁周辺（3）

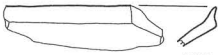
第 43 図　土器・陶磁器（10）

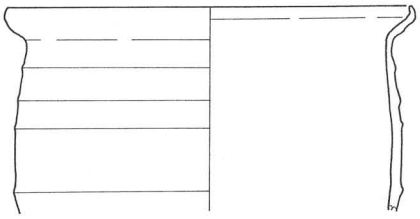

239

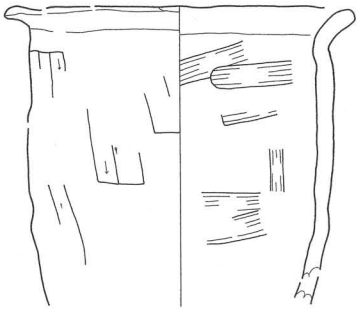

240

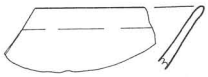
⑥区南縁周辺（4）

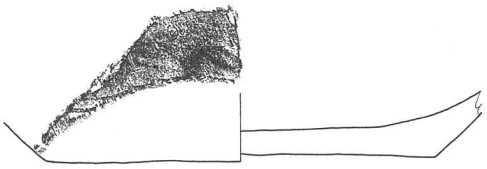
241

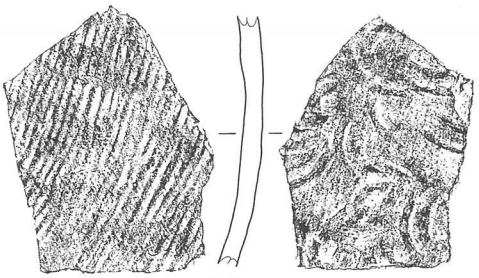

242

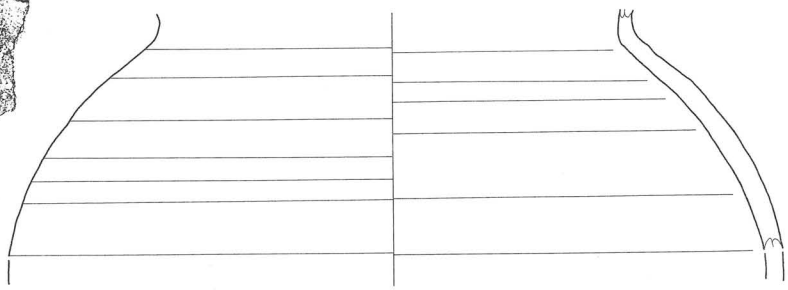

243

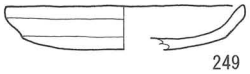

244


245


246

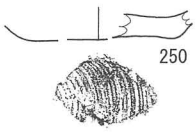

247

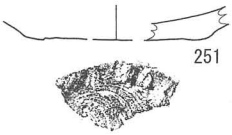

248


249

竪穴住居跡１

②区

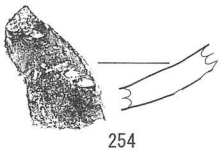

250


251

252

③区

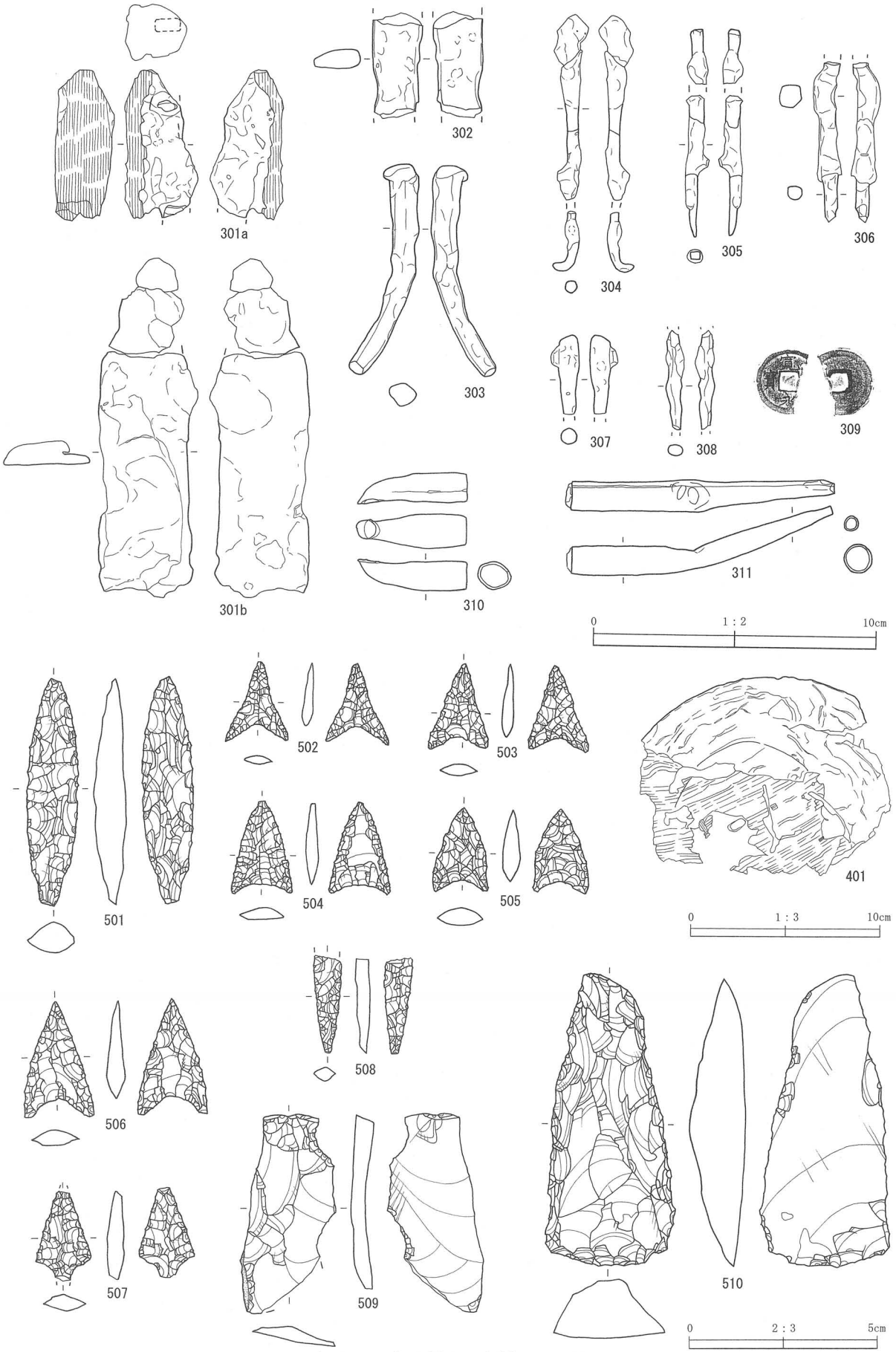
253


254

②・③区

0　1：3　10cm

第 44 図　土器・陶磁器（11）



第 45 図　金属製品・木製品・石器

表６　土器・陶磁器類

掲載番号	仮番号	出土地点	出土区	グリッド	層位・旧取上 No. など	種別分類	器種	所見・帰属年代	口径	底径	器高	備考	図	写真
1	126	建物跡３（pp70）	⑥	ⅡＡ13ｖ	埋土	常滑	鉢	12 世紀後半（２～３型式）					34	28
2	124	建物跡３（pp49）	⑥	ⅡＡ15ｗ	埋土	渥美	甕	12 世紀後半					34	28
3	125	建物跡３(pp49)	⑥	ⅡＡ15ｗ	埋土	常滑	甕	12 世紀第３四半（2 型式）					34	28
4	123	建物跡１（ pp24）	⑥	ⅡＡ19ｓ	埋土	須恵器	坏	9 世紀後半～ 10 世紀初頭			(2.4)		34	28
5	6	建物跡１（ pp81）	⑥	ⅡＡ20ｔ	埋土	土師器	甕	ロクロ整形・10 世紀			(2.4)		34	28
6	7	建物跡１（pp84）	⑥	ⅡＡ21ｔ	埋土	てづくね	かわらけ	12 世紀第３四半			(2.5)		34	28
7	142	建物跡１・２周辺（ ⑥区南西部）	⑥		検出面	常滑	甕	12 世紀第３四半（2 型式）					34	28
8	144	建物跡１・２周辺（ ⑥区南西部）	⑥		検出面	常滑	甕	12 世紀後半（２または３型式）					34	28
9	227	建物跡３付近（⑥区中央）	⑥	ⅡＡ13ｘ～14ｙ	検出面	白磁	壺	Ⅱ系					34	28
10	143	建物跡１・２周辺（ ⑥区南西部）	⑥		検出面	須恵器	坏				(3.0)		34	28
11	253	建物跡１・２周辺（ ⑥区南西部）	⑥		検出面	瓦	軒平瓦	17 世紀初頭					34	28
12	254	建物跡１・２周辺（ ⑥区南西部）	⑥		検出面	瓦	軒平瓦	17 世紀初頭					34	28
13	43	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅡＡ25ｋ	No. 139	てづくね	かわらけ	12 世紀第３四半			(2.9)		34	28
14	44	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅡＡ25ｌ	No. 143	てづくね	かわらけ	12 世紀第３四半	14.4	11.4	2.5		34	28
15	46	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ１ｋ	No. 40	てづくね	かわらけ	口唇面に溝状の調整痕・12 世紀第３四半	13.6		(3.3)		34	28
16	45	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ１ｋ	No. 37	てづくね	かわらけ	12 世紀第３四半	8.2	5.6	1.1		34	28
17	48	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ１ｌ	No. 48	てづくね	かわらけ	12 世紀第３四半	15.4	9.0	2.4		34	28
18	47	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ１ｌ	No. 43	てづくね	かわらけ	12 世紀第３四半	13.4	8.6	2.3		34	28
19	50	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ１ｌ・ⅢＡ１ｍ	Ⅲ層	てづくね	かわらけ	12 世紀第３四半			(3.6)		34	28
20	53	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ２ｋ	No. 72	てづくね	かわらけ	12 世紀第３四半	15.1	11.0	2.7		34	28
21	52	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ２ｋ	No. 59	てづくね	かわらけ	12 世紀第３四半			(3.1)		34	28
22	56	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ２ｋ	Ⅲ層	てづくね	かわらけ	12 世紀第３四半			(2.8)		34	28
23	58	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ２ｋ	Ⅲ層	てづくね	かわらけ	12 世紀第３四半	7.4	5.6	1.2		34	28
24	61	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ２ｌ	No. 91	てづくね	かわらけ	12 世紀第３四半	8.4	4.0	2.0		34	28

25	60	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ２ｌ	No. 90	てづくね	かわらけ	12 世紀第３四半	8.6	4.6	1.2		34	28
26	64	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ２ｌ	Ⅲ層	てづくね	かわらけ	12 世紀第３四半			(2.2)		35	28
27	74	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ３ｌ	Ⅲ層	てづくね	かわらけ	12 世紀第３四半			(2.2)		35	28
28	75	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ３ｌ	Ⅲ層	てづくね	かわらけ	12 世紀第３四半			(2.5)		35	28
29	77	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ４ｉ	検出面	てづくね	かわらけ	12 世紀第３四半			(2.4)		35	28
30	78	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ４ｉ	石敷面	てづくね	かわらけ	12 世紀第３四半	8.5	6.4	1.1		35	28
31	79	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ４ｉ	石敷面	てづくね	かわらけ	12 世紀第３四半			(2.1)		35	28
32	80	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ４ｉ	石敷面	てづくね	かわらけ	内外面に黒色塗膜（漆？）・12 世紀第３四半			(1.8)		35	28
33	76	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ４ｉ	No. 101	てづくね	かわらけ	12 世紀第３四半			(3.6)		35	28
34	92	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ５ｉ～７ｋ	検出面	てづくね	かわらけ	12 世紀第３四半	9.0	5.0	1.8		35	28
35	81	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ５ｊ	No. 131・132・133	てづくね	かわらけ	12 世紀第３四半	15.0		(2.6)		35	28
36	83	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤		敷石面より上部	てづくね	かわらけ	12 世紀第３四半			(3.5)		35	28
37	117	敷石遺構・池状遺構周辺（⑦区）	⑦		カクラン層	てづくね	かわらけ	12 世紀第３四半			1.7		35	28
38	59	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ２ｋ	Ⅲ層	ロクロ	かわらけ	12 世紀第３四半期後半	8.8	6.0	1.9		35	28
39	62	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ２ｌ	Ⅲ層	ロクロ	かわらけ	12 世紀第３四半期後半		6.0	(1.4)		35	28
40	68	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ２ｍ	Ⅲ層	ロクロ	かわらけ	12 世紀第３四半期後半		6.6	(1.2)		35	28
41	73	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ３ｋ	No. 95	ロクロ	かわらけ	12 世紀第３四半期後半		7.6	(1.3)		35	28
42	69	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ２ｎ	１層	土師器				7.1	(2.2)		35	28
43	189	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ４ｉ～ⅢＡ５ｉ	石敷検出面	常滑	甕	12 世紀第３四半（２型式）					35	28
44	198	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ５ｉ～７ｋ	検出面	常滑	甕	12 世紀後半（２または３型式）					35	28
45	199	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ５ｉ～７ｋ	検出面	常滑	甕	12 世紀第３四半（２型式）					35	28
46	205	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ５ｉ～７ｋ	検出面	常滑	甕	12 世紀第３四半（２型式）					35	28
47	206	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ５ｉ～７ｋ	検出面	常滑	甕	12 世紀後半（２または３型式）					35	28
48	208	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ５ｉ～７ｋ	検出面	常滑	甕	12 世紀第３四半（２型式）					35	28
49	193	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤		敷石面直上一括	常滑	甕	12 世紀後半（２または３型式）					35	28
50	194	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤		敷石面	常滑	甕	12 世紀後半（２または３型式）					35	28

51	192	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤		検出面	常滑	甕	12 世紀後半（2または3型式）					35	28
52	222	敷石遺構・池状遺構周辺（⑦区）	⑦	ⅡA 23 h	No. 4	常滑	甕	12 世紀第3四半（2型式）					35	28
53	223	敷石遺構・池状遺構周辺（⑦区）	⑦	ⅡA 23 h	No. 5	渥美	甕	12 世紀後半		6.8	3.3		35	28
54	226	敷石遺構・池状遺構周辺（⑦区）	⑦	ⅡA 23 i	No. 7	常滑	甕	12 世紀後半（2または3型式）					35	28
55	152	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅡA 25 i	No. 13	常滑	甕	12 世紀第3四半（2型式）					36	28
56	154	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅡA 25 i	No. 19・36	常滑	甕	12 世紀第3四半（2型式）					36	28
57	159	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢA 1 j	No. 5・18	常滑	甕	12 世紀第3四半（2型式）					36	29
58	161	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢA 1 j	No. 98	常滑	甕	12 世紀第3四半（2型式）					36	29
59	162	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢA 1 k	No. 137	常滑	甕	12 世紀第3四半（2型式）					36	29
60	163	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢA 1 k	No. 144	常滑	甕	12 世紀第3四半（2型式）					36	29
61	164	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢA 1 k	No. 147	常滑	甕	12 世紀第3四半（2型式）					36	29
62	165	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢA 1 l	No. 53	常滑	片口鉢	12 世紀後半（2～3型式）		10.2	(5.4)		36	29
63	167	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢA 2 i	No. 105	渥美	甕	12 世紀後半					36	29
64	168	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢA 2 i	No. 106	常滑	甕	12 世紀後半（2または3型式）					36	29
65	170	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢA 2 k	No. 74	常滑	甕	12 世紀第3四半（2型式）					36	29
66	174	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢA 3 i	No. 111	常滑	甕	12 世紀後半（2または3型式）					36	29
67	175	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢA 3 i	No. 176	須恵器系陶器	甕	底面に糸切痕・ヘラ状工具によるおこし痕 12 世紀後半		15.6	(3.9)	82・83・67・77 は同一個体の可能性有	36	29
68	177	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢA 4 i	No. 102	常滑	甕	12 世紀第3四半（2型式）					36	29
69	180	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢA 4 j	No. 121	渥美	甕	12 世紀後半					36	29
70	181	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢA 4 j	No. 124・125	常滑	甕	12 世紀第3四半（2型式）					36	29
71	196	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢA 7 h	No. 177	常滑	甕	12 世紀第3四半（2型式）					36	29
72	204	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢA 5 i～7 k	検出面	常滑	甕	12 世紀第3四半（2型式）					36	29
73	153	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅡA 25 i	No. 16	須恵器系陶器	甕	12 世紀後半					37	29
74	187	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢA 1 k		常滑	甕	12 世紀第3四半（2型式）					37	29
75	173	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢA 3 i	No. 107	渥美	甕	12 世紀後半					37	29
76	179	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢA 4 j	No. 120	須恵器系陶器	甕	12 世紀後半					37	29

77	202	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ５ｉ～７ｋ	検出面	須恵器系陶器	甕	12 世紀後半				82・83・67・77 は同一個体の可能性有	37	29
78	203	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ５ｉ～７ｋ	検出面	渥美	甕	12 世紀後半					37	29
79	207	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ５ｉ～７ｋ	検出面	渥美	甕	12 世紀後半					37	29
80	197	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ６ｌ付近	検出面	渥美	壺	刻画文（枝か）・漆継・12 世紀後半					37	29
81	155	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅡＡ25 ｉ	No. 30	須恵器系陶器	甕	12 世紀後半			(2.2)		37	29
82	151	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅡＡ25 ｉ	No. 12	須恵器系陶器	甕	外面転用痕．（敲目が磨滅．おろしに転用か）12 世紀後半				82・83・67・77 は同一個体の可能性有	37	29
83	156	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅡＡ25 ｋ	No. 141・142	須恵器系陶器	甕	12 世紀後半				82・83・67・77 は同一個体の可能性有	37	29
84	169	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ２ｉ	No. 108	須恵器系陶器	片口鉢	12 世紀後半					37	29
85	172	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ２ｋ	No. 78	須恵器系陶器	甕	内面転用痕（硯）・12 世紀後半					37	29
86	171	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ２ｋ	No. 75	須恵器系陶器	壺	12 世紀後半			(7.9)		37	29
87	55	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ２ｋ	No. 183	須恵器系陶器	甕	12 世紀後半			(5.9)	87・94 は同一個体か	37	29
88	66	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ２ｍ	No. 180	須恵器系陶器	壺	12 世紀後半					37	29
89	176	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ３ｋ	No. 94	須恵器系陶器	甕	12 世紀後半					37	29
90	188	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ４ｉ～ⅢＡ５ｉ	石敷検出面	須恵器系陶器	甕	12 世紀後半					37	29
91	182	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ４ｊ	No. 126	須恵器系陶器	甕	12 世紀後半					37	29
92	183	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ４ｋ～ⅢＡ５ｋ	検出面	須恵器系陶器	甕	12 世紀後半					37	29
93	200	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ５ｉ～７ｋ	検出面	須恵器系陶器	甕	12 世紀後半					37	29
94	201	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ５ｉ～７ｋ	検出面	須恵器系陶器	甕	12 世紀後半				87・94 は同一個体か	37	29
95	185	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ６ｉ	No. 136	須恵器系陶器	片口鉢	12 世紀中葉					38	30
96	184	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ６ｉ	No. 135	須恵器系陶器	甕	12 世紀後半					38	30
97	245	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ 11 ｋ	検出面	白磁	碗	Ⅱ類		5.8	(1.4)		38	30
98	230	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ２ｉ	カクラン層	白磁	碗	Ⅴ類（優品）					38	30
99	229	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ２ｉ	No. 119	白磁	碗	Ⅳ類					38	30
100	231	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ２ｋ	No. 71	白磁	壺	Ⅱ系					38	30
101	232	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ３ｉ		白磁	壺	Ⅱ系					38	30
102	235	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ４ｏ付近	Ⅲ層	白磁	壺	Ⅲ系	12.1		(2.5)		38	30

103	236	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ４ｏ付近	Ⅲ層	白磁	碗	Ｖ類					38	30
104	237	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ４ｏ付近	Ⅲ層	白磁	壺	Ⅱ系					38	30
105	246	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ５ｈ	No. 151	近世	鉄絵皿			6.0	(1.2)		38	30
106	248	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ５ｉ～７ｋ	検出面	白磁	碗	Ｖ類					38	30
107	249	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ５ｉ～７ｋ	検出面	白磁	壺	Ⅱ系					38	30
108	247	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ５ｉ付近	検出面	白磁	壺	Ⅱ系					38	30
109	233	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ６ｈ付近	Ⅲ層	白磁	皿	Ⅲ類					38	30
110	234	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ６ｈ付近	Ⅲ層	白磁	壺	Ⅲ系					38	30
111	240	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤		敷石面	白磁	壺	Ⅱ系					38	30
112	241	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤		検出面	白磁	碗	Ｖ類					38	30
113	242	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤		検出面	白磁	壺	Ⅱ系					38	30
114	54	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ２ｋ	No. 73	土師器	坏	内黒処理？磨滅顕著		5.4	(1.1)		38	30
115	49	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ１ｌ	No. 55	土師器	甕	ロクロ整形	20.4		(12.9)		38	30
116	51	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ１ｍ	No. 182	土師器	坏	内面黒色処理	12.7	6.0	3.8		38	30
117	57	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ２ｋ	Ⅲ層	土師器	甕				(1.6)		38	30
118	67	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ２ｍ	No. 181	土師器	甕	非ロクロ整形	13.6	8.0	13.9		39	30
119	72	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ２ｎ	２ｂ層	土師器	坏	ロクロ整形．底部下端及び底外面ケズリ調整．内黒処理．		6.8	(4.2)		39	30
120	63	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ２ｌ	Ⅲ層	土師器	坏				(3.5)		39	30
121	166	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ１ｌ	No. 55	須恵器	坏			7.2	1.3		39	30
122	65	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ２ｍ	No. 179	須恵器	壺	底部外面に墨書あり		7.0	(2.4)		39	30
123	71	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ２ｎ	２ｂ層	須恵器	坏				(3.2)		39	30
124	70	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ２ｎ	２ｂ層	須恵器	坏		14.0	8.4	3.3		39	30
125	157	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ１ｉ	敷石面上位の攪乱層	近世							39	30
126	158	敷石遺構・池状遺構周辺（④・⑤区）	④・⑤	ⅢＡ１ｊ	No. 2	近世	碗				(2.8)		39	30
127	15	土坑０１	⑥	ⅡＡ８ｘ	No. 1・4・6・埋土	てづくね	かわらけ	12 世紀第３四半期前半	15.8	9.0	3.0		39	31
128	16	土坑０１	⑥	ⅡＡ８ｘ	No. 2	ロクロ	かわらけ	底面回転糸切痕・12 世紀第３四半期後半	9.0	6.0	1.8		39	31

129	17	土坑０１	⑥	ⅡＡ８ｘ	No.3	ロクロ	かわらけ	底面回転糸切痕・12世紀第３四半期後半	13.2	8.0	3.0		39	31
130	18	土坑０１	⑥	ⅡＡ８ｘ	No.5	ロクロ	かわらけ	12世紀第３四半					39	31
131	19	土坑０１	⑥	ⅡＡ８ｘ	埋土	ロクロ	かわらけ	底面回転糸切痕・12世紀前半		4.4	(3.3)		39	31
132	11	土坑０３	⑥	ⅡＡ17ｓ・17ｔ	No.1	ロクロ	かわらけ	歪み著しい・12世紀第３四半期後半	14.0	8.0	3.1		39	31
133	12	土坑０３	⑥	ⅡＡ17ｓ・17ｔ	No.2・3・5	てづくね	かわらけ	12世紀第３四半	15.0	8.0	2.9		39	31
134	25	土坑０５	⑥	ⅡＡ19ｗ	中央	てづくね	かわらけ	12世紀第３四半期後半	9.1	4.5	2.3	134・135は２枚重ねて伏せた状態で出土。	39	31
135	26	土坑０５	⑥	ⅡＡ19ｗ	中央	てづくね	かわらけ	12世紀第３四半期後半	8.9	4.3	1.8	134・135は２枚重ねて伏せた状態で出土。	39	31
136	21	土坑０５	⑥	ⅡＡ19ｗ	No.1	てづくね	かわらけ	12世紀第３四半	16.0	10.6	2.5		39	31
137	24	土坑０５	⑥	ⅡＡ19ｗ	No.4	てづくね	かわらけ	12世紀第３四半	8.4	4.4	1.7		39	31
138	23	土坑０５	⑥	ⅡＡ19ｗ	No.3	ロクロ	かわらけ	底面回転糸切痕・12世紀第３四半期後半		8.6	(1.3)		39	31
139	130	土坑０５	⑥	ⅡＡ19ｗ	埋土	渥美	甕	12世紀後半					39	31
140	22	土坑０５	⑥	ⅡＡ19ｗ	No.2	焼成土塊	不明		長4.0	幅2.3	厚1.6		39	31
141	88	土坑０６	④・⑤	ⅢＡ７ｊ・７ｋ	No.2	てづくね	かわらけ	12世紀第３四半	8.4		(1.6)		40	31
142	89	土坑０６	④・⑤	ⅢＡ７ｊ・７ｋ	No.3	てづくね	かわらけ	12世紀第３四半期後半	8.5	5.5	2.9		40	31
143	90	土坑０６	④・⑤	ⅢＡ７ｊ・７ｋ	No.4	てづくね	かわらけ	12世紀第３四半期後半	8.8	6.0	1.8		40	31
144	91	土坑０６	④・⑤	ⅢＡ７ｊ・７ｋ	埋土	てづくね	かわらけ	12世紀第３四半	13.2	7.0	2.5		40	31
145	195	土坑０６	④・⑤		No.1	常滑	鉢	12世紀後半（２～３型式）					40	31
146	13	土坑０７	⑥	ⅡＡ12ｖ	埋土	てづくね	かわらけ	12世紀第３四半					40	31
147	14	土坑０７	⑥	ⅡＡ12ｖ	埋土	ロクロ	かわらけ	12世紀第３四半		6.0	(1.2)		40	31
148	127	土坑０７	⑥	ⅡＡ12ｖ	１層	常滑	甕	12世紀第３四半（2型式）					40	31
149	128	土坑０７	⑥	ⅡＡ12ｖ	１層	常滑	甕	12世紀第３四半（2型式）					40	31
150	129	土坑０７	⑥	ⅡＡ12ｖ	埋土上位	常滑	甕	12世紀後半（２または３型式）					40	31
151	20	土坑１０	⑥	ⅡＡ17ｘ・17ｙ	埋土	てづくね	かわらけ	12世紀第３四半					40	31
152	211	土坑１１	⑧	ⅡＡ21ｔ	埋土	常滑	甕	12世紀第３四半（2型式）					40	31
153	212	土坑１２	⑧	ⅡＡ21ｔ	埋土	須恵器	坏						40	31
154	27	溝跡１	⑥		埋土	てづくね	かわらけ	12世紀第３四半			2.0		40	31

155	131	溝跡１	⑥		埋土	常滑	鉢	12 世紀後半（２～３型式）		12.8	(5.8)		40	31
156	84	溝跡２	④・⑤	ⅢＡ１ｋ付近	埋土	てづくね	かわらけ	12 世紀第３四半			(2.4)	取水口状遺構１の南側の溝埋土	40	31
157	85	溝跡２	④・⑤	ⅡＡ25ｋ付近	埋土	てづくね	かわらけ	12 世紀第３四半	16.8	8.8	2.6	取水口状遺構１の北側の溝埋土	40	31
158	178	溝跡２	④・⑤	ⅢＡ４ｉ	溝埋土	常滑	甕	12 世紀後半（２または３型式）					40	31
159	186	溝跡２	④・⑤	ⅡＡ25ｋ～ⅢＡ１ｋ	溝埋土	常滑	甕	12 世紀後半（２または３型式）				取水口状遺構１の北側の溝埋土	40	31
160	243	溝跡２	④・⑤	ⅢＡ６ｉ付近	溝埋土	白磁	不明	12 世紀代					40	31
161	244	溝跡２	④・⑤	ⅢＡ６ｉ付近	溝埋土	白磁	碗	Ⅳ類					40	31
162	228	溝跡２	④・⑤	ⅢＡ１ｊ	埋土	白磁	碗	Ⅴ類				敷石面脇の溝埋土	40	31
163	35	溝跡２（④・⑤区北東区）	④・⑤	ⅡＡ24ｐ	No.161	てづくね	かわらけ	12 世紀第３四半	8.2	4.0	1.4		40	31
164	32	溝跡２（④・⑤区北東区）	④・⑤	ⅡA23ｒ	No.169	てづくね	かわらけ	12 世紀第３四半	13.4	5.4	3.4		40	31
165	33	溝跡２（④・⑤区北東区）	④・⑤	ⅡA23ｒ	No.171	てづくね	かわらけ	12 世紀第３四半期後半	9.2	4.2	1.8		40	31
166	36	溝跡２（④・⑤区北東区）	④・⑤		埋土	てづくね	かわらけ	12 世紀第３四半	8.4	6.2	1.4		40	31
167	39	溝跡２（④・⑤区北東区）	④・⑤		埋土一括	てづくね	かわらけ	12 世紀第３四半	16.0		(2.2)		40	31
168	40	溝跡２（④・⑤区北東区）	④・⑤		埋土一括	てづくね	かわらけ	12 世紀第３四半	7.2	5.2	1.2		40	31
169	34	溝跡２（④・⑤区北東区）	④・⑤	ⅡA24ｏ	No.163	ロクロ	かわらけ	12 世紀第３四半	9.5	6.5	1.5		40	31
170	37	溝跡２（④・⑤区北東区）	④・⑤		埋土	ロクロ	かわらけ	底面回転糸切痕・12 世紀第３四半期前半	9.6	7.6	1.6		40	31
171	38	溝跡２（④・⑤区北東区）	④・⑤		埋土	ロクロ	かわらけ	底面回転糸切痕・12 世紀第３四半期後半			(1.2)		40	31
172	146	溝跡２（④・⑤区北東区）	④・⑤	ⅡＡ22ｓ	No.173	渥美	片口鉢	12 世紀後半	26.8		(10.1)		41	31
173	145	溝跡２（④・⑤区北東区）	④・⑤	ⅡＡ22ｓ	No.172	須恵器	壺？				(4.5)		41	31
174	116	溝跡３-e	⑦	ⅡＡ23ｉ	No.1	てづくね	かわらけ	12 世紀第３四半			(3.0)		41	31
175	160	溝跡３-c	④・⑤	ⅢＡ１ｉ	No.7	常滑	甕	12 世紀第３四半（2 型式）					41	31
176	225	溝跡３-e	⑦	ⅡＡ23ｉ	No.3	常滑	甕	12 世紀第３四半（2 型式）					41	31
177	224	溝跡３-e	⑦	ⅡＡ23ｉ	No.2	須恵器系陶器	甕	12 世紀後半					41	31
178	8	⑥区南縁周辺（⑥区南東部）	⑥	ⅡＡ19ｗ付近	検出面	てづくね	かわらけ	12 世紀第３四半期後半	14.4	8.5	3.4		41	31
179	9	⑥区南縁周辺（⑥区南東部）	⑥	ⅡＡ19ｗ付近	検出面	てづくね	かわらけ	12 世紀第３四半期前半	10.5	5.2	2.2		41	31
180	28	⑥区南縁周辺（⑥区南東部）	⑥	ⅡＡ20ｗ	No.1	てづくね	かわらけ	12 世紀第３四半	9.0		(1.8)		41	31

181	29	⑥区南縁周辺（⑥区南東部）	⑥	ⅡＡ20 x	No. 3	てづくね	かわらけ	12 世紀第３四半	14.6	7.0	2.8		41	31
182	96	⑥区南縁周辺（⑧区）	⑧	ⅡＡ20x	No. 41	てづくね	かわらけ	12 世紀第３四半			(3.2)		41	31
183	118	⑥区南縁周辺（⑥区南東部）	⑥	ⅡＡ20 x	No. 6	てづくね	かわらけ	口縁～内面にスス付着・12 世紀第３四半	9.4	2.5	2.2		41	31
184	99	⑥区南縁周辺（⑧区）	⑧	ⅡＡ21 u	No. 01	てづくね	かわらけ	12 世紀第３四半期後半	9.5	6.3	1.9		41	31
185	100	⑥区南縁周辺（⑧区）	⑧	ⅡＡ21 u	No. 03	てづくね	かわらけ	12 世紀第３四半期後半	8.8	4.0	1.7		41	31
186	101	⑥区南縁周辺（⑧区）	⑧	ⅡＡ21 u	No. 04	てづくね	かわらけ	12 世紀第３四半期後半	8.8	4.4	1.8		41	31
187	109	⑥区南縁周辺（⑧区）	⑧	ⅡＡ21 v	Ⅲ層	てづくね	かわらけ	12 世紀第３四半	9.5	6.0	1.8		41	31
188	110	⑥区南縁周辺（⑧区）	⑧	ⅡＡ21 v	Ⅲ層	てづくね	かわらけ	12 世紀第３四半	9.6	4.7	2.2		41	32
189	107	⑥区南縁周辺（⑧区）	⑧	ⅡＡ21 v	No. 08	てづくね	かわらけ	12 世紀第３四半期後半	15.2	7.4	3.0		41	32
190	104	⑥区南縁周辺（⑧区）	⑧	ⅡＡ21 v	No. 31	てづくね	かわらけ	12 世紀第３四半	8.8	4.4	2.0		41	32
191	105	⑥区南縁周辺（⑧区）	⑧	ⅡＡ21 v	No. 34	てづくね	かわらけ	12 世紀第３四半期後半	9.0	4.2	1.9		41	32
192	106	⑥区南縁周辺（⑧区）	⑧	ⅡＡ21 v	No. 54	てづくね	かわらけ	12 世紀第３四半期後半	14.0	11.2	2.3		41	32
193	108	⑥区南縁周辺（⑧区）	⑧	ⅡＡ21 w	No. 37	てづくね	かわらけ	12 世紀第３四半期後半	14.0	10.2	2.6		41	32
194	113	⑥区南縁周辺（⑧区）	⑧	ⅡＡ21 x	Ⅲ層	てづくね	かわらけ	12 世紀第３四半期後半	14.0	11.6	3.0		41	32
195	115	⑥区南縁周辺（⑧区）	⑧		Ⅲ層	てづくね	かわらけ	12 世紀第３四半	10.0	3.8	1.9		41	32
196	42	⑥区南縁周辺（④・⑤区北東部）	④・⑤	ⅡＡ22 u～23 u	Ⅲ層	てづくね	かわらけ	12 世紀第３四半期後半	15.8	10.0	3.0		41	32
197	41	⑥区南縁周辺（④・⑤区北東部）	④・⑤	ⅡＡ22 u～23 u	Ⅲ層	てづくね	かわらけ	12 世紀第３四半			(3.4)		41	32
198	10	⑥区南縁周辺（⑥区南東部）	⑥	ⅡＡ19 w付近	検出面	ロクロ	かわらけ	底面回転糸切痕・12 世紀第３四半.		9.6	(1.6)		42	32
199	30	⑥区南縁周辺（⑥区南東部）	⑥	ⅡＡ19 x	No. 4	ロクロ	かわらけ	底面回転糸切痕？・12 世紀第３四半期後半		6.5	(1.2)		42	32
200	97	⑥区南縁周辺（⑧区）	⑧	ⅡＡ20x	No. 42	ロクロ	かわらけ	底面回転糸切痕・12 世紀第３四半	13.0	7.4	4.3		42	32
201	98	⑥区南縁周辺（⑧区）	⑧	ⅡＡ20 x～ⅡＡ21 x	Ⅲ層	ロクロ	かわらけ	底面回転糸切痕・12 世紀第３四半	15.0	8.0	3.5		42	32
202	111	⑥区南縁周辺（⑧区）	⑧	ⅡＡ21 v	Ⅲ層	ロクロ	かわらけ	底面回転糸切痕・12 世紀第３四半		9.2	(2.1)		42	32
203	102	⑥区南縁周辺（⑧区）	⑧	ⅡＡ21 v	No. 13	ロクロ	かわらけ	底面回転糸切痕・12 世紀第３四半	10.0	7.4	2.1		42	32
204	103	⑥区南縁周辺（⑧区）	⑧	ⅡＡ21 v	No. 25	ロクロ	かわらけ	底面回転糸切痕・12 世紀第３四半	8.0	5.6	1.9		42	32
205	216	⑥区南縁周辺（⑧区）	⑧	ⅡＡ21 w	Ⅲ層	ロクロ	かわらけ	12 世紀第３四半期後半		7.3	(1.3)		42	32
206	82	⑥区南縁周辺（④・⑤区北東部）	④・⑤	ⅡＡ22 r 付近	Ⅲ層	ロクロ	かわらけ	底面回転糸切痕・12 世紀第３四半		6.2	(1.9)		42	32

207	114	⑥区南縁周辺（⑧区）	⑧		Ⅲ層	ロクロ	かわらけ	12世紀第3四半	9.8	7.6	1.7		42	32
208	87	⑥区南縁周辺（④・⑤区北東部）	④・⑤		検出面	ロクロ	かわらけ	底面回転糸切痕・12世紀第3四半期前半	8.4	5.6	2.0		42	32
209	31	⑥区南縁周辺（⑥区南東部）	⑥		検出面	ロクロ	かわらけ	底面回転糸切痕？・12世紀第3四半	8.8	6.8	1.9		42	32
210	138	⑥区南縁周辺（⑥区南東部）	⑥	ⅡA 19 w付近	検出面	常滑	甕	12世紀第3四半（2型式）					42	32
211	139	⑥区南縁周辺（⑥区南東部）	⑥	ⅡA 19 w付近	検出面	常滑	甕	12世紀第3四半（2型式）					42	32
212	140	⑥区南縁周辺（⑥区南東部）	⑥	ⅡA 19 w付近	検出面	常滑	甕	12世紀第3四半（2型式）					42	32
213	137	⑥区南縁周辺（⑥区南東部）	⑥	ⅡA 19 w付近	検出面	常滑	甕	12世紀第3四半（2型式）					42	32
214	141	⑥区南縁周辺（⑥区南東部）	⑥	ⅡA 20 x	No. 5	常滑	甕	12世紀第3四半（2型式）					42	32
215	213	⑥区南縁周辺（⑧区）	⑧	ⅡA 20 x～ⅡA 21 x	Ⅲ層	渥美	甕	12世紀後半					42	32
216	214	⑥区南縁周辺（⑧区）	⑧	ⅡA 20 x～ⅡA 21 x	Ⅲ層	渥美	甕	12世紀後半					42	32
217	218	⑥区南縁周辺（⑧区）	⑧	ⅡA 21 w	Ⅲ層	常滑	甕	12世紀第3四半（2型式）					42	32
218	215	⑥区南縁周辺（⑧区）	⑧	ⅡA 21 w	No. 39	常滑	鉢	12世紀後半（2～3型式）			(4.0)		43	32
219	219	⑥区南縁周辺（⑧区）	⑧	ⅡA 21 x	Ⅲ層	渥美	甕	12世紀後半					43	32
220	147	⑥区南縁周辺（④・⑤区北東部）	④・⑤	ⅡA 22 u～23 u	Ⅲ層	常滑	甕	12世紀第3四半（2型式）					43	32
221	148	⑥区南縁周辺（④・⑤区北東部）	④・⑤	ⅡA 22 u～23 u	Ⅲ層	渥美	甕	12世紀後半					43	32
222	149	⑥区南縁周辺（④・⑤区北東部）	④・⑤	ⅡA 23 t	Ⅲ層	常滑	甕	12世紀第3四半（2型式）					43	32
223	150	⑥区南縁周辺（④・⑤区北東部）	④・⑤	ⅡA 23 w	Ⅲ層	渥美	甕	12世紀後半					43	32
224	220	⑥区南縁周辺（⑧区）	⑧		Ⅲ層	渥美	甕	12世紀後半					43	32
225	133	⑥区南縁周辺（⑥区南東部）	⑥	ⅡA 19 w付近	検出面	渥美	甕	12世紀後半					43	32
226	190	⑥区南縁周辺（④・⑤区北東部）	④・⑤		検出面	渥美	鉢	12世紀中葉		13.0	(9.2)		43	32
227	132	⑥区南縁周辺（⑥区南東部）	⑥	ⅡA 19 w付近	検出面	渥美	甕	12世紀後半					43	32
228	221	⑥区南縁周辺（⑧区）	⑧		Ⅲ層	常滑	鉢	12世紀後半（2～3型式）					43	32
229	135	⑥区南縁周辺（⑥区南東部）	⑥	ⅡA 19 w付近	検出面	須恵器系陶器	甕	12世紀後半					43	32
230	239	⑥区南縁周辺（④・⑤区北東部）	④・⑤	ⅡA 22 r付近	Ⅲ層	白磁	碗	Ⅴ類					43	32
231	252	⑥区南縁周辺（⑧区）	⑧		表採	白磁	碗	Ⅳ類					43	32
232	238	⑥区南縁周辺（④・⑤区北東部）	④・⑤	ⅡA 23 p付近	検出面	白磁	壺	Ⅱ系					43	32

233	250	⑥区南縁周辺（⑧区）	⑧	ⅡＡ20ｘ～ⅡＡ21ｘ	Ⅲ層	白磁	碗	Ｖ類					43	32
234	251	⑥区南縁周辺（⑧区）	⑧	ⅡＡ21ｗ	Ⅲ層	白磁	碗	Ｖ類					43	32
235	112	⑥区南縁周辺（⑧区）	⑧	ⅡＡ21ｘ	No.40	渥美	山茶碗小皿	12世紀中葉（尾張または渥美・４型式）	9.4	4.6	3.0		43	32
236	86	⑥区南縁周辺（④・⑤区北東部）	④・⑤		検出面	てづくね	かわらけ	12世紀第３四半			(3.9)		43	33
237	191	⑥区南縁周辺（④・⑤区北東部）	④・⑤		検出面	須恵器	坏			6.6	(1.7)		43	33
238	136	⑥区南縁周辺（⑥区南東部）	⑥	ⅡＡ19ｗ付近	検出面	須恵器	坏			7.8	(1.4)		43	33
239	217	⑥区南縁周辺（⑧区）	⑧	ⅡＡ21ｗ	Ⅲ層	須恵器	甕				(5.4)		44	33
240	134	⑥区南縁周辺（⑥区南東部）	⑥	ⅡＡ19ｗ付近	検出面	須恵器	甕	９世紀後半					44	33
241	2	住居跡１	⑥	ⅡＡ20ｔ	No.9	土師器	坏	内黒処理．外面磨滅．		6.4	(3.2)		44	33
242	5	住居跡１	⑥	ⅡＡ20ｔ？	北西区埋土	土師器	甕	ロクロ整形			(1.8)		44	33
243	3	住居跡１	⑥	ⅡＡ20ｔ	No.21・36	土師器	甕	ロクロ整形	16.2		8.0		44	33
244	4	住居跡１	⑥	ⅡＡ20ｔ	No.27	土師器	甕	非ロクロ整形	13.6		(11.8)		44	33
245	122	住居跡１	⑥	北西区・南西区	埋土	須恵器	坏				(2.5)		44	33
246	121	住居跡１	⑥	ⅡＡ20ｔ	No.14・22・35	須恵器	甕			15.2	(2.6)		44	33
247	119	住居跡１	⑥	ⅡＡ20ｔ	No.6	須恵器	甕						44	33
248	120	住居跡１	⑥	ⅡＡ20ｔ	No.10・33	須恵器	甕				(10.7)		44	33
249	1	住居跡１	⑥	ⅡＡ21ｔ	No.1	てづくね	かわらけ	12世紀第３四半期後半	9.4		1.7		44	33
250	94	②区	②		検出面	ロクロ	かわらけ	12世紀第３四半		5.8	(1.4)		44	33
251	95	②区	②		検出面	ロクロ	かわらけ	12世紀第３四半		5.9	(1.1)		44	33
252	210	②区	②	ⅢＡ23ｋ付近	検出面	渥美	片口鉢	12世紀後半					44	33
253	93	③区	③		検出面	ロクロ	かわらけ	底面回転糸切痕・12世紀第３四半		7.2	(1.4)		44	33
254	209	③区	③		検出面	常滑	甕	12世紀後半（２または３型式）					44	33

表７　金属製品

掲載番号	仮番号	出土地点	出土区	グリッド	層位・取上No.など	種別分類	器種	所見・帰属年代	長	幅	厚	備考	図	写真
301	鉄４	住居跡１	⑥		住居跡１No.29		刀子？	a・b有。木質付着。	(17.6)	3.5	2.1		45	34
302	鉄10	⑥区南縁周辺（⑧区）	⑧	ⅡＡ21ｕ	Ⅲ層		刀子		(3.8)	1.8	0.7		45	34
303	鉄７	建物跡１（pp30）	⑥		埋土		釘		7.6	1.2	1.0		45	34
304	鉄６	土坑１	⑥		埋土		釘		(8.9)	1.1	0.4		45	34
305	鉄５	土坑１	⑥		埋土		釘		(7.1)	0.9	0.5		45	34
306	鉄11	建物跡１（pp80）	⑥		埋土		釘		(5.8)	0.9	0.8		45	34
307	鉄８	建物跡３（pp53）	⑥		埋土		釘		(2.9)	1.0	0.6		45	34
308	鉄９	建物跡３（pp63）	⑥		埋土		釘		(3.1)	0.6	0.4		45	34
309	鉄１	①区	①		検出面	銭貨	寛永通宝						45	34
310	鉄２	②区	②		検出面		煙管雁首		3.9	1.2	1.0		45	34
311	鉄３	④⑤区	④⑤		検出面		煙管吸口		9.5	1.2	1.0		45	34

表８　木製品

掲載番号	仮番号	出土地点	出土区	グリッド	層位・取上No.など	種別分類	器種	所見・帰属年代	口径	底径	器高	備考	図	写真
401	木１	土坑６	④⑤		埋土		木碗		(15.0)	8.0	(4.0)		45	34

表９　石器

掲載番号	仮番号	出土地点	出土区	グリッド	層位など	器種	計測値（cm）			石質・産地推定	備考	図	写真
							長さ	幅	厚さ				
501	Ｓ１	④⑤区東部	④・⑤	ⅢＡ３ｋ	Ⅴ層上部	尖頭器	6.1	1.4	0.8	頁岩、奥羽山脈、新生代新第三紀		45	34
502	Ｓ４	④⑤区東部	④・⑤		Ⅴ層上部	石鏃	2.2	1.7	0.3	赤色頁岩、奥羽山脈、新生代新第三紀		45	34
503	Ｓ５	④⑤区東部	④・⑤		Ⅴ層上部	石鏃	2.3	1.6	0.3	頁岩、奥羽山脈、新生代新第三紀		45	34
504	Ｓ２	②区	②		検出面	石鏃	2.5	1.6	0.3	頁岩、奥羽山脈、新生代新第三紀		45	34
505	Ｓ６	⑥区南部（トレンチ一括）	⑥		Ⅴ層上部	石鏃	2.2	1.5	0.5	頁岩、奥羽山脈、新生代新第三紀		45	34
506	Ｓ７	住居跡１	⑥		埋土一括	石鏃	3.1	1.9	0.5	頁岩、奥羽山脈、新生代新第三紀		45	34
507	Ｓ３	敷石遺構	④・⑤		敷石面	石鏃	2.4	1.5	0.5	頁岩、奥羽山脈、新生代新第三紀		45	34
508	Ｓ８	敷石遺構	④・⑤		敷石面	石錐	2.6	0.8	0.4	頁岩、奥羽山脈、新生代新第三紀		45	34
509	Ｓ９	②区	②		表土	石匙	5.3	2.6	0.5	頁岩、奥羽山脈、新生代新第三紀		45	34
510	Ｓ10	④⑤区（トレンチ一括）	④・⑤		耕作土	石篦	7.9	3.5	1.5	頁岩、奥羽山脈、新生代新第三紀		45	34

Ⅴ まとめ

ここでは、今回の成果の中心となる敷石遺構について調査所見を元に若干の考察を加えたい。

まず、敷石遺構に認められる属性や特徴を整理し、以下に列挙する（ⅰ～ⅳ）。

（ⅰ）幅1.5ｍ前後の帯状の平坦面が造成によって設けられ、拳大の礫が敷かれていること。

（ⅱ）帯状敷石面の両側縁に、連続または断続する溝跡（側溝）を伴うこと。

（ⅲ）敷石面上には廃絶後に転落したと思われる大きめの礫が点在していることから、舗装用の拳大礫に加え、規格の異なる礫を使い分けて構築された構造物であると思われること。

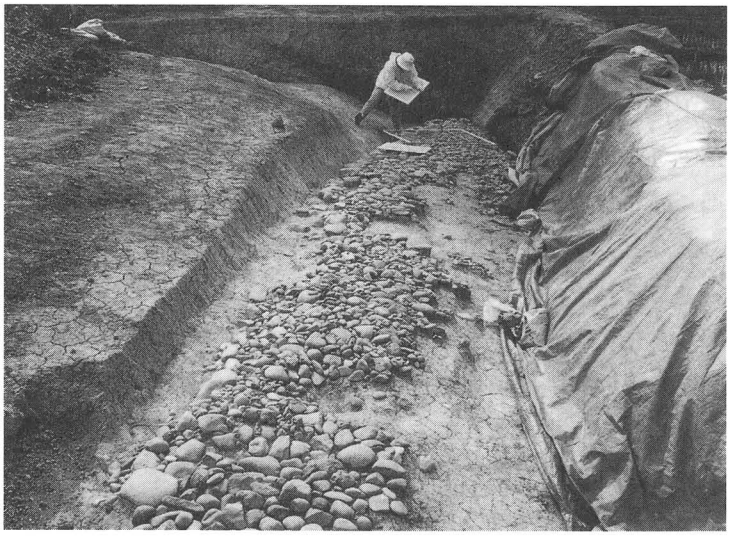
（ⅳ）建物等を配置するような主たる空間（高位面）の外縁部を区画し、外部（低位面）との境界を形成していること。

側溝を伴う帯状の平坦面は「道路」としての機能を自ずと想起させる。平泉町内ではすでにいくつかの遺跡で敷石を伴う道路状遺構が確認されており、このうち無量光院第８次発掘調査では、「北土塁外側（北側）の犬走り状部分から、縁石に頭大、内部に拳大、その上に細かな目潰し石を敷き詰めた玉石敷き面」（幅1.5ｍ程度）が検出され、「道路跡と推定」されている（平泉町教委　2000）。

無量光院例の形態上の諸属性は、本遺跡例の（ⅰ）～（ⅲ）によく類似する。このような「石敷き道」は寺院等に関連して特殊な機能を与えられた道である可能性があるといい（平泉町教育委員会八重樫忠郎氏教示）、関山中尊寺に接する立地の本遺跡例も同様の事例に列せられるかもしれない。

さて、帯状敷石面の側縁に沿う溝を道路側溝と仮定すれば、敷石の残存の有無を問わず、溝跡の走行方向には道路のルートを想定できることになる。まず敷石面東縁に沿う溝跡２は、池状遺構を巻き込むように東へ屈曲し、掘立柱建物等が配された空間（⑥区）の南縁を区画するように走行して、遺跡東方に広がる低位面（北上川方面）へと延びている。一方、敷石面西縁の溝跡３は、概ね南北方向に伸展する敷石範囲の、さらに北へ向かって断続的に直進しており、溝跡２とは明らかに方向を異にしている。従って溝跡から想定されるルートには、敷石遺構の延長線上にあたる南北方向に真っ直ぐ延びるルートと、東方から上ってきて池状遺構付近でこれに合流するルートの二つが想定できるわけだ。しかし残念ながら、二つのルートが接する地点は現代の防火水槽によって大きく破壊を受け、また後世の水田耕作によって敷石面が大きく乱されているため、細部を検討するための十分な材料を得ることはできなかった。道路のルートについては、将来の周辺部の調査に期するところが大きい。

再び無量光院例と本遺跡例の比較に戻ろう。次は無量光院例が境内内部と外界を区画する土塁の外側に沿って設けられている点に注目してみたい。このことは本遺跡例の特徴（ⅳ）と通底する、もう一つの重要な要素であると筆者は考える。当該遺構が単に道路機能にとどまらず、「外郭施設」としての性格をも有する可能性を浮かび上がらせているからだ。本遺跡では、上述の二つの道路ルートが合流する付近においてテラス状の張り出し部が認めら



参考写真１　無量光院跡「石敷き道」（平泉町教委 2004 より）

れ、また、周囲の自然傾斜面にも敷石が施されているなど、帯状敷石面（道路面）の周辺が複雑な様相を呈することがわかっている。礫を用いた地表の舗装は道路面に限らず、周辺部を含んだ広い範囲に積極的に行われた可能性があり、立体的・多層的な構造を持っていたことが想像できる。本報告において、道路機能が想定される部分のみを「帯状敷石面」として区別し、これを内包する敷石構造物全体を「敷石遺構」と仮称したのは、道路機能のみに限定した解釈が進むことで全体像がかすんでしまうのを避けたかったためである。道路としての帯状敷石面、外郭施設としての敷石遺構（周辺部含む）、そして外界から区画されるべき主たる空間。これらからなる遺跡の全体像を復元するためには、今次調査区の周辺にも視野を広げて理解を進める必要があろう。この点についても将来情報が蓄積されるにつれ詳細が明らかになるものと期待したい。

ところで、本遺跡の敷石遺構については検出当初から、当該礫群が隣接の池状遺構に伴う「州浜」であろうとの見解が各方面から寄せられた。平成17年度に発掘調査が実施された「衣川遺跡群」のうち、最も注目を集めた衣の関道遺跡の「州浜状遺構」に類似するためであった。

現時点では衣の関道遺跡の調査は中断され、当該遺構の精査も未了のままとなっている。そのため詳細については正式な報告を待たねばならないのだが、その話題性の高さからか、各種の検討会や書籍において衣の関道遺跡における「園池」の存在は既成の事実として扱われ、現在では衣川遺跡群の「重要性」を示す有力な証左として一人歩きを始めている。このことから本遺跡の当該遺構の検討にあたっては衣の関道遺跡例を避けては通れない状況となっている。坂下遺跡の池状遺構について筆者は湿地管理の一形態であり、いわゆる「園池」とは異なる実用的な水利用の痕跡と考えている。一方、衣の関道遺跡の池状遺構が「園池」とみなされる根拠は州浜を伴う点にあり、池状遺構本体からそれを示す根拠は見出されていない。やはり「州浜状遺構」そのものに検討を加える必要がありそうだ。

幸いなことに衣の関道遺跡の調査機関は当埋蔵文化財センターであり、当該遺構の検出状況写真や断面写真、各種の図面等を見ながら、調査時の状況について調査担当者と意見交換する機会を設けることができた。このとき筆者は、州浜とされる帯状の礫群の全景写真と、坂下遺跡の敷石遺構の全景写真が瓜二つであることに気がついた（参考写真２・３）。衣の関道遺跡の礫群は、坂下遺跡における当該遺構の精査途上段階の礫出土状況に酷似していたのだ。坂下遺跡では「池状遺構」に向かって傾斜する黒色土層面から大きめの礫が多く出土し、これらが下位の水平な敷石面本体の廃絶後に高位面から低位面へ向かって転落・流入したものであることがわかっている。衣の関道遺跡で州浜とされた傾斜する礫面はこれに酷似しており、精査途上の擬似的な現象である可能性は残念ながら高いと思わざるを得なかった。州浜に二時期の変遷があるとする見解も、部分的にあらわれた下位の敷石面を古段階に位置づけた結果ではなかろうか。このほかにも、全景写真を見ると帯状に分布する礫群の延長上に数条の溝跡が平行して延びる様子が認められ（参考写真４、正面奥）、同様に礫群を断ち割った写真や実測図にも礫群側縁に並走する溝跡らしき痕跡が認められることや、現在も湧水がある低湿地に面した高位面の縁辺部境界に位置すること、池の対岸（むしろその存否そのもの）が不明であることなど、坂下遺跡例に類似する点が極めて多いことがわかったのだ。

さてそれでは、衣の関道遺跡例に酷似する坂下遺跡の敷石遺構・池状遺構は、既成事実化した前者にならい、それぞれ「州浜」・「園池」と呼ばれるべきなのだろうか。いや、それは全く逆であろう。調査未了の衣の関道遺跡例についてこそ、一通り調査が済んだ坂下遺跡例の調査成果を踏まえ、現時点で知りうる事実を元にもう一度冷静に検討・解釈する必要があることは明らかだ。繰り返しになるが、筆者はこの種の遺構を、低位面にあるはずとされる園池に付属するものと見なすのではなく、むしろ高位面の主体的空間の縁辺部を区画する護岸的な構造物が、一部に道路としての機能を併せ持っ

参考写真２　坂下遺跡「敷石遺構」

参考写真３　衣の関道遺跡「州浜状遺構」

参考写真４　衣の関道遺跡「池状遺構」

たものとみるのが妥当と考えている。ここで一旦園池の存否を再考することが、衣の関道遺跡や衣川遺跡群の重要性そのものを根底から揺るがすとは筆者には思われない。とはいえども、園池の存在に大きく依拠する解釈にとってみれば、足下の砂が瞬く間に流れ去る一大事ではあろう。

飛躍が過ぎては同じ轍を踏みかねないが、衣の関道遺跡例については、調査未了であることを十分に念頭において取り扱う必要があることを重ねて強調しておきたい。もし精査未了の遺構が不完全なまま持ち出され、考古学的所見とは無縁なところで都合の良い結論を与えられることなどがあるとしたら、一介の調査者としても強い憂慮を禁じ得ないのだ。衣の関道遺跡例を「園池」と断じ、その背後に重要居館の存在までを強弁する論が連なった編書の結尾で、入間田氏は「調査未了につき詳細不明」とする調査担当者の態度に配慮するよう繰り返し注意を促している（入間田編 2007）。この信頼に応えるためにも、我々調査者は遺跡に対して真摯に向き合い、ありのままの事実を淡々と発信する態度を堅持することが何より肝要だ。世界遺産登録を切望する熱波に四方を取り囲まれた今こそ、静かに意を新たにしたい。

参考・引用文献

平泉町教育委員会　2000 『平泉遺跡群発掘調査略報』 岩手県平泉町文化財調査報告書第 75 集

平泉町教育委員会　2004 『特別史跡無量光院跡発掘調査報告書Ⅰ』 岩手県平泉町文化財調査報告書第 87 集

及川真紀・福島正和　2006 「衣川遺跡群とは何か」『歴史評論』No.678　校倉書房

入間田宣夫　編　2007 『平泉・衣川と京・福原』 高志書院

附　　編

附編１　放射性炭素年代測定

坂下遺跡放射性炭素年代測定（AMS 測定）

（株）加速器分析研究所

（１）遺 跡 の 位 置

坂下遺跡は、岩手県西磐井郡平泉町平泉字坂下 43-5（北緯 38°　59′　59″、東経 141°　6′　31″）に所在する。衣川と北上川の合流点付近に形成された氾濫原上に位置する。

（２）測 定 の 意 義

堆積層の形成年代を推定する。

（３）測定対象試料

測定対象試料は、坂下遺跡第 10 次調査で出土した炭化物 4 点である。試料 No.1（IAAA-61638）が池状遺構 D-D’ベルト 2a 層下面、No.2（IAAA-61639）が同遺構 D-D’ベルト 2b 層中位、No.3（IAAA-61640）が同遺構 E-E’ベルト 4b 層下面、No.5（IAAA-61642）が敷石遺構 D-D’断面 2 層下部（西側側溝埋土）から出土した。試料は採取後、アルミホイルで包み、チャック付きビニール袋に入れて保管した。

（４）化学処理工程

１）メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。

２）AAA（Acid Alkali Acid）処理。酸処理、アルカリ処理、酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では 1N の塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では 0.001 ～ 1N の水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では 1N の塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90℃で乾燥する。

３）試料を酸化銅 1g と共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で 30 分、850℃で 2 時間加熱する。

４）液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素（CO2）を精製する。

５）精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（還元）し、グラファイトを作製する。

６）グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着し測定する。

（５）測　定　方　法

測定機器は、3MV タンデム加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。134 個の試料が装填できる。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また、加速器により $^{13}C/^{12}C$ の測定も同時に行う。

（６）算　出　方　法

１）年代値の算出には、Libby の半減期 5568 年を使用した。

２）BP 年代値は、過去において大気中の炭素 14 濃度が一定であったと仮定して測定された、1950

年を基準年として遡る放射性炭素年代である。

3）付記した誤差は、次のように算出した。
複数回の測定値について、χ^2 検定を行い測定値が1つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、みなせない場合には標準誤差を用いる。

4）$\delta^{13}C$ の値は、通常は質量分析計を用いて測定するが、AMS 測定の場合に同時に測定される $\delta^{13}C$ の値を用いることもある。
$\delta^{13}C$ 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰；パーミル）で表した。

$$\delta^{14}C = [(^{14}AS - {}^{14}AR) / {}^{14}AR] \times 1000 \qquad (1)$$

$$\delta^{13}C = [(^{13}AS - {}^{13}APDB) / {}^{13}APDB] \times 1000 \qquad (2)$$

ここで、^{14}AS：試料炭素の ^{14}C 濃度：$(^{14}C/^{12}C)_S$ または $(^{14}C/^{13}C)_S$
^{14}AR：標準現代炭素の ^{14}C 濃度：$(^{14}C/^{12}C)_R$ または $(^{14}C/^{13}C)_R$

$\delta^{13}C$ は、質量分析計を用いて試料炭素の ^{13}C 濃度（$^{13}AS = {}^{13}C/^{12}C$）を測定し、PDB（白亜紀のベレムナイト（矢石）類の化石）の値を基準として、それからのずれを計算した。但し、加速器により測定中に同時に $^{13}C/^{12}C$ を測定し、標準試料の測定値との比較から算出した $\delta^{13}C$ を用いることもある。この場合には表中に〔加速器〕と注記する。

また、$\Delta^{14}C$ は、試料炭素が $\delta^{13}C = -25.0$（‰）であるとしたときの ^{14}C 濃度（$^{14}A_N$）に換算した上で計算した値である。（1）式の ^{14}C 濃度を、$\delta^{13}C$ の測定値をもとに次式のように換算する。

$$^{14}A_N = {}^{14}A_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}C / 1000))^2$$ （$^{14}A_S$ として $^{14}C/^{12}C$ を使用するとき）

または

$$= {}^{14}A_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}C / 1000))$$ （$^{14}A_S$ として $^{14}C/^{13}C$ を使用するとき）

$$\Delta^{14}C = [(^{14}A_N - {}^{14}A_R) / {}^{14}A_R] \times 1000 \ (‰)$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしない $\delta^{14}C$ に相当する BP 年代値が比較的よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

^{14}C 濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC（percent Modern Carbon）がよく使われており、$\Delta^{14}C$ との関係は次のようになる。

$$\Delta^{14}C = (pMC / 100 - 1) \times 1000 \ (‰)$$

$$pMC = \Delta^{14}C / 10 + 100 \ (\%)$$

国際的な取り決めにより、この $\Delta^{14}C$ あるいは pMC により、放射性炭素年代（Conventional Radiocarbon Age；yrBP）が次のように計算される。

$$T = -8033 \times \ln [(\Delta^{14}C / 1000) + 1]$$

＝ － 8033 × ln（pMC ／ 100）

5）^{14}C 年代値と誤差は，1 桁目を四捨五入して 10 年単位で表示する。

6）較正暦年代の計算では、IntCal04 データベースを用い、OxCalv3.10 較正プログラムを使用した。

（7）測　定　結　果

池状遺構 D-D’ ベルト 2a 層下面から出土した試料 No.1（IAAA-61638）が 910±30yrBP、D-D’ ベルト 2b 層中位から出土した No.2（IAAA-61639）が 1220±30yrBP、E-E’ ベルト 4b 層下面から出土した No.3（IAAA-61640）が 1590±30yrBP、敷石遺構 D-D’ 断面 2 層下部（西側側溝埋土）から出土した No.5（IAAA-61642）が 910±30yrBP の 14C 年代である。池状遺構の堆積土中から出土した炭化物の年代は、No.1 が暦年較正年代（1σ）で 1040AD ～ 1170AD、No.2 が 700AD ～ 870AD、No.3 が 420AD ～ 540AD に相当する。下層ほど古い値であるが、人為的に構築された遺構埋土の年代としては時間幅が広い。池状遺構 2a 層下面と敷石遺構 2 層下部から出土した炭化物は共に平安時代後期後半に相当する暦年較正年代であり、同一時期の堆積物と考えられる。

参考文献

Stuiver, M. and Polash, H. A. (1977) Discussion : Reporting of 14C data. *Radiocarbon*, 19 : 355-363

IAA

IAA Code No.	試　料	BP 年代および炭素の同位体比
IAAA-61638	試料採取場所：岩手県西磐井郡平泉町	Libby Age（yrBP）　：　910　±　30
	平泉字坂下 43-5	δ^{13}C（‰）、（加速器）　＝　-23.55±　0.65
	試料形態：　木炭	Δ^{14}C（‰）　＝　-107.5　±　3.2
	試料名（番号）：No.1	pMC（%）　＝　89.25 ±　0.32
	（参考）　δ^{13}C の補正無し	δ^{14}C（‰）　＝　-104.8　±　3.0
		pMC（%）　＝　89.52 ±　0.30
#1450-1		Age（yrBP）　：　890　±　30
IAAA-61639	試料採取場所：岩手県西磐井郡平泉町	Libby Age（yrBP）　：　1,220　±　30
	平泉字坂下 43-5	δ^{13}C（‰）、（加速器）　＝　-23.77±　0.68
	試料形態：　木炭	Δ^{14}C（‰）　＝　-141.2　±　3.2
	試料名（番号）：No. 2	pMC（%）　＝　85.88 ±　0.32
	（参考）　δ^{13}C の補正無し	δ^{14}C（‰）　＝　-139.1　±　3.0
		pMC（%）　＝　86.09 ±　0.30
#1450-2		Age（yrBP）　：　1,200　±　30
IAAA-61640	試料採取場所：岩手県西磐井郡平泉町	Libby Age（yrBP）　：　1,590　±　30
	平泉字坂下 43-5	δ^{13}C（‰）、（加速器）　＝　-26.66±　0.69
	試料形態：　木炭	Δ^{14}C（‰）　＝　-179.5　±　3.1
	試料名（番号）：No. 3	pMC（%）　＝　82.05 ±　0.31
	（参考）　δ^{13}C の補正無し	δ^{14}C（‰）　＝　-182.3　±　2.9
		pMC（%）　＝　81.77 ±　0.29
#1450-3		Age（yrBP）　：　1,620　±　30

1　放射性炭素年代測定

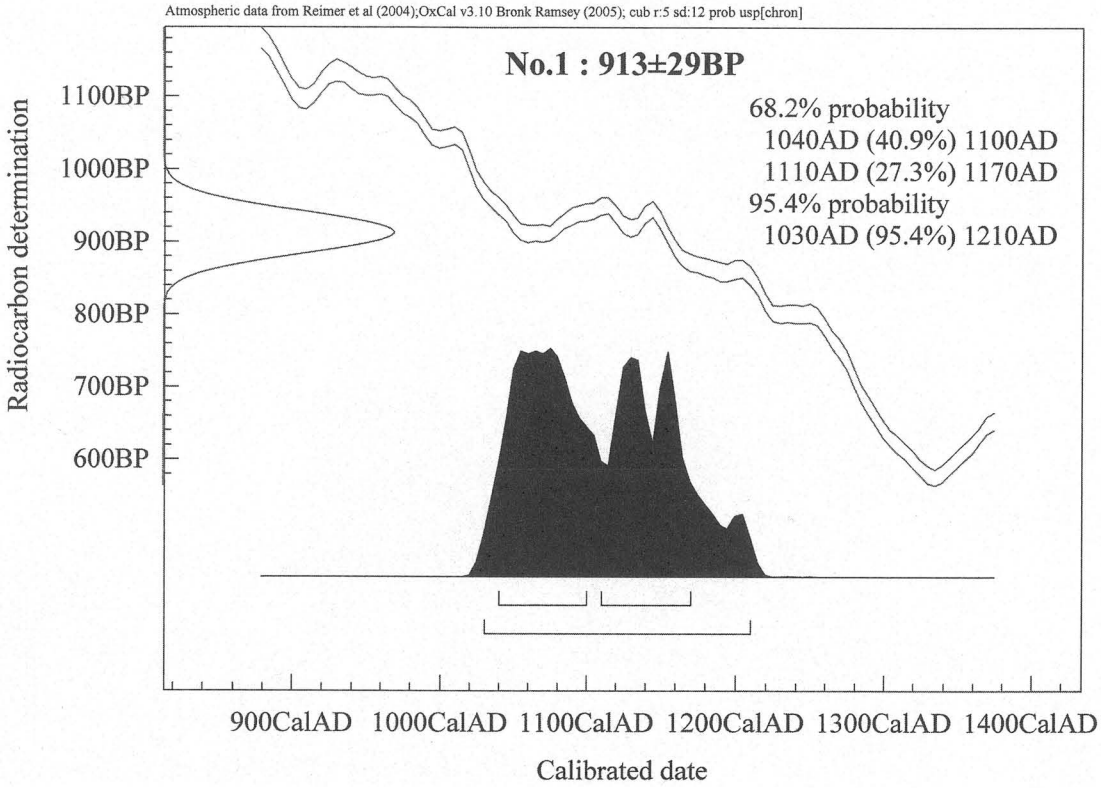
IAAA-61642	試料採取場所：岩手県西磐井郡平泉町	Libby Age（yrBP）	:	910	±	30
	平泉字坂下 43-5	δ^{13}C（‰）、（加速器）	=	-29.24	±	0.56
	試料形態：　木炭	Δ^{14}C（‰）	=	-107.3	±	3.2
	試料名（番号）：No. 5	pMC（%）	=	89.27	±	0.32
	（参考）　δ^{13}C の補正無し	δ^{14}C（‰）	=	-115.1	±	3.0
		pMC（%）	=	88.49	±	0.30
#1450-5		Age（yrBP）	:	980	±	30

IAA

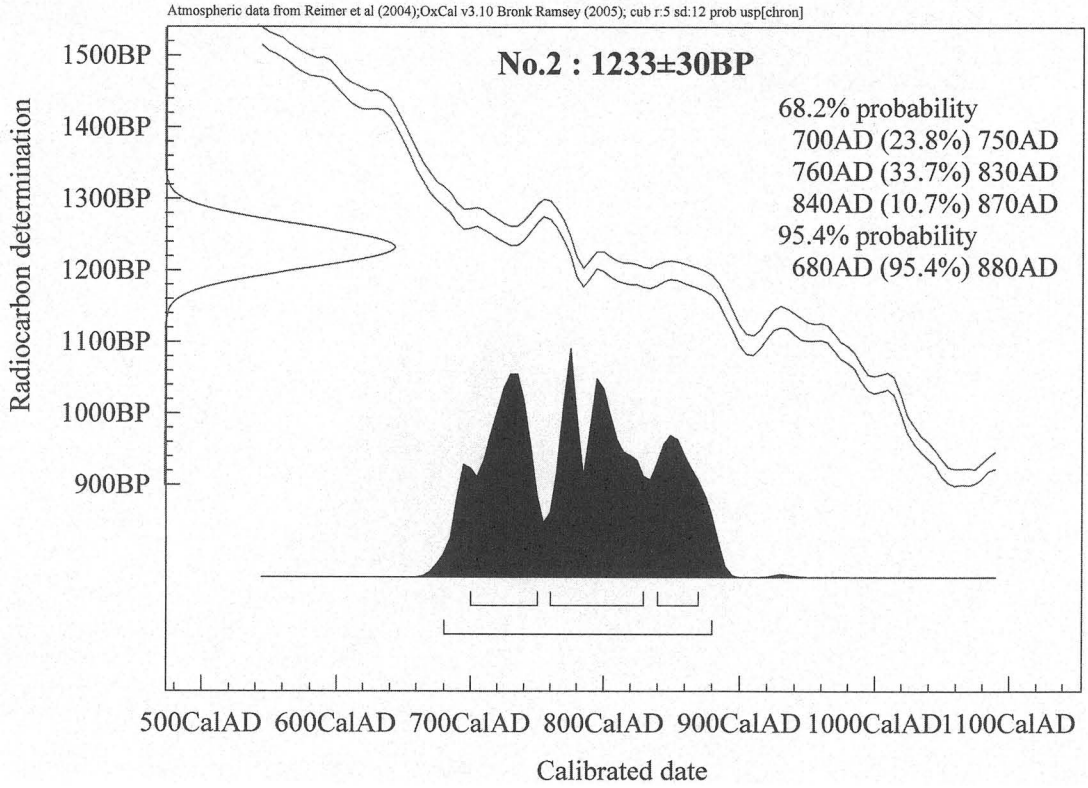
IAA Code No.	試料番号	Libby Age（yrBP）
IAAA-61638	No. 1	913 ± 29
IAAA-61639	No. 2	1233 ± 30
IAAA-61640	No. 3	1590 ± 30
IAAA-61642	No. 5	912 ± 29

ここに記載する Libby　Age（年代値）と誤差は下１桁を丸めない値です。

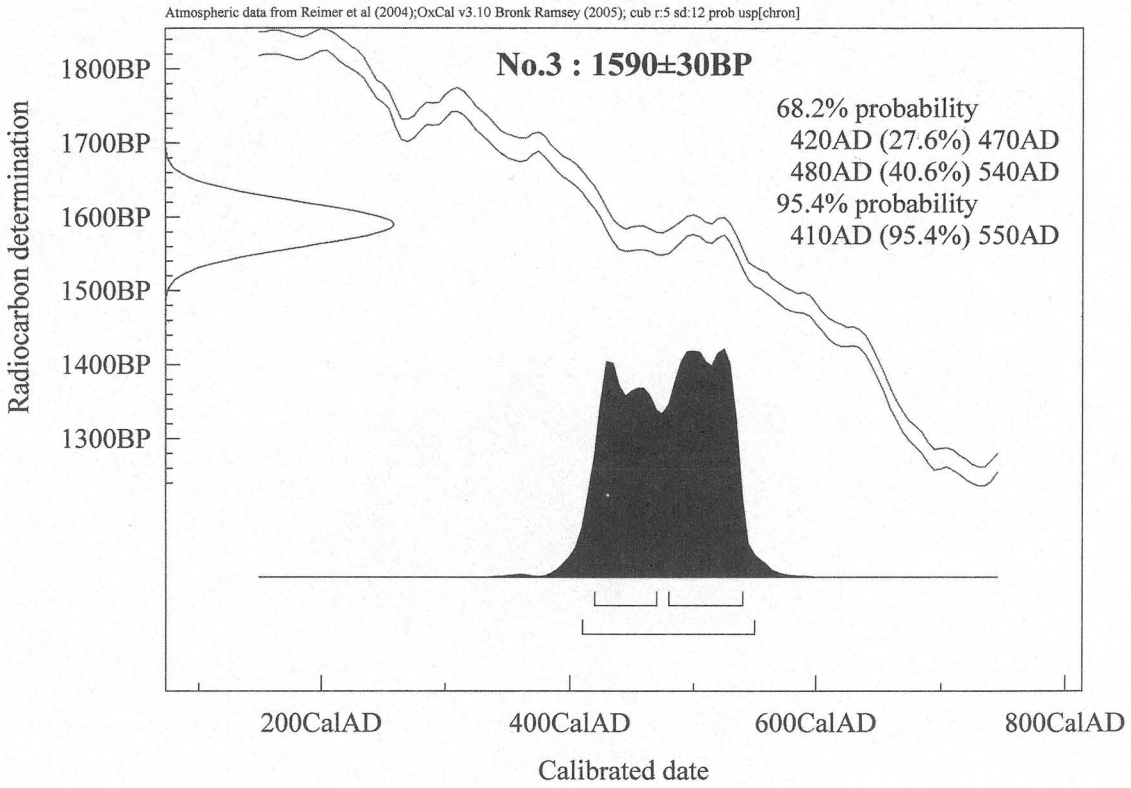
【参考値：暦年補正　Radiocarbon determination】



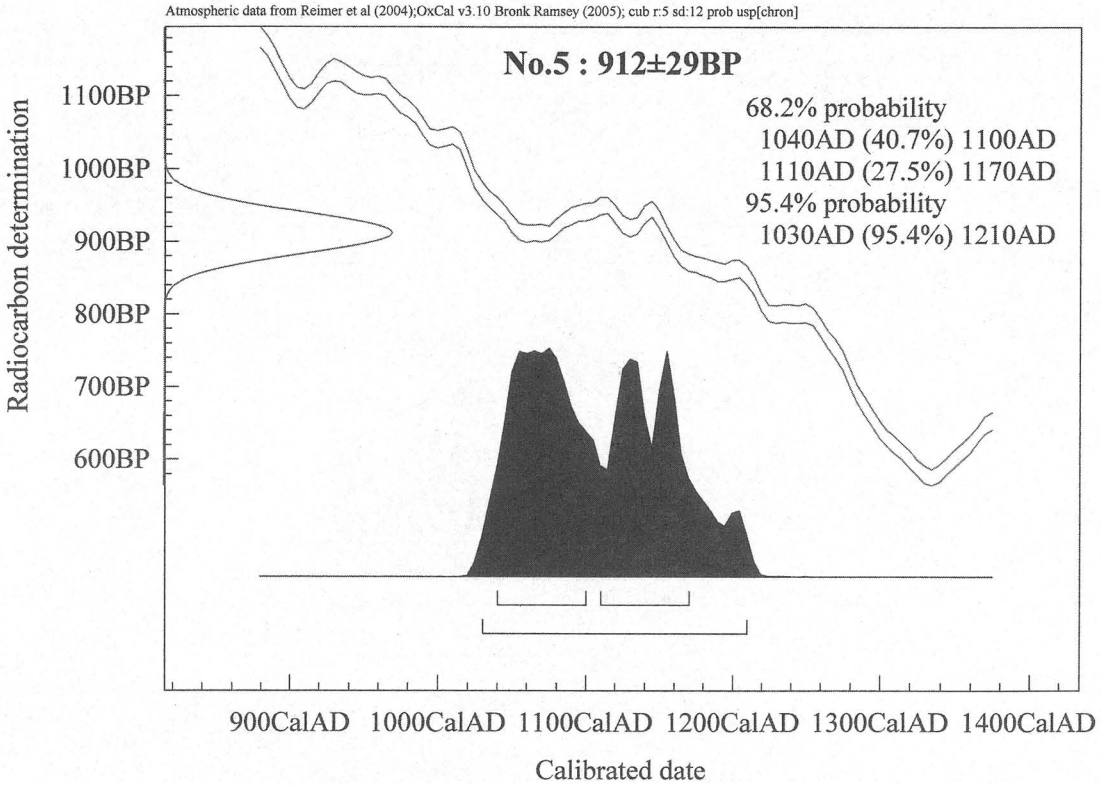
【参考値：暦年補正　Radiocarbon determination】



【参考値：暦年補正　Radiocarbon determination】



【参考値：暦年補正　Radiocarbon determination】



附編２　火山灰同定・微化石分析

坂下遺跡（第10次調査）の自然科学分析調査

パリノ・サーヴェイ株式会社

は　じ　め　に

岩手県平泉町に所在する坂下遺跡は、北上川中流域の右岸、支流の衣川が合流する付近の沖積低地に位置する。発掘調査所見によれば、今回の発掘調査区の位置は、中尊寺のある丘陵である関山の東側斜面直下に位置し、関山から流れ下る小規模な沢筋に挟まれた微高地上にあるとされている。今回行われた第10次調査では、掘立柱建物跡や敷石上遺構、池状遺構などの遺構が検出され、12世紀のものを中心とするかわらけ、陶磁器片などが出土している。

今回の分析調査では、調査区内で検出された沢跡の堆積物中に認められた火山灰（テフラ）とされる堆積物について、その砕屑物の性状を明らかにすることにより、テフラであることの確認と、テフラである場合には既知のテフラとの対比を行う。また、池状遺構の堆積物を対象として、珪藻、花粉、植物珪酸体の各微化石分析を行う。この結果から、池状遺構内の堆積環境や周辺の古植生等について検討を行う。

Ⅰ　火山灰の同定

１　試　　料

試料は、沢跡の断面が作成された④・⑤区中央トレンチの１層より採取された、火山灰とみられる堆積物１点である。試料の外見は、にぶい黄橙色を呈する砂質シルトである。

２　分　析　方　法

試料約20ｇを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の３タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。
さらに火山ガラスが検出された場合には、その屈折率を測定することにより、テフラを特定するための指標とする。屈折率の測定は、古澤(1995)のMAIOTを使用した温度変化法を用いた。

３　結　　果

処理後に得られた砂分は、多量の細砂～極細砂径の火山ガラスと多量の軽石から構成される。火山ガラスのほとんどは無色透明の塊状の軽石型であり、少量の繊維束状のものも混在する。また、微量の無色透明のバブル型も認められる。軽石は、最大径約0.8mmで粒径の淘汰は良好、白色を呈し、発泡はやや良好～やや不良である。火山ガラスと軽石の他には、少量の斜長石などの遊離結晶が認められる。

火山ガラスの屈折率測定結果を図１に示す。n1.497～1.508のレンジに入り、n1.505～1.506にモードがある。

4 考　　察

試料は、細粒の軽石および火山ガラスからなるテフラである。上述した砕屑物の特徴および坂下遺跡の地理的位置と、これまでに研究された東北地方におけるテフラの産状（町田ほか(1981；1984)、Arai et al.(1986)、町田・新井(2003)など）との比較から、試料は、十和田aテフラ(To-a)の降下堆積物に由来すると考えられる。To-aは、平安時代に十和田カルデラから噴出したテフラであり、給源周辺では火砕流堆積物と降下軽石からなるテフラとして、火砕流の及ばなかった地域では軽石質テフラとして、さらに給源から離れた地域では細粒の火山ガラス質テフラとして、東北地方のほぼ全域で確認されている（町田ほか,1981)。また、その噴出年代については、早川・小山(1998)による詳細な調査によれば、西暦915年とされている。なお、町田ほか(1981)は、To-aのn1.502以下の低い屈折率の火山ガラスを主体とする火山灰層は南方へ広がらず、十和田周辺とその東方地域に分布が限られるとしている。しかし、今回の屈折率測定結果は、低屈折率の火山ガラスも微量ながら、岩手県南部まで及んでいることを示唆するものといえよう。

今回の試料は、テフラの本質物以外の砕屑物が極めて少ないことから、To-a噴出時に沢内に降下堆積したものである可能性が高い。その場合、テフラ層より下位の沢内堆積物は、10世紀以前の堆積層、テフラ層より上位の堆積物は10世紀以後の堆積層となる。今回のTo-aの産状は、調査区内の沢跡を中心とした堆積層の時期を推定する上で、重要な手がかりになると考えられる。

Ⅱ 池状遺構堆積物における微化石分析

1 試　　料

試料は、④⑤区で検出された池状遺構に十字形に作成されたベルトのうち、西側のベルトの中程より、発掘調査者側により採取された。試料は、幅・奥行きともに約20cm、高さ約30cmの柱状ブロックとして採取されている。柱状ブロックの基底には、径7cmほどの角礫が数個含まれており、池の基底に相当すると考えられる。ブロックの基底直上には、厚さ約5cmの黄褐色シルト質粘土層が認められ、その上位に厚さ約25cmの暗灰褐色を呈する粘土質シルト層が認められた。また、この暗灰褐色粘土質シルト層の中程は、やや色調の暗い層位が認められた。

分析試料は、暗灰褐色粘土質シルト層の上部、中部、下部およびその下位の黄褐色シルト質粘土層の各層位から1点ずつ採取し、上位より試料番号1～4とした（図2)。分析には、これらのうち、試料番号1と3の2点を選択した。

2 分　析　方　法

(1) 珪　藻　分　析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理･化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する（化石の少ない試料はこの限りではないが､1プレパラートあたり50個体以上の試料については2枚検鏡する）。種の同定は､原口ほか(1998)、Krammer (1992)、Krammer & Lange-Bertalot (1986, 1988, 1991a, 1991b)、渡辺(2005)、Witkowski *et al.* (2000)などを参照し、分類体系はRound, Crawford & Mann (1990)に従った。

同定結果は、中心類(Centric diatoms; 広義のコアミケイソウ綱Coscinodiscophyceae)と羽状類

(Pennate diatoms) に分け、羽状類は無縦溝羽状珪藻類 (Araphid pennate diatoms: 広義のオビケイソウ綱 Fragilariophyceae) と有縦溝羽状珪藻類 (Raphid pennate diatoms; 広義のクサリケイソウ綱 Bacillariophyceae) に分けた。また、有縦溝類は、単縦溝類、双縦溝類、管縦溝類、翼管縦溝類、短縦溝類に細分した。

各種類の塩分濃度に対する区分は Lowe (1974) に従い、真塩性種 (海水生種)、中塩性種 (汽水生種)、貧塩性種 (淡水生種) に分け、貧塩性種については、はさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度 (pH)・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。そして、産出個体数 100 個体以上の試料については、産出率 2.0%以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析は、真塩性種～中塩性種については小杉 (1988)、貧塩性種については安藤 (1990)、陸生珪藻については伊藤・堀内 (1991)、汚濁耐性については、Asai & Watanabe (1995)、渡辺 (2005) の環境指標種を参考とする。

(2) 花　粉　分　析

試料約 10g について、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液 (臭化亜鉛，比重 2.3) による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス (無水酢酸 9：濃硫酸 1 の混合液) 処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400 倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

(3) 植物珪酸体分析

湿重 5g 前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法 (ポリタングステン酸ナトリウム，比重 2.5) の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。

400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部 (葉身と葉鞘) の葉部短細胞に由来した植物珪酸体 (以下、短細胞珪酸体と呼ぶ) および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体 (以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)、およびこれらを含む珪化組織片を近藤 (2004) の分類に基づいて同定し、計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から古植生について検討するために、植物珪酸体群集を図化した。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求めた。

3 結　　果

(1) 珪　藻　分　析

結果を表 1、図 3 に示す。いずれの試料も珪藻化石が豊富に産出する。完形殻の出現率は、約 50% と化石の保存状態は良好とは言えない。産出分類群数は、合計で 35 属 96 分類群である。以下に珪藻化石群集の特徴を述べる。

試料番号 1、3 ともに淡水域に生育する水生珪藻（以下、水生珪藻と言う）が全体の約 70-80% を占

め優占する。これに付随して、陸上のコケや土壌表面など多少の湿り気を保持した好気的環境に耐性のある陸生珪藻も約20%前後産出する。淡水性種の生態性（塩分濃度、水素イオン濃度、流水に対する適応能）の特徴は近似しており、貧塩不定性種、pH不定性種と真＋好アルカリ性種、流水不定性種が優占あるいは多産する。2試料とも同じ様な種が産出するが、産出割合に違いが見られる。

試料番号3は、流水不定性の *Gomphonema parvulum* が約10%と比較的多く出現し、流水不定性の *Gomphonema angustatum*、*Caloneis silicula*、流水不定性で沼沢湿地付着生種群の *Cymbopleura naviculiformis*、*Pinnularia gibba*、*Pinnularia viridis*、*Eunotia minor*、止水性で沼沢湿地付着生種群の *Pinnularia acrosphaeria*、*Pinnularia nodosa* 等を伴う。また、陸生珪藻としては、耐乾性の高い陸生珪藻A群の *Amphora montana*、*Hantzschia amphioxys* 等を伴う。

試料番号1は、好流水性の *Placoneis elginensis* var. *neglecta* が約10%と比較的多かった他は、流水性で中～下流性河川指標種群の *Planothidium lanceolatum*、流水不定性の *Gomphonema angustatum*、*Gomphonema parvulum*、流水不定性で沼沢湿地付着生種群の *Pinnularia gibba* var. *linearis*、止水性で沼沢湿地付着生種群の *Pinnularia nodosa* 等を伴う。また、陸生珪藻としては、陸生珪藻A群の *Luticola mutica*、*Hantzschia amphioxys* 等を伴う。

なお、今回調査対象とした試料の中には、*Actinocyclus ingens* 等の第三紀絶滅種を含む海水生種の *Paralia sulcata*、*Coscinodiscus* spp. 等も少量ながら産出した。

(2) 花　粉　分　析

結果を表2、図4に示す。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。いずれの試料においても花粉化石の産出状況が良好であり、保存状態も良い。

試料番号3,1のいずれも、花粉群集組成は類似しており、木本花粉ではマツ属、スギ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属－ケヤキ属が多く産出する。その他ではサワグルミ属、クマシデ属－アサダ属、ハンノキ属、カエデ属、トチノキ属などを伴う。

草本花粉では、イネ科、ヨモギ属が多産し、カヤツリグサ科、クワ科、アカザ科、ナデシコ科などを伴う。また、サジオモダカ属、ミズアオイ属、ツリフネソウ属などの水湿地生植物に由来する花粉も検出され、栽培種であるソバ属も認められる。

(3) 植物珪酸体分析

結果を表3、図5に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。

試料番号1と3では、同様な植物珪酸体の産状が見られる。すなわち、ネザサ節を含むタケ亜科やヨシ属の産出が目立ち、栽培植物のイネ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが検出される。なお、試料番号1ではイネ属の出現率が試料番号3よりも高くなる。

4 考　　察

(1) 池内の堆積環境について

試料番号1、3ともに同じ様な種類が産出したが、主要種の産出割合が異なっていた。下位の試料番号3は、沼沢湿地付着生種群を含む流水不定性種や止水性種によって特徴付けられ、水深のある湖沼等に生育する浮遊性種は全く産出しなかった。よって、本試料が堆積する頃は、水深の浅い池沼あるいは沼沢地のような水域であったと考えられる。試料番号1になると、中～下流性河川指標種群を含む流水性種が増加したことから、遺構内に流水の流れ込みがあったと考えられる。また、陸生珪藻も増加したことから周囲の乾いた場所から陸生珪藻を含む土壌が流水と共に流れ込んだと考えられる。

すなわち、水深の浅い池が、周辺からの土砂の流れ込みにより埋積していった過程が、珪藻化石の産状から確認されたといえる。

なお、今回の珪藻分析では、第三紀絶滅種を含む海水生種が産出したが、その給源としては衣川以南に分布する磐井丘陵を構成する海成の中・後期中新統（小野寺,1957）があげられる。このことも、池を埋積した土砂が、周辺の堆積物に由来することを示唆している。

(2) 植生について

花粉化石の産状から、比較的広域の植生を反映する木本類についてみると、マツ属、スギ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属－ケヤキ属が比較的多く認められ、サワグルミ属、クマシデ属－アサダ属、ハンノキ属、カエデ属、トチノキ属などを伴う。このうち、ニレ属－ケヤキ属は、河畔や低湿地などの適湿地に林分を形成する種を含む分類群であり、サワグルミ属、クマシデ属－アサダ属、ハンノキ属、カエデ属、トチノキ属なども、同様の生育環境を示す。また、ブナ属、コナラ亜属などは、冷温帯性落葉広葉樹林の主要構成要素である。

本地域の潜在自然植生（人間の影響を一切停止したときに、現在の気候、地形、土壌条件下で成立すると考えられる自然植生）をみると、河川沿いなどにはハンノキ－ヤチダモ群集、シロヤナギ群集、周辺丘陵部はモミ－イヌブナ群集、アブラツツジ－イヌブナ群集、クリ－コナラ群集、山地部ではチシマザサ－ブナ群団とされている（宮脇編著,1987)。これらのことから、堆積当時の本遺跡周辺では、後背の丘陵・山地部にはブナ属を主体とする落葉広葉樹林が成立しており、丘陵縁辺部や低地部などには部分的にスギ属などの林分も認められたと思われる。また、衣川、北上川沿いなどの河畔や低湿地には、ハンノキ属を主体とした湿地林が分布していたと推測される。

一方、本遺跡内及びその周辺を反映する草本類の花粉化石についてみると、イネ科、ヨモギ属が多産し、カヤツリグサ科、クワ科、アカザ科、ナデシコ科などを伴う。これらはいずれも、開けた明るい場所を好む「人里植物」を多く含む分類群であることから、本遺構周辺の開けた草地に、これらの草本類が生育していたと思われる。また、わずかであるが、サジオモダカ属、ミズアオイ属、ツリフネソウ属などの、水湿地生植物に由来する花粉が検出されることから、これらが遺構内及びその周囲の湿地部に生育していた可能性がある。

植物珪酸体の産状からは、池状遺構の内部や周辺の湿潤な場所にはヨシ属など、周辺の乾いた場所にはネザサ節などが生育していたことが推定される。

なお、いずれの層準からも栽培種であるソバ属の花粉化石が検出されることから、当時周辺域ではソバ栽培が行われていた可能性がある。さらに、遺構の下部試料からは、栽培植物のイネ属もわずかに検出された。周辺から土壌が流入していたと考えられることから、検出されたイネ属は周囲の稲作地から流入したものと思われる。また、上部の試料からもイネ属が検出され、下部よりも出現率が高かった。しかし、現状での土地利用は稲作地であり、埋積物の直上で稲作が行われていた可能性があるため、上部の試料から検出されたイネ属は上位の耕作土からの落込みの可能性もある。池状遺構に水域があった当時の本遺跡周辺における稲作については、今後さらに周辺に分布する同時期の堆積物を対象としてイネ属の層位的な消長や分布域を確認した上で検討することが望まれる。

引用文献

安藤　一男，1990，淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理，42, 73-88.

Arai, F.・Machida, H.・Okumura, K.・Miyauchi, T.・Soda, T.・Yamagata, K, 1986, Catalog for late quaternary marker-tephras in Japan　II　－ Tephras occurring in Northeast Honshu and Hokkaido －. Geographical reports of Tokyo Metropolitan University No. 21, 223-250.

Asai, K. & Watanabe, T., 1995, Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic

Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom, 10, 35-47.
古澤　明，1995，火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別．地質学雑誌，101，123-133.
原口　和夫・三友　清史・小林　弘，1998，埼玉の藻類　珪藻類．埼玉県植物誌，埼玉県教育委員会，527-600.
早川由紀夫・小山真人，1998，日本海をはさんで10世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日－十和田湖と白頭山－．火山，43，403-407.
Hustedt, F., 1937-1939, Systematische und okologische Untersuchungen uber die Diatomeen-Flora von Java,, Bali und Sumatra. Archiv fur Hydrobiology, Supplement, 15:131-177, 15:187-295, 15:393-506, 15:638-790, 16:1-155, 16:274-394.
伊藤　良永・堀内　誠示，1991，陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用．珪藻学会誌，6，23-45.
近藤　錬三，2004，植物ケイ酸体研究．ペドロジスト，48，46-64.
小杉　正人，1988，珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究，27，1-20.
Krammer, K., 1992, PINNULARIA. eine Monographie der europaischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND 26. J. CRAMER, 353p.
Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1986, Bacillariophyceae. 1. Teil: Naviculaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/1. Gustav Fischer Verlag, 876p.
Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1988, Bacillariophyceae. 2. Teil: Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band 2 / 2. Gustav Fischer Verlag, 536p.
Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1991a, Bacillariophyceae. 3. Teil: Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band 2 / 3. Gustav Fischer Verlag, 230p.
Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1991b, Bacillariophyceae. 4. Teil: Achnanthaceae, Kritsche Ergaenzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band 2/ 4. Gustav Fischer Verlag, 248p.
Lowe, R. L, 1974, Environmental Requirements and pollution Tolerance of Fresh-water Diatoms. 334p. In Environmental Monitoring Ser. EPA Report 670/ 4-74-005. Nat. Environmental Res. Center Office of Res. Develop., U.S. Environ. Protect. Agency, Cincinati.
町田　洋・新井房夫，2003，新編　火山灰アトラス．東京大学出版会，336p.
町田　洋・新井房夫・森脇　広，1981，日本海を渡ってきたテフラ．科学，51，562-569.
町田　洋・新井房夫・杉原重夫・小田静夫・遠藤邦彦，1984，テフラと日本考古学－考古学研究と関連するテフラのカタログ－．渡辺直経（編）古文化財に関する保存科学と人文・自然科学．同朋舎，865-928.
宮脇　昭（編著），1987，日本植生誌　東北．至文堂，605p.
小野寺信吾，1957，岩手県一関市で発見されたDesmostylusと、その産地附近の地質．地質学雑誌，63，238-253.
Round, F. E.., Crawford, R. M. & Mann, D. G. 1990, The diatoms. Biology & morphology of the genera. 747p. Cambridge University Press, Cambridge.
渡辺 仁治，2005，淡水珪藻生態図鑑 群集解析に基づく汚濁指数DAIpo, pH耐性能．内田老鶴圃，666p.
Witkowski, A., & Lange-Bertalot, H. & Metzeltin, D., 2000, Iconographia Diatomologica 7. Diatom flora of Marine coast I. A. R. G. Gantner Verlag K. G., 881p.

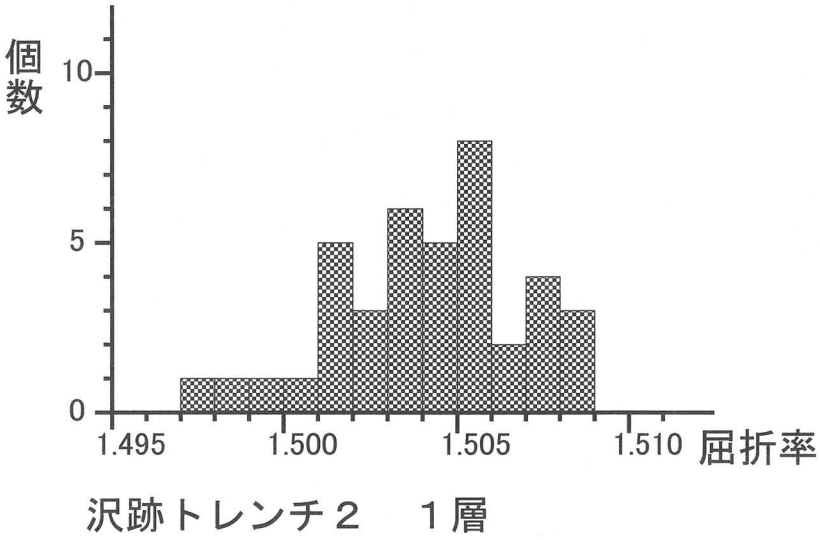


図 1. 火山ガラスの屈折率測定結果

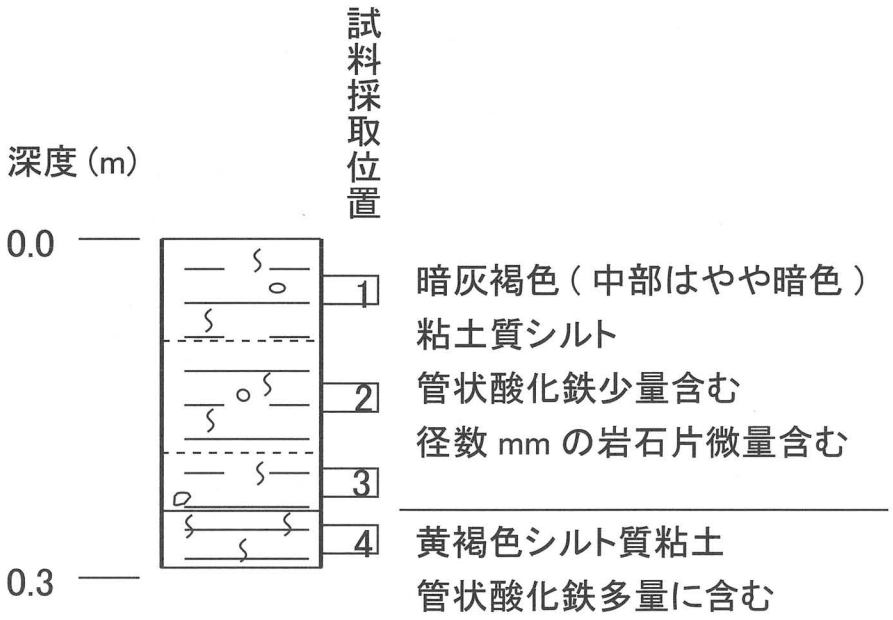


図 2. ④⑤区池状遺構堆積物の柱状図

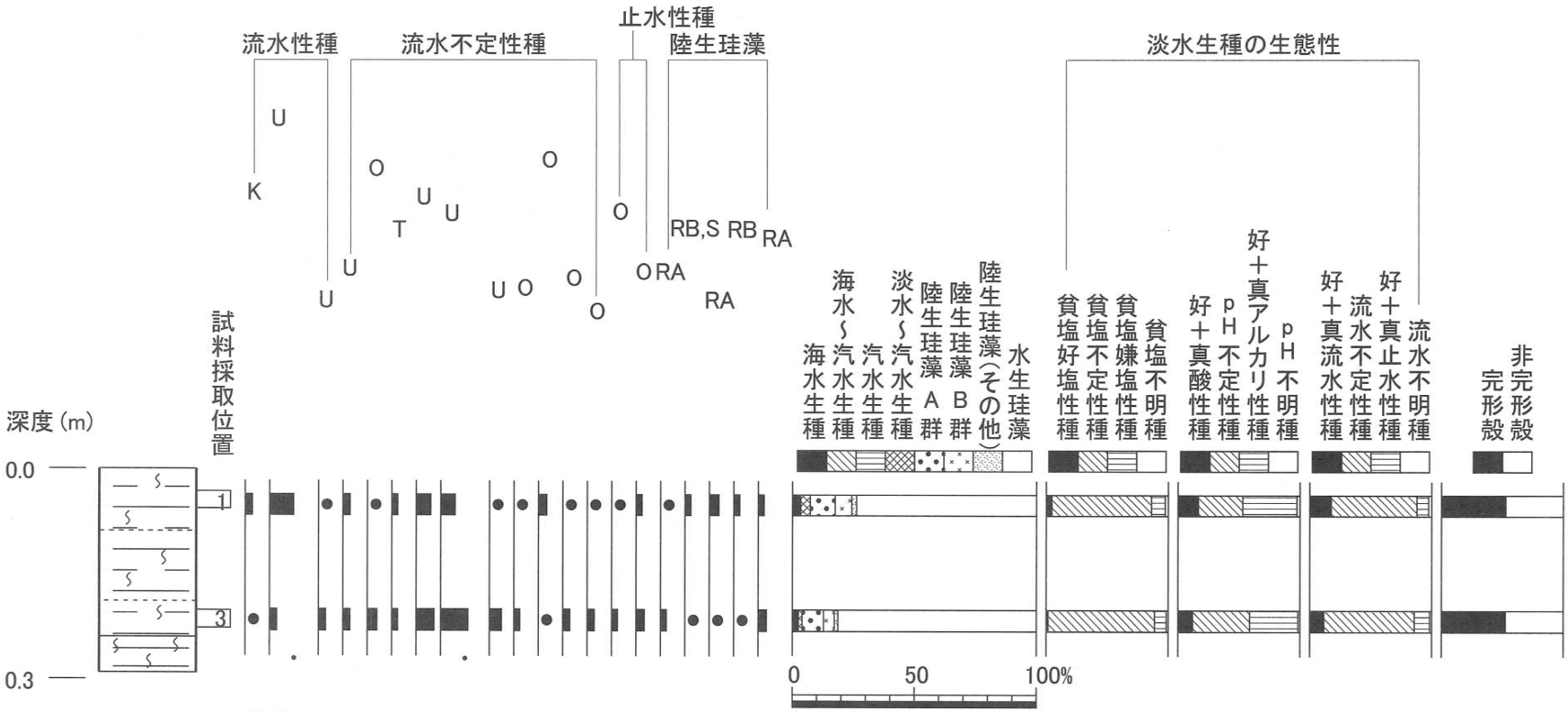


図 3. ④⑤区池状遺構堆積物における主要珪藻化石群集の層位分布

海水－汽水－淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。

いずれも 100 個体以上検出された試料について示す。なお、●は 2 %未満の産出を示す。

環境指標種群

K: 中～下流性河川指標種, O: 沼沢湿地付着生種(以上は安藤, 1990)
S: 好汚濁性種, U: 広域適応性種, T: 好清水性種 (Asai and Watanabe,1995)
R: 陸生珪藻(RA:A 群, RB:B 群, RI: 未区分、伊藤・堀内, 1991)

表1. 珪藻分析結果(1)

種　　類	生態性			環境	④⑤区池状遺構堆積物	
	塩分	pH	流水	指標種	1	3
Centric Diatoms(中心型珪藻類)						
Coscinodiscus spp.	Euh				3	2
Actinocyclus ingens Rattray	Euh				1	1
Paralia sulcata (Ehr.)Cleve	Euh			B	1	1
Thalassiosira antiqua (Grun.)Cleve	Euh				1	–
Araphid Pennate Diatoms(無縦溝羽状珪藻類)						
Fragilaria capucina var. *perminuta* (Grun.)Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind		–	3
Fragilaria vaucheriae (Kuetz.)Petersen	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	–	1
Meridion circulare var. *constrictum* (Ralfs)V.Heurck	Ogh-ind	al-il	r-bi	K,T	1	–
Synedra ulna (Nitzsch)Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	U	–	1
Thalassionema nitzschioides (Grun.)Grunow	Euh			A,B	1	–
Monoraphid Pennate Diatoms(単縦溝羽状珪藻類)						
Karayevia clevei (Grun.)Round et Bukhtiyarova	Ogh-ind	al-il	ind	T	1	2
Planothidium lanceolatum (Breb. ex Kuetz.)Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	6	3
Biraphid Pennate Diatoms(双縦溝羽状珪藻類)						
Amphora copulata (Kuetz.)Schoeman et R.E.M.Archibald	Ogh-ind	al-il	ind	U	6	6
Amphora montana Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA,U	4	5
Cymbella tumida (Breb.)Van Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	1	–
Cymbopleura naviculiformis (Auerswald)Krammer	Ogh-ind	ind	ind	O,U	3	8
Encyonema caespitosum Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	T	–	1
Encyonema mesianum (Kholnoky)D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	T	–	1
Encyonema silesiacum (Bleisch)D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	T	5	5
Placoneis elginensis (Greg.)E.J.Cox	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	2	1
Placoneis elginensis var. *neglecta* (Krasske)H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	20	6
Gomphoneis heterominuta Mayama & Kawashima	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	–	1
Gomphonema affine Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	–	1
Gomphonema angustatum (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-ind	ind	ind	U	12	15
Gomphonema angustatum var. *linearis* Hustedt	Ogh-ind	ac-il	ind		1	–
Gomphonema angustatum var. *undulata* (Greg.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	–
Gomphonema gracile Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,U	–	2
Gomphonema parvulum (Kuetz.)Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	12	23
Gomphonema pseudosphaerophorum H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	–	3
Gomphonema spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	1
Diploneis ovalis (Hilse)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	T	1	2
Diploneis parma Cleve	Ogh-ind	ind	ind		3	3
Navicula veneta Kuetzing	Ogh-Meh	al-il	ind	U	2	1
Navicula ignota Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RB,T	–	1
Navicula viridula (Kuetz.)Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,U	1	1
Navicula spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	1
Gyrosigma procerum Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	U	2	–
Gyrosigma scalproides (Rabh.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	2	–
Craticula cuspidata (Kuetz.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	S	1	1
Stauroneis acuta W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph		–	3
Stauroneis anceps Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	T	–	4
Stauroneis borrichii (Pet.)Lund	Ogh-ind	ind	ind	RI	–	1
Stauroneis lauenburgiana Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind		2	2
Stauroneis obtusa Lagerstedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	2	1
Stauroneis phoenicenteron (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O,U	2	–
Stauroneis phoenicenteron fo. *hattorii* Tsumura	Ogh-ind	ind	ind	O	2	–
Stauroneis phoenicenteron var. *signata* Meister	Ogh-ind	ind	ind		1	–
Stauroneis smithii Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	–	1
Stauroneis tenera Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	–	1
Frustulia vulgaris (Thwait.)De Toni	Ogh-ind	al-il	ind	U	–	2
Diadesmis confervacea Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RB,S	5	1
Diadesmis contenta (Grun.ex Van Heurck)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	–	1
Diadesmis contenta var. *biceps* (Arnott ex Grunow)Hamilton	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	1	–
Luticola goeppertiana (Bleisch)D.G.Mann	Ogh-hil	al-il	ind	S	1	–
Luticola mutica (Kuetz.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	8	3
Neidium productum (W.Smith)Cleve	Ogh-ind	ind	ind		1	1
Caloneis bacillum (Grun.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	2	2
Caloneis lauta Carter & Bailey-Watts	Ogh-ind	ind	ind		1	–
Caloneis leptosoma Krammer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	l-ph	RB	1	1
Caloneis limosa (Kuetz.)R.M.Patrick	Ogh-ind	al-il	l-bi		1	–
Caloneis minuta (Grunow)Ohtsuka et Fujita	Ogh-ind	al-il	ind		1	1
Caloneis silicula (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		4	10
Pinnularia acrosphaeria W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	O	4	5
Pinnularia acrosphaeria var. *undulata* Skvortzow	Ogh-ind	al-il	l-ph	O	1	1
Pinnularia acuminata W.Smith	Ogh-ind	ac-il	ind		1	–
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA,U	1	1
Pinnularia borealis var. *brevicostata* Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RA	1	1

表1. 珪藻分析結果(2)

Pinnularia brevicostata Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind		1	1
Pinnularia divergens W.Smith	Ogh-hob	ac-il	l-ph		–	1
Pinnularia gibba Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	O,U	2	5
Pinnularia gibba var. *linearis* Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind		7	1
Pinnularia graciloides Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind		1	–
Pinnularia macilenta (Ehr.)Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-ph		1	–
Pinnularia microstauron (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	S	1	1
Pinnularia neomajor Krammer	Ogh-ind	ac-il	l-bi		1	–
Pinnularia nodosa Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	5	7
Pinnularia obscura Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	1	–
Pinnularia rupestris Hantzsch	Ogh-hob	ac-il	ind		1	1
Pinnularia schoenfelderi Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	4	2
Pinnularia streptoraphe Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-ph		–	1
Pinnularia subanglica Krammer	Ogh-hob	ac-il	ind		2	1
Pinnularia subcapitata Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB,S	5	4
Pinnularia substomatophora Hustedt	Ogh-hob	ac-il	l-ph		1	–
Pinnularia ueno Skvortzow	Ogh-hob	ac-il	l-ph		1	1
Pinnularia viridis (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O,U	4	6
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		3	1
Sellaphora laevissima (Kuetz.)Mann	Ogh-ind	ind	ind	U	4	1
Sellaphora pupula (Kuetz.)Mereschkowsky	Ogh-ind	ind	ind	S	1	–
管縦溝類						
Hantzschia amphioxys (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RA,U	5	7
Nitzschia angustata (W.Smith)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		1	–
Nitzschia fonticola Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	–
Nitzschia parvuloides Cholnoky	Ogh-ind	ind	ind	U	1	–
Nitzschia tubicola Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	S	–	1
Tryblionella plana (W.Sm.)Pelletan	Meh				–	1
Tryblionella victoriae Grunow	Ogh-Meh	al-il	ind	U	2	–
Rhopalodia gibberula (Ehr.)O.Muller	Ogh-Meh	al-il	ind	U	4	2
翼管縦溝類						
Surirella angusta Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-bi	U	1	2
Surirella minuta Brebisson	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	2	6
短縦溝類						
Eunotia minor (Kuetz.)Grunow	Ogh-hob	ind	ind	O,T	1	6
Eunotia pectinalis var. *undulata* (Ralfs)Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O	1	–
Eunotia praerupta Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,O,T	1	–
海水生種					7	4
海水～汽水生種					0	0
汽水生種					0	1
淡水～汽水生種					8	3
淡水生種					190	197
珪藻化石総数					205	205

凡例

H.R.：塩分濃度に対する適応性
Euh　：海水生種
Meh　：汽水生種
Ogh-Meh　：淡水ー汽水生種
Ogh-hil　：貧塩好塩性種
Ogh-ind　：貧塩不定性種
Ogh-hob　：貧塩嫌塩性種
Ogh-unk　：貧塩不明種

pH：水素イオン濃度に対する適応性
al-bi　：真アルカリ性種
al-il　：好アルカリ性種
ind　：pH 不定性種
ac-il　：好酸性種
ac-bi　：真酸性種
unk　：pH 不明種

C.R.：流水に対する適応性
l-bi　：真止水性種
l-ph　：好止水性種
ind　：流水不定性種
r-ph　：好流水性種
r-bi　：真流水性種
unk　：流水不明種

環境指標種群
A:外洋指標種，B:内湾指標種（小杉，1988）
K:中～下流性河川指標種，O:沼沢湿地付着生種（安藤，1990）
S:好汚濁性種，U:広域適応性種，T:好清水性種（以上はAsai and Watanabe，1995）
R:陸生珪藻（RA:A群，RB:B群，RI:未区分、伊藤・堀内，1991）

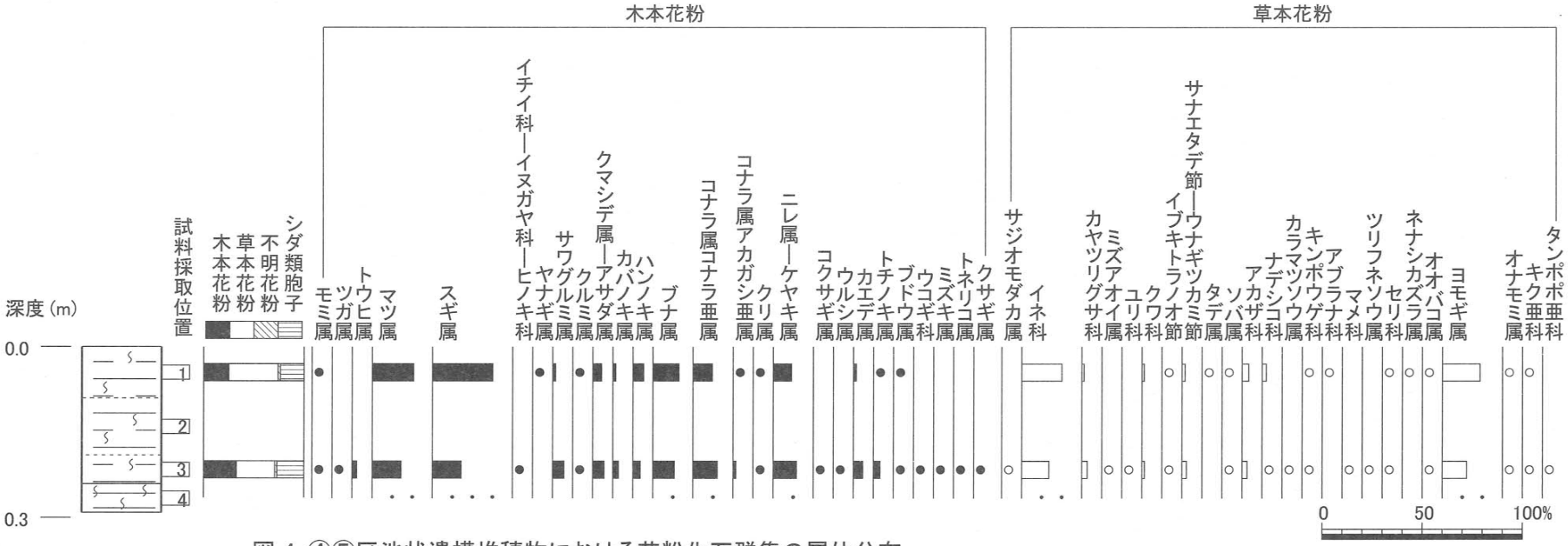


図 4. ④⑤区池状遺構堆積物における花粉化石群集の層位分布

出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は 1%未満を示す。

表2. 花粉分析結果

種　類	池状遺構堆積物	
試料番号	1	3
木本花粉		
モミ属	1	2
ツガ属	−	1
トウヒ属	−	5
マツ属複維管束亜属	12	8
マツ属(不明)	31	23
スギ属	63	31
イチイ科ーイヌガヤ科ーヒノキ科	−	1
ヤナギ属	1	−
サワグルミ属	3	12
クルミ属	1	2
クマシデ属ーアサダ属	9	12
カバノキ属	3	6
ハンノキ属	11	8
ブナ属	27	23
コナラ属コナラ亜属	20	26
コナラ属アカガシ亜属	2	3
クリ属	1	1
ニレ属ーケヤキ属	19	25
コクサギ属	−	1
ウルシ属	−	2
カエデ属	3	10
トチノキ属	1	7
ブドウ属	1	1
ウコギ科	−	2
ミズキ属	−	1
トネリコ属	−	1
クサギ属	−	1
草本花粉		
サジオモダカ属	−	1
イネ科	163	87
カヤツリグサ科	9	17
ミズアオイ属	−	1
ユリ科	−	1
クワ科	9	8
イブキトラノオ節	2	1
サナエタデ節ーウナギツカミ節	12	14
タデ属	1	−
ソバ属	1	1
アカザ科	27	16
ナデシコ科	16	6
カラマツソウ属	−	1
キンポウゲ科	6	2
アブラナ科	2	−
マメ科	−	1
ツリフネソウ属	−	2
セリ科	1	1
ネナシカズラ属	1	−
オオバコ属	1	1
ヨモギ属	153	78
オナモミ属	3	6
キク亜科	3	1
タンポポ亜科	−	4
不明花粉	20	15
シダ類胞子		
シダ類胞子	197	175
合　計		
木本花粉	209	215
草本花粉	410	250
不明花粉	20	15
シダ類胞子	197	175
総計(不明を除く)	816	640

表3. 植物珪酸体分析結果

種　類	池状遺構堆積物	
試料番号	1	3
イネ科葉部短細胞珪酸体		
イネ族イネ属	8	1
タケ亜科ネザサ節	27	31
タケ亜科	17	28
ヨシ属	42	49
ウシクサ族ススキ属	2	8
イチゴツナギ亜科	−	3
不明キビ型	4	5
不明ヒゲシバ型	8	9
不明ダンチク型	9	10
イネ科葉身機動細胞珪酸体		
イネ族イネ属	14	2
タケ亜科ネザサ節	51	79
タケ亜科	12	20
ヨシ属	36	36
ウシクサ族	13	14
不明	25	25
合　計		
イネ科葉部短細胞珪酸体	117	144
イネ科葉身機動細胞珪酸体	151	176
総　計	268	320
珪化組織片		
イネ属短細胞列	4	−

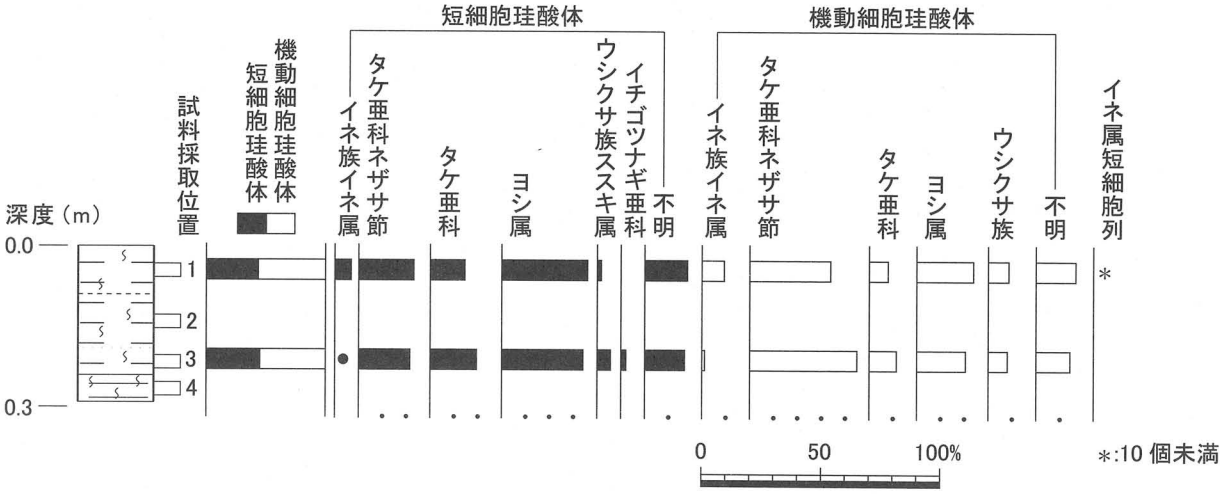
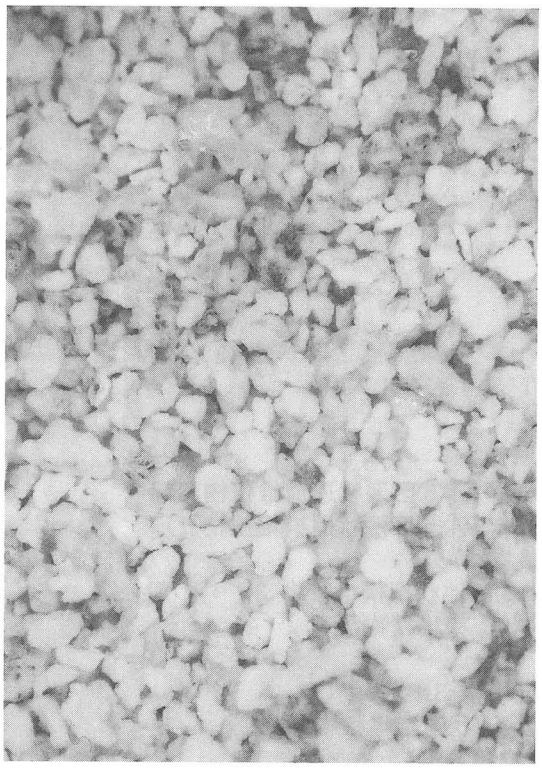
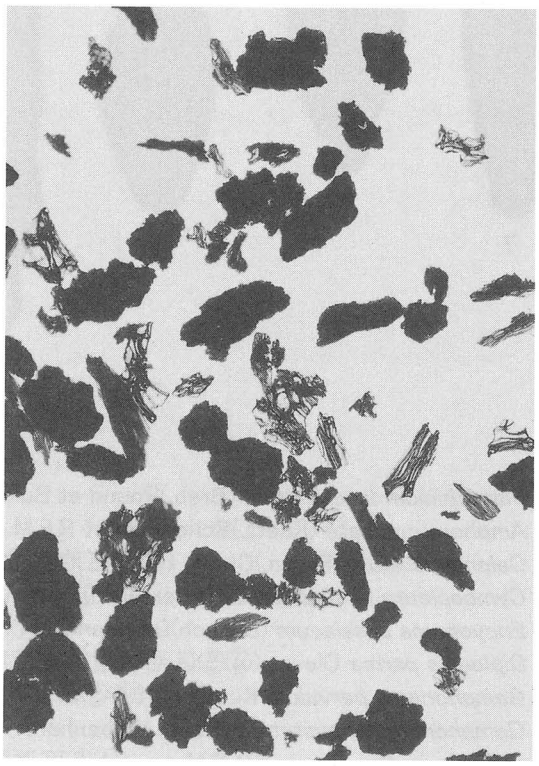


図 5. ④⑤区池状遺構堆積物における植物珪酸体群集
出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●は1%未満を示す。また、珪化組織片の産状を＊で示す。

図版1　テフラ



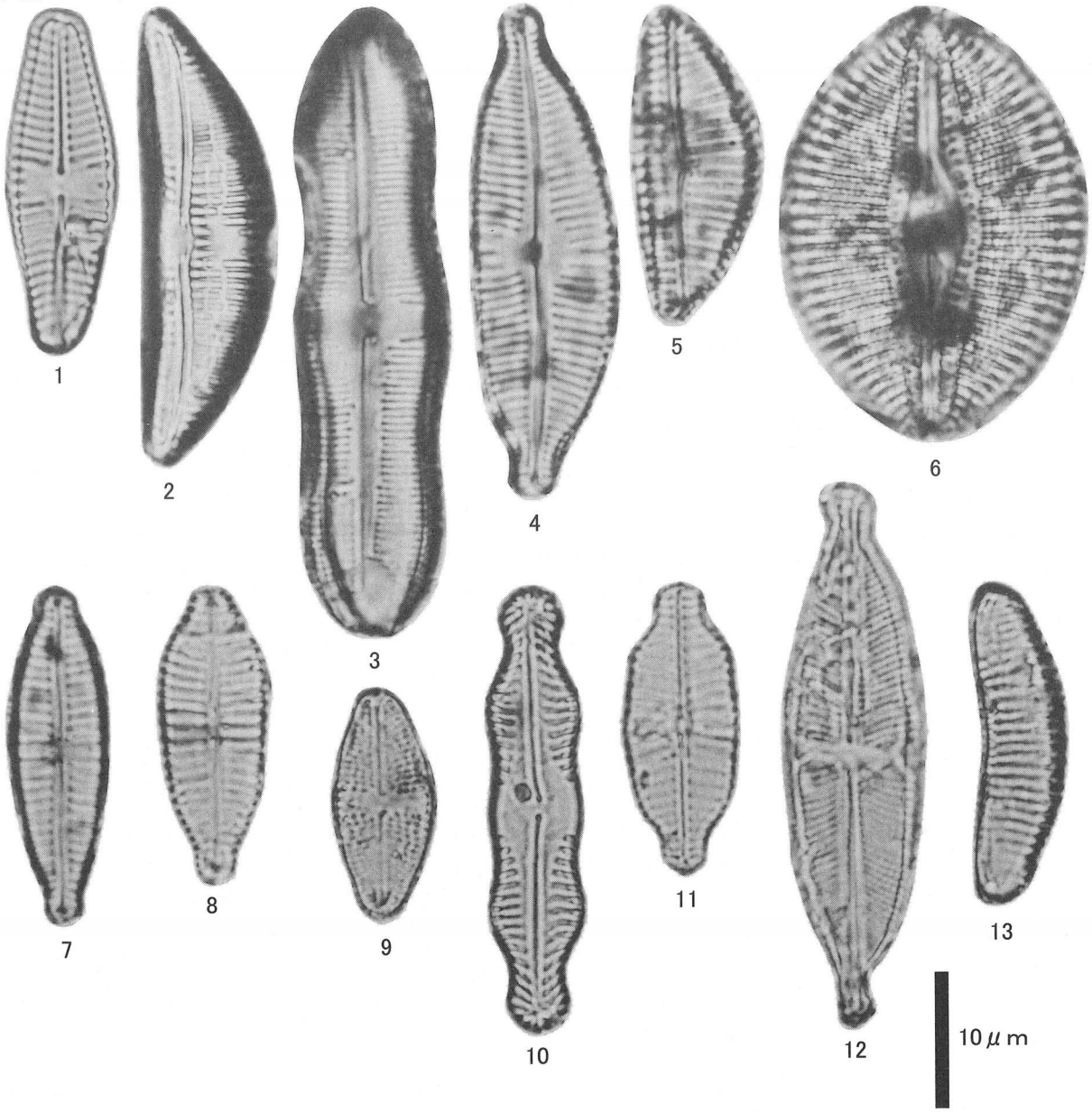
1. To-aの軽石（沢跡トレンチ2；1層）



2. To-aの火山ガラス（沢跡トレンチ2；1層）

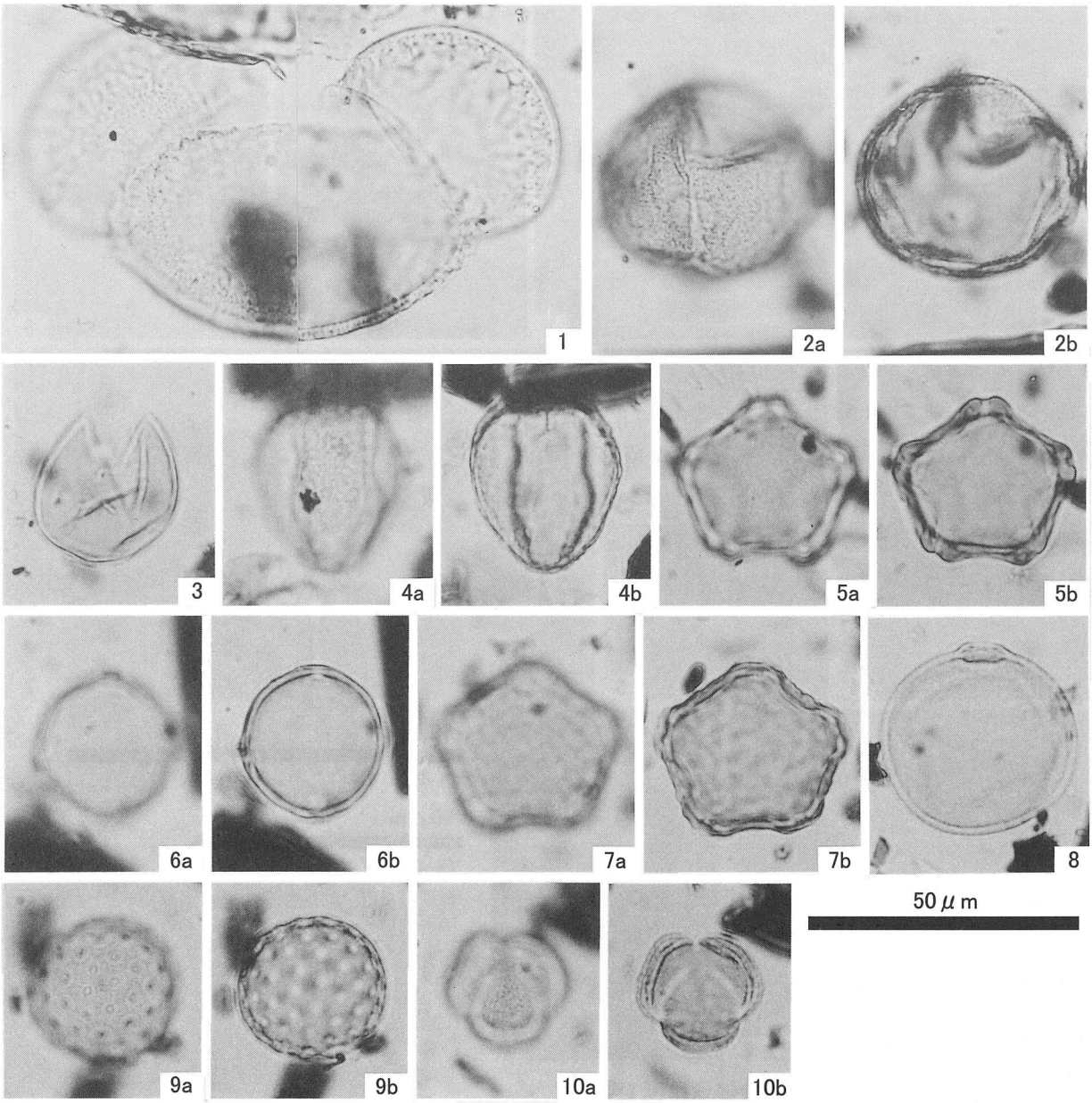
1mm　1
0.5mm　2

図版2　珪藻化石



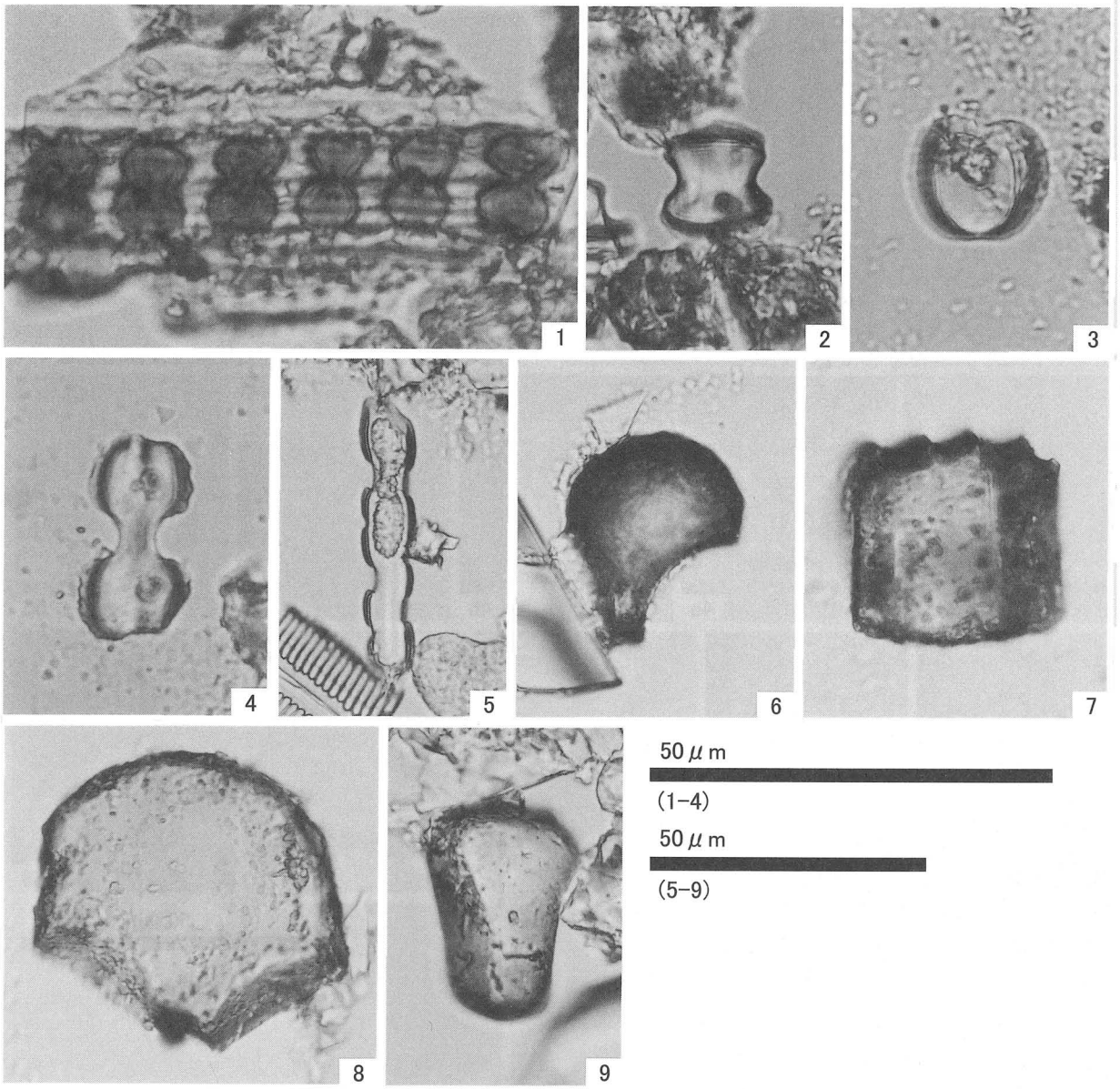
1．*Planothidium lanceolatum* (Breb.)Round et Bukhtiyarova（④⑤区池状遺構堆積物；3）
2．*Amphora copulata* (Kuetz.)Schoeman et R.E.M.Archibald（④⑤区池状遺構堆積物；1）
3．*Caloneis silicula* (Ehren.)Cleve（④⑤区池状遺構堆積物；3）
4．*Cymbopleura naviculiformis* (Auerswald)Krammer（④⑤区池状遺構堆積物；3）
5．*Encyonema silesiacum* (Bleisch)D.G.Mann（④⑤区池状遺構堆積物；3）
6．*Diploneis parma* Cleve（④⑤区池状遺構堆積物；3）
7．*Gomphonema parvulum* Kuetzing（④⑤区池状遺構堆積物；3）
8．*Gomphonema angustatum* (Kuetz.)Rabenhorst（④⑤区池状遺構堆積物；3）
9．*Luticola mutica* (Kuetz.) D.G.Mann（④⑤区池状遺構堆積物；1）
10．*Pinnularia nodosa* Ehrenberg（④⑤区池状遺構堆積物；1）
11．*Placoneis elginensis* var. neglecta (Krass.)H.Kobayasi（④⑤区池状遺構堆積物；1）
12．*Stauroneis anceps* Ehrenberg（④⑤区池状遺構堆積物；3）
13．*Eunotia minor* (Kuetz.)Grunow（④⑤区池状遺構堆積物；3）

図版3　花粉化石



1．マツ属(④⑤区池状遺構堆積物;3)
2．ブナ属(④⑤区池状遺構堆積物;1)
3．スギ属(④⑤区池状遺構堆積物;3)
4．コナラ属コナラ亜属(④⑤区池状遺構堆積物;1)
5．ハンノキ属(④⑤区池状遺構堆積物;3)
6．クマシデ属ーアサダ属(④⑤区池状遺構堆積物;1)
7．ニレ属ーケヤキ属(④⑤区池状遺構堆積物;3)
8．イネ科(④⑤区池状遺構堆積物;3)
9．アカザ科(④⑤区池状遺構堆積物;3)
10．ヨモギ属(④⑤区池状遺構堆積物;3)

図版4　植物珪酸体



1．イネ属短細胞列(④⑤区池状遺構堆積物;1)
2．ネザサ節短細胞珪酸体(④⑤区池状遺構堆積物;1)
3．ヨシ属短細胞珪酸体(④⑤区池状遺構堆積物;1)
4．ススキ属単細胞珪酸体(④⑤区池状遺構堆積物;3)
5．イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(④⑤区池状遺構堆積物;3)
6．イネ属機動細胞珪酸体(④⑤区池状遺構堆積物;1)
7．ネザサ節機動細胞珪酸体(④⑤区池状遺構堆積物;1)
8．ヨシ属機動細胞珪酸体(④⑤区池状遺構堆積物;1)
9．ウシクサ族機動細胞珪酸体(④⑤区池状遺構堆積物;3)

附編３　出土木椀の樹種同定

坂下遺跡（第 10 次）出土木製品の樹種同定

１　は　じ　め　に

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

２　試　　料

試料は坂下遺跡（第 10 次）より出土した木椀１点である。

３　方　　法

カミソリを用いて新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって 40 ～ 1000 倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

４　結　　果

試料は　ケヤキ　*Zelkova serrata Mkino* であった。以下に同定の根拠となった特徴を記し、各断面の顕微鏡写真を示す。

ケヤキ　*Zelkova serrata Mkino*　ニレ科　図版１・２・３

横断面：年輪のはじめに大型の道管１～２列配列する環孔材である。孔圏部外の小道管は多数複合して円形、接線状ないし斜線上に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞であるが、上下の縁辺部のものは方形細胞でしばしば大きく膨らんでいるものがある。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、上下の縁辺部の細胞の中には大きく膨らんでいるものがある。幅は１～７細胞幅ぐらいである。

以上の形質よりケヤキに同定される。ケヤキは本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ 20 ～ 25 m、径 60 ～ 70 ㎝ぐらいであるが、大きいものは高さ 50 m、径３ｍに達する。材は強靱で従曲性に富み、建築、家具、器具、船、土木などに用いられる。

５　所　　見

同定の結果、坂下遺跡（第 10 次）の木椀はケヤキであった。ケヤキは高木になり大きな材がとることができる材で、耐朽性ね、保存性は高く水湿にもよく耐える。縄文時代以降、現在まで伝統的に木地に用いられる材である。温帯に分布する落葉広葉樹で、谷沿いなどの適潤な肥沃地に生育する。

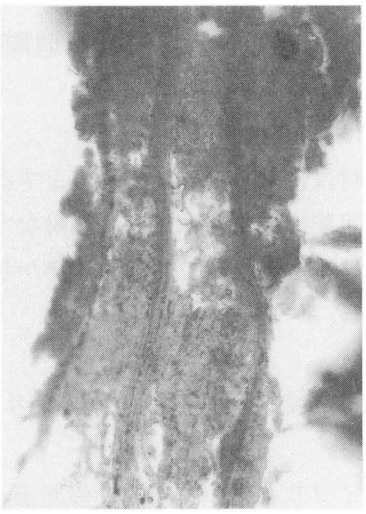
参考文献

佐伯浩・原田浩 (1985) 針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.20-48
佐伯浩・原田浩 (1985) 広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49-100
島地謙・伊東隆夫 (1988) 日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，p.296
山田昌久 (1993) 日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成，植生史研究特別第１号，植生史研究会，p.242

坂下遺跡（第10次）出土木製品の木材

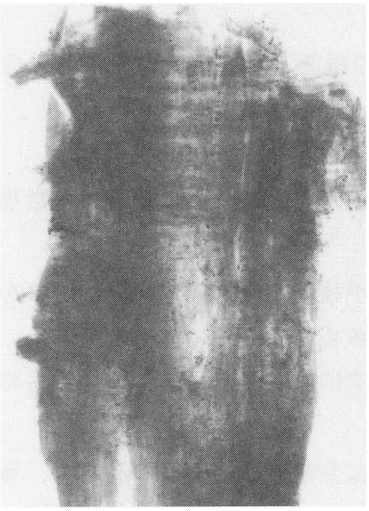
横断面 ―――― ：0.5㎜

横断面 ―――― ：0.2㎜



横断面 ―――― ：0.2㎜

1．土付き椀　ケヤキ



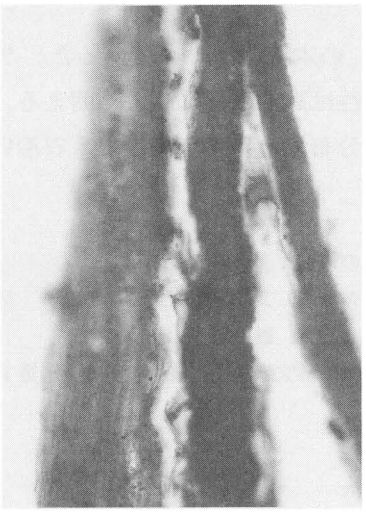
放射断面―――― ：0.2㎜

放射断面―――― ：0.1㎜

放射断面―――― ：0.1㎜

2．同上

接線断面―――― ：0.2㎜



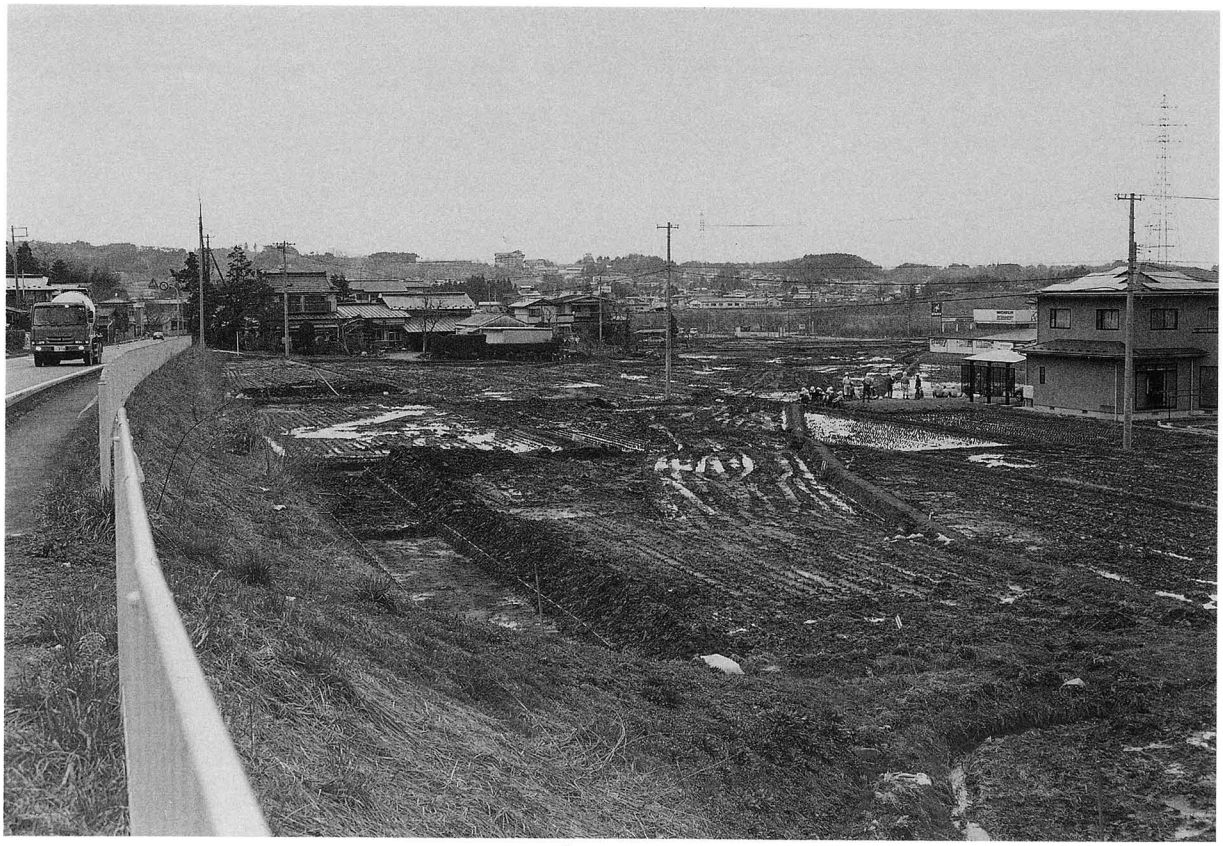
接線断面―――― ：0.1㎜

接線断面―――― ：0.1㎜

3．同上

写　真　図　版

北東側から



南西側から

写真図版１　調査開始時の状況

⑥区の柱穴群

建物跡１（⑥区）

写真図版２　掘立柱建物跡（1）

建物跡３（⑥区）

建物跡４（④⑤区）

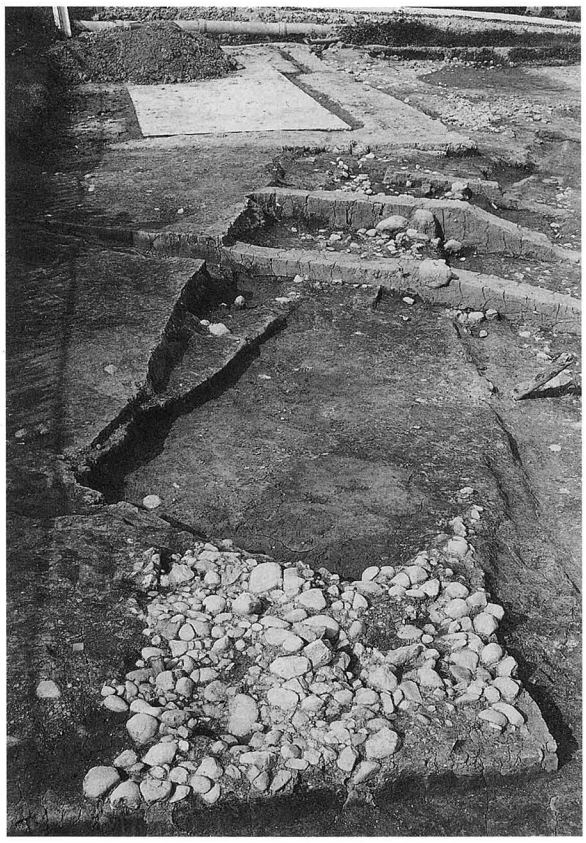
写真図版３　掘立柱建物跡（2）

敷石遺構・池状遺構 全景（南西から）

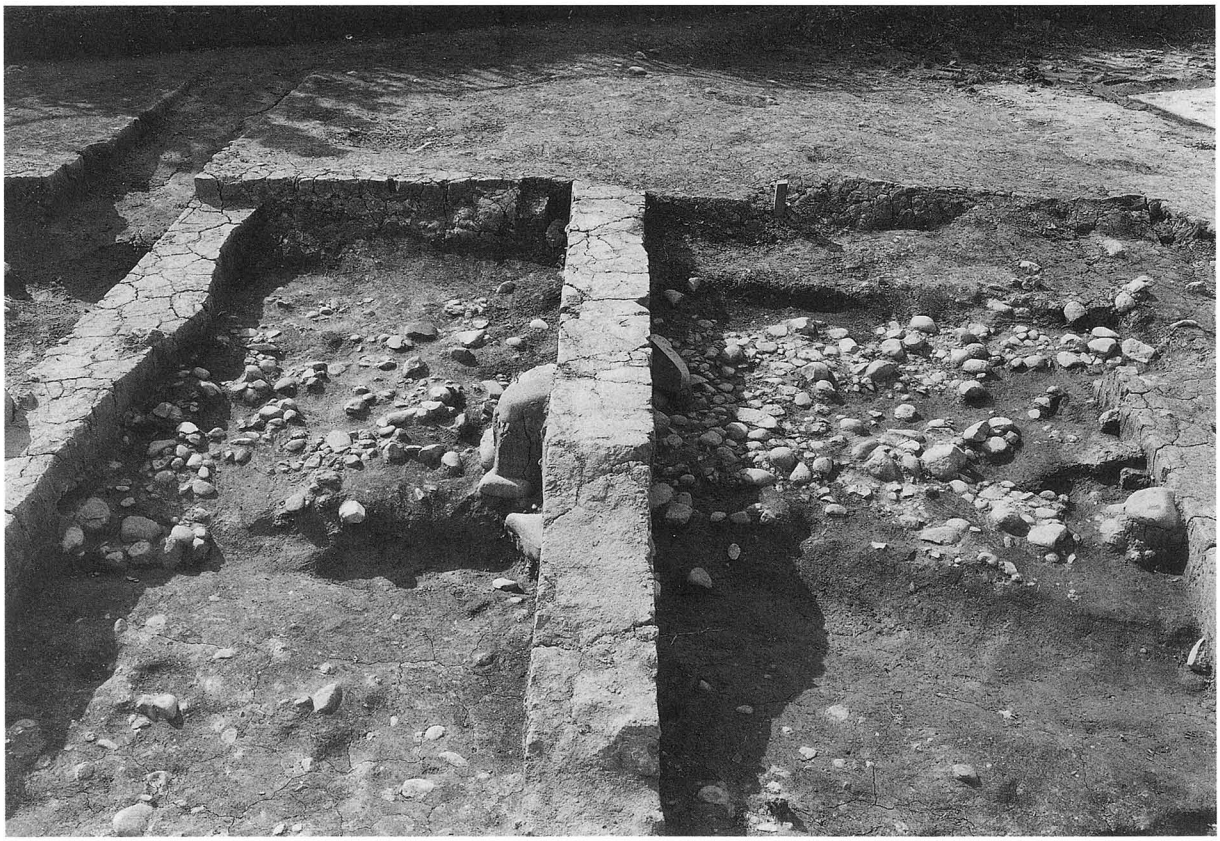
敷石遺構 全景（北から）

写真図版４　敷石遺構・池状遺構（1）

敷石面の状況（南端部　南から）



敷石面の状況（断面Ｂ－Ｂ' 付近　南から）



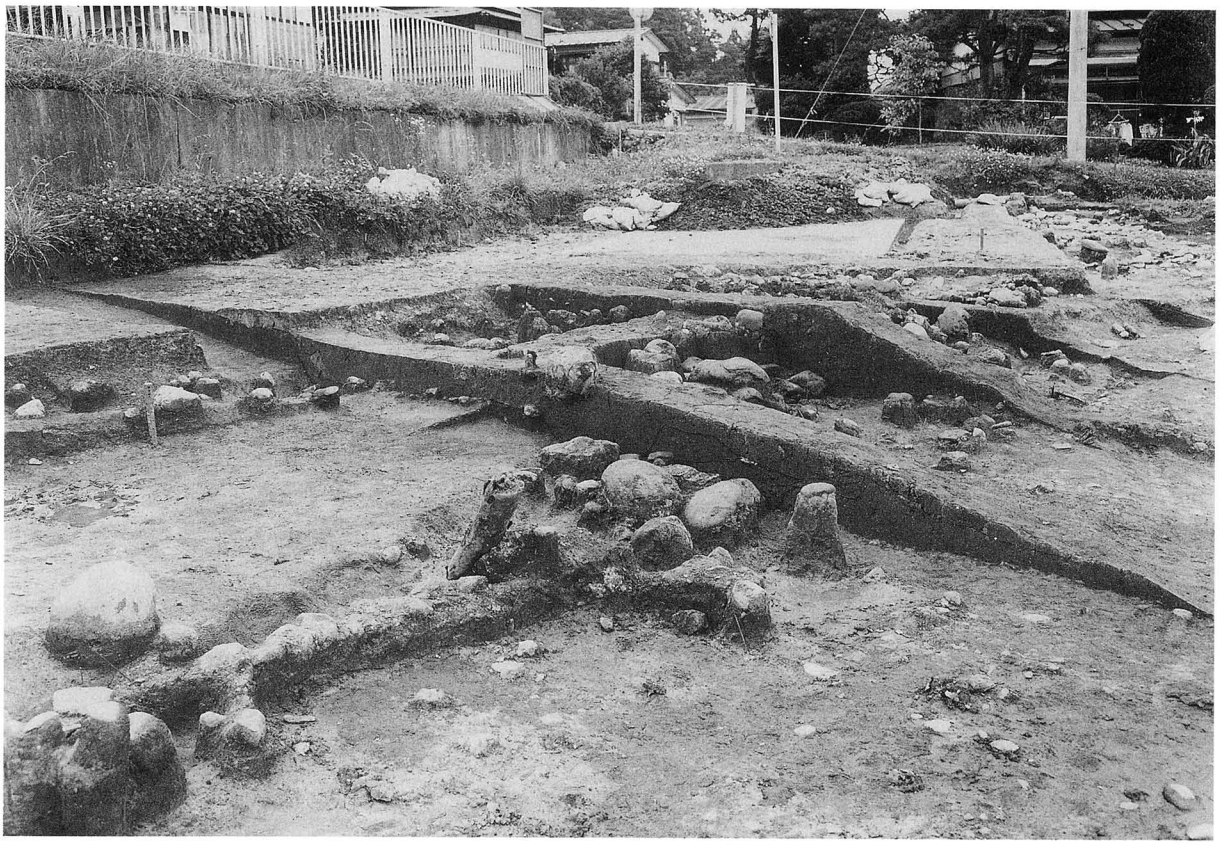
敷石面の状況（断面Ｆ－Ｆ' 付近　東から）

写真図版５　敷石遺構・池状遺構（2）

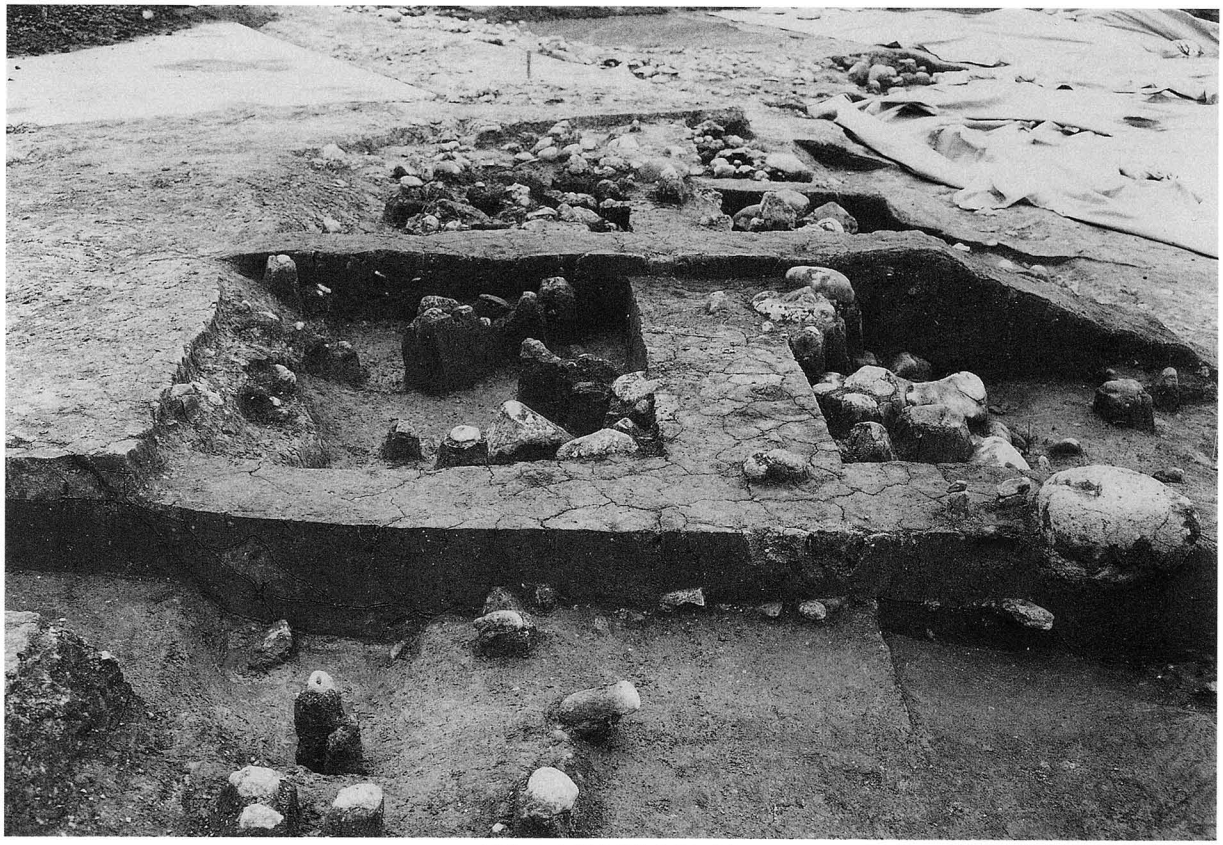
敷石遺構 断面 A－A'（北から）

敷石遺構 断面 B－B'（南から）

写真図版６　敷石遺構・池状遺構（3）



敷石遺構 断面 C－C′（南東から）



同上 中央部 近影（南から）

写真図版７　敷石遺構・池状遺構（4）

敷石遺構 断面 D－D′ と付近の敷石面の状況（北から）

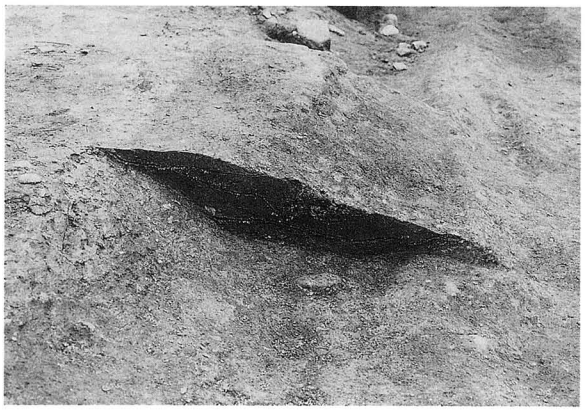
敷石遺構 断面 F－F′ と敷石面を覆う大型礫の出土状況（東から）

写真図版８　敷石遺構・池状遺構（5）

敷石遺構 断面 G－G′～I－I′（南から）

敷石遺構 断面 E－E′（南から）

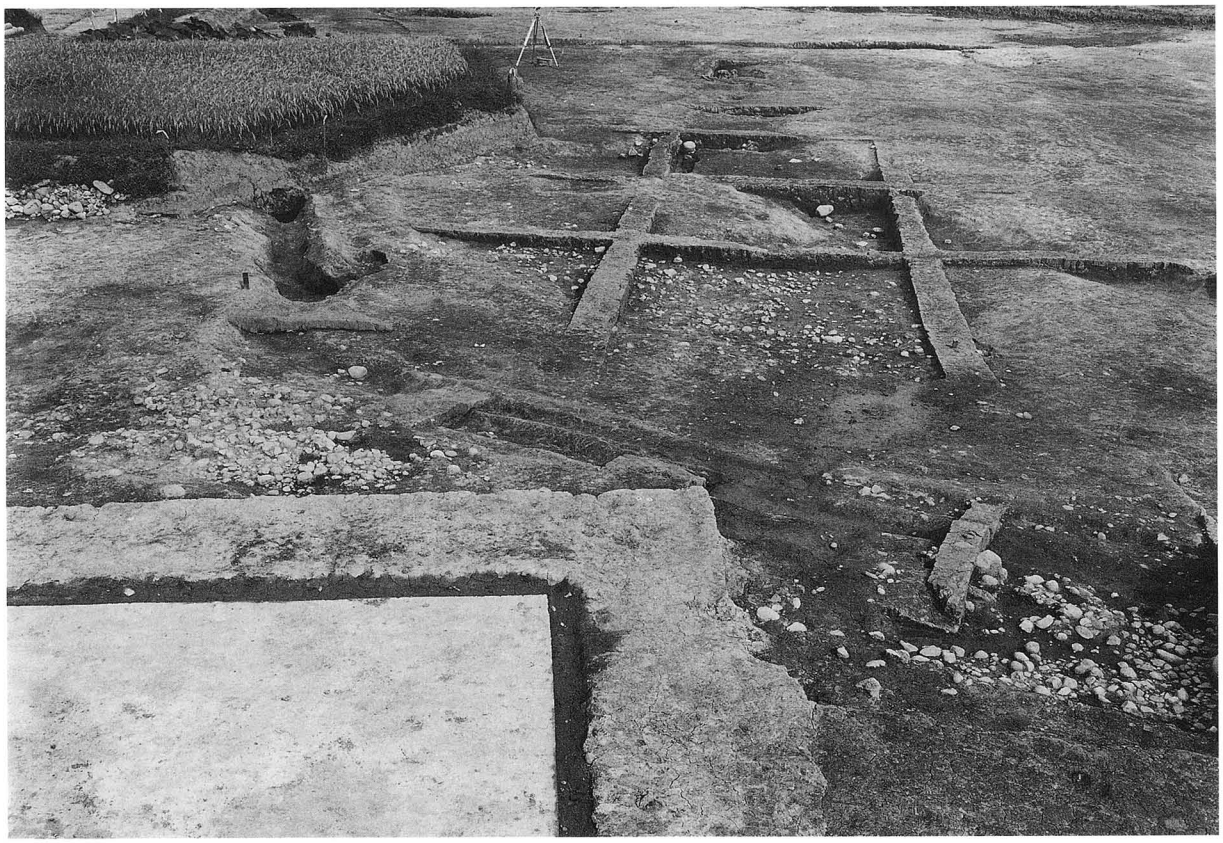
敷石遺構 断面 G－G′（南から）



敷石遺構 断面 H－H′（南西から）

敷石遺構 断面 I－I′（東から）

写真図版９　敷石遺構・池状遺構（6）



敷石遺構〈手前〉と池状遺構〈奥〉（西から）

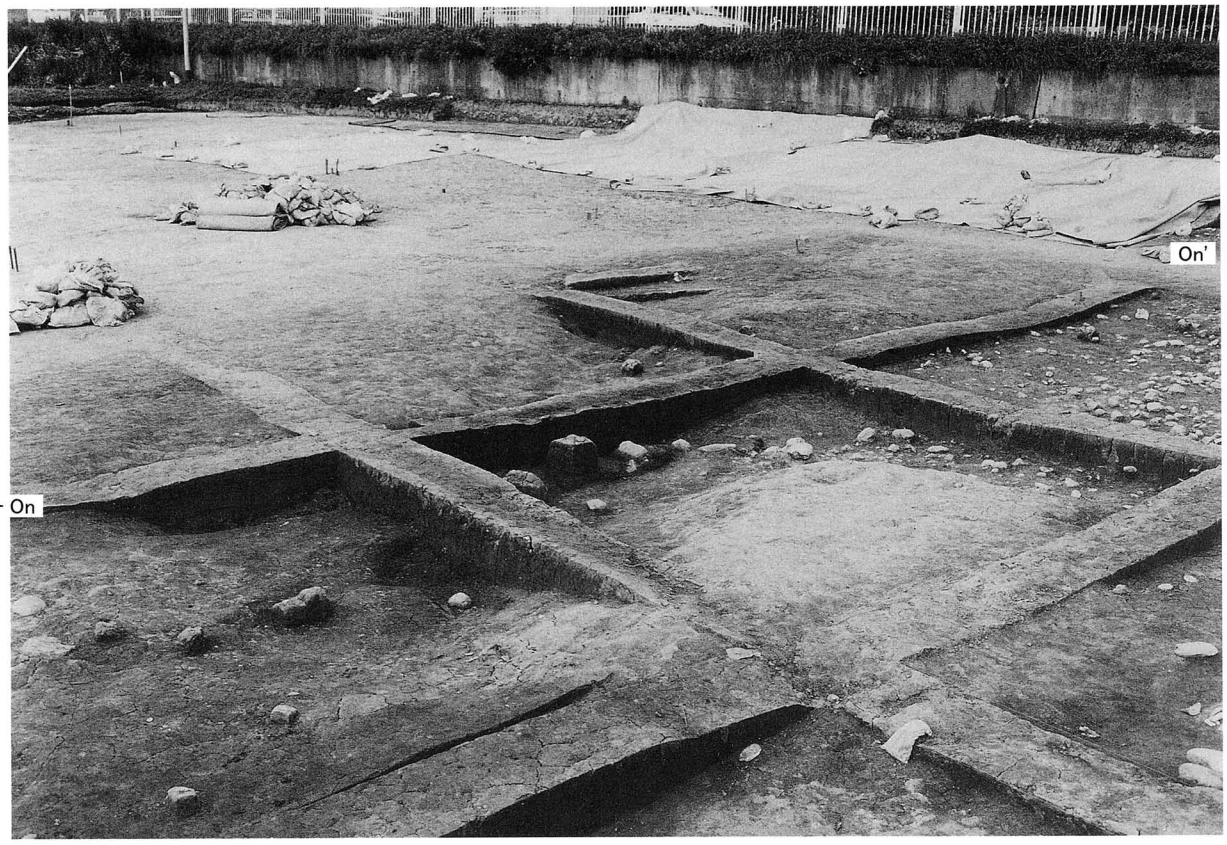
池状遺構 全景（南東から）

写真図版 10　敷石遺構・池状遺構（7）

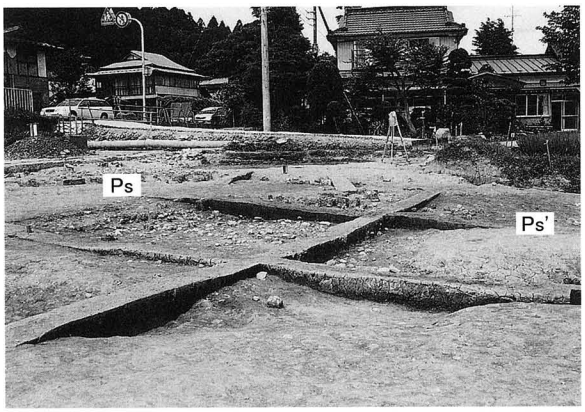
池状遺構 断面 Mw－Mw'（南西から）

池状遺構 断面 Nw－Nw'（南西から）

写真図版 11　敷石遺構・池状遺構（8）

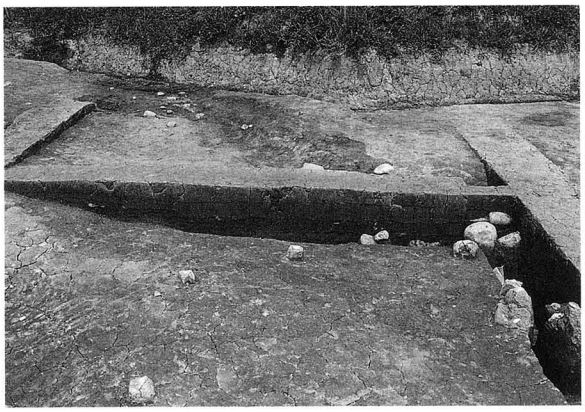


池状遺構 断面 On－On'（北東から）

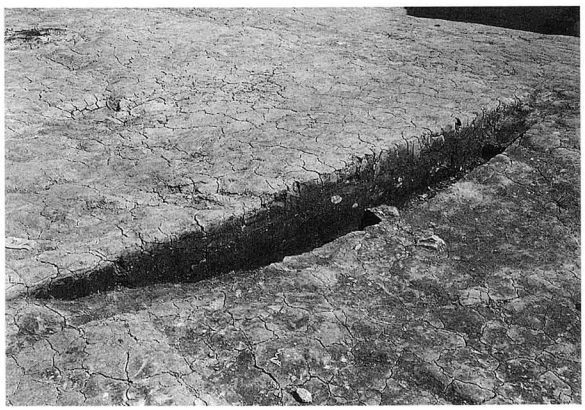


池状遺構 断面 Ps－Ps'（南東から）

池状遺構 断面 Ps'－Ps"（南から）



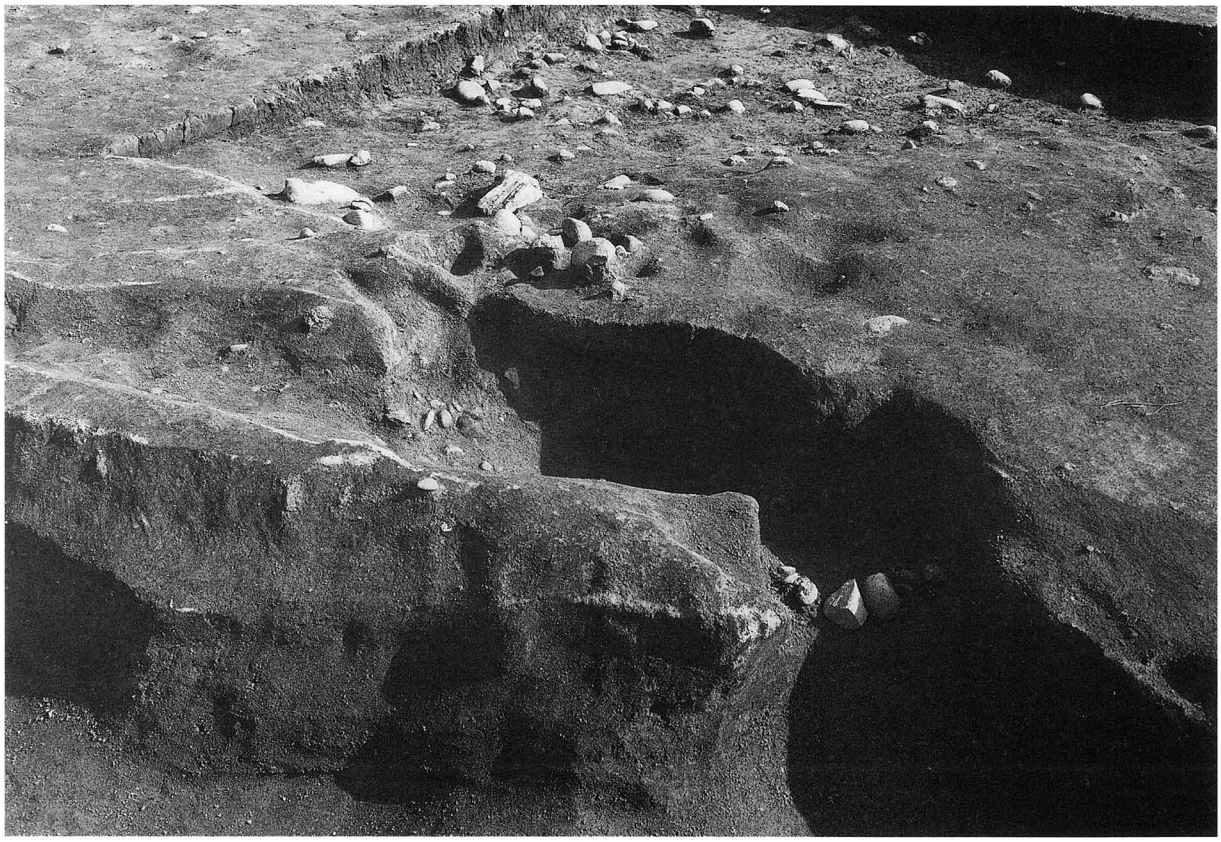
池状遺構 断面 Qw－Qw'（南西から）



池状遺構 断面 Rw－Rw'（北西から）

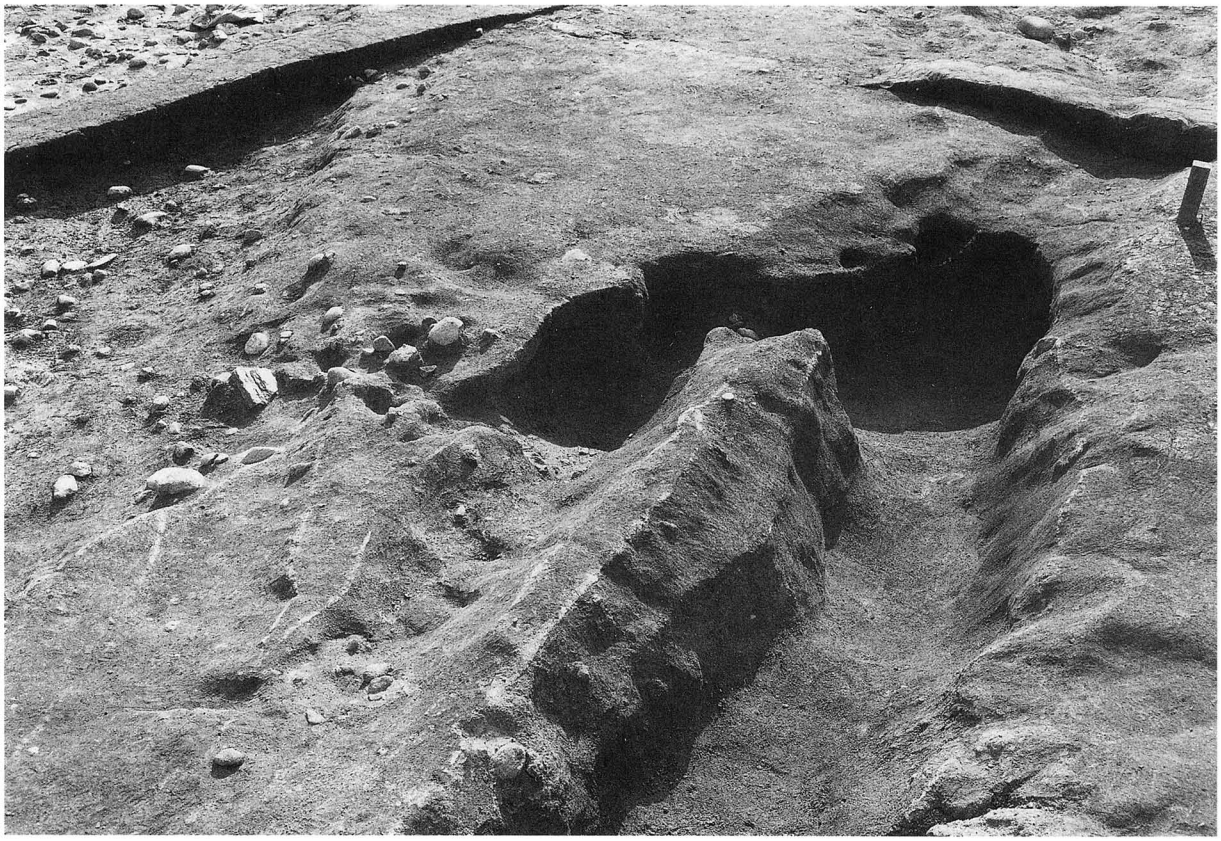
写真図版 12　敷石遺構・池状遺構（9）

取水口状遺構１（南東から）

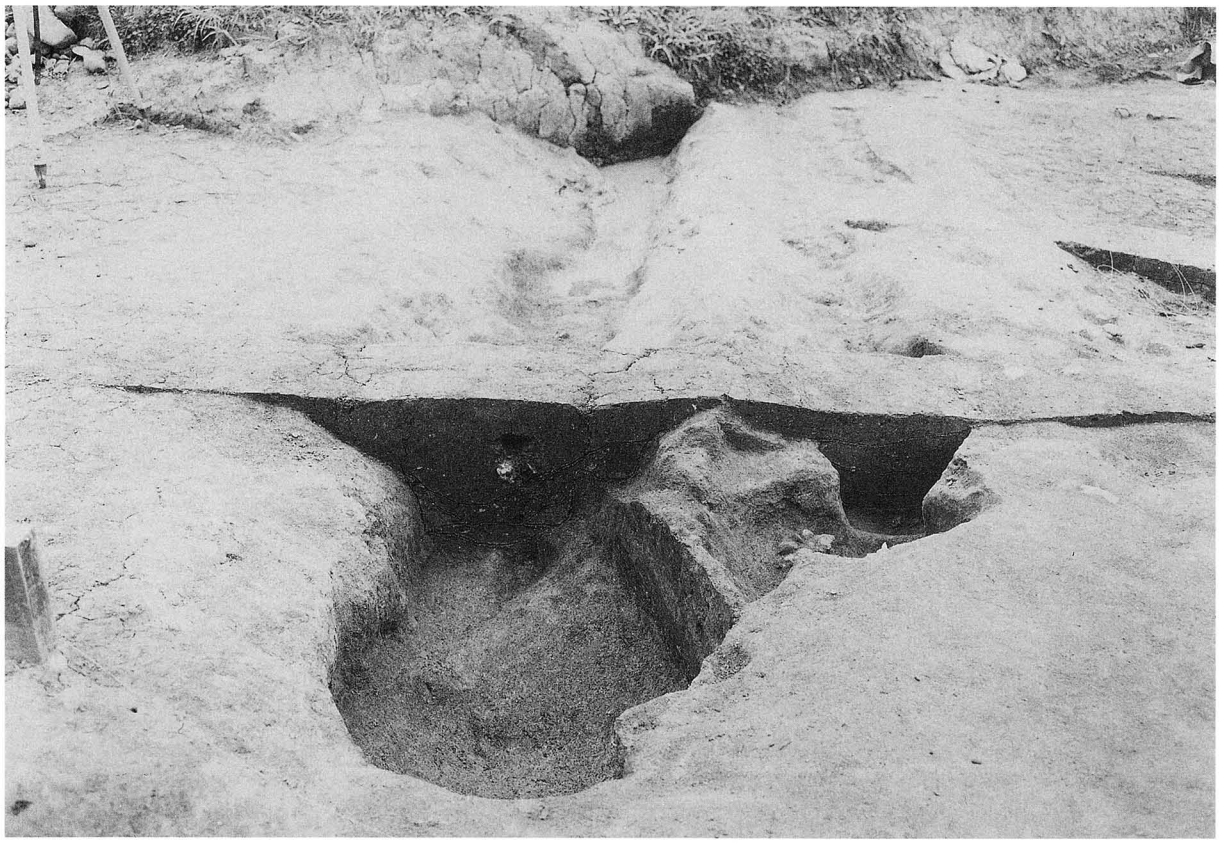


取水口状遺構１（北東から）

写真図版 13　敷石遺構・池状遺構（10）

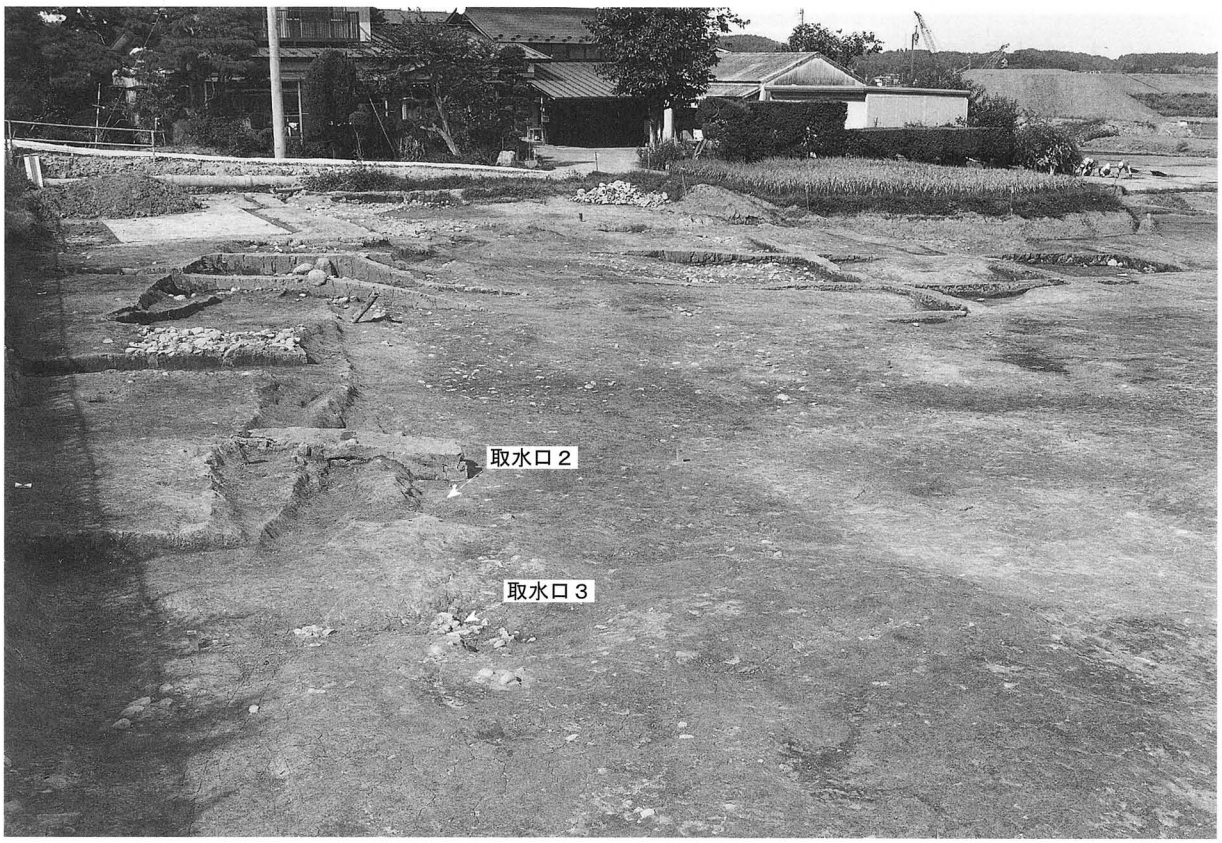


取水口状遺構１（東から）



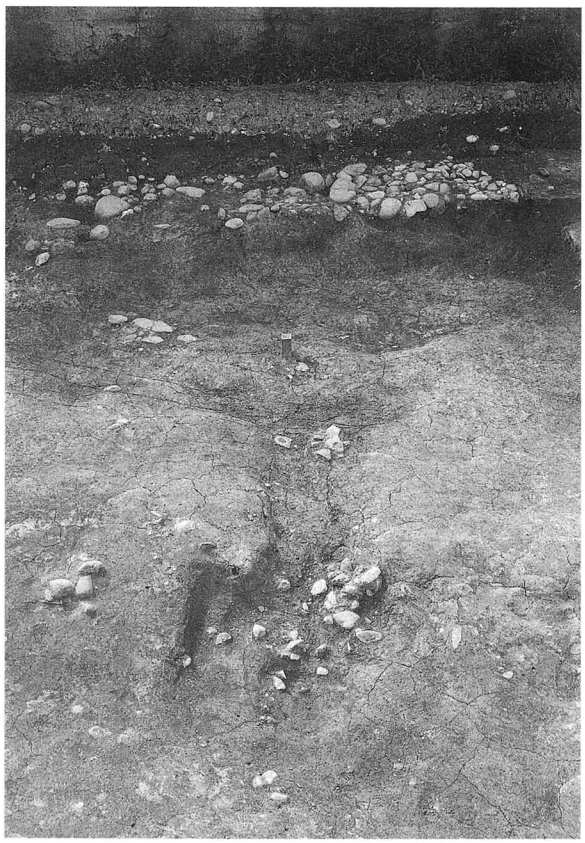
取水口状遺構１付近の断面（敷石遺構断面 J-J'　西から）

写真図版 14　敷石遺構・池状遺構（11）



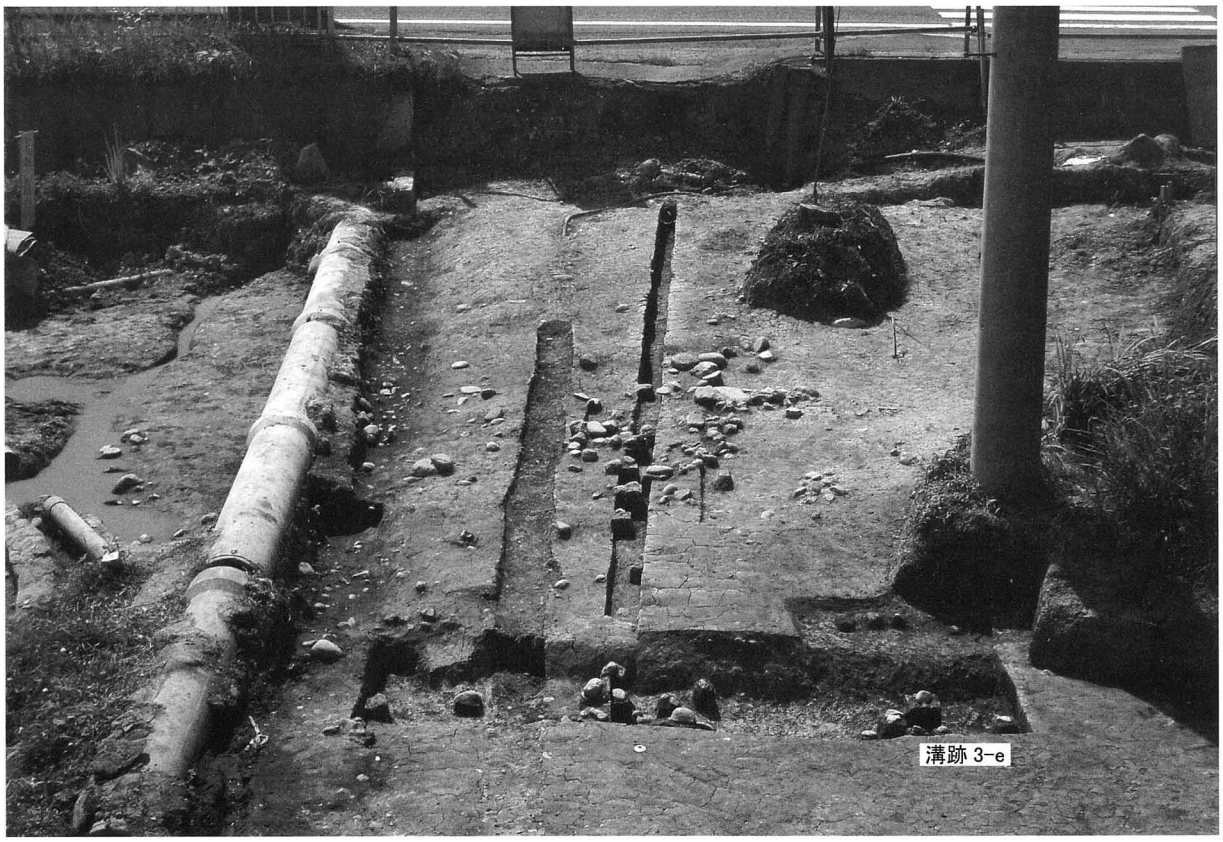
取水口状遺構２・３周辺の状況（南から）

取水口状遺構２（東から）



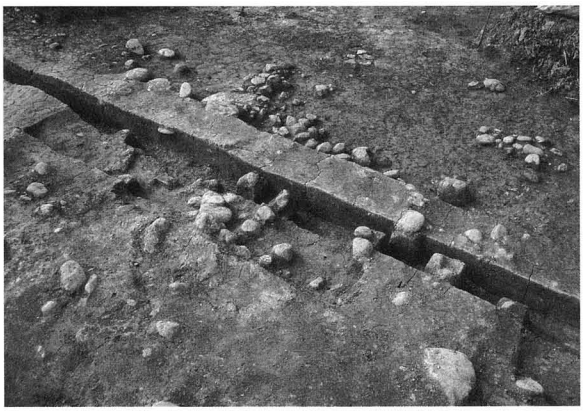
取水口状遺構３（東から）

写真図版 15　敷石遺構・池状遺構（12）



⑦区 全景（東から）

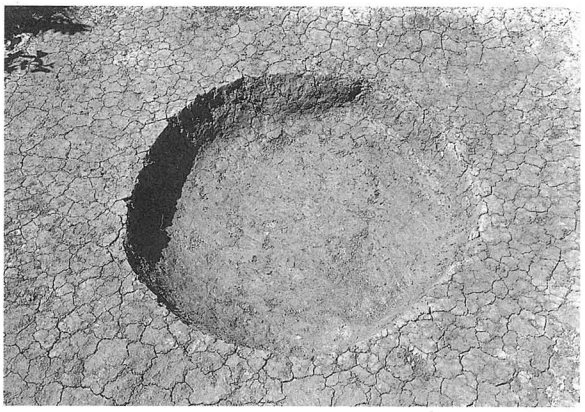
敷石遺構 断面 L－L'（南東から）



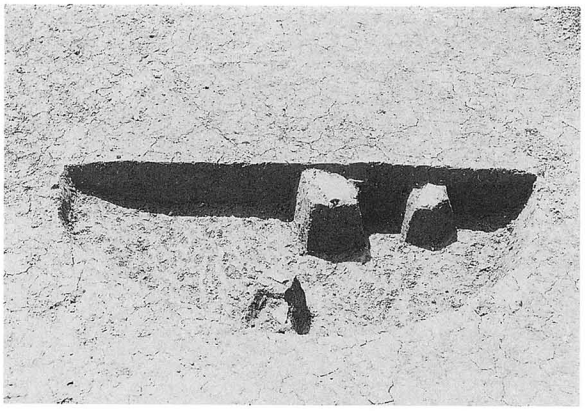
礫集中部の断面近影

遺構 3-e 断面（南から）

写真図版 16　⑦区の調査



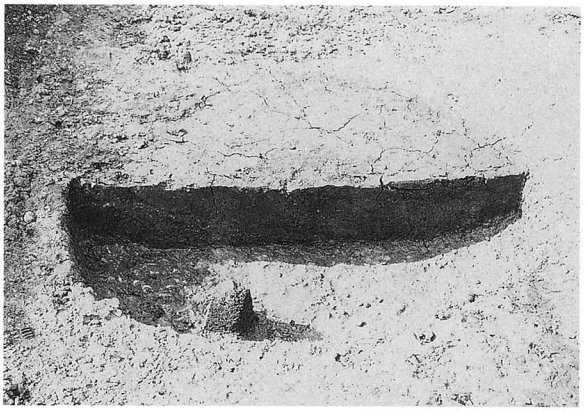
土坑１ 全景



土坑１ 断面

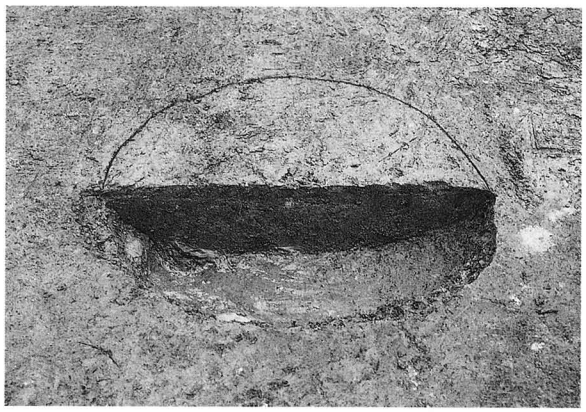
土坑１ 遺物出土状況

土坑２ 全景



土坑２ 断面

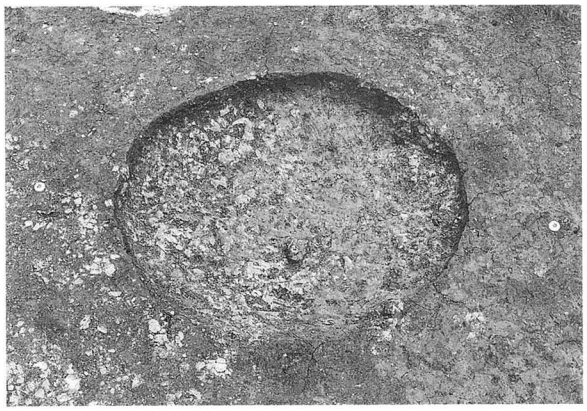
土坑３ 全景



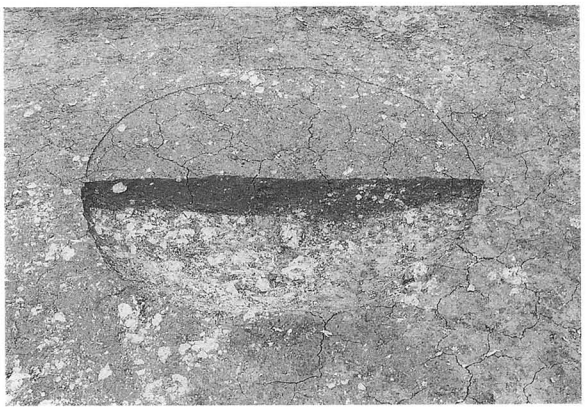
土坑３ 断面

土坑３ 遺物出土状況

写真図版 17　土坑（1）

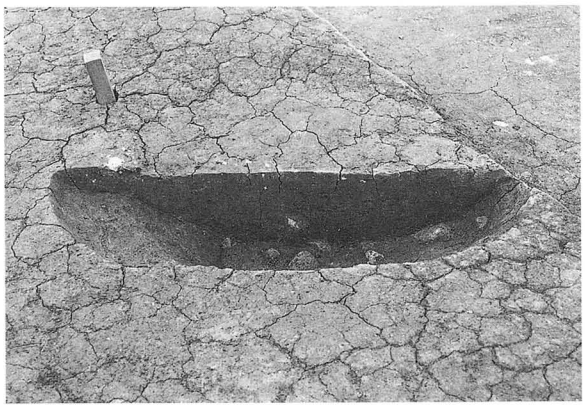


土坑４ 全景



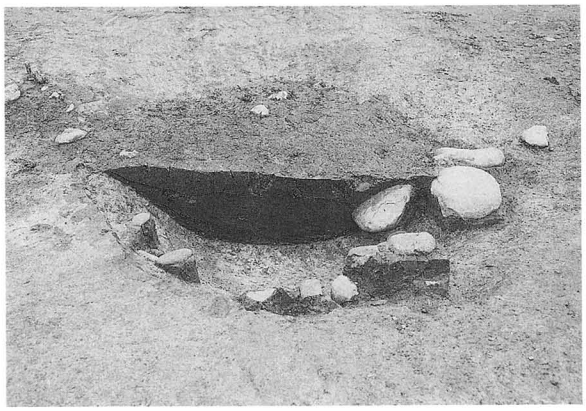
土坑４ 断面

土坑５ 全景



土坑５ 断面

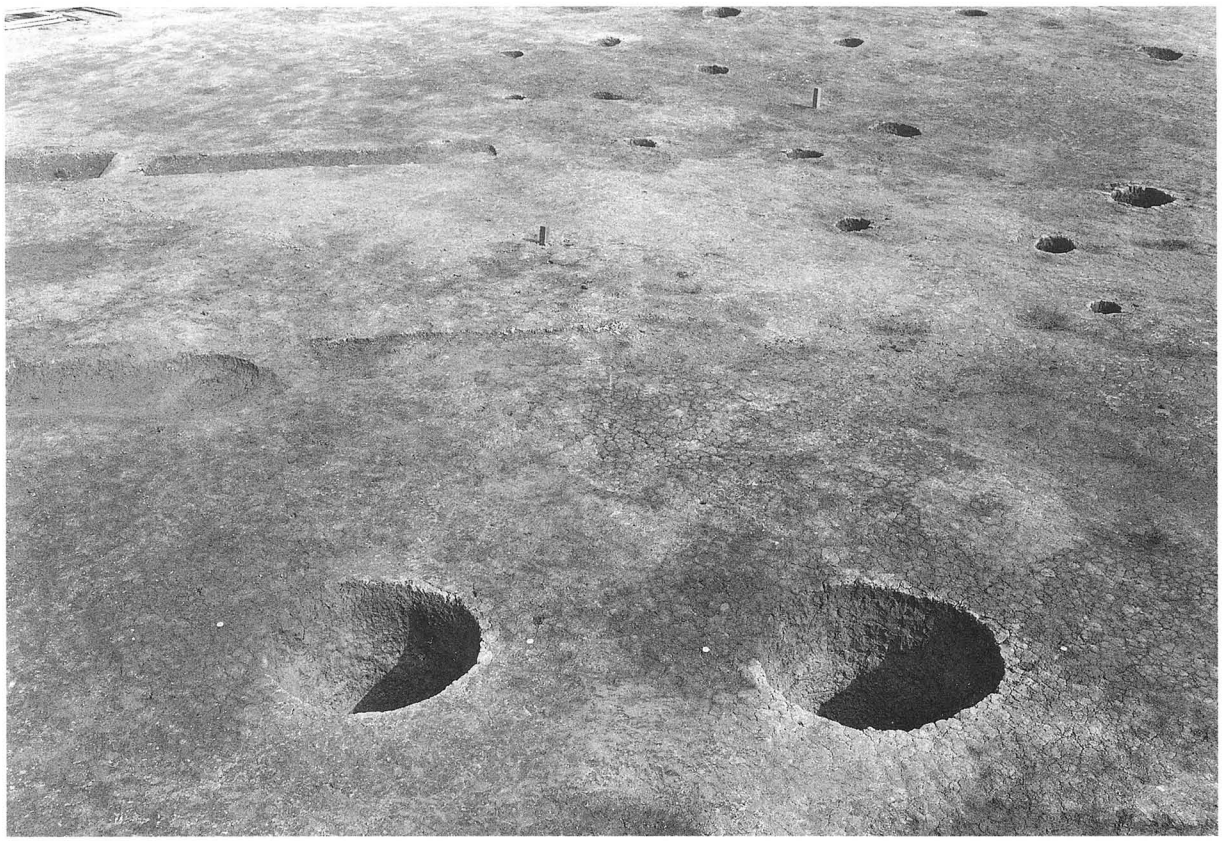
土坑６ 全景



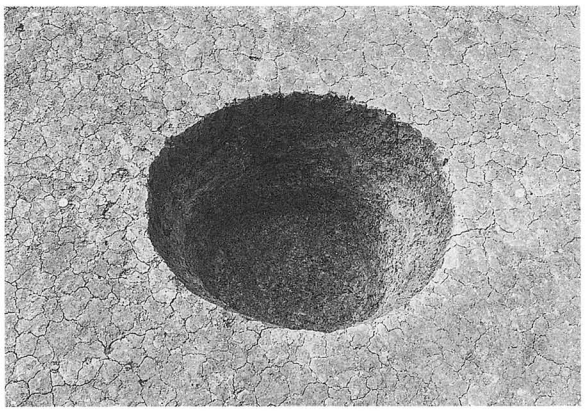
土坑６ 断面

土坑６ 遺物出土状況

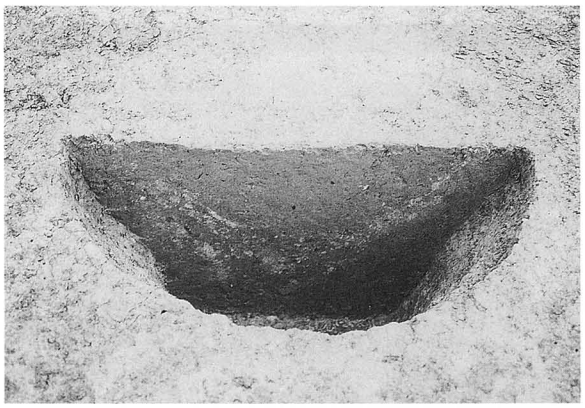
写真図版 18　土坑（2）



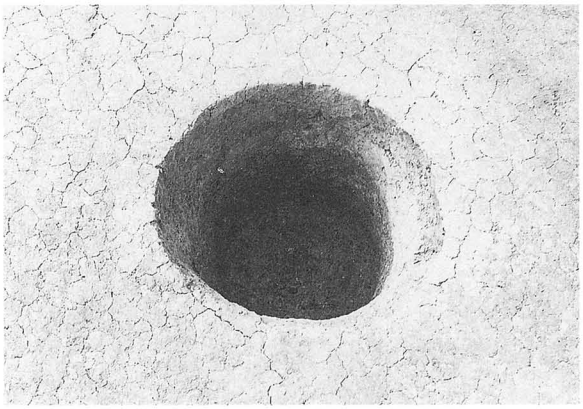
土坑７・８



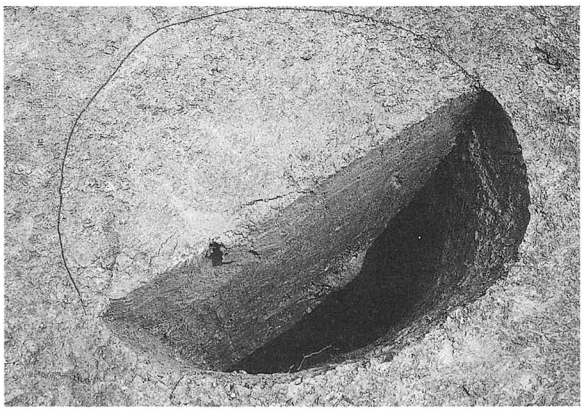
土坑７ 全景



土坑７ 断面



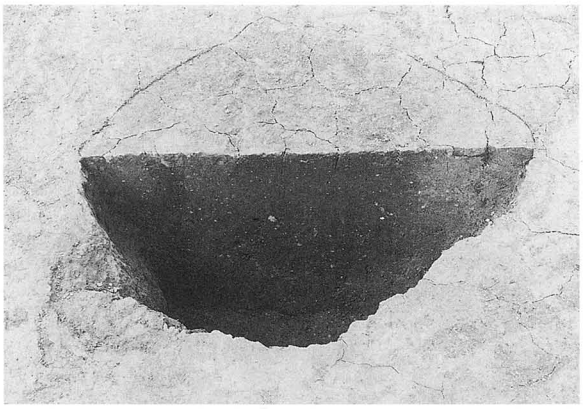
土坑８ 全景



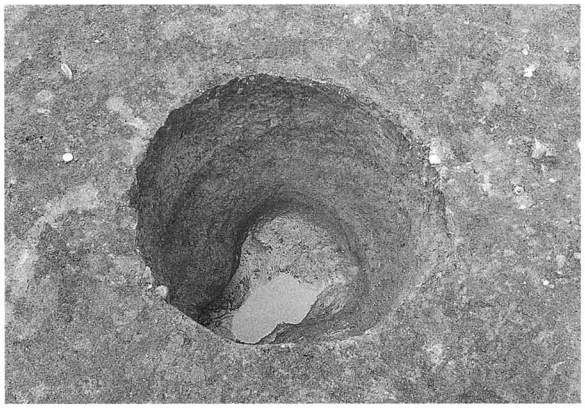
土坑８ 断面

写真図版 19　土坑（3）

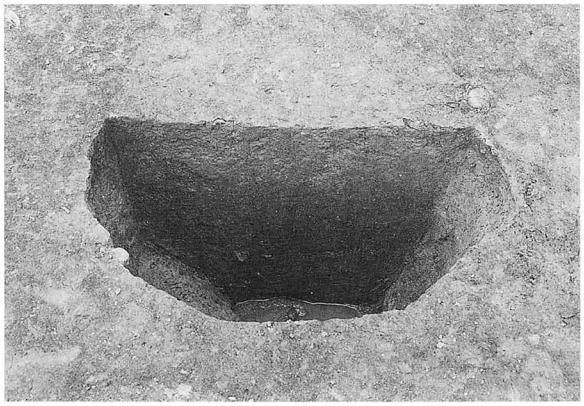
土坑９ 全景



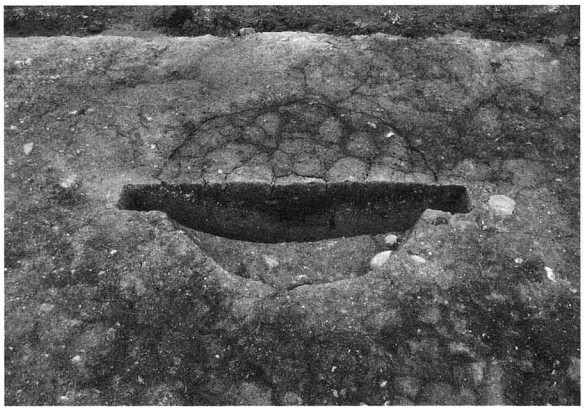
土坑９ 断面



土坑 10 全景



土坑 10 断面



土坑 11 断面

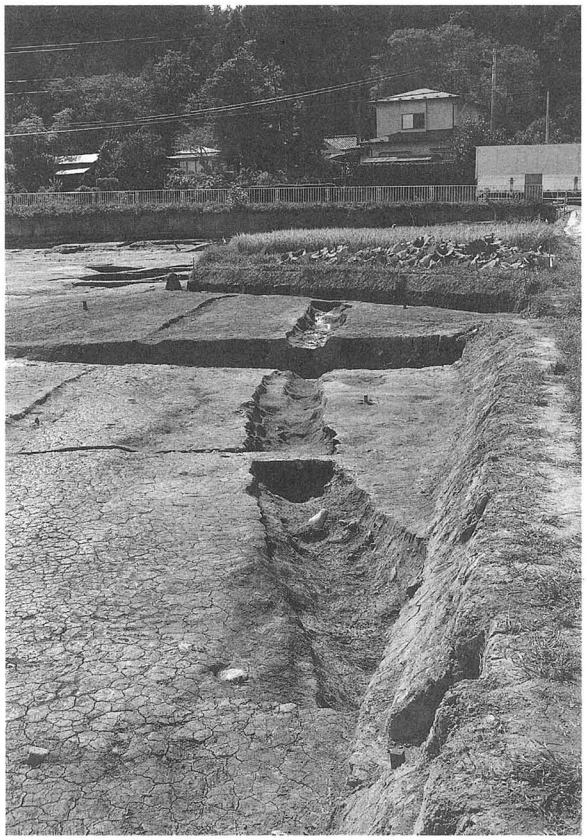
土坑 12 断面

写真図版 20　土坑（4）

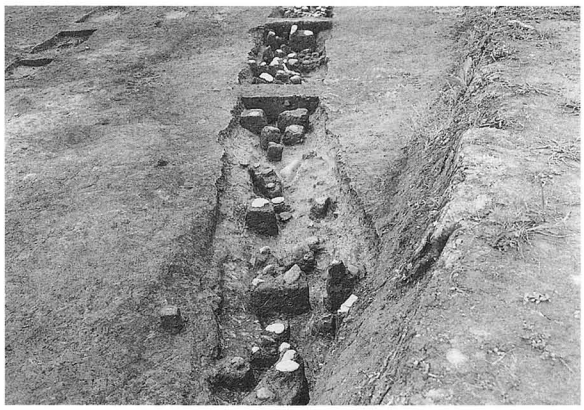
溝跡１（⑥区　東から）

溝跡 2e〈左〉・溝跡 2f〈右〉（④⑤区　西から）

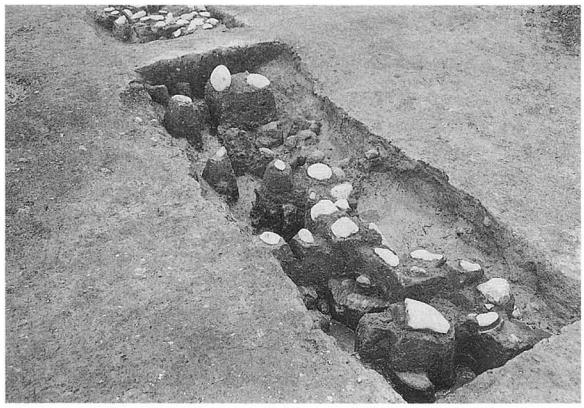
写真図版 21　溝跡（1）



溝跡 2e（④⑤区　東から）

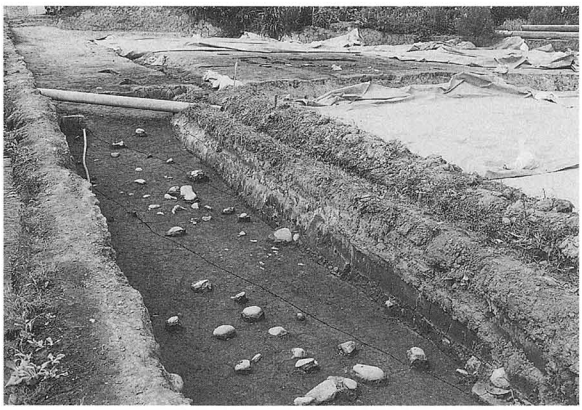


溝跡 2e　遺物・礫出土状況



同　　上

溝跡 2e 検出面の出土状況（⑧区　東から）



同左　近影（1）

同左　近影（2）

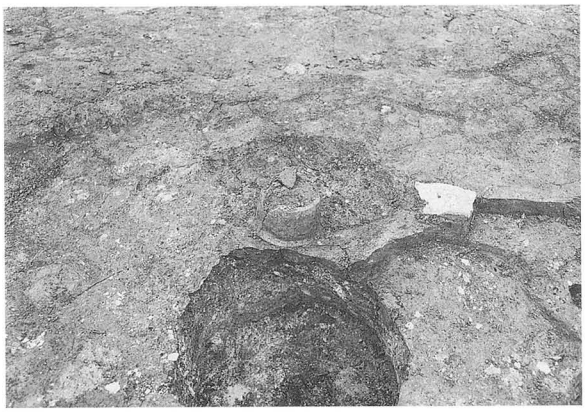
写真図版 22　溝跡（2）

竪穴住居跡１（⑥区　西から）

同 上 断 面（北西から）

写真図版 23　竪穴住居跡（1）

竪穴住居跡１　カマド前の遺物出土状況（北西から）



カマド 近影（西から）

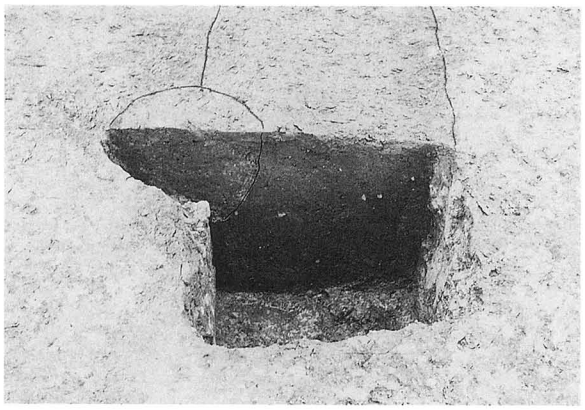
遺物出土状況 全景（西から）

カマド内 土師器甕（27）出土状況

鉄製品（301 刀子？）出土状況

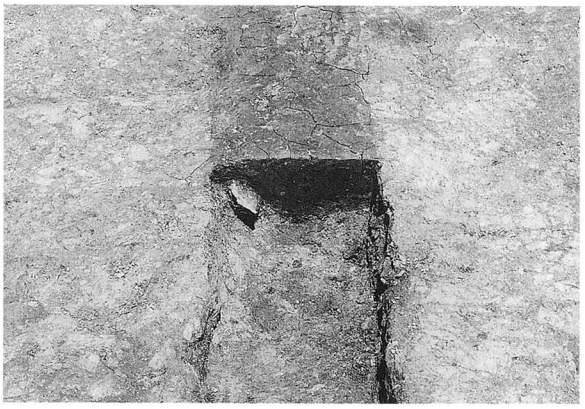
写真図版 24　竪穴住居跡（2）

陥し穴１

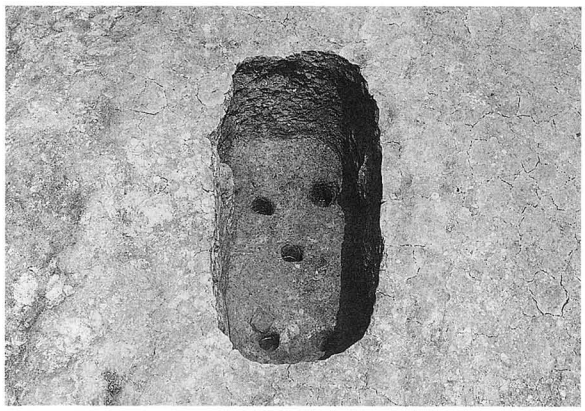


同左 断面

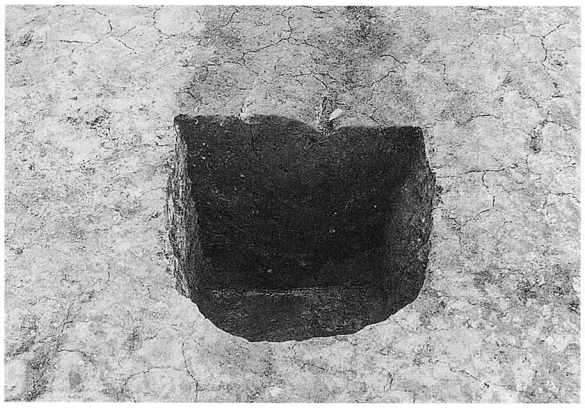
陥し穴２



同左 断面

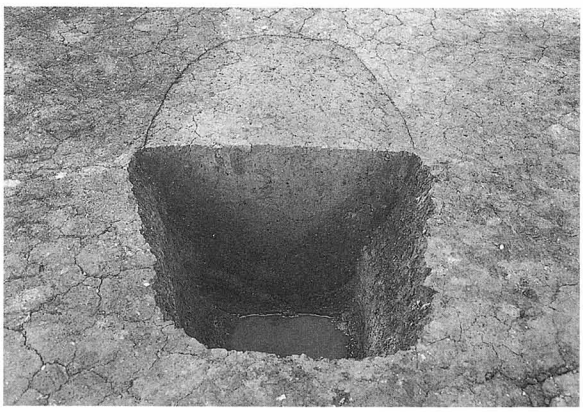


陥し穴３



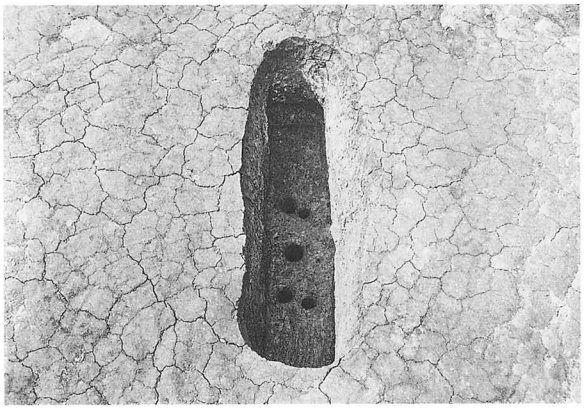
同左 断面

陥し穴４

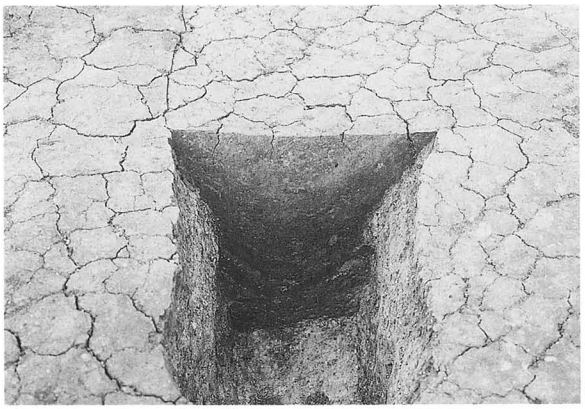


同左 断面

写真図版 25　陥し穴状遺構（1）



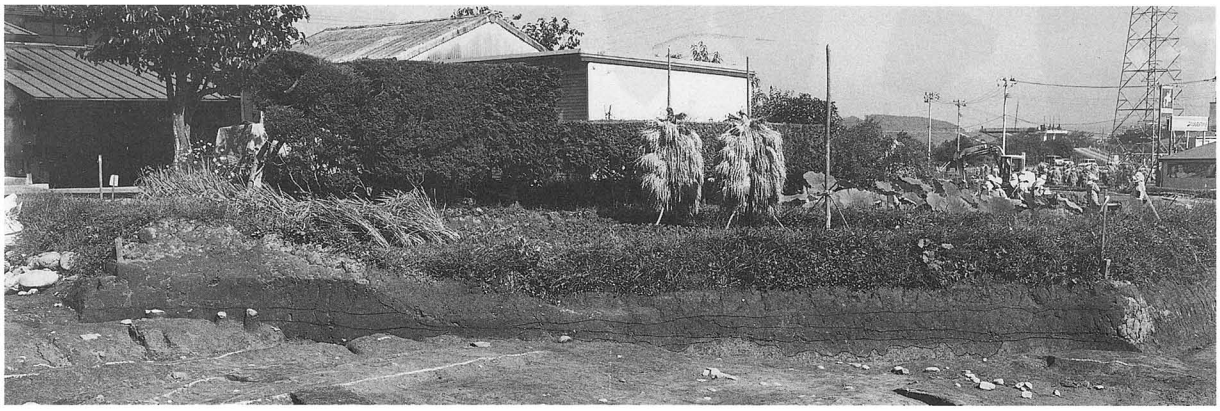
陥し穴５



同左 断面

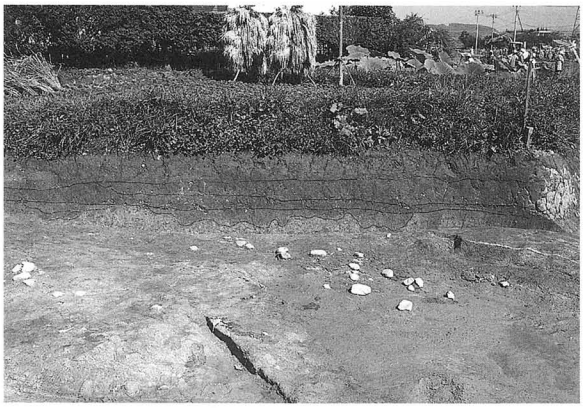
「休憩中」

写真図版 26　陥し穴状遺構（2）



④⑤区 北西部（敷石遺構断面 K－K'）

同 上（左半）

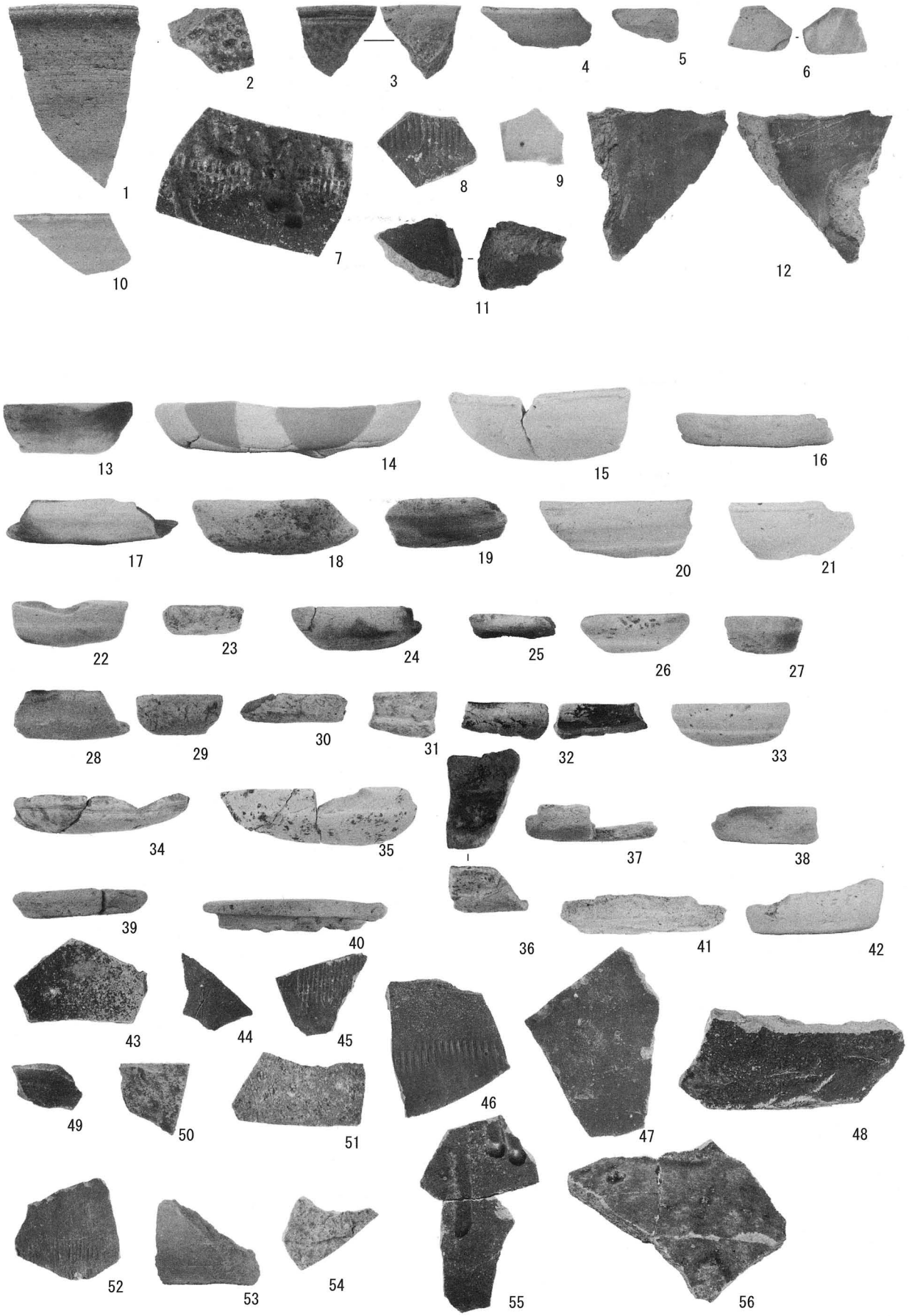


同 上（右半）

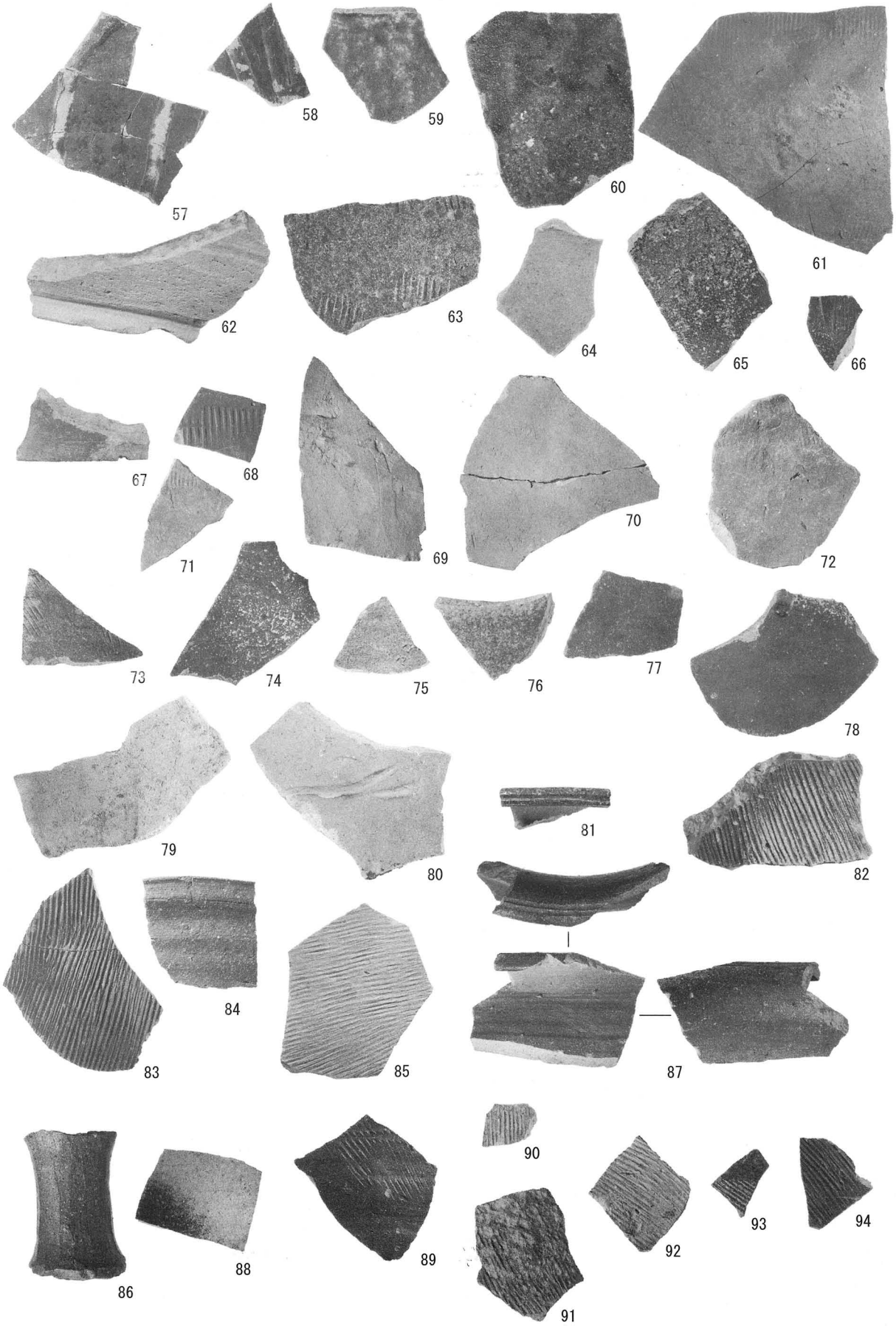
④⑤区 沢跡トレンチ１

④⑤区 沢跡トレンチ２

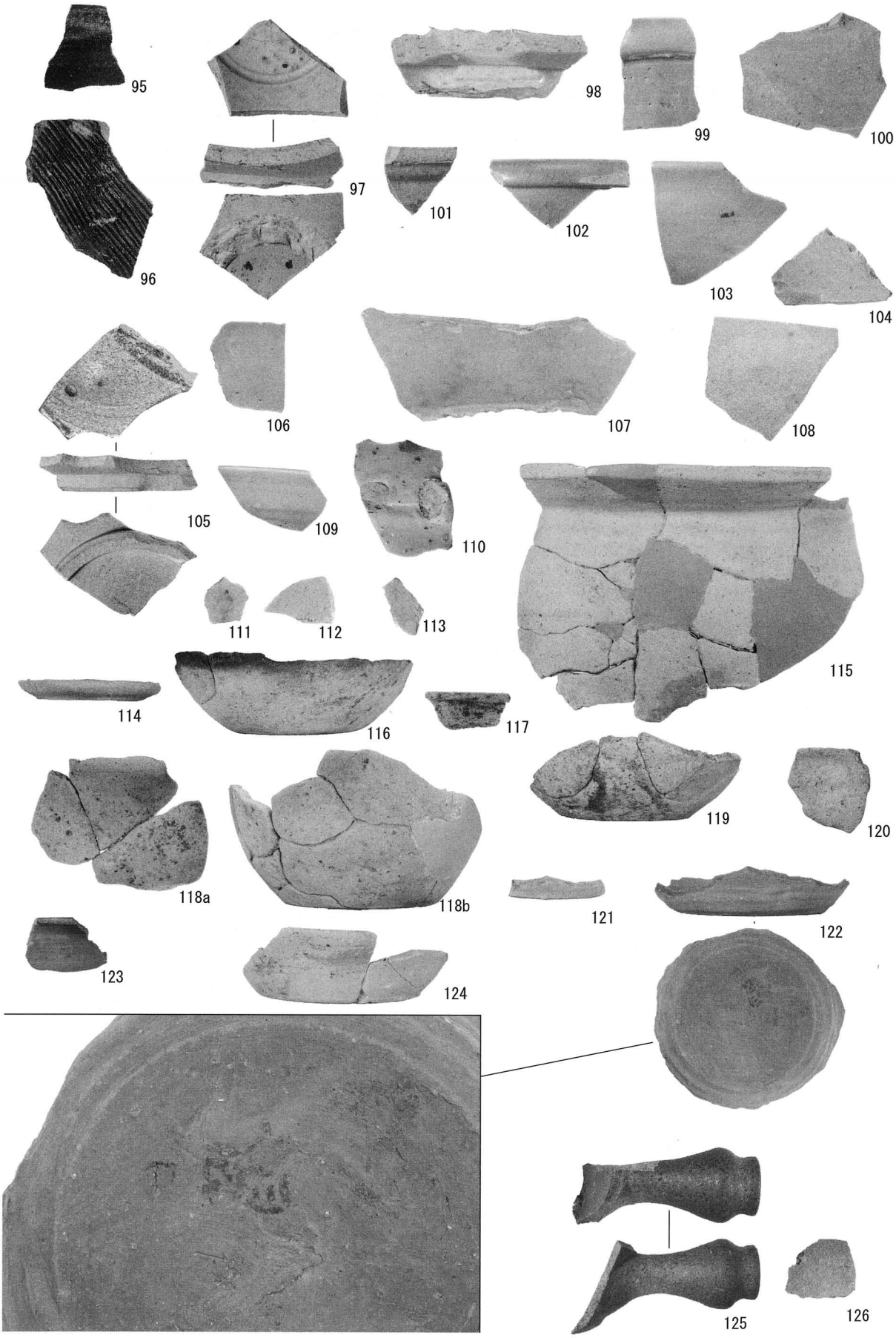
写真図版 27　基本土層・沢跡



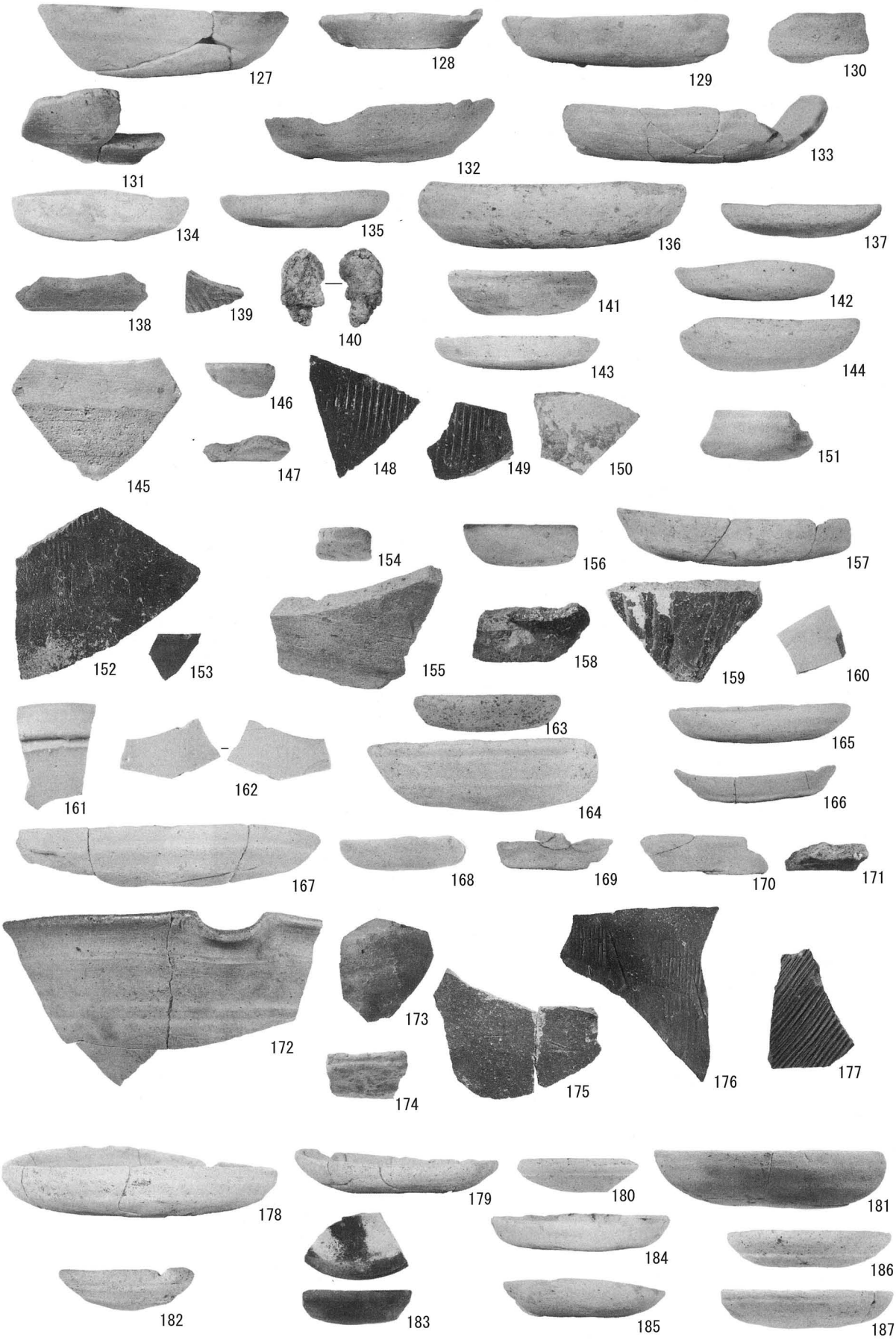
写真図版 28　出土遺物（1）



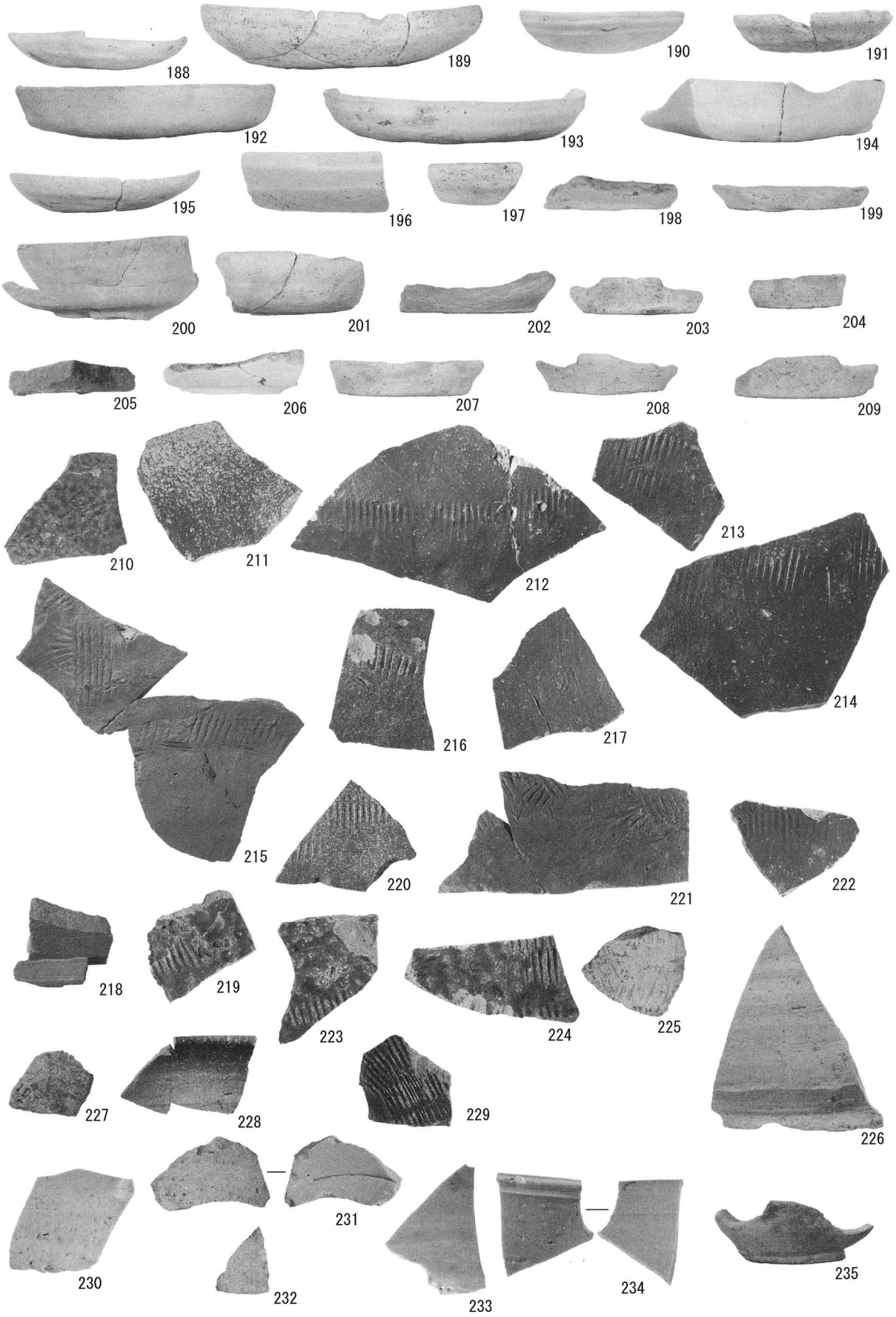
写真図版 29　出土遺物（2）



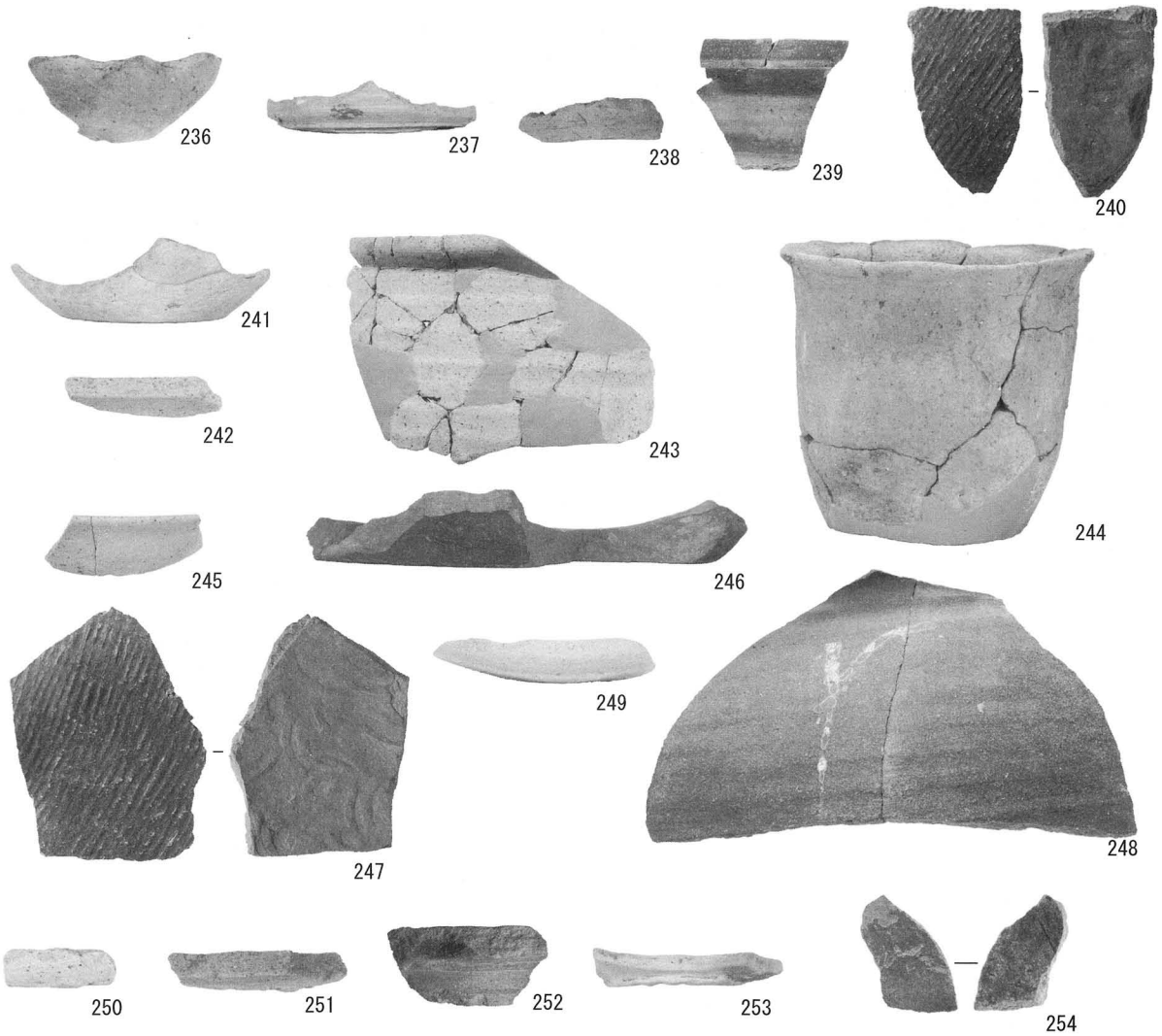
写真図版 30　出土遺物（3）



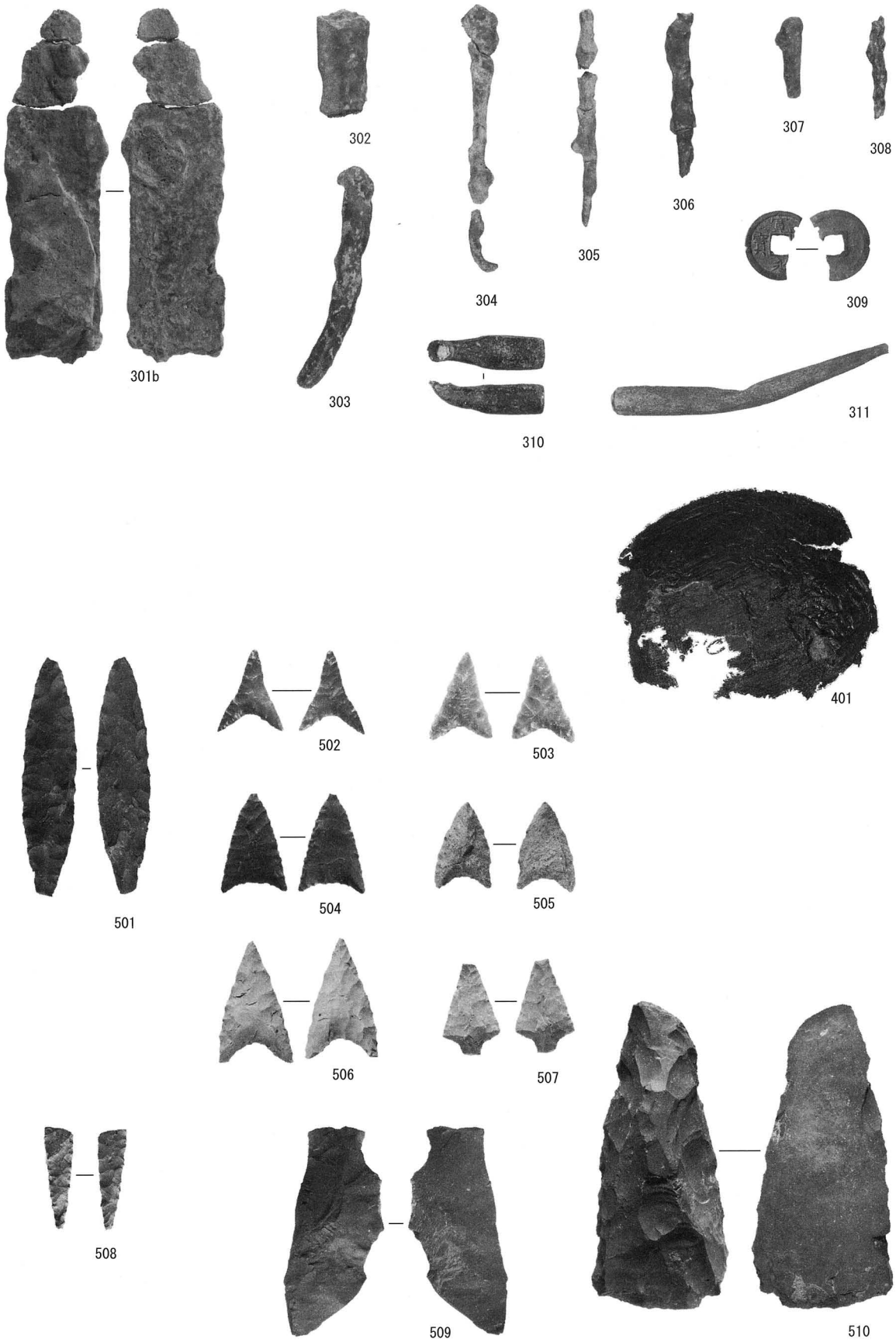
写真図版 31　出土遺物（4）



写真図版 32　出土遺物（5）



写真図版 33　出土遺物（6）



写真図版 34　出土遺物（7）

報告書抄録

ふりがな	さかしたいせきだいじゅうじはっくつちょうさほうこくしょ
書名	坂下遺跡第10次発掘調査報告書
副書名	一関遊水地事業国道4号衣川橋橋梁改築工事関連遺跡発掘調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第509集
編著者名	村上　拓・菅野　梢
編集機関	（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地　　TEL（019）638－9001
発行年月日	2008年3月17日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
さかしたいせき 坂下遺跡 だいじゅうじちょうさ 第10次調査	いわてけんにしいわ 岩手県西磐 いぐんひらいずみ 井郡平泉 ちょうひらいずみあざ 町平泉字 さかしたちない 坂下地内	03402	NE76-0000	39度 00分 09秒	141度 06分 22秒	2006.04.11 ～ 2006.10.18	8,420㎡	一関遊水地事業国道4号衣川橋橋梁改築工事関連遺跡発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
坂下遺跡 第10次調査		12世紀	掘立柱建物　4棟 敷石遺構　1箇所 池状遺構　1箇所 土坑　12基 溝　13条	かわらけ 国産陶器（常滑産・渥美産・須恵器系） 中国産磁器 木椀 刀子	

要約	国指定特別史跡中尊寺が存する関山の東麓縁部の調査。12世紀の遺構・遺物が主体。掘立柱建物跡や円形土坑が分布する微高地上の空間の縁辺を溝と敷石遺構が区画する。隣接の低位面からは池状遺構を検出。

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第509集

坂下遺跡第10次発掘調査報告書

一関遊水地事業国道4号衣川橋橋梁改築工事関連遺跡発掘調査

印　刷　平成20年3月7日

発　行　平成20年3月17日

発　行（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地

電話（019）638－9001

FAX（019）638－8563

印　刷（株）橋本印刷

〒020-0015　岩手県盛岡市本町通1丁目15番29号

電話（019）652－1354

ⓒ（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2008